

奇譚クラブ



新しい風俗文献誌

奇譚クラブ

奇譚クラブ 昭和四十九年五月二十日印刷 昭和四十九年四月二十日発行 第六十八巻第六号 毎月一日発行 第六十八巻第六号 毎月一日発行 第六十八巻第六号 毎月一日発行

THE KITAN CLUB

Published Monthly by

Akatsuki Shuppan

Osaka Japan

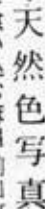
6

6

6

Ⅱ 女体緊縛写真集 Ⅱ

カメラ・ハント染我記……辻村隆
 女体緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三



~~~~~女体緊縛

~~~~~ 緊縛女体の~~~~~

| | | | | | | | | | |
|---------|--------|-------------|----------|-------|---------|-------|--------|----------|-------|
| 痛打の一瞬 | 實の果の諦観 | 痛さをこらえる異国の女 | 海老縛りなれた女 | 老婦の妙味 | 奔弄されるまに | 妖蛇の洗礼 | 酒の肴になる | なごしつての天使 | 可憐な麗物 |
| ホステス裸人生 | 前田真知子 | シラ・ケ下 | 長井葉津子 | 川路 叢子 | 前田真知子 | 関谷富佐子 | 川路 叢子 | 佐々木真弓 | 井葉津子 |

の光と影……………編集部構成……………

これから、どうするの？

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|--------|----------|-------|------|-------|---------|---------|-------|-------|-------|---------|--------|---------|--------|--------|--------|--------|
| 美しき吊り | 苦痛か悦楽か | 逆エビ轉りに入る | 愛撫の責め | 黒眼撮影 | 脚動と白肌 | 身動きできぬ境 | ポリウムを縛る | 浮しき女体 | 麗しき背面 | 汚辱の細 | 高手の小本縛り | 責めの陶酔境 | 失神したマゾ女 | 柱の彼方天国 | 荒縄の海老責 | 美と縛の女神 | はづれた猿轡 |
| 長井葉津子 | 前田真知子 | 関谷富佐子 | 三浦純子 | 渡部好美 | 前田真知子 | 関谷富佐子 | 座間明子 | 中河恵子 | 金原奈加子 | 佐々木真弓 | 川路叢子 | 関谷富佐子 | 関谷富佐子 | 三浦純子 | 前田真知子 | 梨花悠紀子 | 梨子 |

本誌愛読の女性の方々へ

| | | | |
|--------|-----|------|------|
| 入選作品 | 第一席 | 二十萬円 | 1 篇 |
| 入選作品 | 第二席 | 十萬円 | 1 篇 |
| 入選作品 | 第三席 | 五萬円 | 3 篇 |
| 入選作品 | 第四席 | 三萬円 | 5 篇 |
| 入選作品 | 第五席 | 二萬円 | 10 篇 |
| 佳作優秀作品 | | 一萬円 | 15 篇 |
| 選外佳作作品 | | 五千円 | 10 篇 |

▽賞金△

[illegible]

持込品 主税と 消費税を同じ 上原限 統IMの 曲工返めに



開股柱吊り

△前田真知子▽



昭和四十九年 六月号目次 第二十八卷 第六号
通刊第三一六号

| | | |
|---|--------------|-------|
| フォト「むごたらしさの美」△梨花悠紀子▽…………… | 絵川 竹酔…………… | (29) |
| 「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ | | |
| 『憂愁と孤独の住人』△高村浩子の巻▽…………… | 塚本 鉄三…………… | (30) |
| SとMの宿命的邂逅「継母」…………… | 伊都 寿郎…………… | (60) |
| 懸賞告白「私のコレクション」△女性 <small>女性の鼻孔写</small> を収集する▽…………… | 佐藤 光保…………… | (68) |
| 奴隷妻飼育中「鎖禪」(くさりふんどし)…………… | あきのよしみず…………… | (75) |
| 「S研」△友の会▽SMプレイ顛末記△大山良介夫人▽ | 塚本 鉄三…………… | (78) |
| 『ゴム衣人形を責める』…………… | 風流極道軒…………… | (94) |
| 連載・紫蘭の門(34)『エレキの魔力』…………… | 城 剣太郎…………… | (108) |
| 懸賞入選告白「女神への拝跪」…………… | 玉本 章子…………… | (118) |
| 告白「飼育妻からプレイ妻へ」…………… | 久留木 栄…………… | (124) |
| 浩が行く(4)『バーグクラクに陽は沈む』(後) | 苗木 陽子…………… | (138) |
| 昔は物を思わざりけり 熟れてゆく私の体…………… | 千葉 青鬼…………… | (142) |
| 連載小説『大噴火』△第六十八回▽…………… | 佐治 麻造…………… | (150) |
| 連載・Mグループ作品『女の虜囚』(4)…………… | 瀬戸内 勇…………… | (166) |
| 児玉昌子の思い出「妊婦初縛りの告白」…………… | 柴 利好…………… | (170) |
| SM随想「奴隷妻の哀歓に思う」…………… | | |
| 夫婦で「S研」に参加したい男の告白 | | |
| 『SMの極致は複数プレイ』…………… | 山根 明…………… | (180) |
| 連載・M派交友録(52)『血だらけの顔』…………… | 鬼山 絢策…………… | (184) |
| 雑論プレイにおける『目隠しの効用』について…………… | 今井 弘…………… | (200) |

カラー・フォト・セクシオン (艶姿十一態)
高村浩子 福井桃子 藤田明子 矢島靖子
深田菊子 荒尾慶子 苗木陽子 笠井奈保子
前田真知子

開股柱吊り☆晒し者の美女☆ 前田真知子
緊縛感を噛みしめる
凝視の中で☆そりかえる拇指 矢島 靖子
猿ぐつわの哀歎☆プレイの宴 藤田 明子
果てて☆蜂蜜の甘さにむせる
脚を開くのはイヤッ☆愁いの 高村 浩子
目なざし☆縄を解かれた足
菱縄の縄目 深田 菊子
マゾ・フォト 女上位の悦楽 遠藤 威子
ムチ打ちの好目標 苗木 陽子
高々と後手縛り 佐々木真弓
開脚吊り 中河 恵子

~~~~~[憂愁と孤独の佳人]特集[塚本鉄三・撮影]~~~~~

イメージギャラリーII「庭園の珍花」マエダヒオミ (64)  
◎「食事準備中止」志羽利也 (71) ◎「凝脂の悲鳴」須坂  
旭 (77) ◎「新案責め機実験」岡たかし (99) ◎「おぞま  
しき接待」マエダヒオミ (103) ◎「何よりのもてなし」岡  
たかし (112) ◎「縄と鎖とムチ」志羽利也 (127) ◎「黒猫」  
マエダヒオミ (131) ◎「同棲時代の思い出」岡たかし (135)  
◎「不安な時間」須坂旭 (156) ◎「捧げるよろこび」岡た  
かし (161) ◎「SMパーティ」若江正史 (173) ◎「羞恥の中  
の悦虐」マエダヒオミ (176) ◎Mフォト「快美なお仕置」  
逸毛恵須子 (188) ◎「どちらが美味しい？」岡たかし (193)  
「馬化こそ生甲斐」マエダヒオミ (196) 「早く替えてエ」  
原由貴子 (207)

目次フォト

高村浩子・深田菊子

浣腸好きな「カンチョウって大好き」……………中郡 智子 (204)  
娘の告白  
S&Mの考察『マゾ心理の謎を捉える』……………前田恵一郎 (208)  
読者通信……………編集部選 (258)

奇クサロン (216)

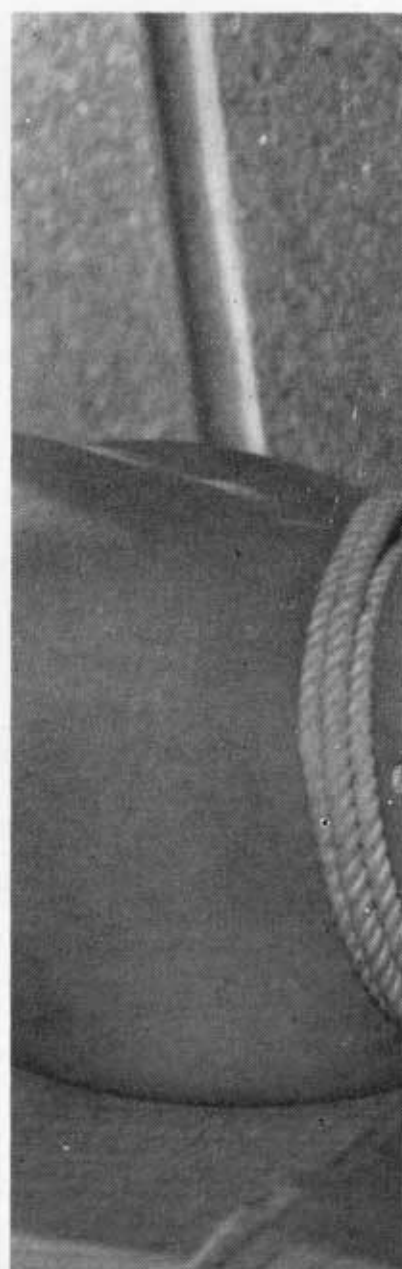
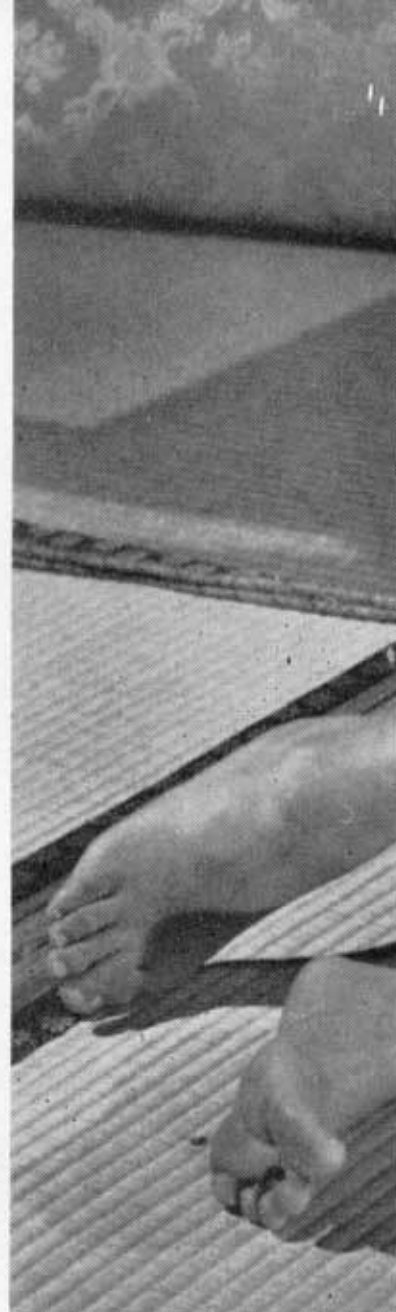
美しいものへの憧れ……………枝川美能留  
ささやかな夢「SM断想」……………山下 真  
カメラ・ルポに希望する……………吾妻 信夫  
売文家に毒されたい奇譚ク……………ケント・ペルメル  
ラブ、その純粋さを愛す……………南原 赤秋  
夏が待ち遠しい……………海野 和夫  
浣腸の好きな僕の告白……………坂本 信三  
私の飼育したペット……………塚本 鉄三  
S研ニュース……………塚本 鉄三  
益々快調！S研グループ会合……………赤畑 修造  
描き刺青の「豚妻」近影……………藤原 幸子  
導尿から浣腸へ……………村井 嗣郎  
縛りマニアの独白……………幸村 美記  
感想 最近の奇ク誌雑感……………島崎 一郎  
どうしても女になりたい……………東 麻耶  
五月号の奇ク誌後感……………鷺山 隆  
S研友の会参加記録……………「ドライブインの一隅で」  
告白 我が「玉入れ」の記……………長崎登美男  
深田菊子さんが好き……………金沢 一三  
年上の女性に憧れるボク……………京野 坊哉  
私達夫婦のSMプレイ……………早坂 信治  
跨がる女性にひかれて……………上田 光一  
飼育したい山田誠子さん！……………今井 博  
「拘束」の東西性について……………山田 広三  
日本一の高層ビルにて……………竹迫 誠也  
鼻責め 新妻可奈江の調教……………杉谷 潤三  
身辺雑記「女牢物語」異聞……………富永 草太  
告白 緊縛女体と私……………近藤 歳三  
同志へ 視姦愛好会の提唱……………視姦 紳士  
イメージ画「絶景かな」……………前田ヒオミ  
最近の縛り映画から……………東山 映史  
再度塚本さんに挑戦……………田端勢以子  
「SMプレイをしましょう」……………編集部  
告白 女死刑囚への憧れ……………小倉 幸男











晒し者の美女

<前 田 真 知 子>

猿ぐつわ哀歓

<藤 田 明 子>





脚を開くのはイヤッ

＜高 村 浩 子＞



蜂蜜の甘さにむせる

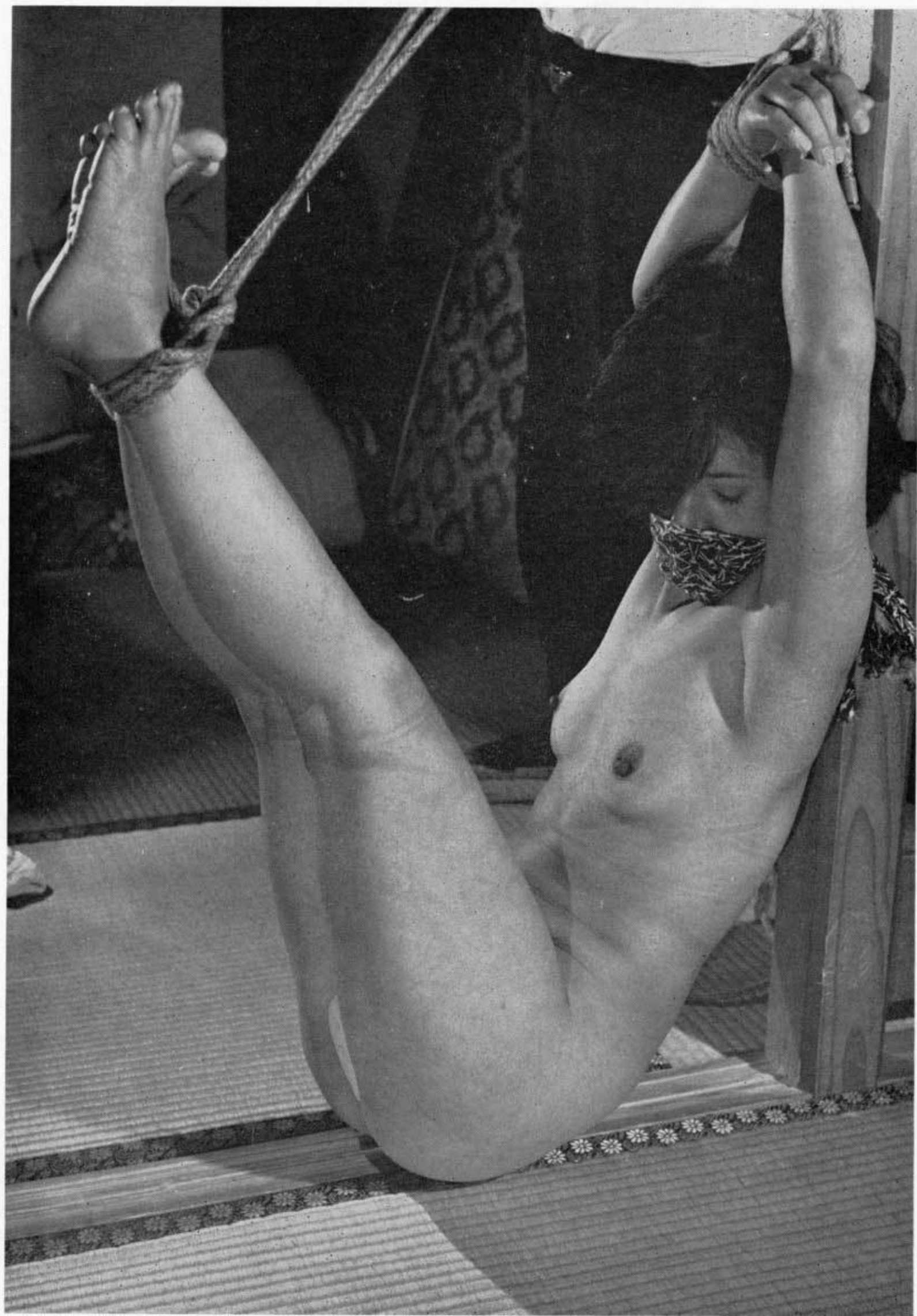
＜藤田明子＞





そりかえる足の拇指

＜矢 島 靖 子＞







緊縛感を噛みしめる

＜前田真知子＞



愁いの目なざし

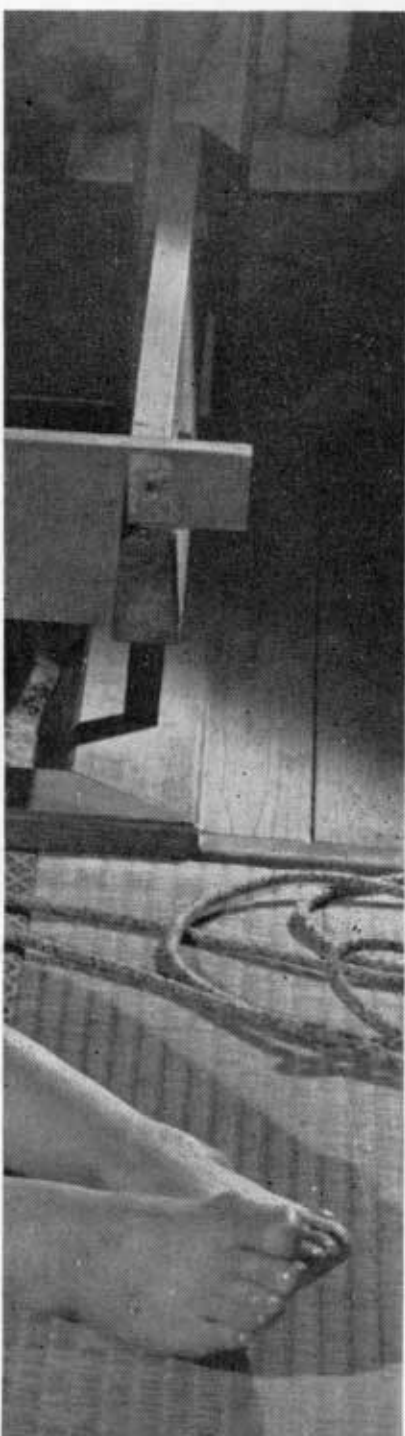
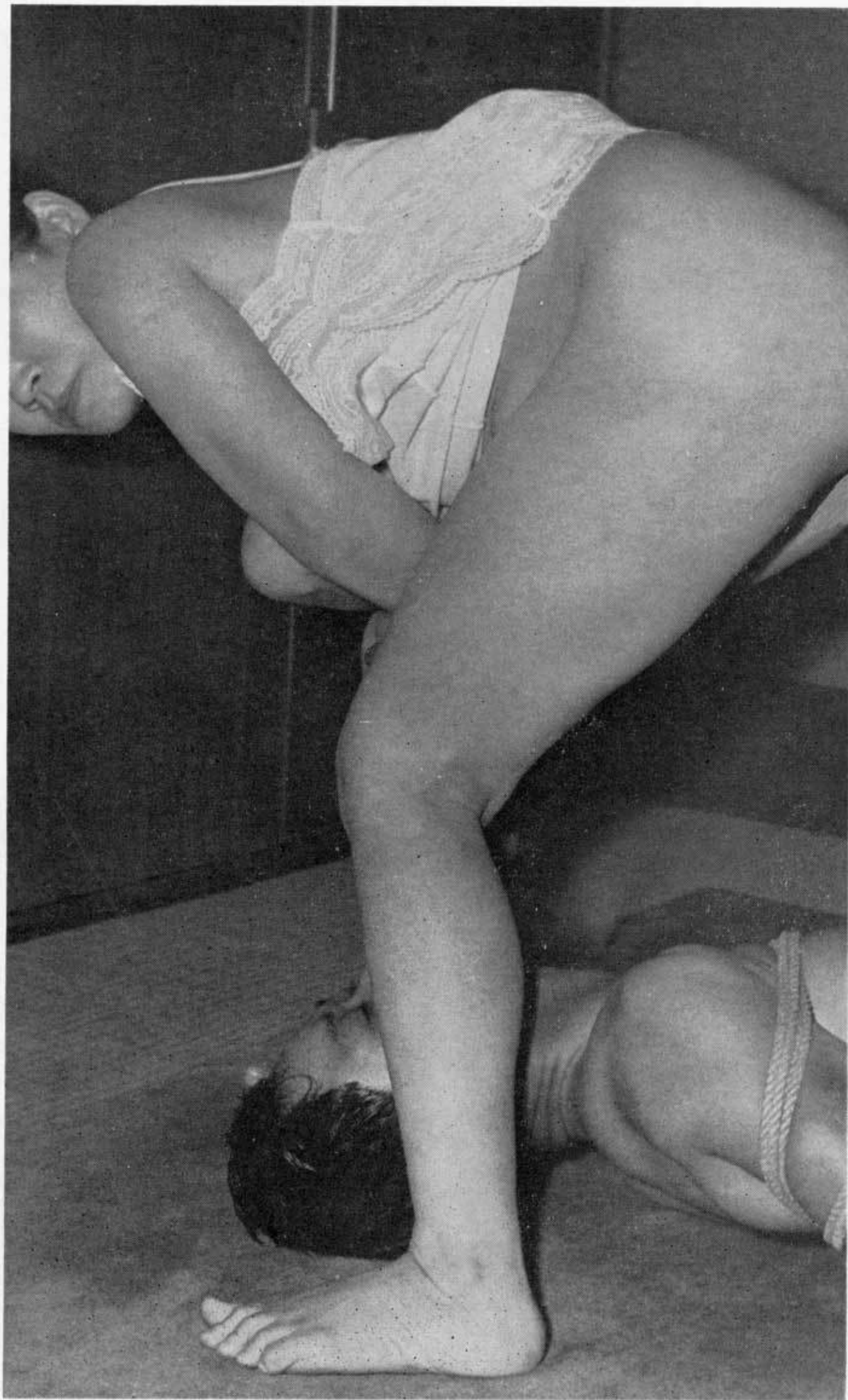
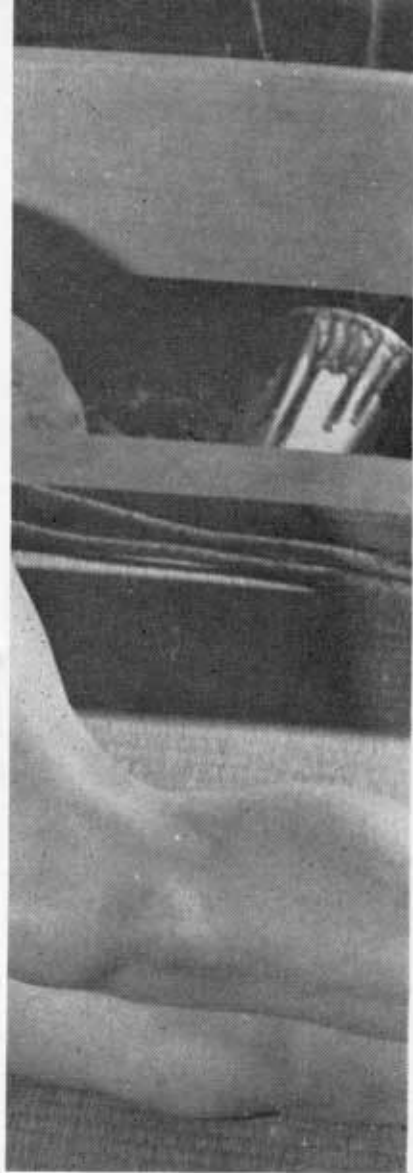
＜高村浩子＞





菱 縄 の 縄 目

＜深 田 菊 子＞



〔マゾ・フォト〕

女上位の悦楽

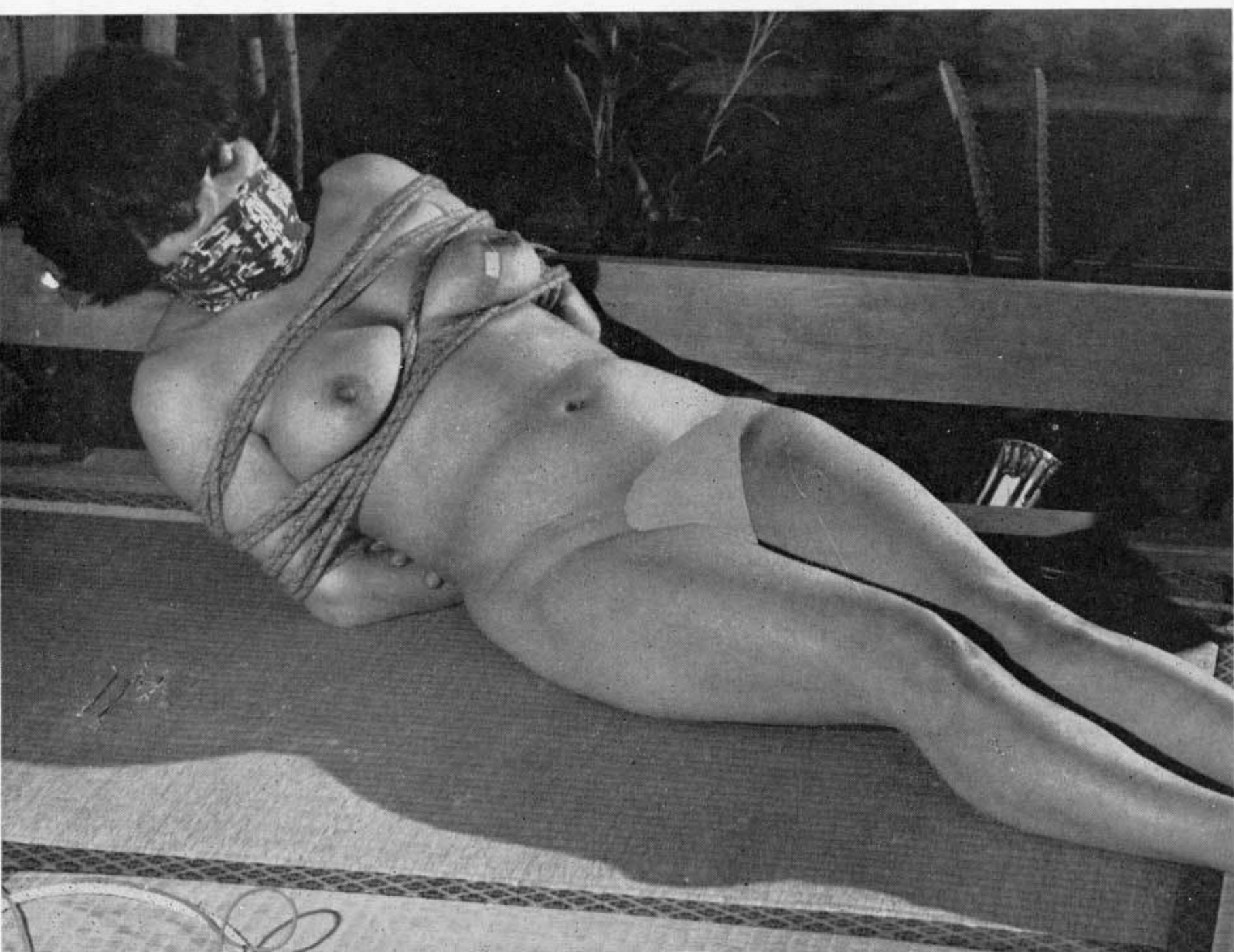
＜遠藤威子＞





プレイの宴果てて

＜藤田明子＞







ムチ打ちの好目標

高々と後手縛り

△苗木陽子▽

縄を解かれた足

△佐々木真弓▽

△高村浩子▽





開脚吊り

＜中河恵子＞



































奇

譚

ク

ラ

ブ

1 9 7 4

6 月 号

<第 28 卷 第 6 号 通刊 第 316 号>



.....むごたらしさの美.....モデル.....梨花悠紀子.....

むごたらしく、竹の棒で開股にされて、逆さ吊りにされた美少女。彼女の体内に、マゾの芽がなかったとしたら、とても許容しそうにない、あられもない、むごたらしさだ。ただ、むごたらしいというだけではない。そこには、SMに惑溺した人達の熱気と、可憐さと、哀歓とがミックスして、この一枚の

写真を、ありきたりの緊縛写真から、むごたらしさの美にまで昇めている。単なる肉体的な苦痛や肉体的なむごたらしさだけを求めているのではない美しさ、この画面から、ほのぼのと、にじみ出ているのである。そこに、この写真の値うちがある。

(絵川竹酔・記)



「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

ゆう しゅう

こ ども

ひと

憂愁

と

孤独

の

佳人

△永遠のM女——高村浩子のプロフィールを抉る▽

塚<sup>つか</sup>

本<sup>もと</sup>

鉄<sup>てつ</sup>

三<sup>ぞう</sup>

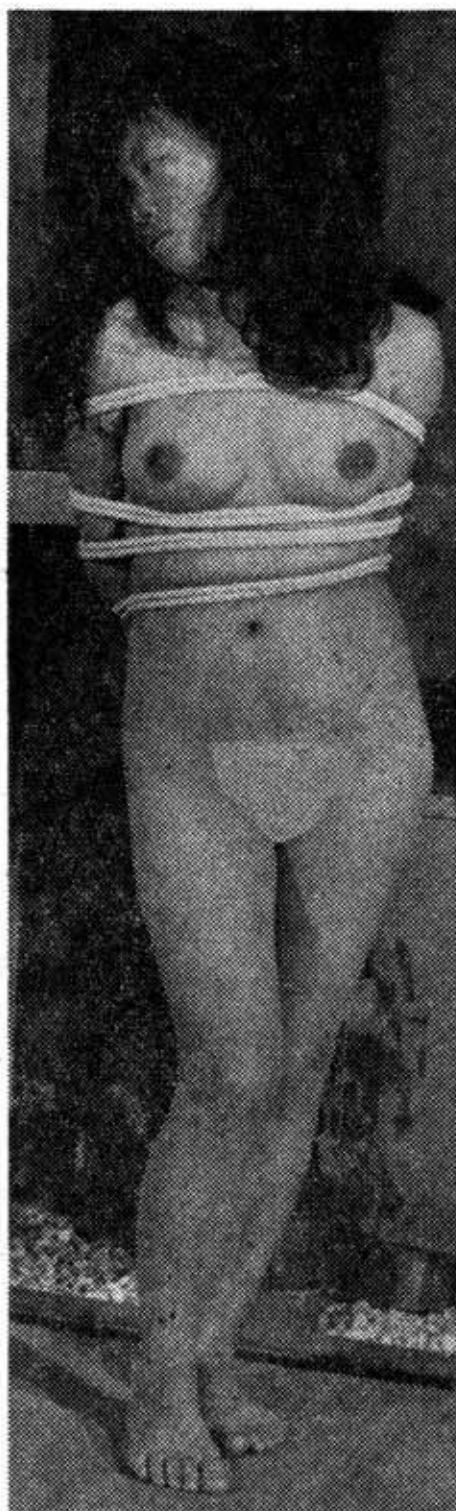
昔馴染みの女

高村浩子——無口な娘の愁いを帯びた淋しげな顔を眺めていると、無性にいじめたくなつた。軟体動物のように、骨なしの、くにくにやの体になっていながら、この娘は、僕を巧みに誘発して、SMプレイのどろどろした泥沼の中へ、ひきずり込んでいった。僕は、その妖しい魔性に魅せられて、自分が溺れてしまふのではないかという恐怖にかられた。しかし、痺れるようなSMの強烈な魅力には抗しきれず、その泥沼の渦中に、とつぷりと全身を漬けてしまったのだった。

その日は寒い日だった。  
僕は車の中にオーバーとマフラーを置いてきたのを後悔した。

約束の時間には、まだ十五分もあったので待ち合わせ場所のタクシー乗場の前を、足早に通り返して、彼女がいらないのを確かめてから、交通公社の案内所へ入る。そこを出てから靴磨きのボックスを、のぞき見て、乗降口の列車の時刻表に目をやる。

そして再びもとへ戻って交通公社のドアを開けた。値上げが響いてか、タクシー乗場に





は行列どころか人影もない。同じコースを靴磨きの方へ行こうとしたときだった。

さっきは誰もいなかった柱の傍らに、一人の若い女が、ひっそりと佇んでいた。

あっ、彼女だ——と、すぐ分った。

タクシー乗場の方へ、じっと目をやっていく、淋しげな横顔は、まぎれもなく高村浩子だ。

僕は建物のかげに身をひそめて、斜め右前から彼女に視線を注いで窺った。

限らない孤独と哀愁に満ちた淋しい彼女の素顔だった。僕の目はズームアップして彼女の蒼白の顔に焦点を合わせた。

化粧していない浩子の顔は、寒さのせいばかりでなく冴えなかった。

空ろな眼は、ぼんやりと戸外の灰色の空に向けられていた。一体、何を考えているのだろうか。僕も少し悲しくなった。

それは如何にも淋しそうな眼だった。

世の中の淋しさと苦悩とを、一手に引き受けたような哀愁に満ちた顔だった。

凍りついたような土色の唇が寒さに、わなないているような気さえた。

僕は柱を回って彼女の背後へ出た。

驚かしてやろうと後へ迫った。

この前に逢ったときから、少しも変わっていない彼女。胸にこみ上げてくる懐かしさが、僕をして突飛な行動に移らせた。

「わっ」と声を掛けて彼女の背後から、がばと抱きついた。

「あっ、ああっ」

びくっとして、彼女の小柄な上半身が揺れた。僕の両腕と胸の中でガクガクふるえた。

腕と胸に、むずがゆいような若い女の、もがきようが、伝わってくる。

その彼女の驚きように、僕の方が、びく

りしたくらいだった。

僕は更に力をこめて抱きしめた。

気持が、よかったのだ。

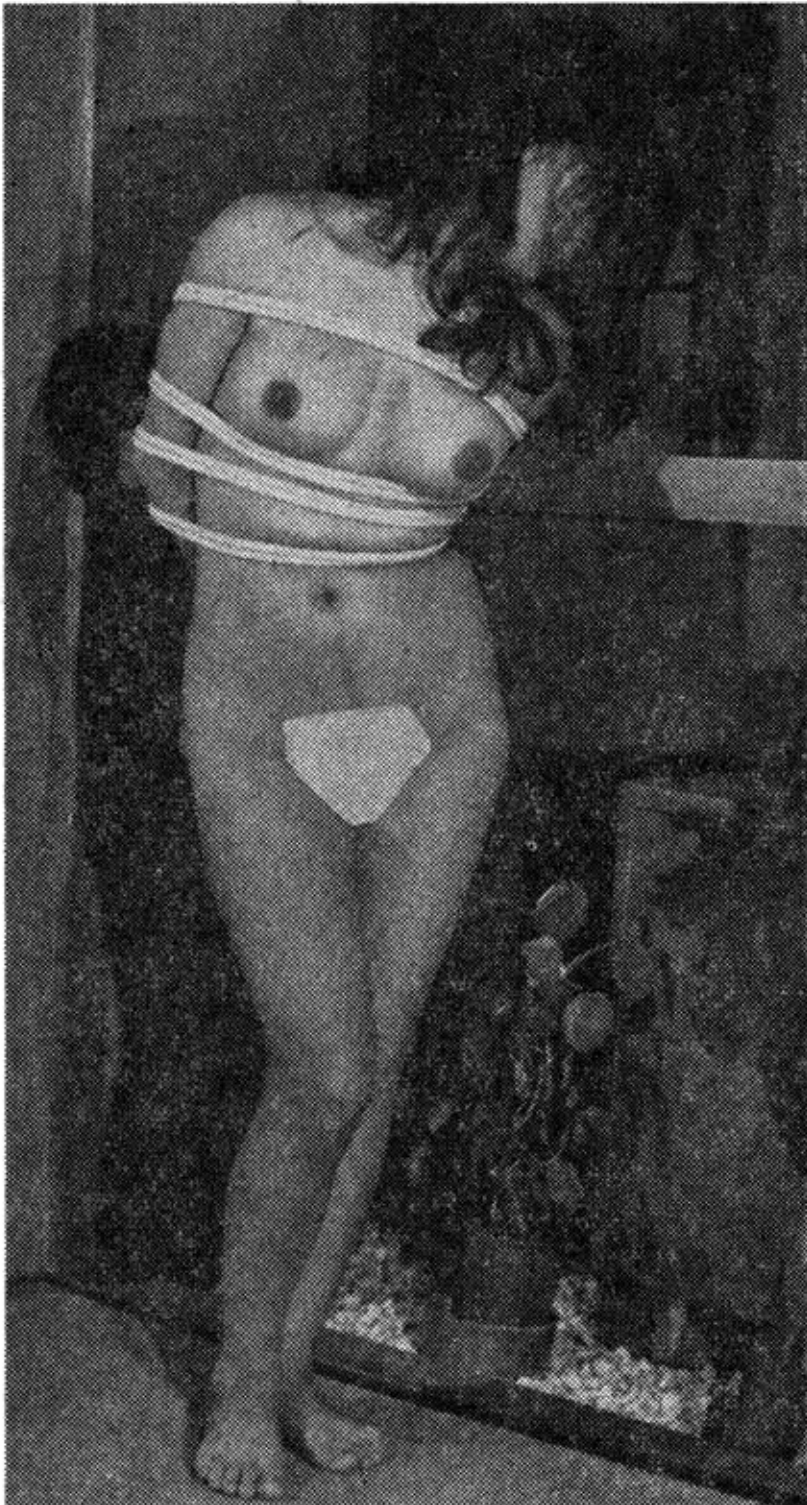
人目がなかったら、両腕ばかりか、脚も巻きつけたくらいだった。

胸の中で、びくっびくっ、びくっついている小娘の肉体は、新鮮で、魅力的だ。

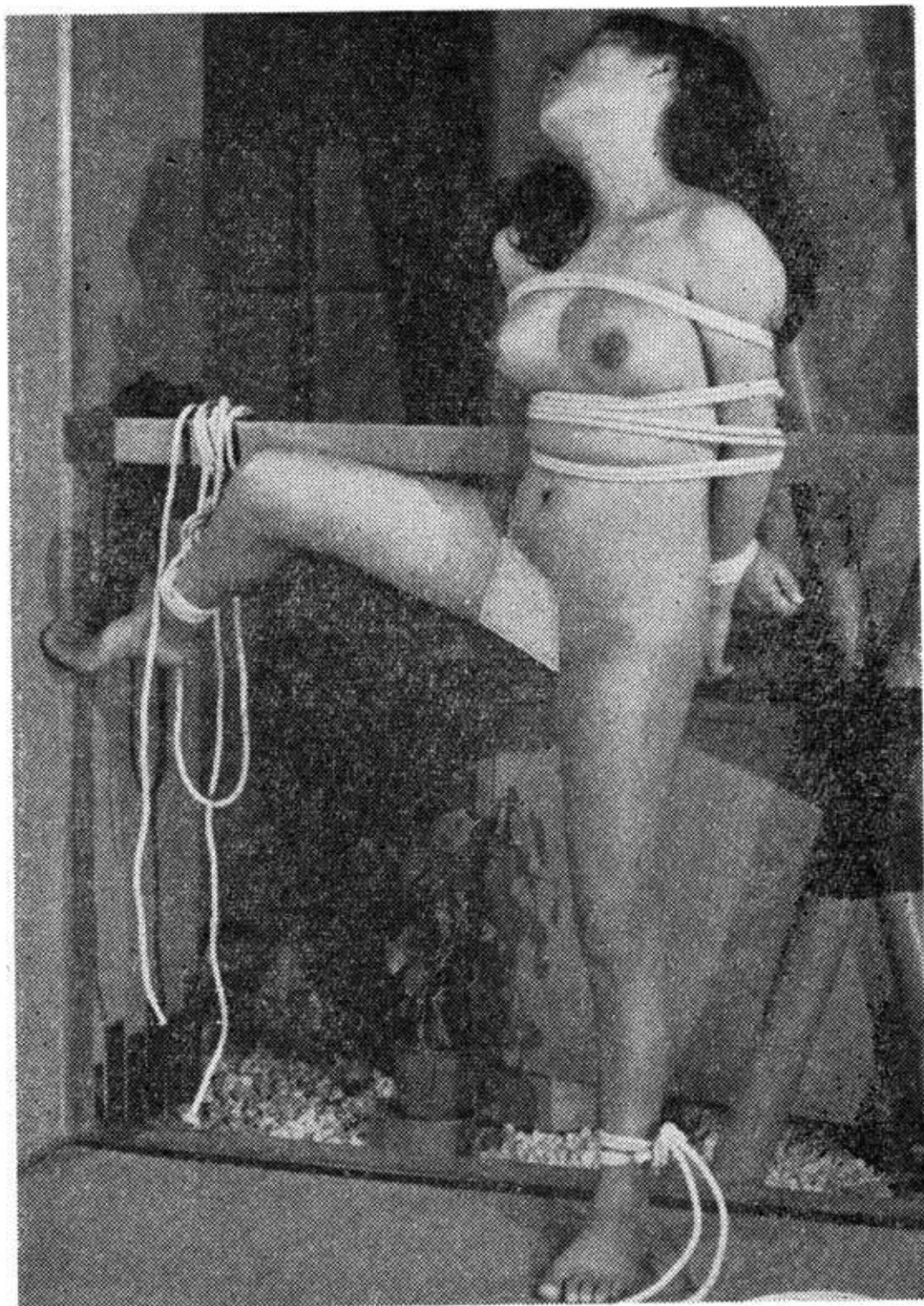
「浩子さん、僕だよ」

その声に、初めて彼女は顧った。

無言のまま、愁いを一杯にたたえた瞳で、僕の方に視線をやった。







それでも、彼女の身体のふるえは、まだ、すっかりは止まらない。

「驚かしてすまなかったね。でも……」

そこまで言って、僕は後は言わなかった。

懐かしさの余り——とか、余り可愛かったの——とか言うつもりだったが、怨んずるような彼女の目なごしを見ていると、そんな

言葉は空々しく思えてしまったのだ。

「あの、私、今日は四時までには、帰らなければ、いけないんです」

彼女は消え入るような声で言った。

☆

それは十二月初旬のことだった。

高村浩子から、何カ月ぶりかで、突然、僕

に電話がかかってきた。

「二十日には故郷へ帰るので、大阪にいる最後の思い出にプレイをしたいの」

そう言うのだった。

勿論のこと、僕のSMの血は沸いた。

“一生の思い出”になるような素晴らしい虐め方をしてみたい——と思った。

そして、思いきり、写真も沢山撮って、彼女との記念のSMプレイのために残しておきたいと、大いにハッスルしていたのだが、彼女のその一言で、いささか、鋒先を、はぐらかされたような気持になった。

四時まで——と言えば、あと正味、三時間しかない。遠い所へなんか、とてもじゃないが、行っている暇なんかない。

「せめて、六時頃まで、伸ばせないの？」

「ええ、夕御飯の支度をしなければなりませんので、四時までには、どうしても……」

「それじゃ、急がなくなっちゃ」

僕は彼女の背を抱えるようにして、地下道へ通ずる階段を急いで降りていった。

## 縄に失神す

部屋へ入るなり、僕は背広の上衣を、かな



ぐりすてて、オーバーをとっただけのセーター姿の浩子に襲いかかっていった。

「時間がない」ということが、僕をして、そんな性急な行動に出させたのだ。

さっき、両腕と胸の中で、びくついていたら彼女の肌の感触が、まだ生々しい。

「ああ、いや、いやっ」

僕は、仰向けに押し倒した浩子を、羽交絞めに押えつけていた。

セーターの下で、大きな乳房が、こんもりと盛り上って、喘いでいる。

セーターを下のシャツごと、たくし上げて、ぺしゃんこのお腹に潜り込ませた僕の右手に、彼女は両手で、すがりついてきた。

「ねえ、それだけは、かんにんして……」

僕は手荒く、彼女の手を払いのけてから、ジーンズのホックを素早く、はずした。

彼女が、お臍をペコンと、へこましているの、僕のその作

業は難なく達成した。

ぺしゃんこの何も食べていない、お腹だ。

僕は、尚も、セーターを上へ上へと、たくし上げて、脱がそうとした。

彼女は、両手で必死に、それを防ぐ。

その一瞬を狙って、僕の右足の指先がジーンズに、かかったかと思うと、一気に膝ま

で、ずり下げてしまった。

「あっ」

彼女の全身が弓なりに反った。

僕の左手は彼女の肩を抱え込み、右手はセーターを胸のところまで、たくして上げていた。荒い息が僕の耳に、ふりかかる。

ズボンは彼女の膝頭で止まっている。

僕は、彼女のお臍のまわりをさすった。

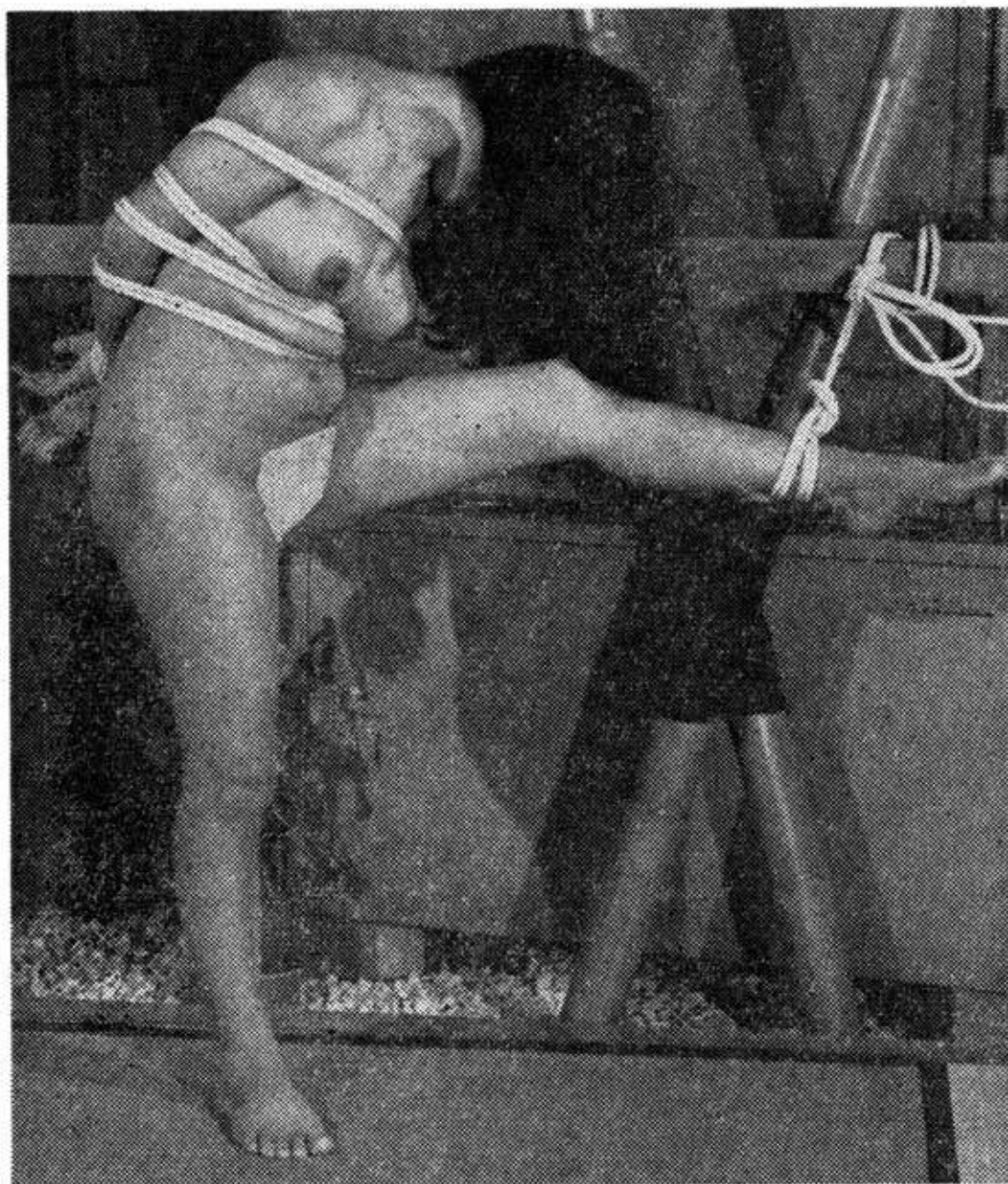
ジーンズも、パンティストッキングも、パンティも、一まとめとなって、僕の足の指にひっかかって、裏返しになったまま、くるとバナナの皮を剥くように、はがされていった。

足首までいったとき、彼女は自分から、左足だけを抜いたが膝と膝とは、ぴったりと合せている。

「ねえ、乱暴しないで……」

彼女の、そのか細い声は、S男を誘発するM女の妖しい囁きだった。

僕には、もうセーターを脱がす気分的な余裕はなかった。





豊かな乳房が、かすかに、ふるえている。僕の手は彼女の肌の上を乱舞した。

いつしか、固く鎖した彼女の両膝が、徐々に緩んでいった。

あとになって、彼女は恥かしそうに、顔を赤らめながら、小さな声で言った。

「あのときが、一番よかったの」

☆

すっかり、手足の力を失くしてしまっている彼女を抱え上げて、柱の前に置いた台の上に立たせた。

僕が手を離すと、彼女の裸身は、くたくたと台の上に、くずれてしまう。

僕は浩子を柱に縛りつけた。

両手を左右に開けさせて縛りつけた。

足首から膝頭、太股、腹部、胸——と。

彼女は、僕のするがままになっていた。

台を、さっと取った。

彼女の全体重を支えてい

た台を除いた。

グクッと5センチばかり、ずり下ったが、そこで止まった。両腕を鴨居に縛ってあるので、それが支えになったようだ。

「ううう……」

彼女の呻き声が陶醉を深める。

僕は、その肢体を穴の開くほど眺め、そし

て、ゆっくり写真に撮った。

やがて、浩子の首が、がくりと倒れ、縄によって失神してしまった。

僕は、あのときの光景を、今でも忘れることが出来ない。

縄で縛られて失神してしまう女——。

それは一体、どういうことになっているのだ。僕にも、さっぱり、わからない。

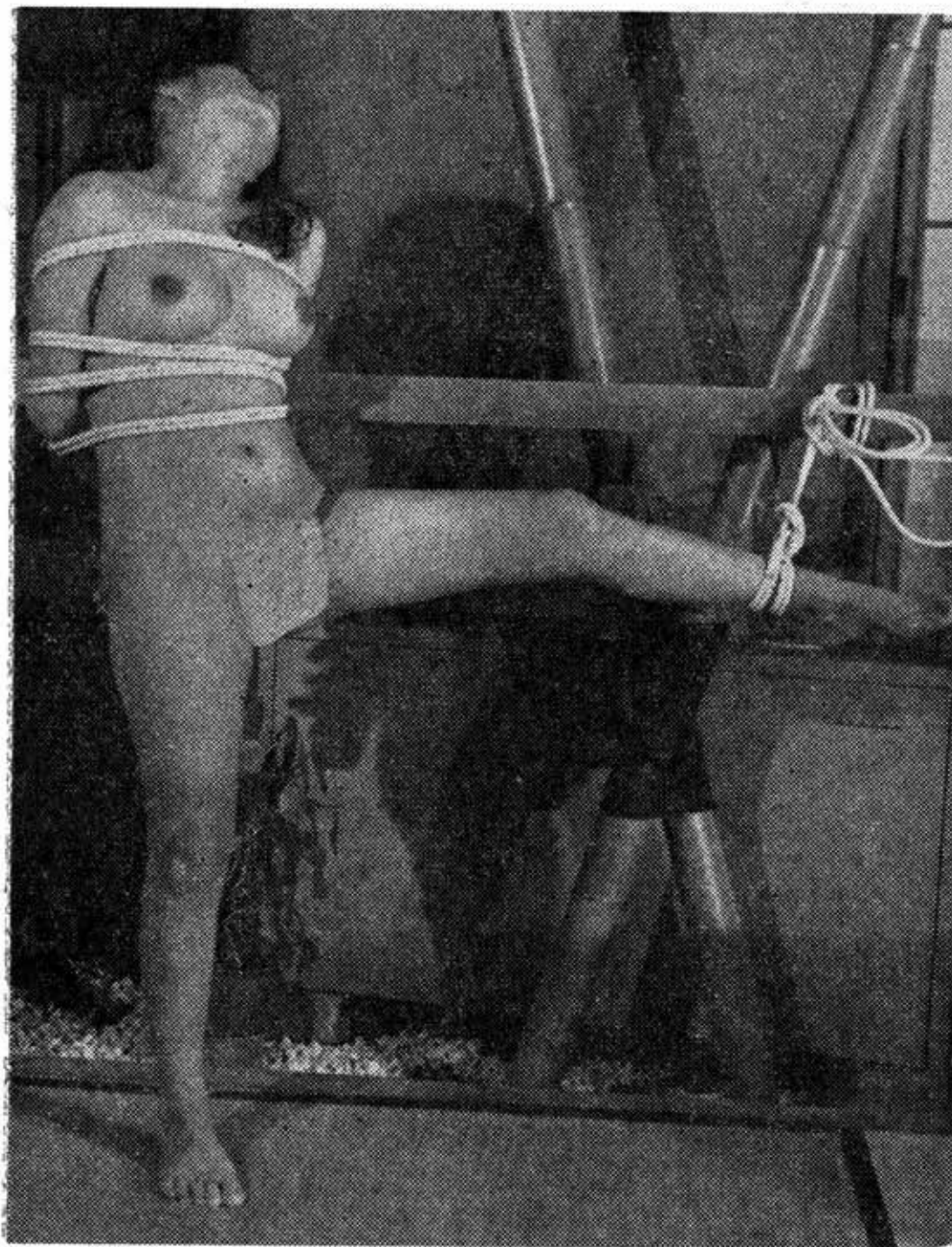
縄を解いてからも、彼女の身体は、全身がクラゲのようで、力が入らない。

すべて、僕のするがままだ。

僕は、くにやくにやの女体を弄んだ。

そして、また、縄で縛った。

片足を、高々と吊り上げた。足首を縛った縄尻を鴨居に通して引っぱると、足を開かれまいとする彼女の意志とは反対に、吊られた片足は、じりじりと上ってゆくのだ。







僕は面白くなってきた。彼女の隠しておきたい場所が、次第次第にあらわになってゆく。縄止めておいて、殊更カメラを近づけてアップにする。

彼女は消え入りたげに羞かしがる。しかし、それで許されたわけではない。

写真を写し終ると、再び縄尻を持って、じりじりと引き上げるのだ。もう、片足が一直線のように、上に伸びきってしまった、下になった足が、徒らに、空をけている。

僕は、そんな彼女に意地の悪い視線を注いで、一年何カ月間に、どのように変化、成長したかを具さに観察してから、やおらパイプを、とりあげた。

僕が彼女と逢わなくなっ  
てから、もう、どのくらい  
経っただろうか。その間、

彼女は、何人ものファンの男性とプレイをやったということだ。僕は、あらぬ妄想を走らせながら、その部分を熱心に眺めていた。

普通、パイプは、それ自体、振動している  
ので、放っておくと、すぐに抜け落ちてしま  
うのだが、浩子はどうかだろうか、ぴったりと  
銜え込んで放さないのだ。

そのままにして責めながら、いろんなハレ  
ンチをポーズをとらして弄び、悶えぬく姿を  
カメラに収めていった。

彼女は断末魔の呻き声を洩らしつつ、喘い  
で畳の上を、ころげまわった。

これが彼女を責める最後になるのかと思っ  
と、やけっぱちになって責めまくった。

やがて彼女の全身の力が抜けてしまった。  
もっと、時間さえあれば、彼女のマゾの限  
界を見極めるまで、念入りに責められたのに  
と考えると残念だった。

## 挑発する女

もう二度と、高村浩子は僕の所へは、連絡  
して来ないだろうと思った。

あれだけ手荒な責め方をし、辱かしめを与  
え、まるで人間扱いをしない羞恥責めを加え



た上で放免したのだから、懲々したことでだろうと思った。

それが、どうだろう。

年が明けて成人の日が済むか済まない或日のこと、思いがけず彼女から電話があった。

「お逢いしたいんだけど……」

その日は暖かった。

オーバーを手にして車に乗り込んできた高村浩子の顔は上気して汗ばんでいた。

「汗をかいているじゃないの？」

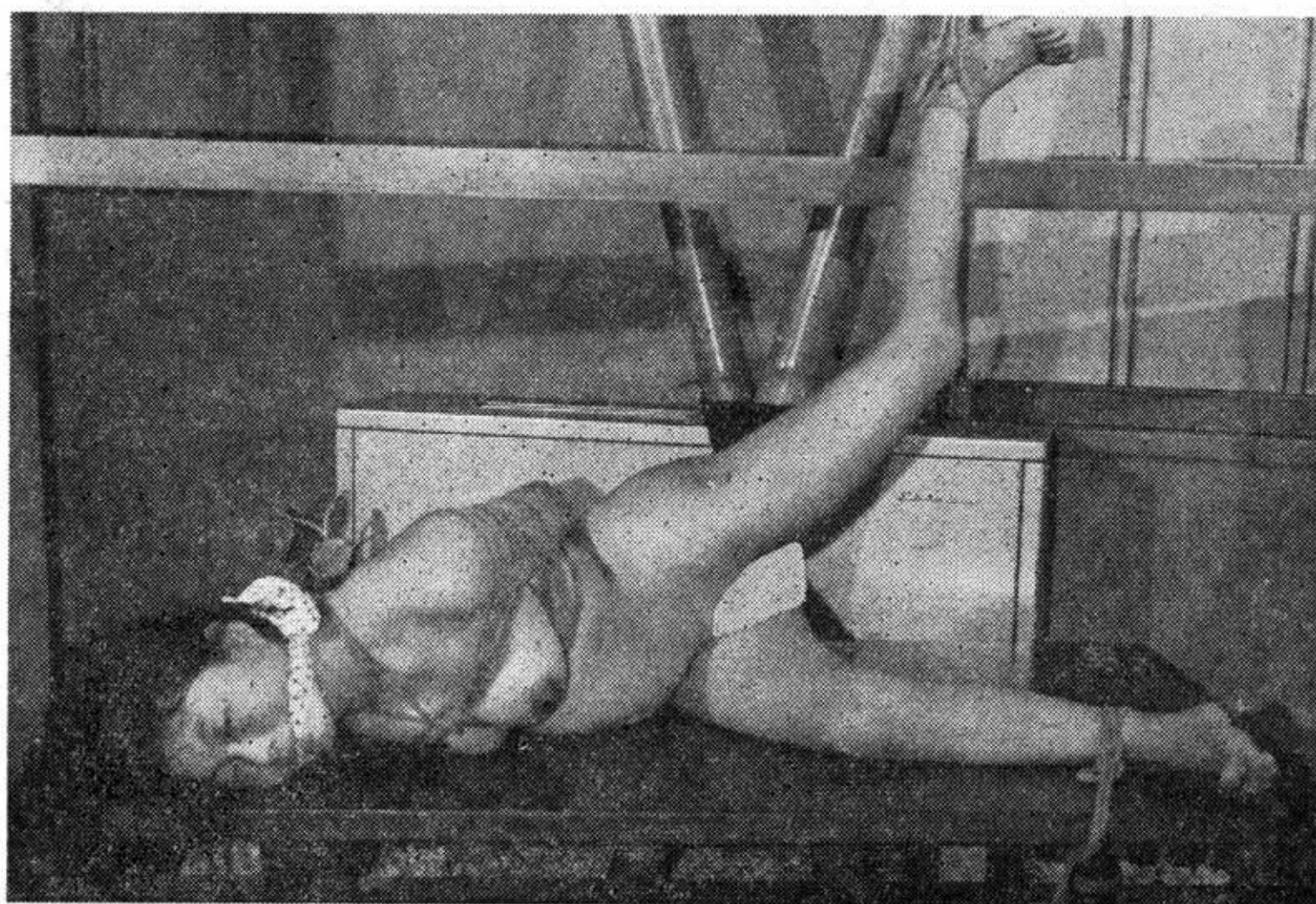
私は車のヒーターを止めながら言った。

「ええ、お待たせしてはいけないと思って、地下鉄の階段を駆け上ってきたの。暑くて暑くて、オーバーも脱いでしまいましたわ」

車を走らせてから三角窓を開けた。

「いや実は、貴女は、もう都会へは戻って来ないと思っていましたので、電話があったときは、正直いって、びっくりしましたよ」

「田舎に二十日ばかり、いたんですけど、やはり遊んでばかりおれませんか」



の、仕方ありませんわ。でも、田舎って本当に、よかったですわ。空気がきれいだし、それに、お魚が新しくて。うんと食べてきましたわ。都会では信じられないくらい安いですもの」

彼女は饒舌なくらい、よく喋った。

この前とは大変な違いだ。

顔色も、この前よりは格別によい。

どうしてこうも違うのだろうか。やはり田舎で過してきた、せいだろうか。

「今日は、時間の方は、いくら晚くなくても構わないんです。お暇を頂いてきましたから」

「おお、そりゃ、いいですな。それだったら落着いて、ゆっくりプレイ出来ますな。それはそうと、一泊ぐらいで出られませんか。泊りがけだったら、一晩中、ぶっ続けて、面白いプレイが出来るんですがね」

「私、夜は出られないんです。夕方、六時頃までだったら、お暇もらえますから、お休みの日の、お昼にして下さいますか？」

「残念ですが、仕方ありませんな」

「我儘言っただけです。次も、お昼





に逢って下さいね。お願いします。私、どうしても泊ることは出来ないんです。御免なさいね」

彼女は申し訳なさそうに詫びた。

☆

案内の婦人が出て行くか行かないのに、浩子の様子が、変になりだした。

そわそわして、脅えだしたのだ。この前のように、僕に襲われるのではないか——という予感がして用心しているのだろう。

僕の両腕には、あのと自分の自分の両腕の中でガクガクとふるえていた柔らかい上半身の感触が未だに、はっきりと生々しく残っている。

そして、ジーンズも、パンティストッキングも、パンティも、一緒にして、裏返しになるのも構わず足でくると剥くように、はがしていった感激も忘れられない。

僕は彼女の脅えたような全身に、じっと視線を注ぎ

ながら、素早く洋服を脱いで、浴衣を羽織った。今日は時間がたっぷりあるということが幾分、僕の気をゆったりさせていた。

でも、視線をはずすと、彼女が、その場から逃げてゆくような気がして離せなかった。息づまるような、狙う者と狙われる者の切迫した一瞬だった。

浩子の心の中にも、この前のあのとときの淫らな連想があったのだろうか。

それとも、僕の目で鋭く睨まれていて、いたたまれなくなったのか。

肩を小刻みにふるわせながら、両手をうしろへついて、いざるように、僕から遠ざかるうとした。膝もがたがたしているのが、離れている僕にも、よくわかるのだ。

意識してか、無意識でか——。

それはS男にとって、たまらない誘惑だ。

M女が、全身で誘っている媚態だ。

今にも襲われるか、今にも襲われるか。

おののき、恐怖に脅えきった表情だ。

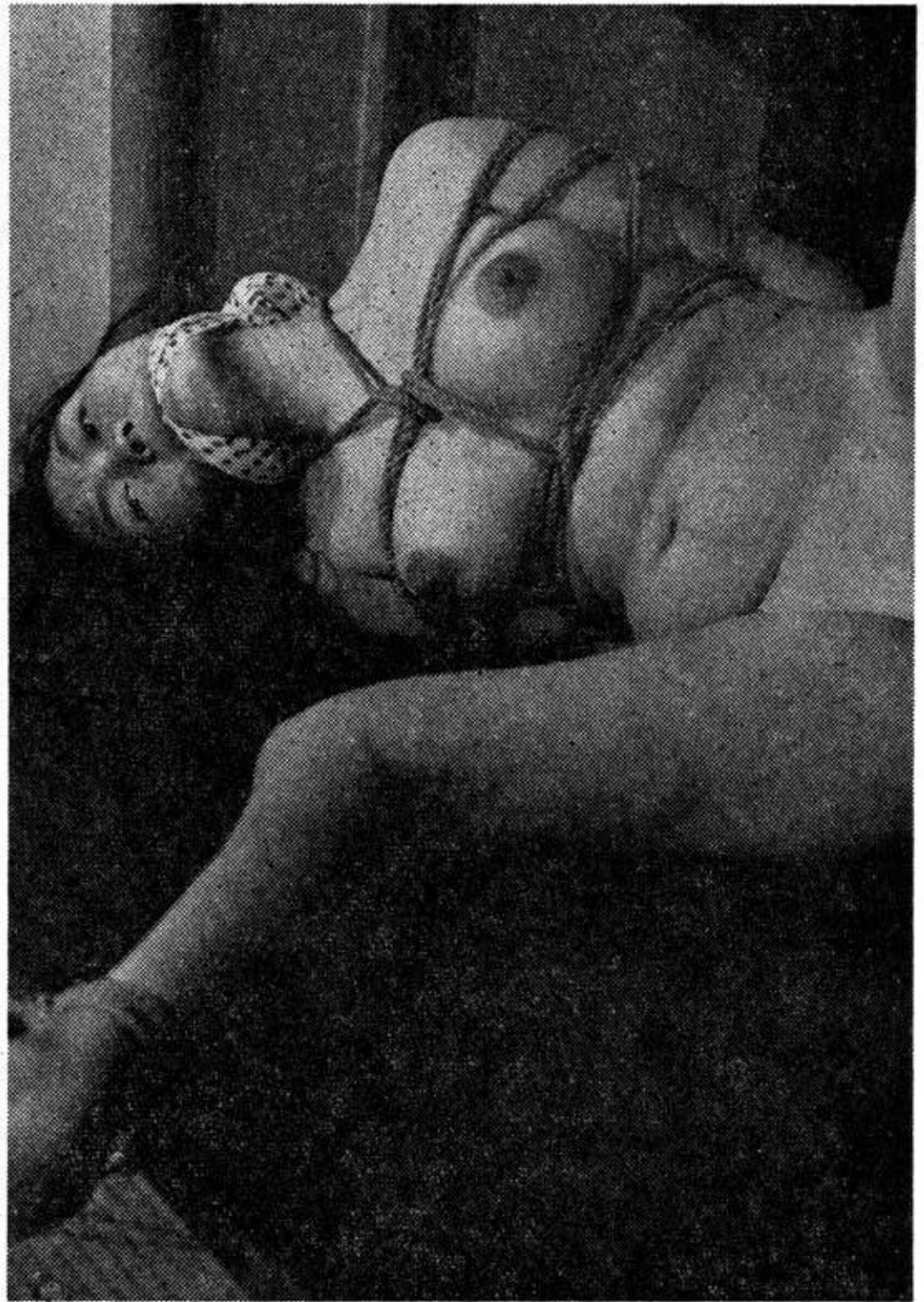
僕の全身は熱く燃え上ってきた。

口の中が粘って、ゴクリと生唾をのんだ。

お互いに無言だった。

この機会をはずしては、もう二度と、火花の散るようなプレイが出来そうになかった。





演出でもない、打合せをしたわけでもなかった。それなのに、二人の心と心の間に、無言の契約が出来上っていたように、このような場面を待ち望んでいたのだ。

これは、お互いに待ち合わせて同道してきたSMプレイに間違いはない。

それなのに、高村浩子は巧まずして、名演

技者だった。それはM女の天性の然らしむところなのだろうか。

S男を地獄の奈落の底まで、引きずり込んでしまうような視線と表情だった。それにっられて鼠を狙う猫のように、僕は彼女の上半身に、とびかかっていった。

「あっ」

小さな悲鳴と共に彼女は、のけぞった。僕が襲ってきたら、こうしようと予期していたような型にはまった仕草だった。

両手を突っ張って僕の顎と胸に手をかけて激しく抵抗した。

その手を軽くなして、頬と頬とを、ぴたりと合わせて、頬ずりをした。

ねっとり、吸いつくような、なめらかな肌だ。若くて香ぐわしい女の肌だ。なんとぬめぬめとして、柔らかい頬の肌だろう。

浩子は全身を堅くしてブルブルとふるえている。何を怖れているのだろうか。それともM女のマゾの感激の余りなのか。

いずれにしても、それは僕にとって、快い肉体の織動だった。

唇を唇に当てたが、彼女は口を固く鎖して開こうとはしない。彼女の下唇に軽く歯を当てて噛む。そして、右と右の頬、左と左の頬を交互に擦り合わせた。

たまらないほど、すべすべした肌だ。

可愛い。食べてしまいたいくらい可愛い頬だ。可愛いだけじゃない、ねっとりとした、生きている若い女の頬の感触が素晴らしい。

いくら頬ずりしても飽き足りない。



唇を噛む。顎を噛む。鼻を噛む。  
咽喉へ唇を這わす。

「くくくくくく……」

擦ったそうに、イヤイヤをする彼女。

再び激しく頬ずりをしてから、鼻の頭を噛む。そして瞼に唇を当てる。

唇の下で瞳がピクピクしている。

もう一度、頬をすり合わせてから、耳たぶに歯を当てた。歯型がつくほど、前歯でジーンと噛みしめるように噛む。

このときになって、初めて浩子の全身のふるえが止まり、堅さがとれた。

前歯を通して耳孕の快さが伝わってくる。

彼女は、痛いとは言わない。

僕は更に、前歯に力を入れて噛んだ。

右と左の耳を交互に噛んだ。

耳から、彼女の体臭が、かすかに匂った。

僕は耳たぶに歯を当てながら、ズボンのホックをはずしておいて、浩子のお臍のまわりをさすってから、お尻へ手を回した。

冷たい、お尻の膚だ。

お腹は温かく、お尻は冷たかった。

皮下脂肪の少ない、ぺしゃんこのお腹のお臍のまわりを、擦りまくる。そして、その次は冷たいお尻だ。大きくはない、きゅっと、

よく締まった、お尻を撫でる。

彼女は擦ったがって、もじもじするが、言葉に出しては何も言わない。

「ああ、可愛い、可愛い」

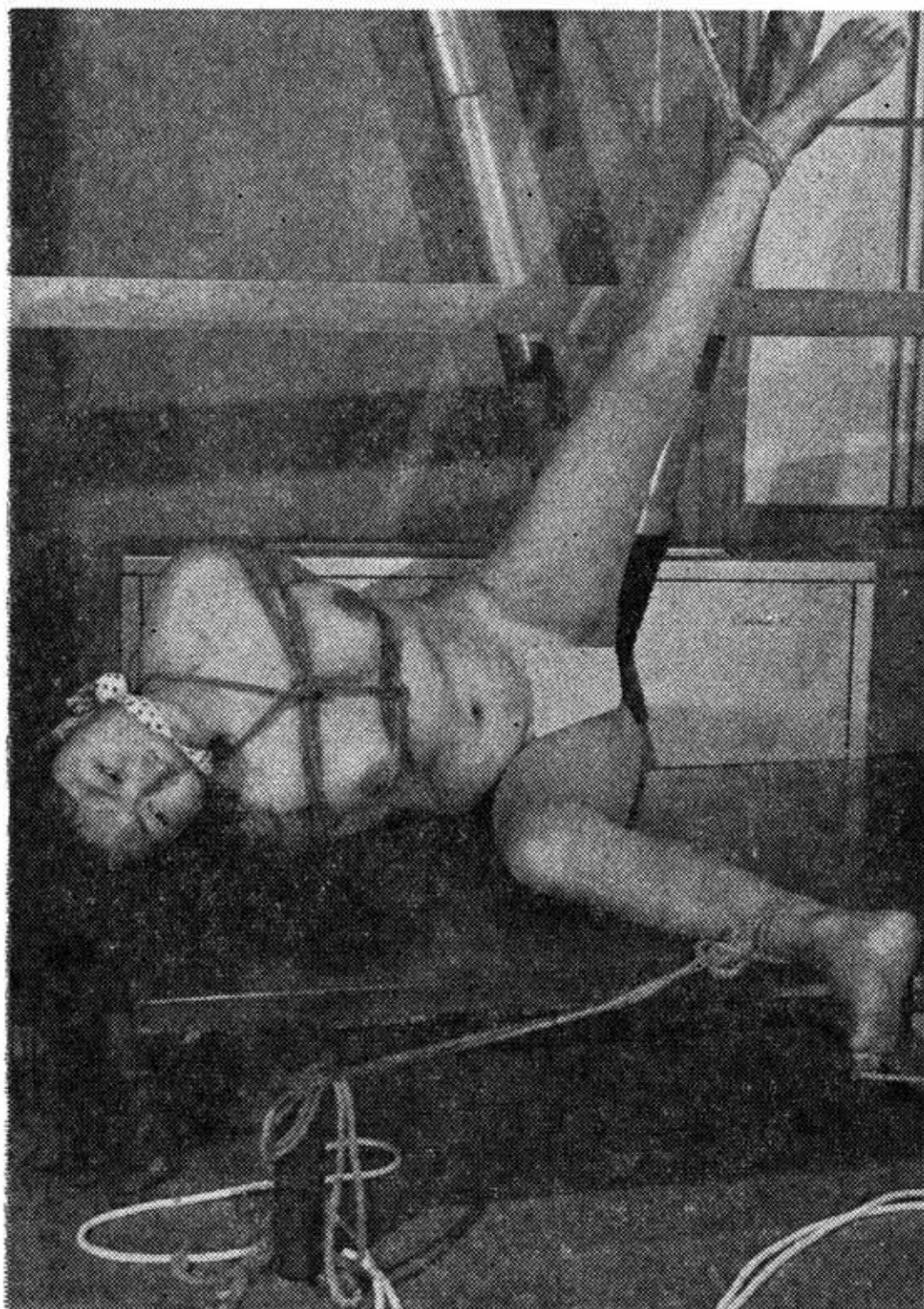
僕は耳から口を離して頬ずりをする。

荒々しく彼女の首を両手で抱きしめて唇を合わせておいてから、一転して、虚を衝いた

ように、セーターをアンダーシャツ毎、くると捲くり上げた。

彼女の両手を万才の格好にしたまま、裏返しになったセーターの中に閉じ込めておいてその端を浴衣の紐で括った。

裏返しになったシャツは、彼女の首のところで、ぴったりと止まっている。





さて、僕は、ゆっくりズボンを取りにかかった。彼女は、ぴったりと両膝を合わせて、それを必死になって防いでいる。

僕は両手を彼女のお尻に、掬うようにして回した。ピチピチしたお尻が、よく動く。

指先を這わすとピクピクと蠢いた。胸が激しく上下している。

唇を乳首に当てた。

コリコリとした堅い感触だ。

「あれっ」と、思った。

みるみる、大きくなった感じだ。

彼女のズボンを更に、ずり下げる。

パンティストッキングが、ひつついたまま、めくれている。途中からパン

ティも一緒だ。

すべて裏返しのままだ。

白いパンティの股の所が黄色く色づいている。足首まで、捲くりあげたとき、初めて彼女は、自分から、片足からズボンを抜いた。

M女は、なかなか、自分からは行動を起さないものだ。すべて、あなたまかせだ。左足首にまといついた裏返し



のままのズボンを僕は、わざと取らないでおいた。

足の指でひっかけて、荒々しく剥ぎとり、部屋の隅へ蹴とばしておくのも一つの手だ。でも、こんなにして、足首に裏を返したまま、へばりつかしておくのも面白い。

顔と両手は、裏返しになったセーターの中に隠れていて見えない。

首から下は、すっかり、むきだしになってしまっている。左足首に、ズボンの裏返し、まといついている他は――。

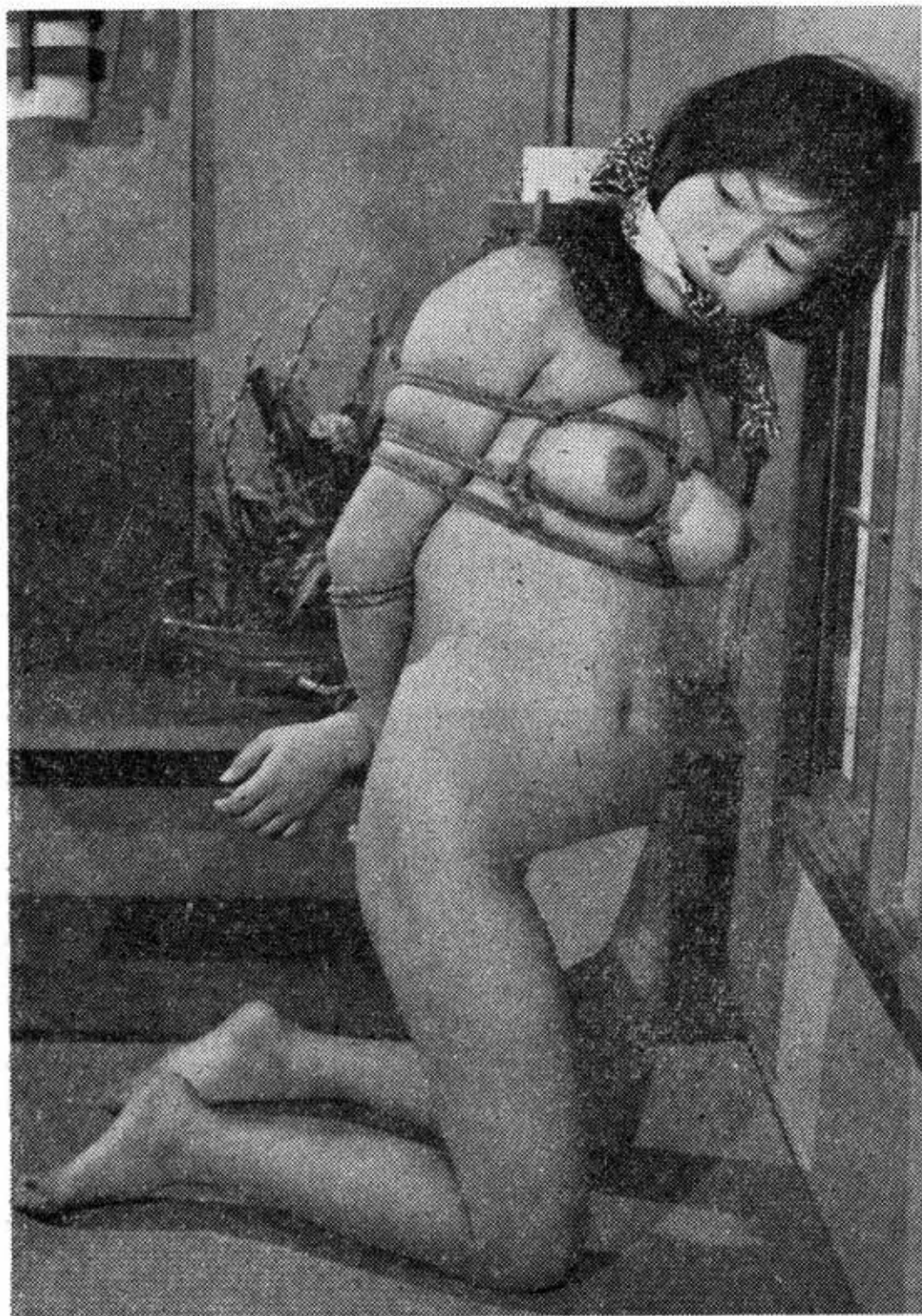
僕は、そんな高村浩子を、じっと見下しながら、足の指で太股を抓った。

彼女は、何をされるのか、わからないので脅えている。顔をセーターの首から出そうとするが、僅かに顎の先が出る程度だ。

この部屋へ入ったばかりで、ライトニングの配線は、残念ながら、まだ出来ていない。

風呂の湯を止めて戻ってきた僕は、彼女の傍らに横になって、頬杖をついた。片手を伸ばして、ピンと突っ立つ





ている乳首に指先を触れた。頂点の平坦地に指先の腹を軽く当てて、くるくる、くるくると、時計の針の方向に、ゆっくりと回す。

お腹が、きゅっと窪んだ。

お臍が、つぼむ。

膝頭と膝頭が、ぴったりと、力をこめて合わさり、両脚はピンと伸ばしている。

足の拇指に力が入ってきた。

乳首から手を離して、お臍のまわりに掌を当てるか当てないかの、すれすれの距離で、さする。今度は、胸が大きく喘ぎだした。

「顔を出さして、お願い」

いくら、もがいたって、掴みどころのないセーターから、首は抜けない。

僕は片手だけで、彼女の肌を弄ぶ。

決して、手荒なことはしない。

「いじめてほしい」「なぐさみものにしてほしい」「おもちゃにしてほしい」

それは皆、彼女が僕に手紙で言ってきた言葉だ。そんな抽象的な文句が、一体、何を意味するのか、彼女も知っているのだろうか。

僕に願ひさえすれば、ただ、じっとしているだけで、羽化登仙のM女としての最大の喜びを得られるとでも考えているのだろうか。

僕は依然として、頬杖をつき、煙草をくゆらしながら、片手で、面白半分のように、浩子の肌を、さすりまわしていた。

手が草原地帯へ行くと、もう、ここだけはどんなことがあっても、金輪際、明け渡してなるものかといった激しい気魄で、しっかりと両膝を固めて抵抗した。

僕には、そのはかない彼女の抵抗が、おかしかった。きっと、見られてはならない状態に、そこが変化しているのだろう。

そして、それでいて、無理矢理にだったらそこを暴かれたい気があるに違いない。

僕は煙草の灰をお臍の窩へ落した。落ちておいて、その灰を肌へ、すり込んだ。

そんなことをやっても顔をセーターで









もあり、同じところもあるような気がした。女を責める場合、「口」は非常に大切な役目を持つ。殊に、饒舌な女性に対しては、うまく誘いに口説を施すと、あらぬ囁言を喋りまくって、自ら、その『被虐』のムードの中へ、はまり込んでしまう。

また、無口の女性にしたって、一々返事は

してくれなくなっちゃって、こちらの焚きつけた誘発の言葉は、必ず、体の反応として返ってくる。女は、口で否定したって、体の反応の方は、まことに正直なのだ。

「口」の役目として、もう一つ大きな仕事がある。例えば、両手も両足も責めに動員されているとき、口の果す役割は大きい。

唇あり、舌あり、歯あり、しかも、吸引力と吹きつける力も具えているのだ。

僕は無防備に、さらけ出している彼女の腋の下へ唇を当てていた。

チーズのような体臭が鼻に匂ってきた。

高村浩子は、決して腋臭ではない。しかし入浴していない若い女の肌からは、なんともいえない香ぐわしい体臭が匂ってくるのだ。

若しも、腋臭の強烈な匂いを放つ女性がいたとしたら、僕は忽ちにして燃え上ってしまった。そんな女性を、一度、思いきり責めてみたいと考えているのだが、未だに、その機会には恵まれない。

汗ばんだ浩子の腋の下へ顔を埋めるようにして僕は唇を当てていた。

腕のつけ根へ、唾液に濡れた唇をナメクジのように這わしたとき、彼女は、狂ったように、もがいた。

もがけばもがく程、手もまた、滑り込む。濡れた唇は、乳房の脇に滑って、そこで歯を当てた。丘の横から、かぶりついた。

歯型を麓から並列に頂上まで、つけていて、その頂の乳首に歯を当てた。

そこで、唇と舌が活躍する。

丘と丘との間に、僕は顔を埋めた。



顔をずらして、お臍まで来たとき僕は舌を伸ばして、臍窩に探りを入れた。

苦い味がした。

右手は下、左手は上、そして、唇は中央の臍窩に吸いついていた。

左手は、腋の下から、もぞもぞと這い上って、顎の下、頸すじを擦りまわした挙句、小指を耳の穴へ挿し込んでいた。

☆

男と女の営みを、ベッドの上か、布団の上で、とばかり考えている人には、生活のマンネリが早く訪れるのではなからうか。

場所を変えただけでも、どれだけ新鮮な感激を生むことか。これは一見、なんでもないことだが、一度、経験してみると、よくわかるのだ。

「こんなところでは、絶対にイヤ」

余程のことがない限り、十人が十人、そう言うに違いない。が、しかしだ、SMプレイの面白さは、こうしたところにある。

「こんなところでは、イヤ。でも、こ



うなったら、仕方がないわ」

そう言わすところに、SMプレイのSMプレイとしての値うちがあるのではなからうか。

夫婦プレイで、マンネリ化を訴える人々は非常に多い。実際に毎日、顔をつき合っていると「馴れ」に惰してしまうというのも無理からぬことだ。しかし、反面、一人の女性を究めることさえ出来なくて、何のSMプレイの研究ぞVということさえ言える。

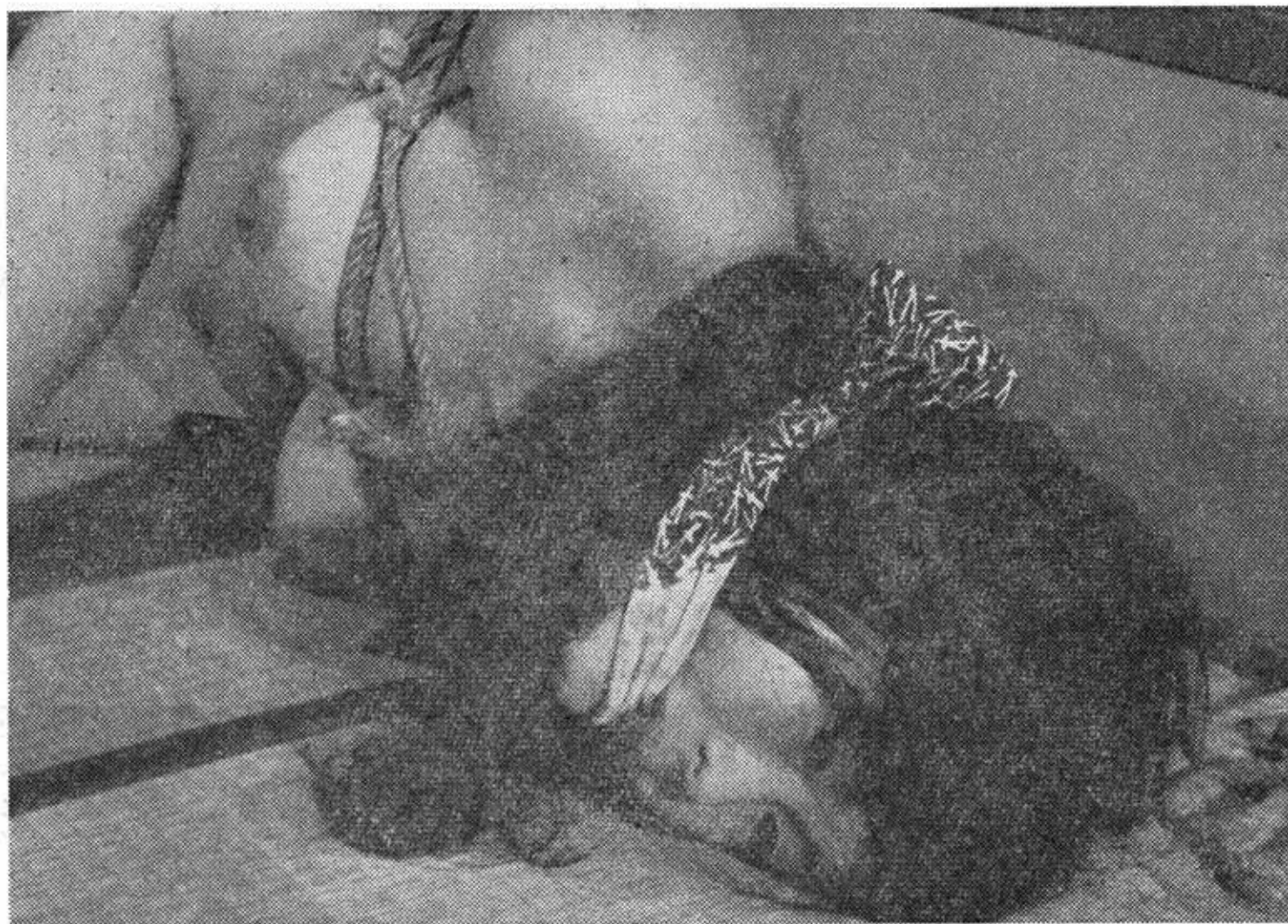
そこで、プレイの場所を変えることで、新発見か、大発見をすることがあるものだ。

相手になる対象が、変らないとすれば、場所と時間を変えることによってムードに変化をつけることが出来るのだ。これは理屈じゃなくて、それを敢てやる実行力さえあれば、その観面<sup>てき</sup>の効果に、きっと驚かれるだろう。

本誌に、よく載っている「プレイ旅行」なんかは、場所と時間の異動によって、うまく変化の妙味を享受している実例だ。

余裕があれば、それもよからう。だ





が、何も旅行ばかりが能ではない。例えば、時間の方で言えば、奇襲戦法と、待ち伏せ作戦とがある。奇襲戦法とは、或日或時間、突然、電話をして、妻を呼び出すのである。電話がなければ、置手紙も面白い。

恋人時代のように喫茶店へ呼び出して待ち合わせるのでもいいし、街頭で待ち合わせてもいい。妻を拐って、SMプレイの場へ連れ込むというのも面白いじゃないか。

置手紙のことを書いたが、毎日、顔をつき合わせている妻に、SMラブレターを書くのはどうだろう。まかり間違えば、主人が色気狂いになったのではなからうかと誤解される恐れは多分にあるが、若し実行したとした

ら、その効果は絶大なものがあるう。

ただ、世の男性は馬鹿らしくて、実行しないだけだ。そして、時としては、つまらない男の色事師的な手練手管に、妻を誤らせてしまふ失敗をする。

待ち伏せ作戦というのは、一月後でも三月後でもいい、はっきり日時をきめて、その日その時間に、SMプレイをやることを宣言しておく。そして、その日が来るまで、何回となく、その責め方を具体的に、微に入り詳細彼女の耳に吹き込んでおくのだ。寝物語でもなんでも、事毎に、話しかけておくと、彼女も、いつの間にか、その気になってしまうものだ。

夫婦なればこそ効果がある面白いSM作戦だと思う。僕は大体、夫婦プレイに於いては妻に対して全力投球すべきだと思っている。そして、徹底して、常識破りの痴漢的行為に出るべきだとも考えている。

例えば、炊事をしていて両手を使えない妻の背後から襲ったとしたら、どうだろう。そんな馬鹿な——と一笑に附されるかもしれないが、しかし、彼女が如何に燃えるか、いや燃えたか、ということは、これは実行者のみが知る「女性の謎」である。



## 閑話休題――

☆

さて、高村浩子は完全にグロッキーになっていた。顔を隠しているということで、彼女は、首から下を狂い回らせた。

僕の方も、彼女の手が出て来ないのと、彼女から見られていないということの二つの理由で、思いきり動物的になれた。

その間の詳細を記述することは、勿論、許されないことだが、とにかく、立ち上った僕の目の下で、彼女は虚脱状態で長々と伸びていた。もう、少しぐらいの刺激を加えても、全く無反応である。抱き起そうとしても、骨無しのようにぐにやぐにやで、掴みどころがなく、まるで軟体動物だ。

僕は、それ以上、責めるのを諦めて、彼女を、そのまま放置して、浴室へ向った。

## 縄と柔肌と――

風呂から上ってみると、浩子は、ちゃんとセーターを脱いで浴衣を羽織り、きちんと食卓の前に座っていた。

「お風呂へ入ったら、どう？」

僕が上るのを待っていてくれたのかと思っ



て声を掛けたが、彼女は座ったままだった。

「いいえ、いいんです」

事が終われば、何をおいても、トイレか浴室へ飛び込む女が多い中で、彼女は、そのどちらへも急いで行かないタイプだった。

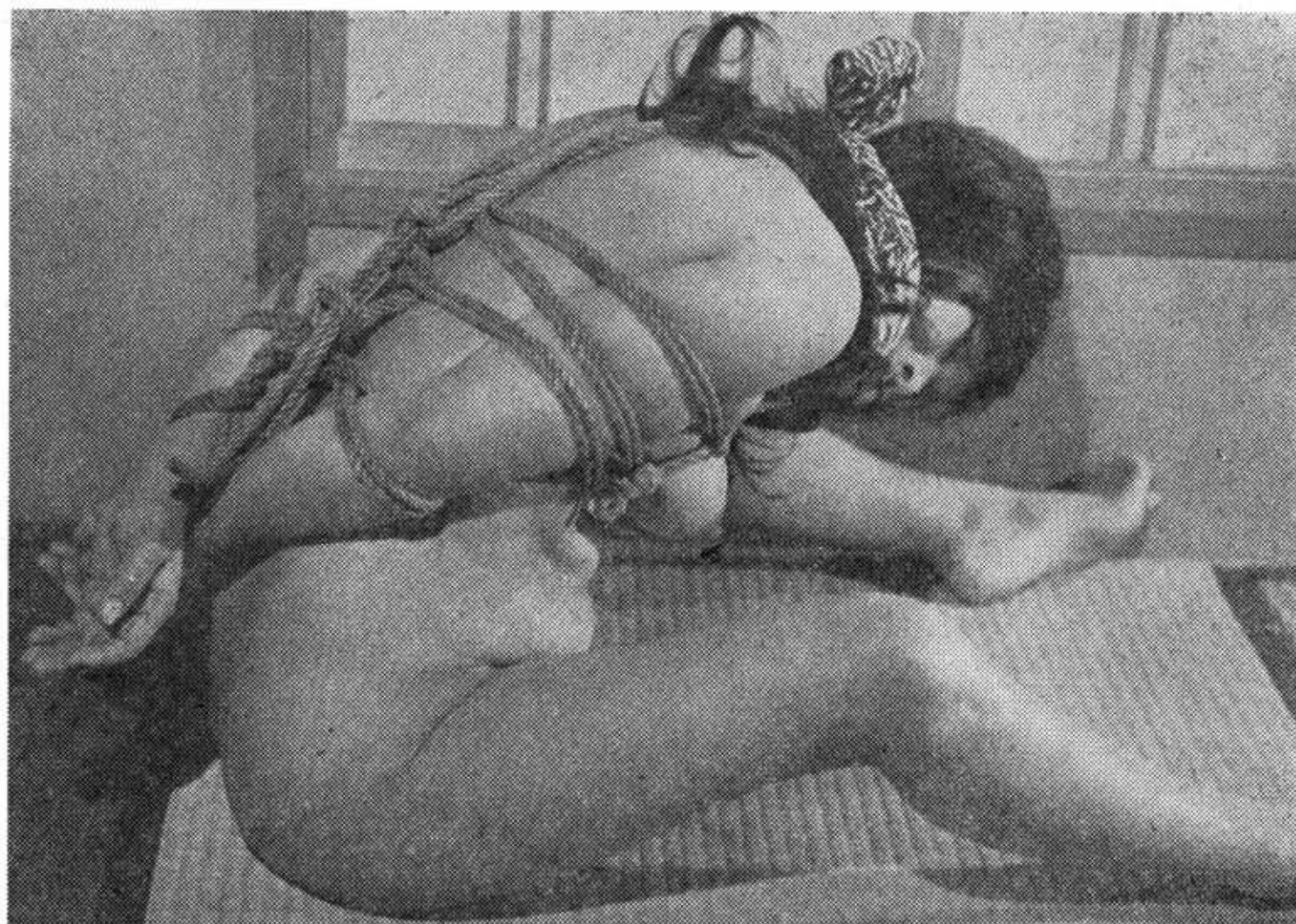
不機嫌なように黙ったまま、うつむいている。もう、どんなに言葉をかけてきても、喋

らないぞ――という、かたくなな態度だ。

僕は、そんな彼女に構わず、どんどん、写真撮影の準備を進めていった。

無口で淋しげな彼女の横顔を、じっと眺めていると、僕は無性に、いじめたくなった。さっきは、軟体動物のように、骨なしの、ぐにやぐにやの体になっていながら、今はも





う、そんなことは何も知らないといった、そらぞらしい顔つきをしている。

そんな浩子を見ていると僕は妖しい魔性の精にとり憑かれている自分を自覚した。

責めたくて、いじめたくて、土足で踏みにじってやりたくさえ思った。

憎くてでは勿論、ない。さりとて、可愛いくてでもない。言わば、痺れるようなSMの抜き難い魅力に誘われてのことだった。

自分が狂ってしまうのではないかという恐怖にさえかられた。

僕は手に縄を持って彼女に近づいた。

今まで座っていた彼女は僕が近づくと、脅えたように、後ずさりしながら、仰向けに倒れた。僕は、まだ何もしていない。それなの

に、彼女は、自ら浴衣の裾を割って仰向けに倒れてしまったのだ。

浴衣の裾から現われた白い胫から内股にかけて、さっきの熱戦のあとを物語るかのよう

に、ねっとり汗ばんでさえいる。僕は、蝶結びの紐を解き、浴衣の肩口から手をさし込んで、浴衣を脱がしながら、抱き起こそうとした。

彼女は僕のすることに、何も抵抗しないがさりとて自発的に起きようともしない。

虚脱状態の全身は、くにゃくにゃで、まるで力がないのだ。

一体、これは、どうしたことなのだ。

肌は汗ばむほど、熱く燃えているというのに、体は骨なしの、ふわふわ人間だ。

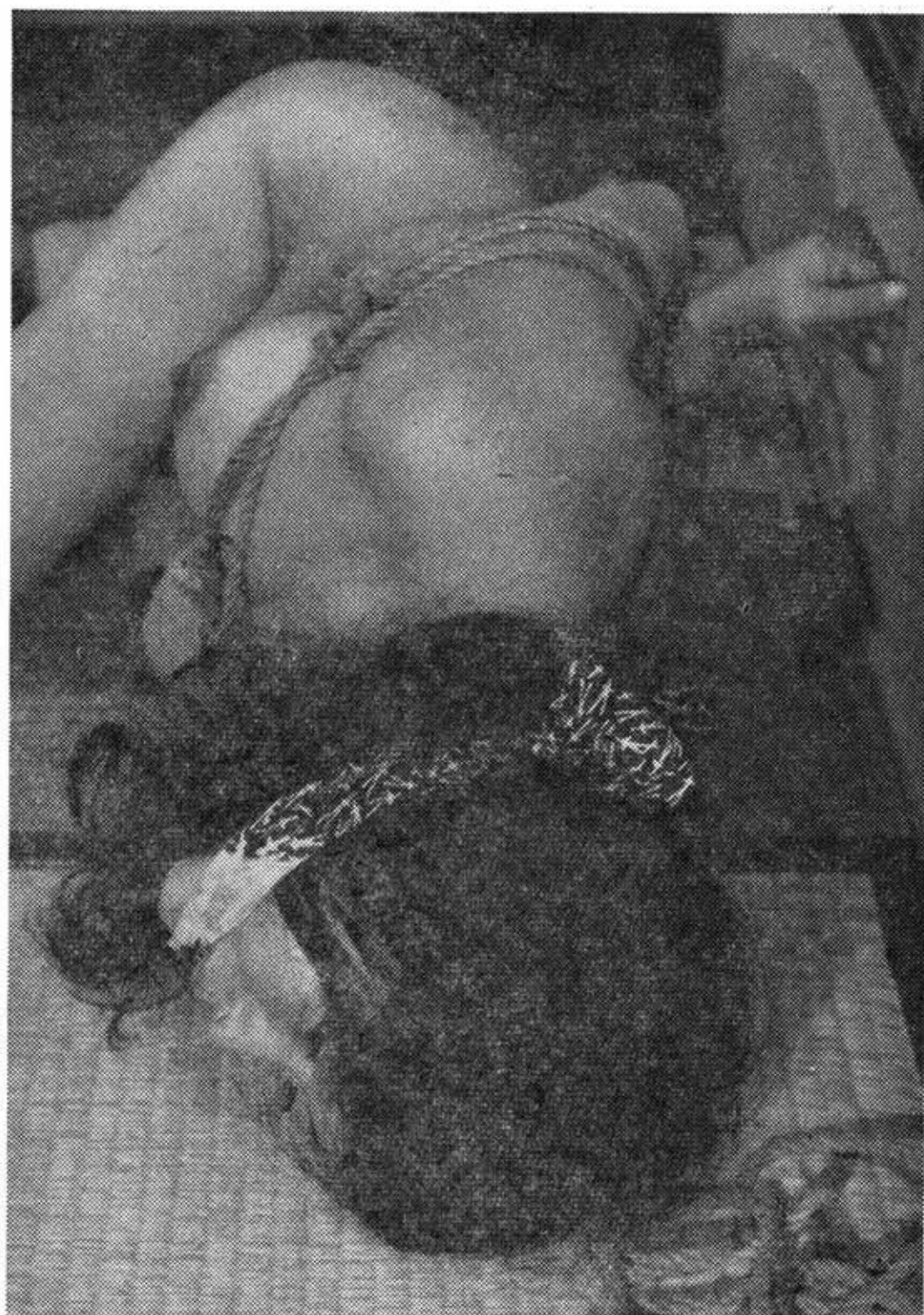
浴衣を剥がして、無理に起した。しかし足に力がないから、すぐに、くたくたと、くずれるように、うずくまってしまう。

僕は、彼女の両腋に腕をさし込むと、引きずるようにして、ライトの配置した場所へと運んできた。

うつ伏せにすれば、うつ伏せになったままいぎたなく寝そべっている。いわば、恍惚とした夢遊状態を、さまよっているのだ。

彼女にしたら、こうした法悦境を味わいた





くて、「いじめてほしい」と言ってきたのかな——と、ふと思った。

だが一方、こんな骨なし人間を縛り上げた、どうなるか、それにも興味があった。

△縛られるのが大好き△と言っていた高村浩子のことだ。その大好きな緊縛によって、どのように、体に変化するだろうか。

従来は、「緊縛」から入って、彼女の体を燃え上らせておいて、さて、本格的なプレイへ導入してゆく、というパターンをとっていた。それが前回から戦法が変わってしまった。のっけから、アタックしてしまうことになってしまったのだ。

彼女の誘発もあったが、その方が、彼女に

とっては格別に良いと言うのだ。

逆手にした両の手首は、よく挙がるし、縄を掛けると、よく締まった。

高手小手に縛り上げて立たしたが、まだ、足元が定まらずに、ふらふらだ。

追い立てて、部屋の一方にある横に渡した棧に縄尻を縛りつける。これで、倒れることも、しゃがむことも出来ない。

だが、長く伸びた髪をふり乱したまま、首は、がくりと前に垂らしたまま。手にも足にも力がなくて弛緩しきったままだ。

僕は髪の毛を、ぐっと掴んで顔を起した。

とろんとした眼だ。

「ちゃんとせんかつ」

頬を平手で叩く。

「顔を起して——」

物頼く、顔面が動く。

カメラを向けてシャッターを切った。

まるで処刑者のハリツケのようだ。

恐怖におののき、そのため虚脱状態に陥っ

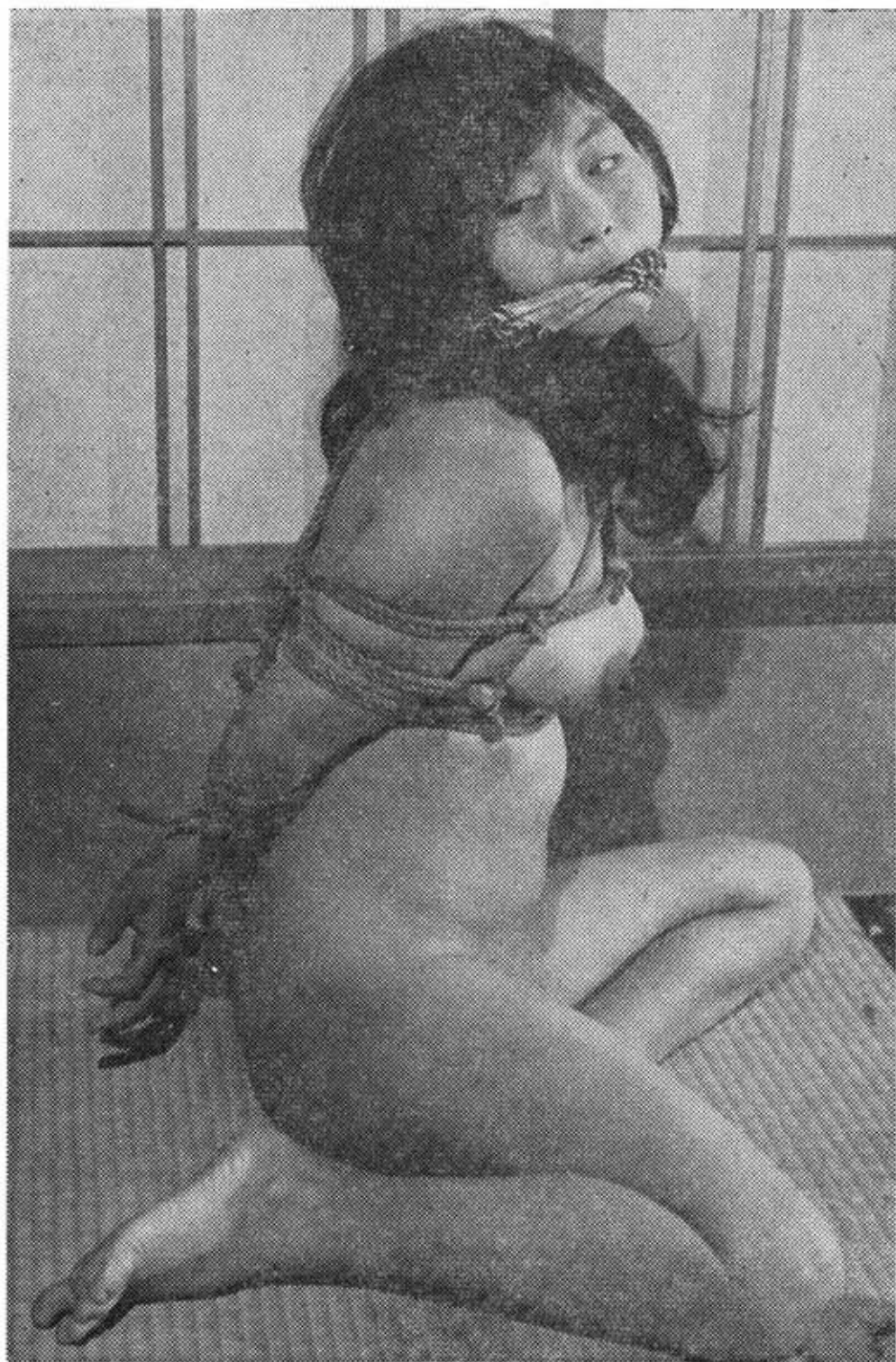
た、お仕置を受ける女囚さながらだ。

僕の嗜虐心は、むらむらと湧いた。

とことんまで羞かしめたかった。

ポーカーフェイスの彼女が泣き、喚き、狂いまわって許しを乞うまで、徹底して責めま





くりたかった。

彼女の全身は、それを待っている。

左足首に縄を掛けて、ずるずると引き上げると横棧に止めた。

羞じらいに頬を染めて、うつむいたが、彼女は声を出さない。全く、僕の為すがまま、全身を委ねている。

片脚挙げのあられもないポーズにさせてお

いてから、ゆっくりと正面からシャッターを切った。

そんな羞かしい格好を目の前に晒させたまま、僕は浩子を眺めていた。

彼女は身も世もあらず悶えている。もう、一本足で立っているのが耐えられない。

僕は、じっと眺めていた。

と、どうだろう。今まで、ずっと無言だっ

た彼女の口から、突然、言葉が洩れた。

「先生、く、苦しい」

頭が、がくりと前に倒れた。

「どうしたのだ？」

手にしたカメラを投げすてるなり、駆け寄って、慌てて、縄を解く。

縄を解くやいなや、僕の両手の中に、ぐったりと裸身をもたせかけてきた。腋の下から汗の玉が、一つ二つと、噴き出ている。

「気分でも悪くなったの？」

彼女を膝の上にのせたまま、縄の束の中に僕は座った。胸を縄で押えて、いや或は鳩尾を締めつけたから、気持でも悪くなったのかと、心配した。

「いいえ、もう、いいんです」

浩子は目を開けて、僕の方を見た。

なんともなさそうなので、ほっとした。

首が、がっくりと落ちたときは、どうしたことかと、びっくりした。

と、突然、彼女は体を起すなり、がばっと両腕を伸ばして、下から抱きついてきた。

「ねえ、もう、縛るのは、いや」

それは、僕にとって、妖しい悪魔の囁きだった。耳元に響く、その甘い語調――。

温かくて柔らかい胸の隆起が、僕のお腹の





あたりに、ぴたりと吸いついてくる。

さては、さっきのあの失神状態は、僕に縄を解かせるためのゼスチュアだったのか。

そうと判ると、僕は足下の縄を手にするなり、忽ち、彼女を高手小手に縛り上げた。

彼女は戸惑ったように、軽く抗<sup>あら</sup>がったが、うんもすんもない早縄だった。お腕を伏せた

ような大きな乳房が、周囲を縄で締めつけられて、むっくりと盛りあがった。

張りのあるプリプリとした豊かな乳房だ。

食卓を持ち出してきて、その上に縛り上げた浩子を追いつける。

食卓は、可憐なイケニエ浩子の処刑台だ。左足首に縄を掛けて、横棧に引き上げると

彼女はイヤイヤをして身もだえたが、僕は、そんなことは更々気にしない。

ぐいと片足を持ち上げさせておいて、正面からカメラを向ける。

消え入りたげな彼女の表情を見てみると、僕の心の中の悪魔が、むくむくと頭をもたげてきた。

左足ばかりか、右足首にも縄を掛けて、ぐいぐいと引っ張る。彼女は、そうさせまいと足先に力を入れる。しかし、所詮、両手の自由を奪われているのだから、どうすることも出来ない。左足も、彼女の意志に反して、じりじりと開いてゆく。

僕も彼女も、無言のままだ。

彼女は上目使いに僕の目を見た。

こんな、傍若無人の作業に熱中している僕に対しての彼女の無言のレジスタンスだ。

僕は内心忸怩<sup>じくじ</sup>たるものがあつた。

視線をそらしながらも、それでも、縄の手は緩めず、思いきり開いて縄止めする。

彼女は諦めて顔を伏せる。

羞恥の焦点にピントを合わせて、正面からシャッターを切る。燃え上るような熱気が、ふつつつと彼女の裸身から噴いている。

僕は意地悪い視線を粘つくく注いでいた。



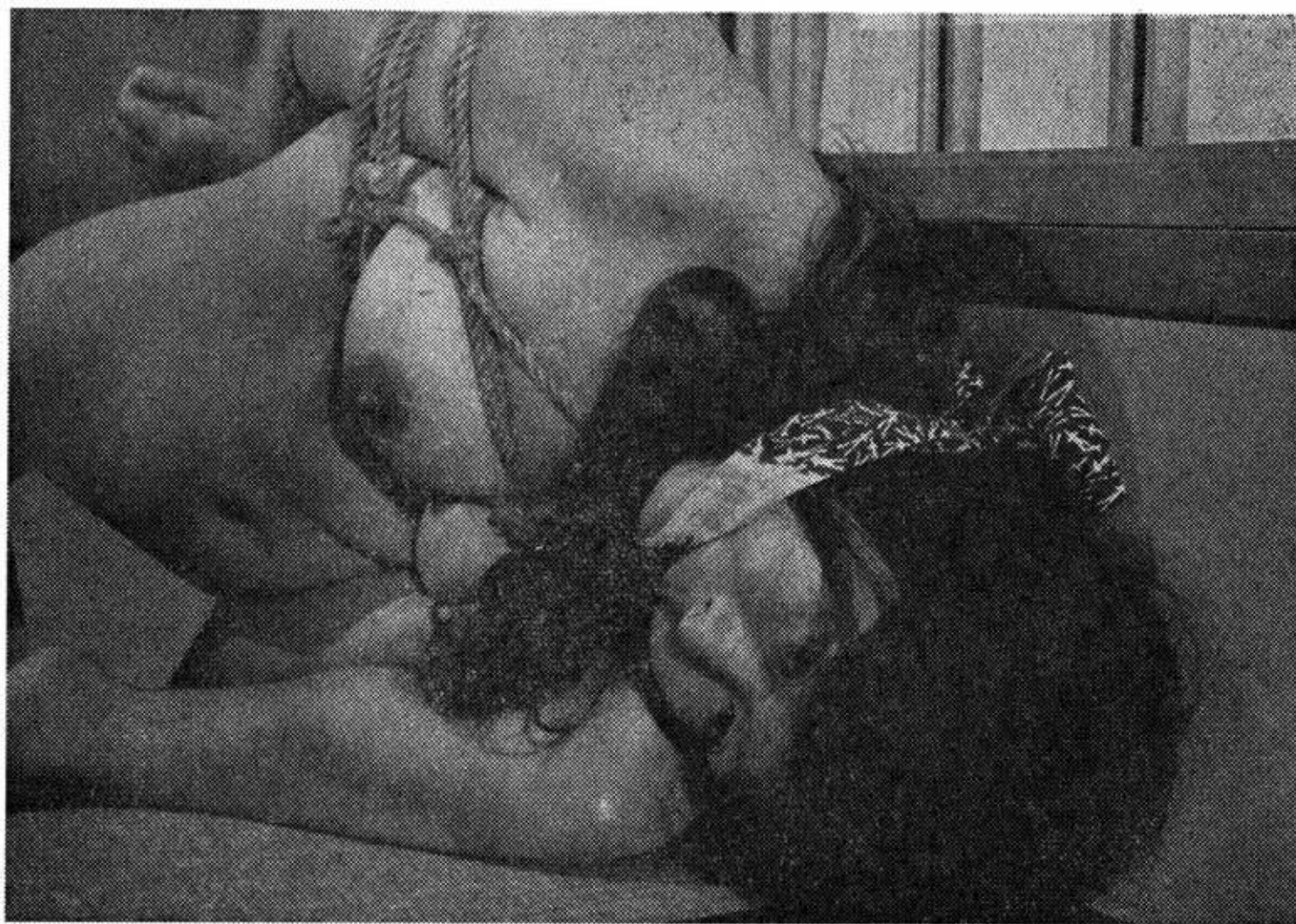
肉眼の方が正確か、カメラのレンズの方が正確か。僕はじっと見ていた。浩子は、次第に体を、もじもじさせる。

上半身が、ぐらりと大きく揺れた。右足の側の棧に留めた縄を解き、左足首を更に、一直線になるまで揚げてゆく。

大体に於いて、彼女の体毛は薄い方だ。太股なんか、すべすべとしていて生毛さえ、生えていない。人によっては、胫に剛い毛が密生していて、ストッキングを穿いたときなど長目の毛が横倒しになっているのが、透かして見えることがある。

高村浩子は、胫なんかも、かすかに毛穴らしいものは見えても、毛らしい毛は生えていない。掌を当てると、べったりと吸いついてしまうような、ねばっこい肌だ。

「安定を失った彼女は、たまらなくなつて、ごろりと横倒しになる。そうしたからといって、彼女の隠したい個所が隠せるわけでもない。食卓の処刑台の上で、軋々として身悶えする彼女に



ストロボの閃光が周囲から包みまくる。

あらゆる角度から、彼女の秘奥を暴き出すためにカメラを駆使した。食卓の脚もまた彼女の足首を留めるために活用できた。

見られるだけ見られ、写されるだけ写された彼女は、ぐったりと食卓の上で、伸びたように長くなっている。

足首を吊り上げたり、思いきり開かせたりした縄を棧や食卓の脚から解いてやると、彼女は、ほっとしたように、汗ばんだ裸身を横たえたまま、僕の方を見た。

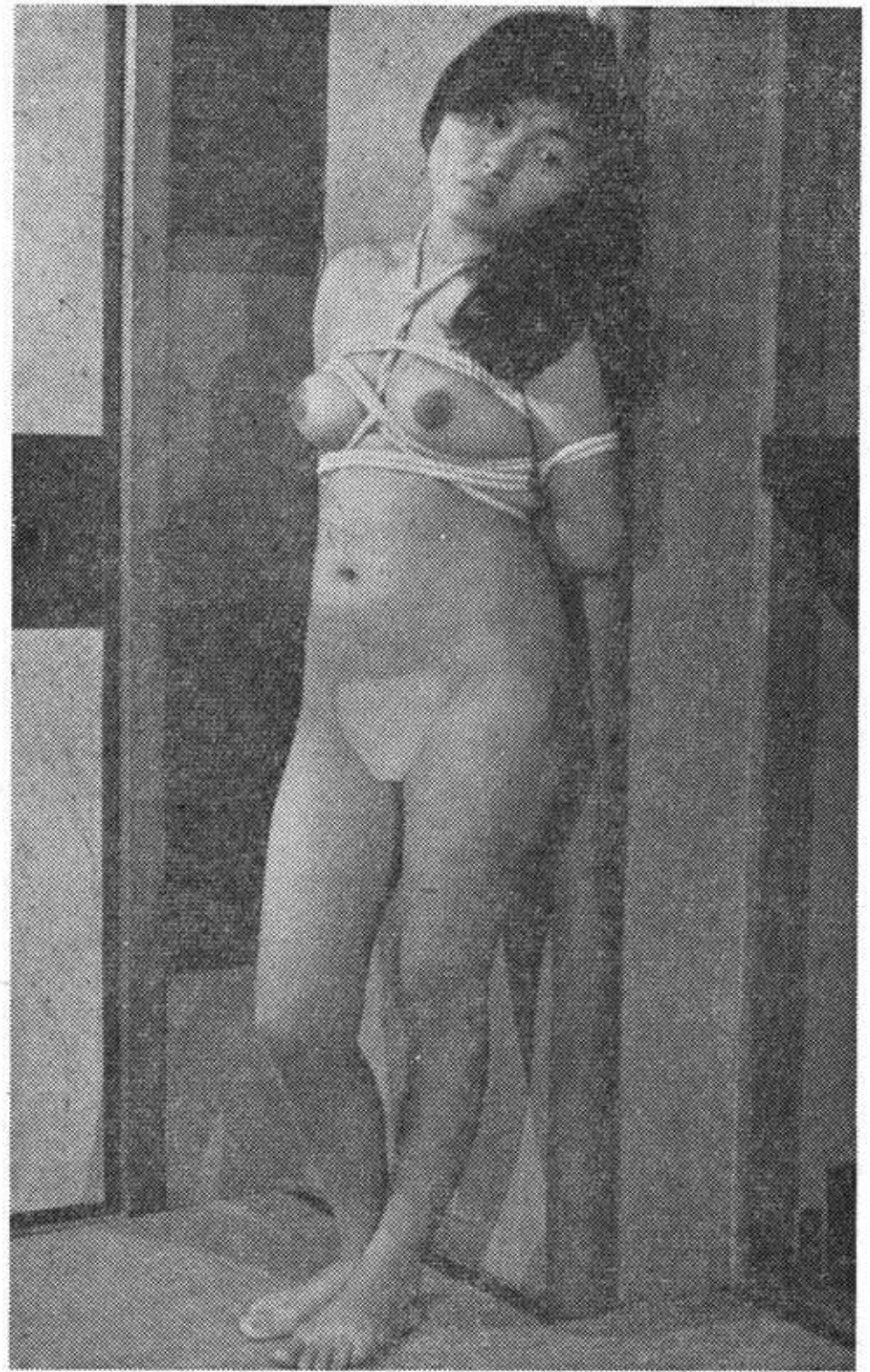
無口な彼女は、只じっと目を上げて僕の顔を見上げるだけで、何も言わない。何も言わないけれど、僕には彼女の体の変化を見ているだけで心の中は、よくわかった。

僕は彼女を軽々と抱え上げた。

## 二人で責める浩子

三月の声を聞くと、さすがに都会





も春めいてきた。一雨一雨、暖かさが増してきた。

四月下旬並みの暖かさだと気象通報が伝えていた朝、トルコ航空のエアバスが、フランスのオリ空港にて墜落して、全員死亡したという、いたましくも暗いニュースをラジオが報道していた。

午前十時すぎ、高村浩子から突然、電話があった。

「今、スーパーに買物に来ているんだけど、今日の午後、暇が出来そうなので、お逢いできないかしら？」と言うのだ。

「この前、話しておいたように、僕以外に、男の人が来てもいいんだね」

突然のことなので、予定した人はなかったが、一応、彼女の意向を確かめた。

「ええ。でも、なんだか、恥かしいわ」

彼女は言い淀んでいるが、むしろ、何人も

の男性に、複数で責められることを望んでいるのは、この前のプレイで、彼女が自ら告白していたことなのだ。

そうだ、この前のプレイのとき、「もう縛るのは勘忍して」と頼む彼女を抱き上げて、ベッドの上へ運んでいったからだ。

「まだ写真は、何枚も撮っていないんだぞ」  
「それは、よくわかっていますわ。でも、私写真を撮られるのは、イヤじゃないんですけど、縛られて写真を撮られるだけだったら、つまらないもの。もっと、もっと、私って、いじめてほしいの」

彼女にしては、せい一杯の希望だった。

「それだったら、こうしようか。SM研究会の会員の中で、適当な人を二人ばかり選んで君を責めて貰うんだ。そうしたら、僕も写真撮影に専念できるからね」

「ええ、そうして頂けたら……」

彼女は、僕の腕の中に顔を埋めて答えたのだった。

「僕に連絡してこない一年半ほどの間に、住所は何回も変わったんだってね」

「はい、アパートも変りましたし、勤め先も二回ほど変りましたわ」

「それはそうと、読者の方と、SMプレイを



何人もの人とやっただって話だね」

僕のその問いに対して、彼女は堅く口をつぐんで語ろうとはしない。

掩いかぶさるようにして、両手首をうしろで捻じ上げて手近な縄で縛った。

一筋の縄が手首に掛かっただけで、彼女の裸身が、みるみる生々としてきた。

「今までにプレイした人達とのことを、今ここで話してごらん」

「プレイしたって三人ぐらいなんです。お逢いしたのは、五人ぐらいなんですけど」

「その三人でもいいから、どうだった？詳しく話してごらん」

「そんなこと、話せませんわ。とても……」

「喋らないんだナ。それだったら、こうしてやる」

仰向けに寝ている浩子の揃えて伸ばした太股の上に馬乗りになった僕は、両手で脇腹を擦った。

「ああ、く、く、くすぐらないで……」

全身を縄のように振って悶える。

口が半開きになったまま、荒い息だ。

恥かしがり屋の浩子が、恥も外聞も忘れて燃えてきた。それを見て、僕は一層、きつくいじめたくなった。擦りたくなった。



乳房の横、脇腹、お臍の傍らを、指先でプチンプチンと抓った。

脚を、ばたつかせて僕をはねのける。

中腰になると、僕の胸や腹を、ねっとりとした浩子の足の裏が当る。その足の片方を手で掴んで、太股から内股へ指を這わす。

「くすぐりたい、くすぐりたいわ」

足の裏へ手をやると、膝を激しく屈伸させて逃れようとする。

もう、こうなると、体の何処を触られても、彼女にとっては、擦ったいらしかった。

僕にしても、喋らせる目的の内容なんか、どうでもよかった。体中、擦ったくて、擦ったくて、どうにも、たまらなくなっている彼女を、狂い死にするほど、擦ったくさせてやることにのみ、熱中した。

両手を後手に縛られている浩子は、体の前面を、すべて僕の視線と両手の攻撃に晒していた。僅かに自由な両足だけが活発に動いていたが、やがて、この両足も自由に動かせなくなるときが来た。

両方の足首に、縄を絡ませて、それぞ





れ、ベッドの左右の脚に括ってしまったからだ。

高村浩子から電話を受けて、僕は、あの日

☆

これで高村浩子が希望しているS研の友とのSMプレイが出来るわけだ。  
僕は彼女を待ち合せ場所で拾うと、すぐ近くに予約してあるホテルへ向った。彼女が夕

のプレイのことを反芻していた。

「こんな突然じゃなしに  
せて、二、三日前に連絡してくれたら、いいの  
になあ」

そんなことを考えながら、僕は、急に出て来られそうな近くの二人に電話をした。しかし間が悪く二人とも留守だった。

仕方がないので、少し離れているが奈良市在住のY氏へ電話した。

幸いにして在宅だ。話をすると大乗気で今、これから直ぐ行くという。土地不案内の彼に詳しく場所を説明し、念のため予約したホテルの電話番号を知らせる。

飯の支度のために、早く帰りたいというから余り遠くへは行けないという理由もあるが、もう一つは、彼女は、すぐ車に酔うからだ。  
初めて逢った日、彼女が車に酔うということを知らなかったものだから、助手席に乗せて、ものの五分も走らないうち、ゲーゲーとやりだしたのだ。

あわてて路傍に車を停めて、背中をさするやら、仁丹を飲ますやらして看護した上、急に予定を変更して、近くへ行ったのだった。  
それからは、窓を全開にしたり、極々徐行運転したり気を使ったので、近頃では大分、車にも慣れてきたようなのだ。

そんなことがあって、暫くして、彼女から「奈良か京都へドライブに連れて行ってほしい。そして、山の中の一軒家なんかで、誘拐してきた娘のようにして、いじめてほしい」と言ってきたことがある。(勿論、手紙にだが)そのとき、僕は返事した。

「いじめてほしいのはいいが、山の中まで車で行って酔ったりしたら、責めどころか、帰れなくなるぞ」

結局、そのプランは実行されずに終わったが空想癖の強い彼女は、奇クを読んだりして、よく、僕に便りを寄こした。



股間縛りにした上から洋服を着せて、街の雑踏を散歩させてほしいとか、流腸したあとでオシメを当て、オシメカバーを穿かせて、公園へ連れて行ってほしいとか、夜の海岸で全裸にして縛ってほしいとか、いろんなことを言ってきた。

その何れもが、さて、実行するという段になると、午後一時から四時ぐらいまでの時間帯の限られた時間では、とても出来る相談ではなかった。そんなわけで、彼女の空想は、いつも空想のまま、くすぼり続けていた。

☆

ホテルの部屋へ落着くなり、僕はY氏が来ることを彼女に告げた。

彼女は羞らいながら小さい声で、うつむいたまま、呟くように言った。

「どんな方かしら？ 私、怖いわ」

その言葉の中に、未知のS研の人に対する興味と関心が窺えた。

「きつと、キミが好きになれる人だよ。今日は、その方に思いきり責めて貰うことだな。僕は、さんざんに責められて、もがき回っているキミを、隅から隅まで眺めて、その上、写真に撮るよ」

「まあ、恥かしいわ」

そう言いながらも、洋服を着たまま、もじもじしている浩子を追いたてて、浴室へやる。

その間に、僕は撮影の準備を万端整える。

お膳立てが揃ったところへ電話のベルが鳴った。

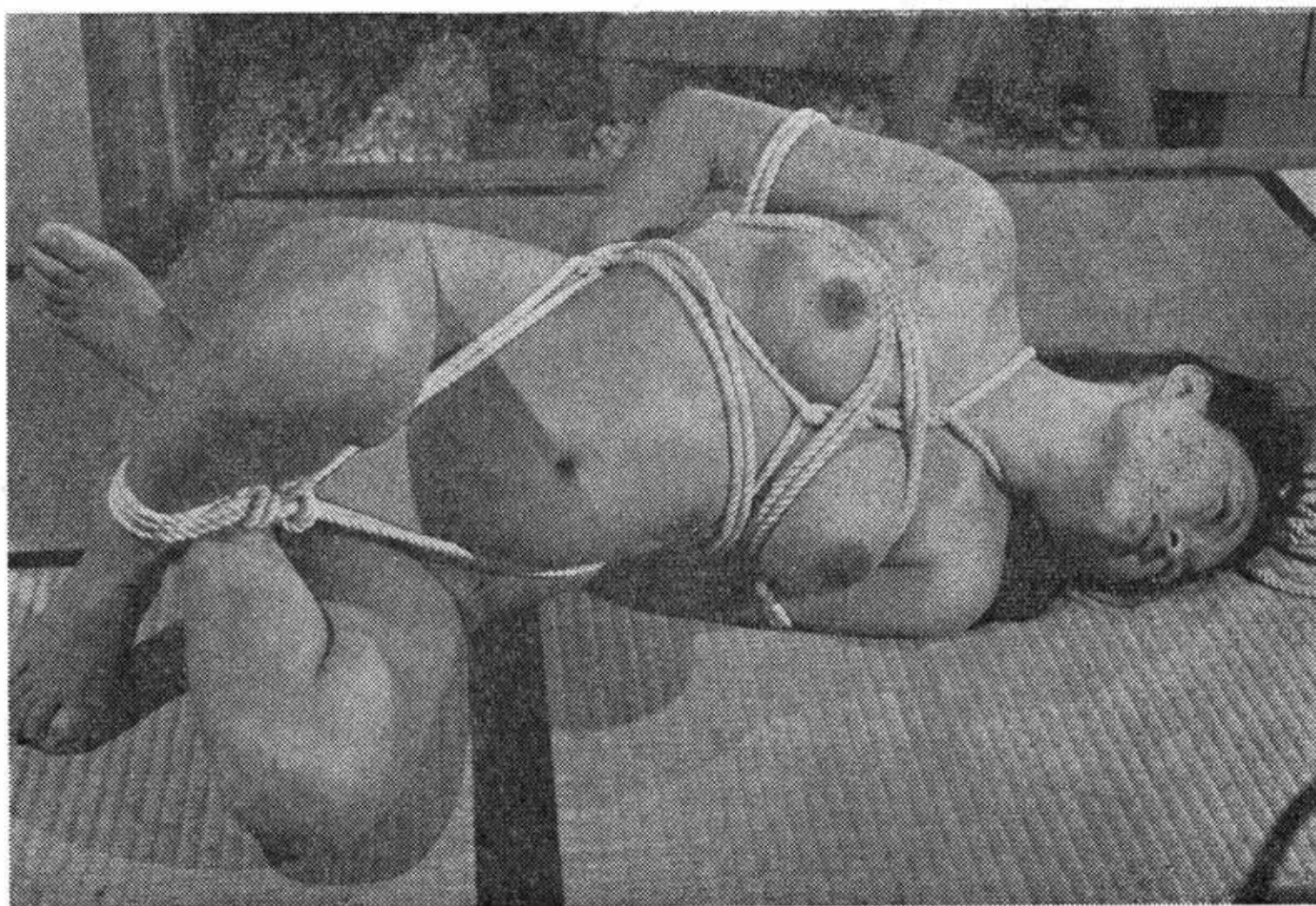
「お連れ様が、お見えになりました」と言うのだ。早速、部屋へ来て貰うことにする。「急いで来ましたものですか……」

部屋へ入ってきたY氏は、額に浮んだ汗を掌で拭いながら言う。

高村浩子は部屋の隅へ逃げて姿を隠す。

「どうです？ 風呂へ入って汗でも流しませんか。浴衣でも着て、それから、ゆっくりプレイをやったらいいですか……」

「いや私なら、いいんです」Y氏は、すっかり恐縮して





いる。

彼は、まだSMプレイの経験は一回もないという。それに、特別に縛り以外に好みの傾向はないとのことだ。

という、縛り一遍倒か。それだったら、今日こそ、この「縛られることの大好きな」高村浩子という娘の裸身を、思いのままに縛り、日頃、胸に描いていた構想を存分に発揮してほしいものだ。

「それじゃ、一つ、縛ってみますか？」

僕は白いロープをY氏に手渡す。

縛り方によっては、よく締まる縄だ。

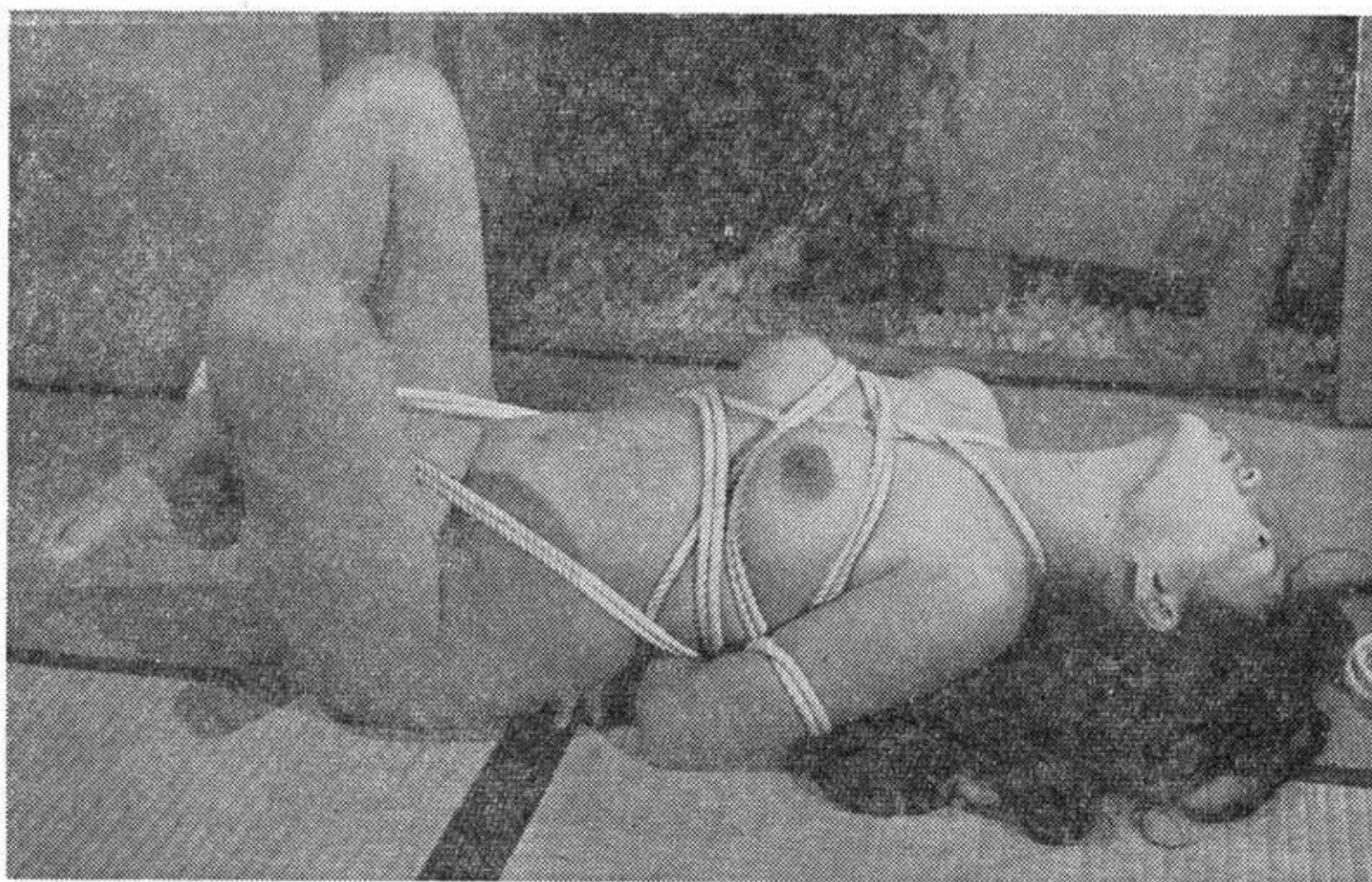
しかし、高村浩子だったら、少々なことでは、音を<sup>ね</sup>挙げることはすまい。

「なにしろ、生身<sup>なまみ</sup>の女性を縛ったことなんて、只の一回もないもんですから、今日は、実は塚本さんの責め風景を見せて頂こうと思ってきましたが……」

「そうですか、それじゃ、初めは僕がやりましょうか。後で交替してやって下さいね」

Y氏が顔を真っ赤に上気させて、尻込みしているので、僕は気の毒になって、無理強いしなかった。

浩子も、Y氏が顔を見せたことで、怖<sup>おじ</sup>



気づいたのか、姿を隠したまま顔を見せない。

隣の部屋の洋服箆<sup>へら</sup>のかげで、両手で胸を抱えたまま、ぶるぶる慄えているのを、引っ張りだしてくる。

浴衣を脱がすなり、するすると、白いロープを掛けてゆく。早縄を掛けるとなると、どうしても、いつもやっている手馴れた縛り方になってしまう。その早さに、初めての人は驚くのだが、自分としては、やはり変った縛り方にしたいと思う。

そうすると、どうしても、手間がこんで、時間がかかってしまう。

Y氏が後から、やり易いように、誘い水のつもりで僕は手早く縛った。縄尻を持って、押し出そうとしたが、どうも、いつもと様子が違うのである。

両足を突っぱって歩こうとしない。いつもだったら、僕のすることになったら易々諸々として従っていた彼女なのに、全身がこわばったようになって、Y氏の控えている隣室へは行こうとはしない。

お尻を膝でこぶくと、怨みのこもった目を僕の方へ注ぐ。





「こんな裸のままで、出てゆくのはイヤ」

「Yさんと、これからプレイをするんじゃないか。今日は、僕は写真を撮るだけなんだ。だから、このあとYさんに縛って貰うんだ。そら、出て行かんか」

「いやなの、いやなの」

彼女はテコでも動かないつもりだ。Y氏もこちらへ入って来ようとはしない。M女のことだから、喜んで出て行くかと思ったが、女の心理なんて不思議なものだ。僕のやり方が悪かったのかも知れない。

「よし、それじゃ、そうして立ったままで、駄々をこねているところを撮るよ」

僕はカメラを握る。

急に、彼女に羞恥心が増してきたのか、カメラを向けると、はにかむ。

隣室に初対面の男性がい

るからか。

きっと、人見知りをするタチなんだろう。誰もいない、二人っきりの時と、大変な違いだ。僕の言いなりにならないなんて、今までにないことだ。

こんなだったら、身動き出来ないくらい嚴重に縛り上げて責めまくり、十二分に燃え上ったところで、Y氏を招じ入れたらよかったのに——と、悔んだ。

彼女を畳の上に、ころがす。

カメラを向けると観念したように、彼女はじっと目を閉じた。

「Yさん、来てごらんなさい」

Y氏は背広の上衣を脱いだシャツ姿で顔を見せる。

「ほう、これは素晴らしいですナ」

「よかったら、縛ってみませんか。これで両方の足首を括ってから、海老縛りにしたら、面白いですよ」

「私に、出来るでしょうかね。縛られた女の人を見ているだけで、もう、こんなに汗をかいてきました」

「そりゃ、そんなズボンを着いているからですよ。ほら、僕のように、パンツ一枚のハダカになりなさいナ」



「ええ、そうですが、そればかりじゃないんです。こんなに手がふるえてしまつて……」

僕は手を借して、一緒になつて縛る。

どうやら、Y氏は本当に初心のようだ。

浩子の方もY氏が見ているので、堅くなっている。第三者に縛られた姿を見られたい気持と、それに恥かしさが心の中で相剋しているのだろう。

僕は、そんな浩子とY氏の様子を眺めていて、ほほえましくなった。

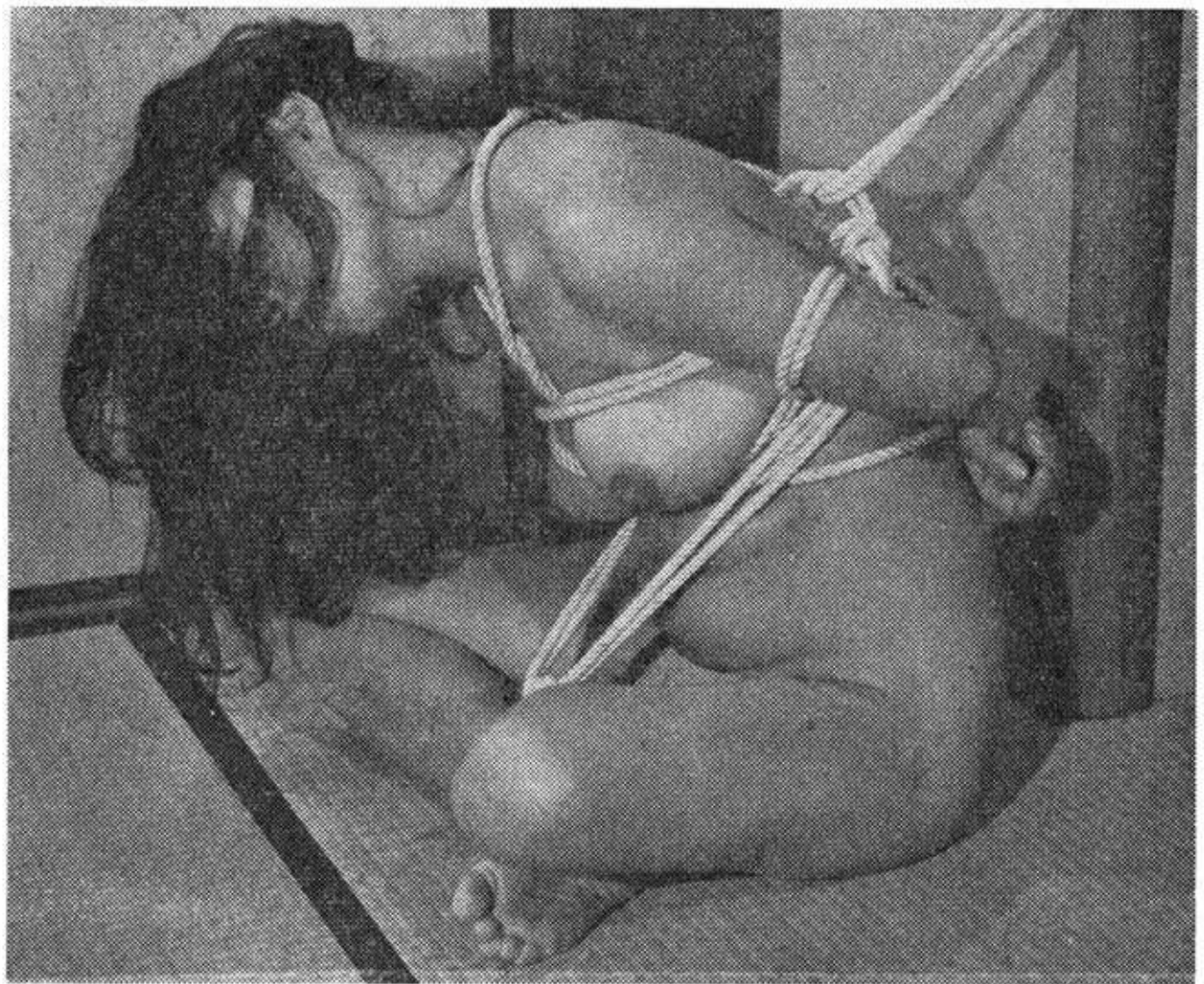
あっちへころがし、こっちへころがして写真に撮ってから、僕はカメラを置いた。

「僕は、これから風呂へ入ってくるから、Yさん、好きなように責めていて下さいナ」

パンツを脱ぐなり、タオルを片手に、浴室へ飛び込んだ。

栓が、ぴたりしていなかったのか、湯がすっかりなくなつてしまつてゐる。

あわてて、湯と水を全開にしておいて、



シャワーを出して全身に浴びる。

最近のホテルは競争でデラックスな浴室を備えている。温泉なんかへ行かなくても、岩風呂の大きなのがあって、湯が滝のように流

れてくる設備のところがある。

この浴室も比較的、広い。キングダムというだけあって、王国にふさわしい王室風の浴室である。シャワーも両側から、何段にも噴きつけるので全身に万遍なく温水が軽いマッサージが続けてくれる。

浴槽の湯は忽ちにして溢れてきた。

今頃、Y氏は、高村浩子を、どんなにして責めているだろうか。

私は浴槽の中で長々と全身を伸ばして、ゆったりと湯に浮んでいた。

☆

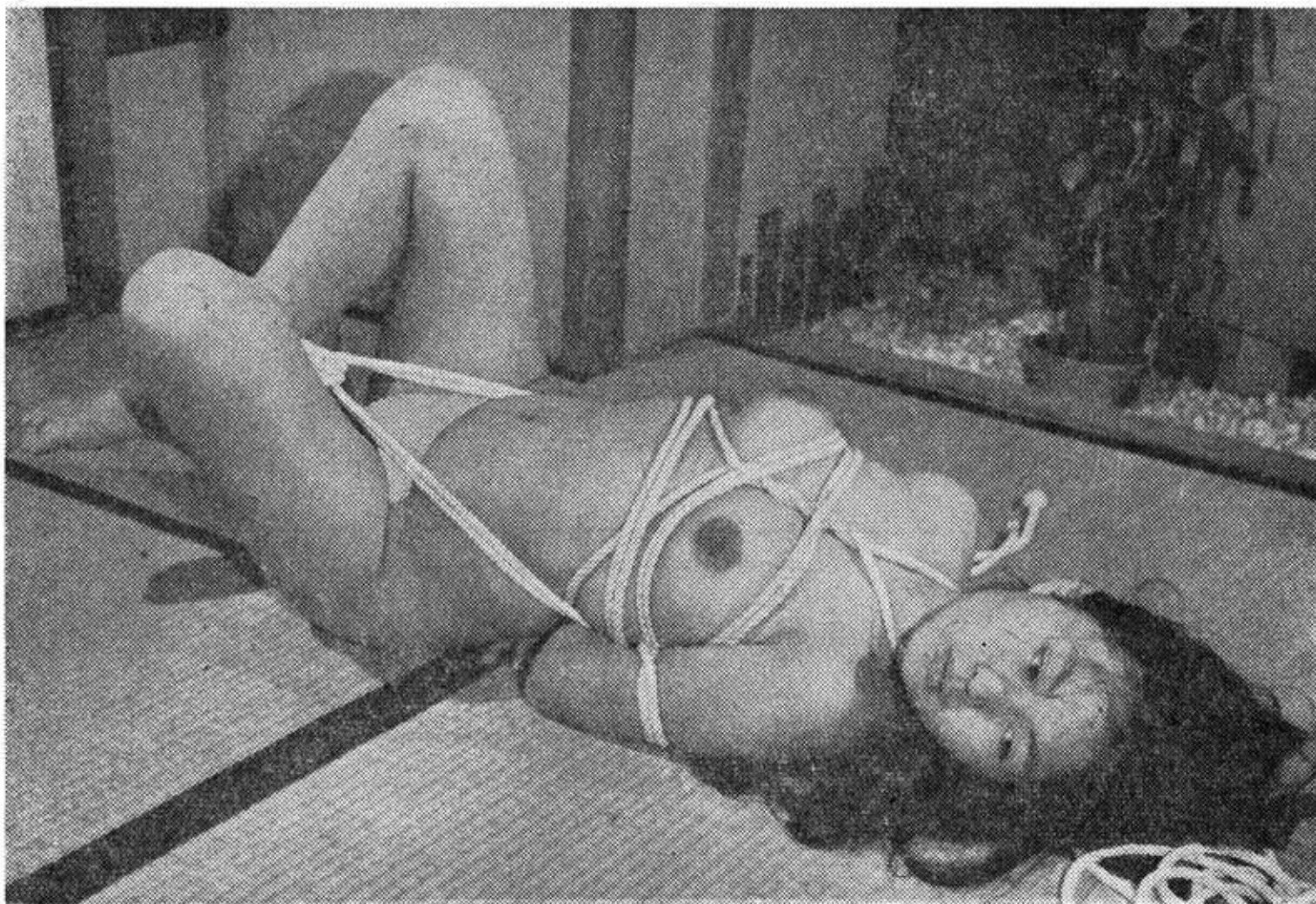
バスタオルを腰に巻きつけて部屋に戻ってくると、高村浩子は縛られたまま、畳の上にくるがっているのは、さっきのままだった。

海老縛りの苦しさをY氏には訴えなかったらしい。Y氏は、その傍らで胡座をかいて、何か、彼女と話をしてゐる様子だった。

「縄を解いてやらなかったんですか？」

海老縛りのままの裸身を見られることに、浩子は愉悅を覚え、そして、Y氏は、そんな緊縛肢体を眺めていることに、昂奮を覚えて





いたのだろうか。

僕のように、縛ったり解いたり、解いたり縛ったり、目まぐるしくやるのも、責めの一種だろうし、こうしてY氏のように、じっくりと鑑賞しているのも一つの方法だ。

僕は浩子の縄を解いた。

「Yさん、あんたの好きな縛り方、やってごらんない」  
「いいや、私なんか、とてもさまになるような縛り方なんて出来ません。もっと、もっと、勉強しなきゃ」

そんな事を言っているうちに浩子は部屋の隅の浴衣を拾うと、ころげるようにして隣室へ逃げて行ってしまった。

「それじゃ、彼女のいないところで、Yさんと二人でSM談義といきましょうか」

「ええ、貧弱な体験ですけど御参考になるようでしたら、お話し上げます」

それからの二人は、高二の

ときから奇クを読みだしたという彼の話からSMの話題について花を咲かせた。大学へ通っているときラッシュアワーの電車の中で、いつも顔を合わす女高生に、ヘビータッチをした思い出なんかをY氏は語ってくれた。

僕は彼の疑問や質問に対して答えているうち、浩子も浴衣をきちんと着て、ひっそりと顔を出した。

「Yさん、あんたもお風呂へ入って、この浴衣でも着てから、いらっしゃいな」

僕はY氏が浴室へ入ったのを見届けてから浩子を抱えるとベッドの上へ、ゆっくりと下ろした。

「さあ、これから、本格的に責めるぞ」

僕は、使い馴れて柔らかくなった縄を手にした。浩子は、部屋の外を、ちょっと気にしたようだったが、すぐに溺れるように縄目の中に身を沈めてきた。

△燃えて、燃えて、炎のように、燃え上らせておいて、Yさんに見せてやるのだ▽

僕は、ほくそ笑みながら、浩子の裸身に迫っていった。

浴室でY氏の使う湯の音が、遙か遠くのようには聞えずに、時々聞えてくるのだった。

——（おわり）——





父が第二の妻を迎えたのは、信夫が十四才の秋だった。新しい母にひきあわされたのは父達の結婚式の二十日程前だった。信夫は父に連れられて銀座へ出た。

## S と M の 宿 命 的 邂 逅

継

(ままはは)

母

イ  
伊

ズ  
都

ヒサ  
寿

ヲ  
郎

父は、いつになく上気嫌で、いろいろ信夫に話しかけたが、信夫はそれに、うんうんと上の空の返事をして、これから会う新しい母のことを、あれこれと想像していた。

『呉竹』という古風な料理屋の長い廊下を二人は黙って歩いて行った。

つき当りの廊下を左に折れると、そこは明るい庭に面した座敷の外縁に通じていた。

父は信夫を振り返って一寸、笑って、そのまま座敷に入っていった。

信夫も父の背中にかくれるように、これに続いた。

「やあ」と父の太い声に、女はただ黙って頭を下げた様子だった。

「信夫、新しいお母さんだ。御あいさつ、しなさい」

父の声に信夫は畳の表から顔を挙げた。若い女<sup>ひと</sup>だった。

信夫は、まぶしいものでも見るように女の顔を見た。

当時、父は四十三才だったが、新しい母はそれより、はるかに若く、二十七、八才に思えた。

信夫に話しかける声が、少し鼻にかかって信夫は、その声に耳の奥をくすぐられるような気持がした。

柄の大きな着物を着て、時々びんのあたりを右手で抑えるようにして話すのが癖のようだった。



手を挙げるたびに着物に重ねた赤いじゅば、  
んの下から、白い腕が、ちらと見え、それが  
異様な白さに感じられて、信夫は奇妙な胸の  
ときめきを覚えた。

「志津子さん」と、その日、父は、その女を  
こう呼んでいた。

結婚式が済んで志津子が家へ来てからも、  
信夫は仲々、母として、なじめなかった。

父の一馬は仕事の都合で帰りが遅くなるの  
で、信夫は志津子と茶の間で父を待った。何  
となく気づまりで、信夫は母というよりも異  
性を志津子の中に感じた。

志津子は、明るい女だった。アクセントに  
一寸、千葉辺りのなまりがある口調で、信夫  
に話しかけた。

幼いころから、人見知りするたちの信夫は  
これに口少なに答えるだけだが、志津子はそ  
んなことに一向、こだわる様子もなかった。  
「ああ、今日は、とつてもつかれちゃった。

信夫さん、肩もんでくれないかしら」  
などといって信夫に、あんまを頼むことも  
あった。

志津子の肩の肉は柔らかくて厚かった。二  
の腕から先の方へ、もみ下す時は、指がこの  
まま埋もれてしまうのではないかと思われる

ほどの感触だった。

信夫は、この感触を秘かに楽しんだ。

信夫が、母の秘密を知ったのは、それから  
一年後の春だった。

その日は、朝から志津子が外出して、信夫  
が一人で家にいた。

暖かい日ざしが部屋一杯にあふれて、小説  
を読み耽っていた信夫は、いつの間にか快い  
眠りに落ちこんで行った。

どれほど眠っただろうか。ふと目を覚すと  
日は大分、西に傾いて、部屋もすっかり暗く  
なっていて、薄ら寒いような感じだった。

信夫は日当りの良い二階の母の部屋へ上っ  
て行った。

母は、まだ帰って来ていないようで、整頓  
された六畳の部屋は、ひっそりとしていた。

部屋の真ん中に寝転がって、見るともなし  
に天井を見つめていた信夫は、東の隅の一枚  
が少し横にずれているような気がした。

「いや、そんな筈はない」と心で打ち消して  
みたものの、西の隅から板の重ね目を、ずっ  
と直線で追って行くと、確かに五枚目位が、  
ゆがんでいた。

軽い冒険心からられて信夫は、立ちあがっ  
た。廊下から踏み台を持って来て、上に乗り

板に触れて見た。

動いた。強く押すと、板は音もたてずに持  
ちあがった。信夫は不意に天井裏をのぞいて  
見たいような誘惑にかられた。

江戸川乱歩の『屋根裏の散歩者』を思いだ  
したからだ。

恐る恐る、首を突っこんで見た。暗くて何  
も見えない。しばらく目をとじて、ぱっとあ  
けると、薄ぼんやりとした明りの中に、太い  
梁や胸木が黒々と見えた。

と、信夫は「おや」と思った。信夫の突き  
出た首のすぐ近くに箱が置いてあるのだ。丁  
度、重箱ほどの大きさだ。

「何だろう」むらむらと起きる好奇心に信夫  
は、それを、そっととりあげ、踏み台から下  
りた。

黒い塗りが大方、はげかかっていた。

ふたを開けて見た。

中には、ぎっしりと新聞紙が入っていた。  
信夫は少し、がっかりしたが、それを除け  
て見た。

麻縄だった。長さ六尺ほどの麻縄が四、五  
本、束になって入っていた。

更に底を探ると、二つ折りの和とじの絵草  
紙らしいものと七、八枚の写真が出て来た。



絵草紙の表紙には何もかいてなく、くすんだ灰色で、標題を書かれてあった紙を、はぎとったらしい形跡があった。

信夫は表紙を、はぐった。いきなり、ぱつと目に飛びこんで来たのは、極彩色に彩られた人の姿だった。

信夫は、息がとまるような、ショックを感じた。

絵は腰巻一枚にされた女が、はりつけにされているものだった。両手両足を釘で打ちつけられ、二の腕と太ももに、ぎりぎり荒縄が喰いこんで、首から両乳の間を通して、へその辺りから脇腹にかけて、嚴重にいましめられている。きつと喰いしばった唇から鮮血が、たらたらと、したたり落ち、やや上目勝ちに怨念をたたえて、かっと見開いた目はやや灰色がかった青色。二本の槍の穂先が厚味のある両の腋下に三寸ほど、突き刺されている。

信夫は、喰い入るように厳しく縄目が喰いこんだ乳房を、ふくよかな腹部を凝視した。

信夫は、次々頁をかえた。

火あぶり、釘責め、棒しばり、股裂き等、全て若い女が全裸、あるいは半裸で責めさいなまれる図だった。

不意に信夫は、麻縄が何の為のものか判然とした。はりつけの女の図と、志津子の柔らかな脇腹の感触が奇妙な交錯をした。

母が帰って来る……こう思った信夫は、あわてて草紙や麻縄を、もとのように仕舞い、天井裏へ返して階段を下りて行った。

茶の間のふすまをあけて「ぎくっ」とした。母が帰って来ていた。

静かに茶をたてていた志津子は、顔をあげて笑いかけた。「母さん、何時、帰って来たの」こう問いかける声が妙にかすれていた。「見つかったのではないだろうか」と信夫は自分の表情が知らず知らず、こわばって行くようだった。

「たった今。すっかり疲れちゃった。信夫さん、何処にいたの。留守番が遊びに行っちゃ駄目じゃない」志津子の言葉には少しもきつ問するような調子はなかった。

「母は知らない」と信夫は、ほっとした。

どうにか笑顔もできた。しかし志津子の明かるい表情のうちに、なにか暗い険悪な影がほんのわずかではあるが、かげっていたなどとは、うろたえていた信夫の心が感じとることとは、とうてい出来ないことだった。

この日から信夫の妙な習慣（これがサディ

ズムというものであることを、信夫は後に雑誌で知った）が始まった。

新聞や雑誌にある女の写真や絵を、丹念に消しゴムと鉛筆で自分の満足するように改作するのだ。女がしばられているような、さし絵があったりすると、父が読むのを待って、そっと切り抜いては、机のひき出しの奥にしまいこみ、夜に寝床の中で腹ばいになって、心ゆくまで書き改めたりした。着衣の部分を消して裸の線をかきこみ、後手にしぼられている部分を黒くぬりつぶして、両手を高く吊りあげたりすることが、信夫の大きな楽しみになっていった。

授業中なども先生の目を盗んでノートに責めのポーズを工夫して描いて見たりした。

あの日も、信夫は夢中になって責め絵を描いていた。小一時間も、書いては消し、消しては書きながら、義母の手文庫を秘かに見た時の、つきあがるような快感が甦ってきた。

信夫は瞳孔が拡がったような錯覚を覚え、脊椎をつきぬけるように、生温かい息吹が湧き上った。

「ほっ」という太い吐息と共に、信夫は我に帰った。後ろに人がいるような気配を感じてはっとして振り返った。



母だった。やや、こわばった表情の頬の辺りに黄色い（驚いた信夫の心には、そう映った）笑いを、かすかに浮べて立っていた。

信夫は頭に、かっと血が昇って、腋や胸の辺りが、じっとりと汗ばんで来るのを感じ、言葉を失ったように凝然と志津子の顔を見つめて、手は本能的に絵をおおっていた。

志津子が何も言わずに立ち去った後も、信夫は呆然とした虚脱状態にあった。

耐えようもない苦痛と悔恨。そうして激しい羞恥。これ等、様々の感情が怒濤のように信夫の思考を乱しに乱した。

ただ、このような心の錯乱状態の中で、たった一つの慰めは、父でなくて良かったということであった。

母の秘密を信夫は知っている。何か負債を返したような安らぎのようなものが脳中を、ちらっと、かすめた。志津子の秘密を、かい間見た日の、あの複雑な感情——それは一種の感動に近いものだったが——が、ありありと思い返された。

更に、さきほどの志津子の、かすかな笑いを含んだ冷たい表情を思い浮べた。

母は信夫の中にサディズムを発見したのだろうか。

もしや、もしや……と信夫は、あることを空想した。しかし、何というアンティモラルックで破廉恥な……。信夫の十五才の理性にも「人倫」というモラルのかきが無意識のうちに形成されていた。

「だが、母は本当の母じゃない」肯定し、否定し、信夫は自分の心に嵐を感じた。

信夫はその日、夕げの席についても、じっと目を伏せて、志津子を見なかった。いや、見られなかった。心の秘密をのぞかれたというショックは、十五才の少年には余りにも残酷だった。

それから信夫の頭に浮んだ、ある空想。信夫の少年らしい潔癖は、志津子の顔を見ないことで、その誘惑を抑圧しようとしたのだ。

一馬は口数が少なかった。

母も、その日は黙っていた。信夫は母の視線を、やきつくように頬に感じていた。

重苦しい夜だった。信夫は早々に食事を終えると自室へ入った。

電燈もつけずに信夫は、じっと中空の一点を見つめていた。

ぐるぐるぐるぐると、不規則なうず巻が網

膜に映ったようだった。信夫は青白い閃光が光るのを感じた。どれほど時間が、たっただろうか。父が銭湯へ行くらしく、玄関の戸が音を立てた。しばらくして後のふすまが開いた。

志津子という「女」の意識を背中一杯に感じて、信夫は、なおも、じっと暗やみを見つめていた。

スイッチの音がして部屋が明るくなった。志津子は畳に座って信夫の目を見た。

いきなり信夫は周囲の大气が爆発したように感じた。その時、信夫の体は猛烈に志津子の体に、ぶつかっていた。

かすかな叫びと共に、志津子の体は部屋の隅に、くずれ落ちた。

せきを切ったような感情の奔流は止むべくもなかった。信夫の左右の平手打ちは志津子の頬を打った。二の腕を掴んで引き倒した。

後ろから羽交いにしめて両足を志津子の腹の上に組み合せて、ぐっとしぼると、見る見る志津子の顔は紅潮し苦悶の表情を示した。

信夫の涙と志津子の涙とが入り混じって、二人の着物をぬらした。

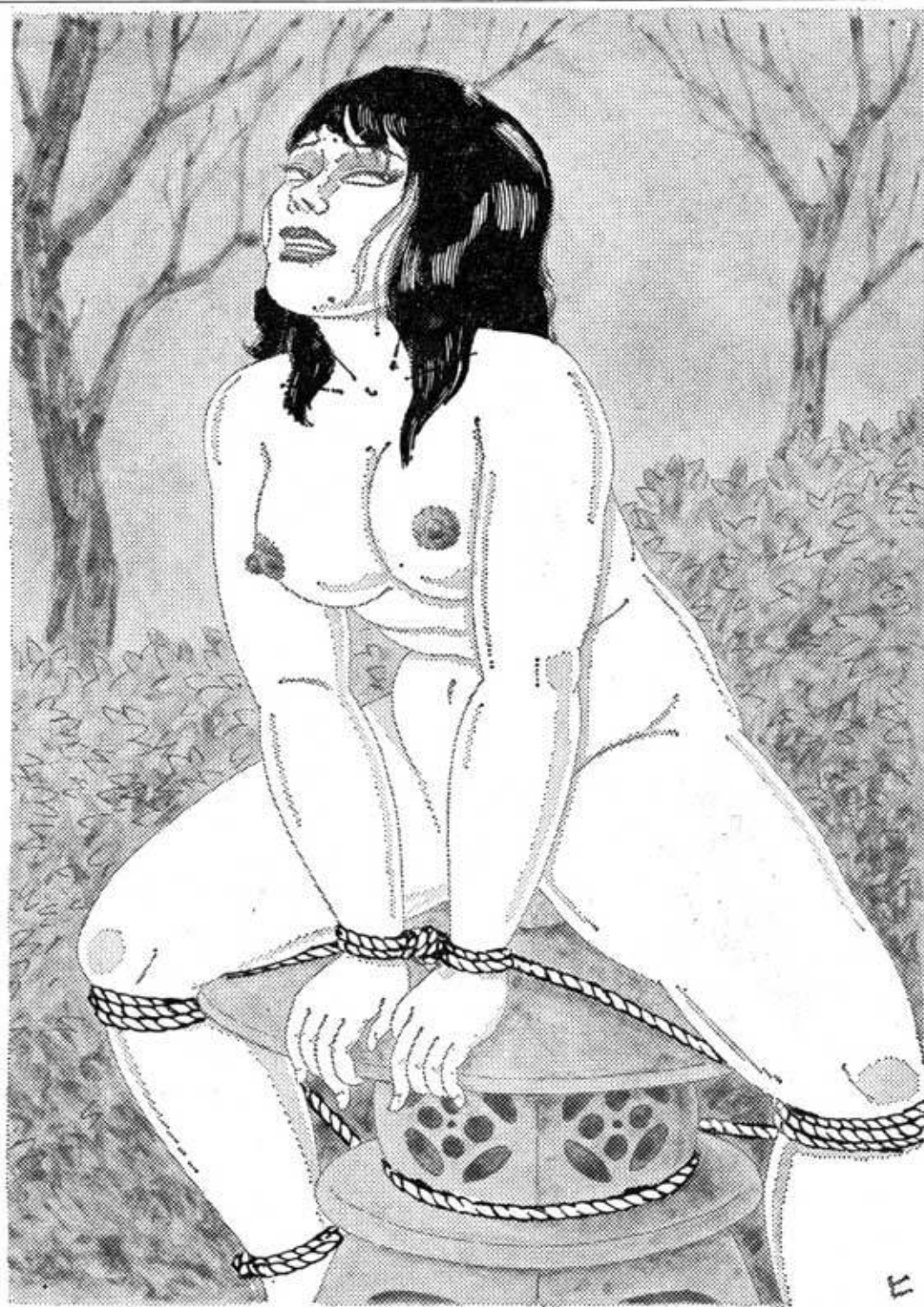
足をゆるめて両腋に手をさし入れて、いっように、くすぐった。



イメージギャラリー

『庭園の珍花』

マエダ・ヒオミ



着物を通し志津子の重い体が信夫の若々しい四肢の中で、あえぎ、もがくのを感じた。「もっと、しめて、しめて」と呼吸を弾ませながら志津子は訴えた。信夫は両の腕を彼女の首にまわして力をいれた。

志津子は、じっと目を閉じていた。しばらくして力を抜くと「はっ」と深い息を吐いて涙を流した。

これを二度、三度と繰り返すと、志津子の顔は汗ばみ、乱れた髪が頬のあたりに、ぴっ

たりと密着した。こうして二人は、へびのような遊びを繰り返した。

それは素晴らしい感情の暴風であった。

二十八才の女の体は牡鹿のように躍動する少年の体に打たれ、踏まれ、蹴られるその苦痛は、彼女の理性を超越した、高い高い悦楽となって五体を、かけめぐった。

嵐は去った。

信夫は、汗にまみれ、涙と汗によごれた体を、畳の上に大の字に横たえた。

志津子は、辛うじて立ち上って机のはしに手をつき、我が身を支えていた。

「母さん、そでが、ほころびているよ」

信夫は、こういって「母さん」という言葉の響きが、いつもと全く違っているのに驚いた。

この日から今までの母と子の関係は、二人の間の不思議な感情の葛藤によって大きな変化を、とげて行った。

その後、うわべは平穏な日々が続いた。しかし絶えず信夫を苦しめたものは、志津子の両の腕に喰い入った縄目の幻想だった。

一馬が九州へ長期出張の途についたのは、それから十日後の日曜日だった。

一日は暮れて、夕げのぜんを片づけた志津



子は信夫の部屋を、のぞいて見た。

信夫は宿題のレポートを熱心にかいていた「信夫さん。随分、せいが出来ることね」

志津子は何気なしに机の片隅に手を置こうとした。そのとたん、彼女のそでがインキびんにふれたかと思う間もなく、あっという間に青色の液体が刻明に書きこまれた信夫のノートに拡がって行った。

信夫は「あっ」と叫んで、強いまなざしで志津子を見た。

志津子は、ただおろおろと、机の上のものを、とり除くだけだった。信夫の胸に、むらむらとサディストの血が湧き上った。

いきなり、志津子の足を、はらった。どうと倒れるのを組み伏せた。十五才とはいえ、相撲で鍛えた腕力は強い。

たちまち、ブラウスとスカートが、はぎとられ、シュミーズのまま、両足を机の足に別々に、しばりつけられ、両手は頭の後に一緒に、いましめられた。

信夫は物置から長い竹竿を持って来て、これを槍のようにしごいて、志津子の脇腹を、ぐっと突いた。硬い竹竿の先が志津子の肌に埋まった。腋の下、下腹、太もも、乳房と、所きらず、ぐいぐいと突き下ろした。

志津子は体をくねらせて、あえいだ。信夫の掌が汗ばんで、握る竹竿が、ぬるぬると手から抜け落ちそうになるのを、持ち直し持ち直しては、足下のいけにえを情容赦なく、責めさいなんだ。

このように最初のお処刑<sup>しおき</sup>は、一時間にわたって行われた。志津子が信夫の責めを毎夜の「儀式」として、うけるようになったのは、その日からであった。

大体、一週間に一、二度のピークを除いて他の日には軽い「しばり」や、しもと打ちの程度だったが、二人の感情が絶頂点を描くような日には随分、思いきった責めを試みた。

責めといっても二人の間では、割にノーマルな、しばりが用いられ、ポーズの珍奇さというよりも、はりつけとか、打ち首という想定のもとで、責めを実演することになった。それは志津子と信夫という二人の名優によって演ぜられる、芝居といった方が、あたっていた。刑場には、主として浴場、納屋、庭等が用いられた。

主家の大金を盗みとった小間使は斬首に処せられることになる。ゆあみして体を浄めた小間使は神妙に、いましめにつく。

後手にしばられ、はだ着一枚にされた志

津子は、荒むしろの上に引きすえられる。刑のいいわたしが行われ、静かに閉じた志津子の目に目かくしがされる。

前にさしのべられた、えり足の白さが、後ろに立つ信夫の目に、しみる。

洗い髪が風に乱れている。

刑事は小間使に「何か言い残すことはないか」と、たずねる。志津子は静かに首を横に振る。

刀（二尺ほどの棒の先に、水にぬらした麻縄をしばりつけたもの）が刑事の頭上高く振りかざされ、さっと振り下される。

「ぴしっ」鋭い音と共に、志津子の体は前に、ゆらぐ（ここで二人は小間使の首が胴を離れて、前にごろごろと転がり落ちるイマーシュを、えがくのであった）

すでに息絶えた小間使の死体は荒むしろの上に横たわる。やがて下人が来て（これは信夫が演ずる）死体の着物をはがして、こもにくるんで土中に埋める。（こここのところは志津子の体をシートに包んで、なるべく草深い所に投げ出し、乾いた砂をその上に盛り上げ、これをおおうことにした）万事、こうした調子だった。

激しい性の闘争というより、歌舞伎の舞台



のようなクラシカルな情緒の世界であった。イミテーションというには二人のしぐさは、余りにも真に迫って居た。

また、梅雨空の、じめじめした日の昼下りには、志津子は後手にしばられて、納屋の中に引きたてられて行った。

納屋は四坪ほどの薄暗い建物で、素足の志津子には、冷ややかな土の感触が、じーんとしみわたった。

一時、縄を解かれた志津子は、ためらいもせず、着物を脱ぎすてて、両手両足をひろげて、木組を背にして立った。

両手、足首が、ぎりぎり柱に、しばりつけられ、両乳の下を通して脇腹にかけて、針金が固く、まといつた。荒縄が口に、がっとな裸身が大の字形に、納屋の暗うつな薄明りの中に、くつきりと浮び上った。

外は、しきりに降る雨の音が、止まなかった。

「はりつけ、はりつけ」志津子は、心の中でつぶやいた。はりつけという言葉の魅力が実感となり、彼女の胸に高鳴って行った。

信夫の手には一束の縫針が握られていた。

信夫の目は、実験台上のモルモットのように

に手足を上げた志津子の四肢を見つめた。

のどから乳にかけての、なだらかな隆起。腹部から腰の、むっちりとした肉のひきしまりが、両股のつけ根のかげりに続いて行き、太ももから両足へと見事にのびきって、ぐつと踏んばった足の甲には、かすかに静脈が青く浮き上って見えた。

信夫の手は、縫針の一本を、とった。ぶつり。縫針の先端、五分程が太ももに突きたった。つづいて左の内ももに、更に乳房に、乳頭に、突き立てられて行った。

志津子のひきしばられた口から、声にならぬ、うめきが洩れた。

「七本——八本——九本」志津子は、皮膚をつき通すような激痛が感じられる度に、これを数えた。

何本まで覚えていただろう。

やがて青ざめた熱気が、足の先から頭まで太い棒のようになって、肉と皮膚とを切り裂いていった。まぶたの裏に火花が、しぶきのように散りかかって、どこかで鐘の音が鳴っているような気がした。

志津子が意識をとりもどしたのは、もう夕暮れだった。体中は、じんじん痛むが、針はもう取り除かれていた。

外は、すっかり暗く、雨だれの音だけが淋しく響いていた。手足は前のように開張されたままで、信夫の姿は見えなかった。

体がしびれて来た。初夏とはいえ、雨の夜の冷気は、素足をつたわって体中に、しみわたるようだった。

一時間たち、二時間経過しても辺りは、しんと静まりかえって、人の来る気配はなかった。母屋の時計が十一時をうつのが、かすかに聞えた。

志津子は聖ピエトロや、聖セバスチャンの受難図を思い浮べて、刻一刻と加わって来る激しい苦痛を、夢と現の間で享受した。

再び気がついた時は、志津子は床の中にいた。もうすっかり明るく、かたわらに信夫の顔があった。志津子はその顔に笑いかけた。熱があつて、悪感が幾度となく、彼女を襲った。

その後も一日、二日と微熱が続いたが、三日目から三十八度にも体温が昇った。はだは絶えず汗ばみ、顔は上気し、うわごとを口走った。まくらもとに座る信夫に、夢うつつの中でも「打って、打って」と、せがんだ。涙をながして、まるで子供のようだった。熱にうかされて暴れるので、手と足を細引で軽く



しはって、その上から、ふとんをかぶせた。志津子も、そうすると満足らしく、すやすやと眠った。

こうした病状も、一進一退を続けて十日程経過したが、梅雨があけると共に熱も下り、食も進むようになった。

こうなると長い間、抑えられていたサドとマゾの血が、再び湧き上って来るのを、どうすることも出来なかった。

七月の夜だった。むしあつくて空気が、どろんと重く、よどんでいた。十一時ともなれば夕涼みの人も殆ど家に入って、外はしーんと静まり返っていた。寝室では志津子は、もう二時間も責められていた。日に日に強烈な刺激を求める二人は、工夫し改良した、猛烈な責めを試みていた。

信夫は志津子の内ももを、野球のバットの端で、ぐいぐいと、こねていた。少し青味を帯びた彼女の皮膚は、たちまち内出血を起して、くろずんで行った。信夫の両足の下に、ふみしかれた両手が、ぐっと握りしめられていた。信夫は、かがみこんで志津子の両手をひざの下に敷き入れて、志津子の浴衣の胸を押し開けた。盛り上った乳房と、勢いよく上向いている黒ずんだ乳頭は、志津子のおとろ

えぬ若さを示していた。信夫は釘抜きをとると、乳頭をはさんで、ぐっと力を入れた。わずかに皮膚が破れて、血が滲み出た。信夫の歯が、かちかちと音をたてた。志津子ののどが、くっくくと鳴った。

○

○

父が帰って来たのは、七月も終りに近い土曜の朝だった。その夜、階下に寝ていた信夫の耳に、一馬の怒りとも悲しみともつかぬ怒声が聞かれた。平手打ちの音が起った。

信夫は、その怒号の原因が何であるかが、判りすぎるほど判って、愕然とした。

すさまじい物音と共に、志津子の体が階段を転げ落ちて来た。

一瞬、信夫は怒りに狂った父の青ざめた顔と、血走った目。ぐったりと失神した志津子の足から流れ出た一筋の血潮を見た。鼻から眼の裏へ冷たい恐怖が吹きぬけた。

信夫は深夜の町を裸足で、かけた、かけた脱れた。何から脱れるのだ。信夫自身の罪の意識からか、眼前に見た「死」の影からか、

一馬の怒りからか、信夫には判らなかった。信夫が家にもどったのは、翌日の早朝だった。部屋中央に志津子が寝かされていた。父の横顔には怒りのかげはなく、灰色の悔恨

と淋しさが、青くかげっていた。

志津子が死んだのは、その日の昼下り。かしましい蝉の声が時雨のように降りそそいでいる中だった。

死因は脳底骨折。夕方、父は自首するため玄関に下りた。振り返った一馬の顔にはもう愛憎を超えた静かな感情が見てとられた。

二人は黙ったまま別れた。

やがて父は傷害致死で起訴され、信夫は田舎の祖父の家にひきとられた。

田舎の秋は深く、銀杏いちょうの木きの枝ごしに青く澄み渡った大空に、ゆう久の安らぎが感じられ、落葉を焼く煙が、ゆっくりと透明な大気の中を真っ直に昇っていた。

信夫はポケットから、今では志津子の遺品となった、あの画帳をとりだして火中に投じた。火は最初ちろちろと画帳のはしをなめていたが、たちまち、めらめらと燃え上った。黒い燃えがらは、やがて白くなって、音もなく、くずれ落ちた。

じっと、これを見つめる信夫の目には、半年前までの、かりそめにも「母」と呼ぶ女性との、妖しい遊戯の、ほとぼりを懐かしむような感慨があった。信夫は痴呆のように。いつまでもいつまでも、立ちつくしていた。



カット・志羽 利也



(1)

人間の顔の道具立ての中で、鼻ほどバラエティに富んだ形態を持ち、容貌の美醜に、深い関係のある器官はあるまいと思います。顔の真ん中の一番、目立つ所にありながら、ペチャンコな鼻や、あぐらをかいた醜い鼻からスッキリと高く、鼻筋の通ったノーブルな鼻まで、その高さ、長さ、幅、あるいは鼻孔の形など、まさに千差万別です。

「クレオパトラの鼻が、もう少し低かったら

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

## 私のコレクション

(女性の鼻孔写真を収集する)

佐藤 光 保

世界の歴史は変わっていただろう」とは、パスカルの言葉ですが、ときには、世界の歴史を変える力をさえ、持っている女性の鼻——。私は、女性の顔の中心にあって、女性美の象徴ともいえる恰好のよい鼻——特に、その鼻孔——に、堪えられない、狂おしいまでの憧憬と執着とを感じるのです。

普通の人と異なって、女性の鼻孔にのみ強く性的欲望を感じる私は、性的異端者——性倒錯者なのでしょうか。どうして、こんなに女性の鼻孔に心を惹かれるのか、その心理状

態は、いくら考えても自分では、まったく理解できないのです。

こんな変わった性向は、親兄弟はもち論のこと、親友にさえも打明けることができず、むしろ、自分の特異な性向を他人に知られるのが恐ろしいので、今まで絶対に人に気づかれないように、ヒタ隠しにして来ました。ですから、周囲の人達は、私にこんな秘密の一面があることなど、おそらく誰ひとりとして想像もしていないに違いありません。そしてそれは、今後も、私が死ぬまで変えることはない



でしょう。

でも、奇クの読者の皆さんにだけは、私の心の奥深く秘めた内面を、すべて、洗いざらいお話ししたいと思い、拙いペンをとった次第です。

そもそも、私が女性の鼻孔に心を惹かれるようになったのは、ある偶然なことが、きっかけになった訳ですが、まず、その発端となった出来事からお話しましょう。

○

今から数年ほど前になりますが、私は神田に所用があつて地下鉄、銀座線に乗ったのです。車内は、かなり混んでいて、私は押されるままに車内の中程に入り、吊皮につかまっていたのですが、フト顔をあげて、思わずハッと思ひを吞みました。電車の中吊り広告に、素晴らしい写真のポスターがブラ下っていたからなのです。

それは某化粧品店の広告のポスターでしたが美しい女性が、顔をグイッと大きく、のけ反ったポーズをとり、カメラは顔の下側から鼻孔を狙った形で、思いきり大きく、クローズアップで写しているのです。しかもそれは、素晴らしく恰好のよい、まるで造化の神の傑作

とでもいいたい程の、美しい鼻孔だったので。ムッチリと張りつめた肉づきのよい小鼻と、それに囲まれた鼻孔は、豊かな拡がりでも好ましい楕円形をなし、鼻腔の中の暗く湿った柔らかな感じや、鼻腔の奥に整然と生え揃った美しい鼻毛の茂りまで、はっきりとわかるのです。じっと見ていると、妖しい戦慄が体を貫いて走るような思いにさせられるほど魅力的な写真でした。

「ウーン。これは、なんという美しい鼻の孔なんだろう！」

私は、思わず感嘆してしまいました。

しばらくの間、私は全神経を両眼に集中して、その魅惑的な鼻孔を喰い入るように凝視し続けていました。

と、そのうちに、ムラムラと淫らな欲望が湧いてきて、私は、思いもかけぬ強い性的衝動におそわれてしまったのです。美しい女性の、顔の下側から丸見えになった鼻の孔に、私はなぜか、強烈なエロチシズムを感じたのです。これは、いったい、どういう訳なのでしょう。

ポルノ映画の広告などに、快楽の絶頂に達した女性が、恍惚とした顔をのけぞらせて、

鼻孔をあらわに見せている写真が多いようですが、女性の鼻孔とセックスとは、何か関連があるのかもしれませんが。

○

さて私は、その魅惑的な鼻孔写真のポスターが、無性に欲しくて堪まらなくなってしまったのです。なんとしてでも、このポスターを手に入れたい——。が、まさか他の乗客の前で、ポスターをはがす訳にもいきません。私は神田駅で降りずに、終点の浅草まで行ってしまいました。そして、乗客が全部、降りてしまった後で、す早くポスターをはがし、丸めて持ち帰ってしまったのです。これが、私のコレクションの第一号と、なったわけのです。

——ふだん、あまりお目にかかることのない鼻孔の奥を、あらわに見せつけられた時、私は、官能を激しく揺さぶられて、この日から女性の美しい鼻孔の魅力のトリコになってしまったのです。

(2)

それ以来、私は、女性週刊誌や婦人雑誌、あるいはポスター等から、鼻孔を写された女



性の顔写真を切りぬいてはスクラップブックに貼り、鼻孔写真のコレクションを作ることをはじめたのです。

奇巧の分譲写真の中にも、SMや浣腸などの写真の他に、女性の鼻孔を扱ったものがあるようです。以前、買い求めたところ、指や器具などを使って、女性の鼻孔を拡張したり、変形させた写真が多く、私の好みには合いませんでした。

私の好きな写真は、変形させない自然のままの美しい鼻孔なのです。たとえば、顔の真下から鼻孔を写したものの。斜下の角度から、鼻孔を写したもの。あるいは、まっすぐな鼻筋を側面から写した横顔の写真などが好きでこういう種類の写真を、主として集めているのです。

でも、女性の鼻孔なら、何でもよいというわけではありません。

最近のポルノ雑誌には、カラー印刷の大型グラビヤに、女性モデルが豊満な裸身をさらし、悩ましい顔をのけ反らせて、鼻孔をあらわに見せている写真が沢山あります。しかしこういう写真のモデルになるような女性に、まず、美人はいないと言っても過言ではありません。

ません。モデル達は、みな鼻が低く、鼻孔も真ん丸や三角形の不恰好のものが多いのですが、こんな鼻孔には、まったく興味がありません。

私が集めている写真は、美貌の女性の、恰好のよい鼻孔でなければなりません。ですから、この収集は一見、簡単なのですが実はどうして、なかなか容易なことではないのです。

冒頭にも述べましたように、鼻の形状というものは、非常に個人差があつて千差万別、実に多種多様です。しかしながら、数多い鼻の中で、外人並みの高い鼻梁を持ち、長楕円形をした美しい鼻孔というものは、ほんの、極くわずかしかなかった。しかも、そんな鼻の持主が顔を仰向けて、鼻孔をあらわに写された写真となりますと、これは、もう滅多なことでは、お目にかかれるものではないのです。

ときたま、そういう気に入った鼻孔の写真を見たとき、私は、激しい欲情的な気持ちになつてしまい、万難を排してでも、その写真を手に入れないことには気が済まないのです。写真がほしいばかりに、読みもしない女性週

刊誌を随分、買ったものです。いや、週刊誌は買えますから、まだよいのです。それが電車内のポスターや、映画館や商店のショーウィンドー等に貼つてあるポスターになりますと、売っているものではありませんし、どうしても、非合法の手段で手に入れるより他はありません。つまり、無断ではがして、失敬してきてしまうのです。

○ 以前、旧号の奇巧に、危険をおかして、物干台などに干してある女性の下着を、収集している人の体験告白がありました。

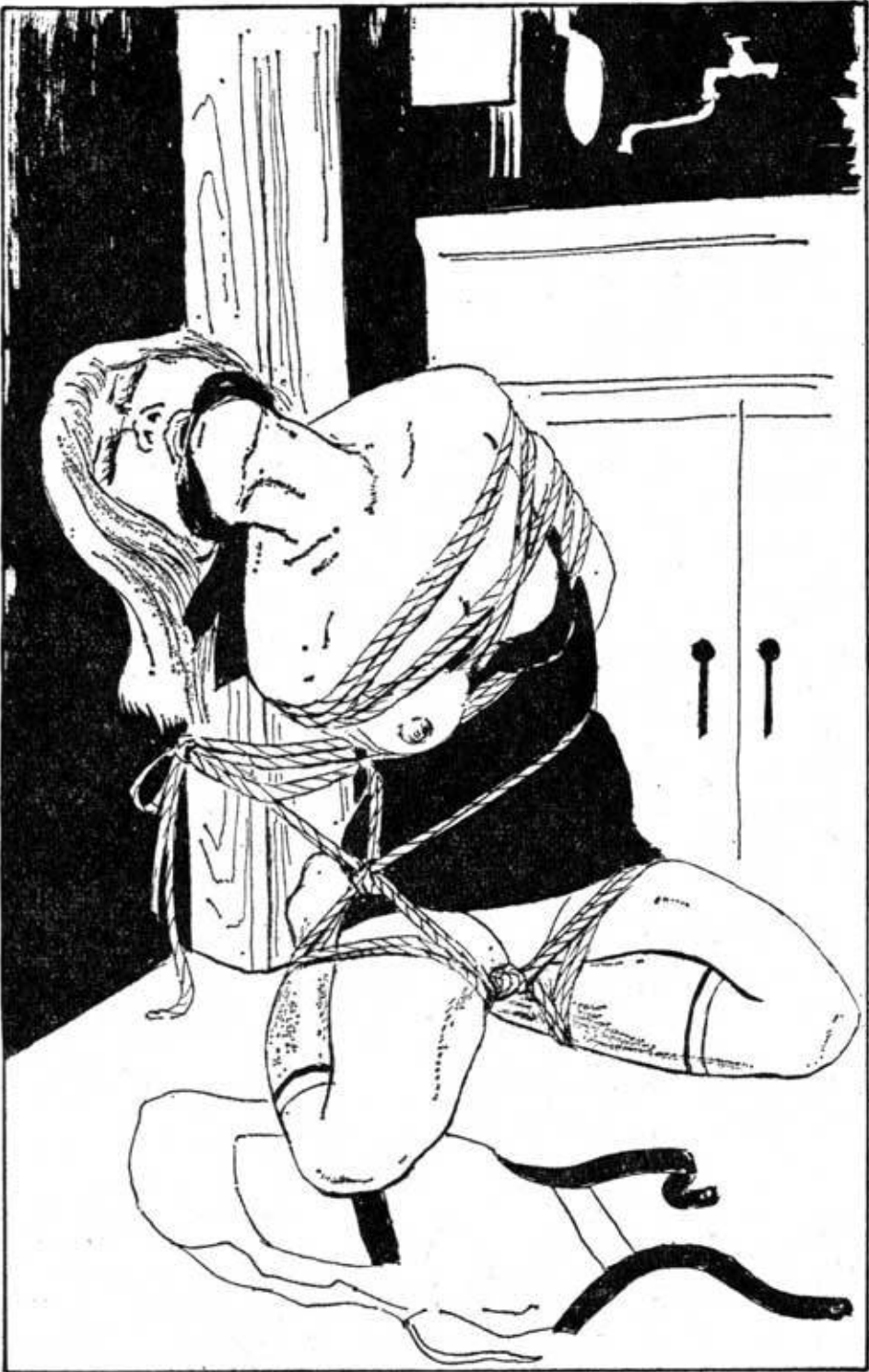
私の場合、もし、ポスターを失敬する現場を見つかったとしても、そのハレンチの度合は、女性の下着の場合よりは、ずっとましだと思います。また、値段のついている商品を盗んだわけではないのですから、まさか、警察へ突き出されるような事もないとは思いますが、けれども、やはり、窃盗の一種には違ひありませんので、万一、捕つたりしては、具合の悪いことになってしまいます。ですからポスターの収集は、人に見つからないように細心の注意をはらつて行いました。私は心臓をドキドキさせながら、根気よくポスターを



はがすチャンスをつかがい、周囲の人目をかすめては、この奇妙な窃盗行為を続けたのです。

いつの頃からか、私は安全カミソリの刃を一枚、ポケットに入れて、持ち歩くようになりました。これは、ポスター収集用のためです。駅などに貼ってある大きなポスターや、

商店のショーウィンドーに貼ってあるポスターは人目がありますので、画鋏を抜いて、大きいまま、はがす訳にはいきません。そこで人待ち顔で何気なくポスターに寄りかかりながら、ポケットに忍ばせたカミソリの刃で、ポスターの顔の部分だけを、たくみに切りとってしまうのです。



イメージギャラリー

『食事準備中止』

志羽 利也

今までの私の経験から申しますと、概して化粧品や薬品のポスターのモデル嬢は、ポルノ雑誌のモデルと違って、美人が多いようです。したがって、私のコレクションには、薬局の店先から失敬してきたものが、相当多く含まれているのです。

ポスターが、薬局のショーウィンドーの外側に貼ってある場合には、私は何としてでもそれを失敬してしまうのですが、ガラスの内側に貼ってあるものばかりは、さすがの私でも、どうにもなりません。ポスターを譲ってくれるように店員に頼めば、あるいは売ってもらえるかもしれませんが、気の小さい私には、とても、そんなことを頼む勇氣はありません。やむなく、垂涎おくあたわざる素晴らしい鼻孔のポスターを前にしながら、むなしく諦めるほかはないのです。

(3)

美貌の女性の持つ、妖しくも美しい鼻孔の魅力——。女性の恰好のよい鼻の孔を見たとき、私は、なんとも言えない悩ましい気持ちになってしまいます。そこには、エロチックかどうか、何ともいうにいわれないセックスア



ピールがあるように、私には感じられるのです。

セックスアピールを感じる部分というのは通常の人の場合、女性の裸体や乳房、あるいは恥部に、それを感じるのが普通で、私のように女性の鼻孔にのみセックスアピールを感じるのは、きわめて特異な性向といえるのではないのでしょうか。視覚を刺激して性的興奮を呼び起す、いわゆる「オナペット」として普通の人は、女性のヌード写真やポルノ写真を使うようですが、私の場合のオナペットはもっぱら、女性の鼻孔写真なのです。

私は夜、ひとり自分の部屋にこもって、扉にしっかりと鍵をかけ、収集した、たくさん  
の鼻孔写真の中から、特に気に入ったものを選びだして、自分の周囲に、ズラリと並べます。すると、それを見ただけで、はげしい性的興奮をおぼえ、たちまちエレクトしてしま  
うのです。私は、それらの写真を見ながら自  
らを慰めるのですが、大勢の美女の鼻孔に囲  
まれながら果てる瞬間に、この上ない陶醉と  
幸せを感じるのです。

あるときは、実物大に写された鼻孔写真に  
ふたつの鼻孔を小刀の先で切り抜き、その穴

に、筒先をあてがって放出したこともありま  
す。もち論、まわりにはズラリと鼻孔写真を  
並べ、本物の美女の鼻腔の中に注入している  
ことを空想しながら……。

それにしても、女性の顔面の中央部にあい  
ている、ふたつの鼻の孔が、何故これほどま  
でに、私の心を惹きつけるのであろうか。女  
性の鼻孔に対する私の思いは、日増しにつの  
るばかりで、どうにも止まらない程エスカレ  
ートするのです。『ねては夢、おきては現  
まぼろしの……』という言葉がありますが、  
私の頭の中は、女性の美しい鼻孔のことで四  
六時中、いっぱいになり、私は憑かれたよう  
に鼻孔写真を求めては巷を放浪しました。

そのような写真のありそうな所——、たと  
えば、デパート等で催されるカレンダー展や  
ポスター展にも、よく行ったのです。

カレンダー展の場合、何百種と展示された  
カレンダーのうち、女性写真のカレンダーだ  
けを片っ端からメクツて見てゆきますと、大  
抵一枚ぐらいいは、鼻孔が写った、私好みの写  
真があるものです。展示品は、殆どの場合、  
非売品で売って貰えませんので、無断で失敬  
してくる他はありません。私は用意して行っ

たカミソリの刃で、その気に入った写真を、  
一枚だけ切りとってしまふのです。

○

さて、こうして集めた鼻孔の写真やポスタ  
ーが相当量たまりますと、大型のスクラップ  
ブックに整理して貼るのです。

まず、カラー写真とモノクロ写真とに分け  
つぎに、なめらかな鼻筋を写した横顔の写真  
や、顔の下側から鼻孔を写した写真など、同  
じ系統のものに整理、分類をします。そして  
小さいものは一ページに二、三枚。大きいも  
のは一枚ずつ、スクラップブックに糊で、は  
ってゆくのです。また、ポスターのように特  
に大型のものは、折り込むようにして貼って  
ゆくのですが、これは、私にとっては、とて  
も楽しい作業なのです。

今、このスクラップブックを開いて、長年  
かけて集めた苦心の結晶ともいうべき鼻孔写  
真を見ると、その写真の一枚一枚には、そ  
れを収集した時の苦勞をした情景が、いとも  
鮮やかに浮んでくるのです。

あの町の映画館から、失敬してきたポスタ  
ー。この町の薬局の、ショーウィンドーから  
はがして来たポスター。電車の中や、駅に貼



ってあったもの。あるいは、旅行先の旅館から持ち帰ったもの等々……。中には、お金を支払って手に入れたものもありますが、殆ど大部分のものは、無料で収集したものばかりなのです。

ポスターの収集には、いろいろと苦勞をした思い出が数え切れない程ありますが、次にもっとも印象に残っている苦心談の一つをお話しましょう。

## ○

二年ほど前になりますが、私の町の映画館で、『幸福の条件』というセックス映画が上映されたことがあります。映画館の横の、ショーウィンドーのようなガラス張りの箱の中に、外人の女優が顔を仰向けて、鼻孔を見せているポスターが貼ってあるのですが、その美しい鼻孔が、私の心を完全に魅了してしまったのです。

人類学的にも、寒帯地方に住む西洋人は冷たい空気を呼吸するために、タテに細長い鼻孔をしているそうですが、顔をふり仰いで、真正面からバッチリと、とらえられた、その女優の鼻孔の美事なこと！ 鼻の高さにくらべて幅が狭く、タテに思いきり細長のびた

柿の種のような二筋の鼻孔と、二つの孔の境界線（鼻柱）の細長く優美な形状——。

「ヨシッ。このポスターを、何が何でも手に入れよう」私は、そう決心しました。

それまでも、映画のポスターは、方々の映画館で、たびたび失敬していました。観覧席の両サイドの外側にある休憩所の壁に、よくポスターが貼ってあるのですが、映写中は休憩所に誰もいなくなりますので、画鋏を抜いて、容易にはがすことができるのです。

私は、ポスターを失敬するのが目的で、入場料を払って映画館に入りました。が、どういうわけか、その映画館の休憩所には、ポスターは一枚も貼ってなかったのです。キップ売場の横のショーウィンドーの中に、のどから手が出るほどほしい、あの素敵な鼻孔のポスターが貼ってあるのですが、映画館の前は人通りが激しく、そのうえ、ショーウィンドーのガラス戸には施錠がしてありますので、ポスターをはがすことは、とうてい不可能なのです。

やむなく、諦めようと自分に云い聞かせてそのまま帰宅しましたが、夜、床に入っても、さきほど見た、あの魅惑的な鼻孔が目

の前にチラついて離れず、どうしても眠ることができません。

いても立ってもいられなくなった私は、人びとの寝静まるのを待って、コッソリと家をぬけ出しました。時刻は、午前一時を過ぎていたように思います。

私は深夜の町をさまよい、目に見えない糸に引き寄せられるように、映画館に行きました。それは、鼻孔の妖しい魔力に魅せられ、気の狂った一人の異常者の姿であったかもしれません。にぎやかだった映画館の前も、深夜ともなるとネオンも消えて、暗くヒッソリと静まりかえり、あたりには人っ子一人、見あたりません。私はショーウィンドーの錠を針金を使って苦心の末、こじあけ、ついに鼻孔写真のポスターを手に入れてしまったのです。

女性の鼻孔などに関心のない、正常な方々からみれば、私の、この奇怪な行動は、まったく正気の沙汰とは考えられないことでしょう。「なんだ、ばかばかしい。どうして、そんなくだらないものを」と、あきれはて、私の心理を理解に苦しむに違いありません。しかし、こうして苦心をかさねて集めた鼻孔写



真は、私にとっては何物にもかえ難い貴重な宝物なのです。

## (4)

ここで皆さんは、きっと次のような疑問をもたれるのではないかと思います。『そんなに女の鼻孔がよいのなら、写真などでなく女をハントして、本物の鼻孔をのぞいた方がよさそうなものだ』と。

その疑問にお答えしましょう。それは私としても、写真よりも生身なまみの女性の鼻孔の方が何倍も心を惹かれるのは、言うまでもありません。

しかし、女性の鼻孔に目を近づけて、至近距離からのぞくなどという事は、至難のわざで、まず不可能といわなければなりません。もし、仮にもそんなぶしつけな事をすれば、たちまち、痴漢か狂人扱いをされてしまうに違いありません。

だいたい、鼻の孔は、ふつうの状態では、なかなか見られないものですが、それは、鼻孔というものがエロチックな、ある種の羞恥の感情を含んでいるため、慎しみ深い女性になるべく鼻孔をあらわに見せないようにして

いるのではないのでしょうか？ 女が自ら顔をのけぞって、自分の鼻孔を見るのを許すとき——それは、お互いに肉体まで許し合った深い関係になった時ではないかと、思うのです。

ですから、女性の鼻孔をのぞくためには、その女を完全に自分のものにしなければならぬのですが、それは私にとっては、非常に困難なことなのです。というのは、もって生まれた内向的な性格のため、私は女をハントすることに全然、自信がないからなのです。

私と同じように、女性の鼻に非常な興味を持つておられる斉藤香根雄氏は、告白「女の鼻に関する八章」で、美しい鼻の持主の女性をハントしては、その鼻をつまんだり、鼻孔をのぞいたり、カメラで鼻孔を撮影されていることを述べておられます。また、電車の中などで、狙いをつけた若い女性の鼻を手当り次第につまみ、その数は二十年間に、なんと二千人に達したとのこと。まことに羨ましかぎりで、斉藤氏の勇氣と実行力には只々敬服するほかありません。

それにひきかえ、私は、女性コンプレックスとでもいうのでしょうか。女性の前に出た

だけで顔が赤くなってしまい、声をかけることなど恐ろしくて到底できないのです。まったく、お恥かしい話ですが、その女性が美しければ美しいほど、魅力的な鼻であればあるほど、私には近寄りがたく、遠い存在に感じられるのです。

『オレって男は、ダメな男だなあ』と我ながら、つくづく情なく思うのですが、鼻の形のよい美人を見かけても、声をかけてハントするなど思いもありません。もっぱら、羨望と憧憬の眼ざしで、その美しい鼻に遠くから、じっと熱い視線を送っているだけなのです。それで、せめて写真でも——ということから鼻孔写真のコレクションを作り、独りひそかに眺めては悦に入っているのです。

大変、長たらしい、また廻りくどい説明になりましたけれども、これが、私が本物の女性の鼻孔をのぞくことなく、鼻孔写真で我慢している理由なのです。

その後も、収集に対する絶え間ない努力によって、私の宝物である鼻孔写真のコレクションは、スクラップブックが一冊、また一冊と、次第にその数を増していったのです。

——(おわり)——



カット・花咲 潤



## 鎖 禪

(くさりふんどし)

あきの・よしみず

……▽奴隷妻飼育中止△……

私の家は、竜安寺と金閣寺の丁度、中程にあるので、よく寺を歩きまわる。

その日も、妻の瑠美子と一緒に金閣寺を散歩して帰ってみると、家の戸にカギがかかっていない。

「また来ているな」と、思って、中へ入って行くと、やはり妻の従妹の由貴が部屋の真ん中で寝転んでテレビを見ていた。

「店は、どうしたんだい？」

「今日は、お昼までで閉めてきたの」

由貴は、親から資本を出してもらって、私の家から二つ目のバス停にあたる所で、小さな喫茶店を出して、一人のウェイトレスを雇

い、気ままな生活をしている。

「瑠美は？」

「さあ、着替えでもしてるんじゃないかな」

「これ、してるの？」

由貴が自分のヘソの下の方を指さして言ったので、私が苦笑いをする、「ちょっと」と言っ

て、これとは、私が自分の欲望を満たすために瑠美子に、いつもさせている鎖の禪のような物である。

妻はマゾヒストでも変質者でもないが、私を愛しているのと、あきらめたのとで、痛いとか、苦しいとか言いながらも、それをして

いる。

「由貴さん、カギを返して……」

「欲しかったら、力づくで取るのね」向うの部屋から、由貴が妻を弄んでいる声がする。鎖は、かなりきつく体に喰い込むようにしてあるので、カギを外さないと取ることが出来ないのだ。

由貴が、私と妻との間に割り込んできて、奇妙な関係になってから、もう一年近くになる。

私の家に遊びに来た由貴が、瑠美子と一緒に風呂に入った時、瑠美子の体の鎖の痕を見つけた時から始まった。

私は時々、瑠美子を細紐で縛ったりすることもあるが、由貴がいる時は、瑠美子がか



いそうなので、しないことにしている。

そのかわり、由貴が瑠美子をいじめていても、私はだまって見ている。

以前に、瑠美子が私に助けを求めて来た時私が由貴に味方したことがあるので、瑠美子も無駄だとあきらめているらしく、私に助けを求めることは殆どない。

なぜ、瑠美子が、二つ年下である由貴の無法な行為から逃げきれないかというと、二人の性格もあるだろうし、やはり鎖というものが、なによりも瑠美子の弱みになっているのだろう。

この二人が仲が悪いかというと、決して、そうではない。いつもは楽しそうにしているし、買物にも、よく二人で一緒に出かけたりしている。

「ねえ、由貴さん」

三人で炬燵に入って話をしていたが、瑠美子が言いにくそうに由貴を呼んだ。

「カギを返して下さらない」

由貴がカギを出さないの、瑠美子は、まだ鎖を股間に締めたままだった。

「さっきも言ったでしょ。欲しかったら、勝手に取ったらいいって——」

「そんなこと、言わないで。ねえっ、お腹が苦しくて、たまらないのよ」

瑠美子がトイレに行きたがっているのだということは、私にも由貴にも、よくわかって

いた。もちろん、鎖をつけたまま、出来ないことはないのだが。

「じゃあ、明日、一緒に映画に行く？」

「ええ、いいわ」

瑠美子は、ほっとしたように言った。

「その鎖をつけて行くのよ」

由貴のその言葉で、がっかりする。

「そんなこと、嫌だわ」

「それじゃ、駄目ね」

私より、由貴の方が調教が上手のようである。だからこそ、由貴の横暴を許し、瑠美子を早くマゾヒストにしようと、私自身、由貴を利用しているところも少しはあった。

しばらくすると、いよいよ我慢出来なくなったのか、瑠美子が泣くようにして、由貴に頼みだした。

鎖の禪をつけて映画に行くという条件をのんで、やっと、カギを返してもらったと、駆けのようにして部屋を出ていった。

夜は、私を中心にして、左に瑠美子、右に由貴と、三人、頭を並べて寝た。

瑠美子を抱きにいくと「由貴さんがいるじゃないの」と言っただけを向いてしまった。

うとうとしていた私が、ふと目を覚ますと由貴が私の腕を引っ張っている。

妻を見ると、向うを向いて、起きているのか寝ているのか、わからない。

私は音をたてないように、由貴の布団へ移

った。今までに、妻に隠れて何度か由貴を抱いたことがある。

多分、妻は感づいていると思うが、私には何も言ったことはない。私は妻を捨てて、由貴と一緒にいる気は、さらさらしないし、由貴も、そう考えているということを、瑠美子はよく知っているから——。

翌日。

約束通り、瑠美子は鎖の禪を締め、グリーンの服とミニスカート、黒のコートとブーツを身に着けて出かけた。

平日のためか、映画館は空いていた。

瑠美子と私の間に座っていた由貴は、時々私の体に手を伸ばしてくる。

しばらく見ているうちに、朝起きて、すぐ鎖を着けられたものだから、まだ一度もトイレへ行っていないかった瑠美子が、昨日のように由貴に許しを請うたが、また由貴が無理を言っているらしく、なかなか、瑠美子は席を立とうとしない。

やっと、カギを渡してもらって出ていったが、なぜか、そのすぐ後、由貴も出ていった。

「何をしてたの？」

二人が揃ってもどってきて、席についたとき、由貴にたずねた。

「ウッ、フッ」

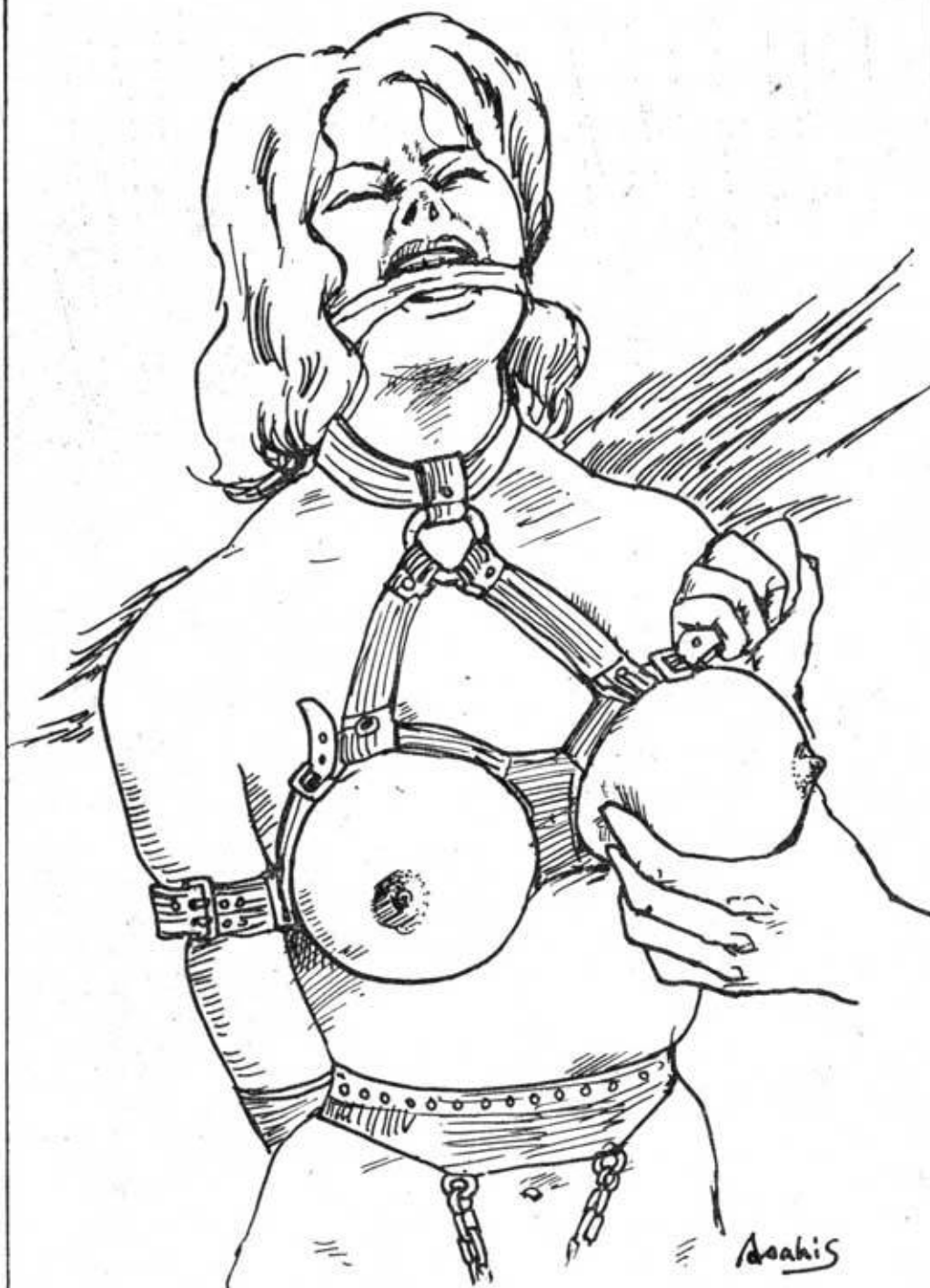
由貴は、さもおかしそうに笑う。



「あのね。おトイレから戻ってくる時、パンティを脱いだしたら、カギをあげるって、言ったの。でも、もしかしたらって思って、行ってみると、案の定、一人で帰るつもりだったのよ。だから、私、おトイレの中まで……ウツ、フフツ」

由貴は、昨日、家へ来たときから、何もかも、計画ずみのようであった。しかし、瑠美子も由貴の言うことを、すべて聞き入れていたわけではなかった。

映画を見終ってから、由貴の案内で、座敷のある和食店へ行っただが、瑠美子に、帰



イメージギャラリ

『凝脂の悲鳴』

須坂 旭

りはスーツも脱いで、鎖禪の上にコートを着るだけにするように言ったので、瑠美子は、とうとう、本当に怒り出し、一人で先に帰ると言い出した。

その場は私が仲に入るような格好になり、鎖禪を着け、パンティをはいていない妻の下半身に、鎖を外し、パンティをはいてもいいということ、一応おさまった。

「さて、これで、そろそろ、お開きにしようかな」

三人とも、なんとなく白けた気持になり、私は、もう帰ろうかと言いつ出した。

「ねえ、これから、私のところへ来ない？ 今日日は瑠美に悪いことしちゃったから。飲物ぐらいなら、あるし……」

由貴が、あまりにも熱心に勧めるので、それではということになり、由貴の店へ行ったのだが、朝からの気疲れと、酒にそれ程、強くない妻は、わずかグラスに二、三杯の洋酒で、すぐに酔いつぶれてしまった。

そんな妻に対して、由貴と私は、二人で考えられる、すべての物を用いて、あらゆる辱かしめを与えた。しかし、それ以来、瑠美子は一週間ばかり寝込んでしまった。

そんな妻のことを思えば、あの時、いったい、何があったのか、とても話す勇氣は、私にはない。

——(おわり)——



会> SMプレイ顛末記

# 形を責める

夫人を囲むSM研究会>

てつ  
鉄

ぞう  
三



私が「SM研究会」を提唱して以来、通信を寄せられた方々は相当な数に達する。

大山良介氏も、その中の一人であった。彼の通信は、他の方とは一風変わっていた。というのは、目下飼育中の自分の妻をマゾに仕込んで呉れというのであった。

これも、まあ、SMの研究になることはなるのだからと、私は早速、返事を書いた。

彼から二回目に届いた手紙は、相当に打ちとけていて、職業とか、家族のこととか、それに、夫婦のプレイ歴などについて詳しく書いてあったが、そうしたプライベートのことは、今は伏せておこう。

私が電話番号を知らせてから二回ほど電話が掛かってきて話をした。是非、直接逢って

お話したいことがあるし、見せたいものがあると言うのだ。私は、もう今まで、S研のメンバーの何人の人達と逢ってきたことだろうか。中には、全くの時間潰しの人もあったこともあったが、大山良介氏とは、一緒に夫人を飼育するとすれば、一度、逢っておくのも悪くはないと思った。

それから一週間ほどして、私と大山良介氏とは、大阪南郊の、とある喫茶店の片隅で、向い合って座っていた。

SMのことや奇譚クラブの話、それにSM研究会のことについて、あれや、これやと話し合っていると、話題は次から次へと尽きることがない。忽ちにして二時間ばかり、あっという間に経ってしまった。

彼が、わざわざ持参して私に見せたいというのは、夥しい枚数の責め写真だった。

それは全部、彼の夫人をモデルにして撮影した責め写真ばかりだった。

喫茶店のテーブルの上で、そんな写真を、おっぴろげるのは、どうしてもまずいと彼が言うので、一先ず、そこを出て、駐車している車の中へ戻って、そこで一枚一枚、ゆっくりと見せて貰った。

ゴムを使って責めている写真が多かった。



■〔S研〕＝＜友の

# ゴム衣人

＜大山良介氏

つか  
塚

もと  
本

大山夫人が、喘ぎ、悶えている表情を眺めていると、私は、あらぬ妄想に体が燃えた。

大山良介氏は、熱心に、「妻を責めて、マゾに仕込んでほしい」と私に頼んだ。

頼まれなかったって、やりたくて、うずうずしている私だから、一も二もない。

だが、そこで、大山氏は、声をひそめて、もろもろの条件を出してきた。

一、写真は、すべて自分のカメラで自分が撮ること。

二、痛いことや体に傷アトのつくようなこ

とは絶対にしないこと。

三、パイプは非常に嫌うので、出来るだけ用いないでほしいこと。

四、初対面の男性には、妻の警戒心が強く、今迄に何度も失敗したことがあるので、慎重に取扱ってほしいこと。

五、ゴムの猿ぐつわは必ず噛ませ、出来たら、ゴム衣裳を着せてほしいこと。

その他、細々したことについての打ち合わせをした。パイプなんか、勿論、私としてもそんな小道具を用いた姑息的なことは好まないから、願ってもないことだ。

☆

さて、実施の日のことだが、彼がよいという日は私が駄目だったり、私がこの日では、と云えば、彼の都合が悪かったりした。

そんなわけで、大山氏と逢ってから、半月は、あっという間に経ってしまった。

そして、二月二十四日の日曜日にやろうと決まったのは、その前々日の朝だった。

徳島から畑村信一氏がS研会員として、大阪南港に到着する予定なので、集合場所を南港ビル二階の喫茶室と、きめる。

今回の会合の出席者は、大山氏夫妻を中心に、彼と親交のある和歌隆夫氏、畑村氏、そ



れに私を加えて計五名である。

この機会に、SMについて、SM研究会の会員の人達と、いろいろと話したいのであと二名ばかり呼んでみてはどうかという大山氏の意見だったので、私は、早速、心当りに電話してみたが、一名は留守、一名は、その日、都合が悪いとのことだった。

大山氏は郊外のホテルに、二部屋予約してくれてあった。一部屋はプレイ用の部屋、もう一部屋は控え室に使うためだった。

☆

二月二十四日。

昨日、一日中、降り続いた雨は朝になって上っていたが、依然として厚い雲が垂れ込めていて曇り空だ。

喫茶室で待ち合す筈だったが、定刻前に、ビルの正面玄関にて、一同五名、ぴったりと顔を合わせる。

挨拶もそこそこに、喫茶室へ向う。

岸壁に横づけになったフェリーが硝子窓越しに見下せる席に陣どってから、サンドイッチ、

ジュース、コーヒ、紅茶と、それぞれ、思いの注文を出す。

硬くなり勝ちな大山夫人。それはそうだろう。四人の、むくつけき男性に囲まれて、これからSMプレイの花形の主人公になるのだから、無理もないことだ。

私は冗談を言って彼女を笑わし、リラックスするように心掛けたので、どうやら、少しは気が楽になったようだ。

二台の車に分乗して、大山氏の予約してくれてある郊外のホテルへと向う。

私には場所がわからないので大山氏の車に先導して貰って、南港から国道26号線へ一旦出てから、一路、南下する。

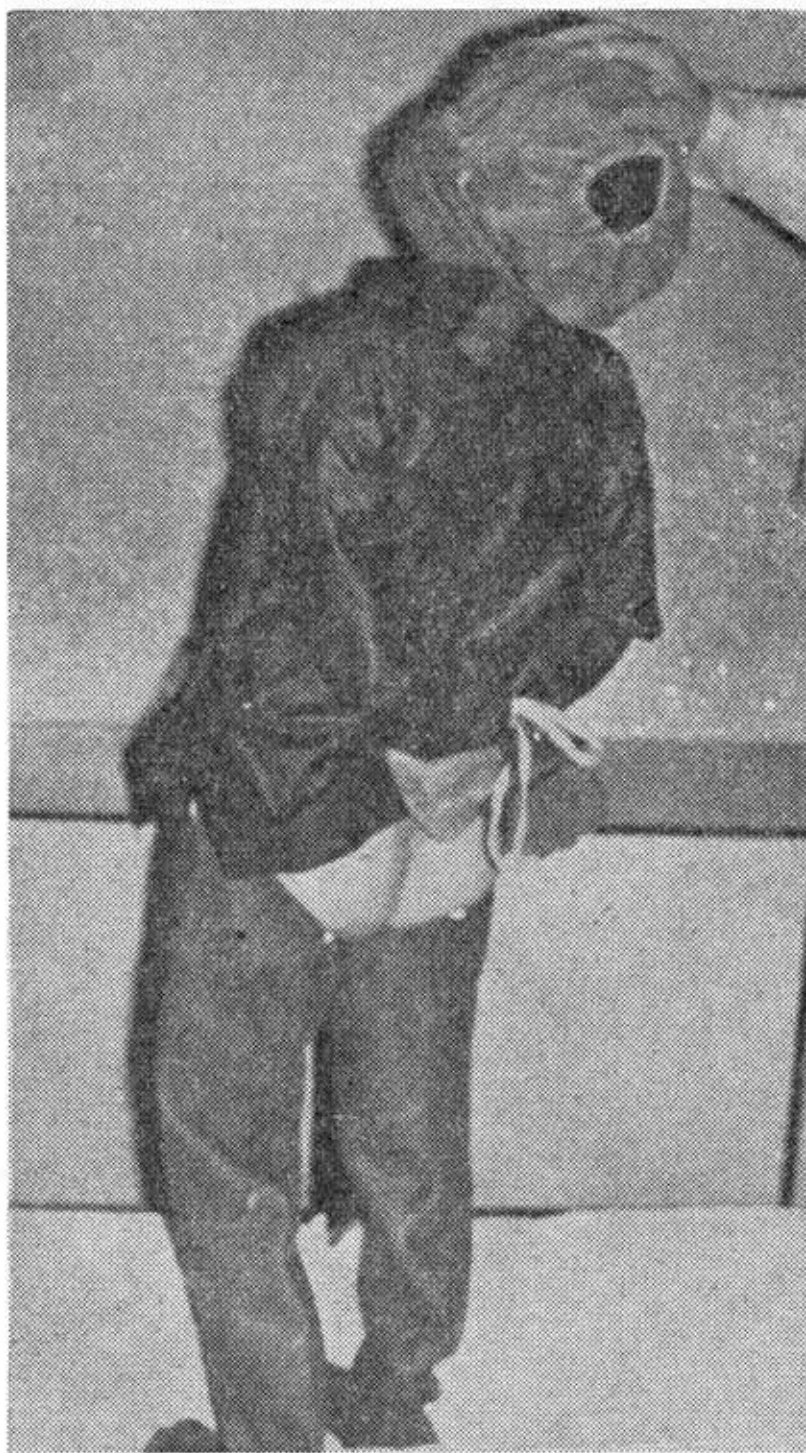
日曜日のこととて車は空いていて、四十分ばかりで屋根のついた広い駐車場のあるモーターに着いた。

今日は私は、カメラも責道具も、何一つ持ってきていない。それに引き換え、大山氏の方は大荷物だ。バッグや紙袋が五つもある。

みんな得手分けして、部屋へ運び込む。漁師用のゴム装束一式、これが嵩ばって

て中々重い。それにテープレコーダーに、アルバムなどなど。

一室に落着いてから、ホームコタツに足を突っ込んで、魔法瓶からついで、お茶を飲みながら、とりとめもない、雑談に耽る。気の張る話題は何一つ、ない。肩のこらない軽快



なSMの話とHな話ばかりだ。

こればかりは、初対面だって、結構、話はずむ。話題には事欠かないのだ。

「塚本さん。一つ、見てくれますか」

大山氏は、ぶ厚いアルバムを五冊、紙袋から取り出して、コタツの上に置く。この前、逢ったとき、次には必ず見せると約束していた彼秘蔵の「責めのアルバム」だ。

勿論、みんな夫人を主人公にして、いろんな人達が、いろんな責め方をしている大山氏撮影の△責め写真▽ばかりだ。彼にとってはそれは門外不出の貴重品に違いない。

そのどれもが、責められて恍惚とした表情の文字通りのプレイ写真ばかりだった。

やはり、ゴム責めが多い。ゴムの猿ぐつわがポイントになっているようだ。

大山氏は、一枚一枚、丁寧、且つ詳細に解説を加えてくれる。撮影者の解説つきだからなかなか興味がつきない。SMマニアにとっては、楽しいひとときである。

ゴムについては、私は余り知らない。和歌氏も畑村氏も、特別にゴムに強い関心を持っているとは、私には思えない。

そこで私は、ゴム責めの実践者、大山良介氏に対して、一つの疑問を投げかけた。

「女をゴムで責めるということは、一体、どんなところが、いいんでしょうかね」

彼は直ちに、事もなげに答えた。

「いや、実際は、私も、ゴムは大嫌いなんですよ。その大嫌いなゴムの衣裳を、最愛の女性に無理強いして着せるといったところに、凄い虐待感を感じるんです」

「ほ、ほう、そんなもんですかね。私は又、貴方がゴムが大好きで大好きで、たまらないから、そのゴムを使って責めるのかと思っていました」

「ゴムの臭いなんか、いやですがね。そのゴムくさい嫌な臭いを嗅がして責めるところに良さがあるんです。ですから、ゴムが好きだというのとは、又、違いますね」

「自分の体にゴムをつけて責められたいという人と、ゴムで相手を責めたいというのとでは、ニュアンスが非常に違いますね。それはそうと、話は変わりますが、あなたの言われるその最愛の夫人を、他の男性の手で責めさせて何ともないんですか？ 殊に、SEXプレイのときなんか……」

「そこところは、複雑な心境なんです、一見、Sのように見えていても、私も、多分にMの傾向もあるのかもしれないね」

畑村氏は、大山氏と私のやり取りを感心したように聞いている。

和歌氏と大山夫人は、既に旧知の間で、プレイの経験もあるとのことなので、先ず、プレイ室の設営と一緒にやって出ていった。

SM研究会の運営については、大山氏も畑村氏も、私に熱心な意見やアドバイスをしてくれた人達なので、そのことに関して、いろんな建設的な構想が持ち出される。

私は、現在まで申し込んで来られた方々の状況に関して一わたり説明して、お二人の意見との調整を計る。研究会だなんて言うものだから、四十人も五十人も、一堂に会合してという風に誤解して、週刊誌の話題になんかなくては困るという大山良介氏の心配も、もつともなことだ。

会誌だとか機関誌の発行だとか、地区別の支部を設けるとかいった話を持ち込まれる方もあるが、それは夢のような話だ。

手紙や電話だけで話しておったときと違って、こうして顔を合わせていると、直接、ザックバランに話せるので、畑村氏にも、「S研」というものの、ニュアンスは、よくわかって貰えたことだろうと思う。

誰彼なしに、あけすけに話し合えないSM



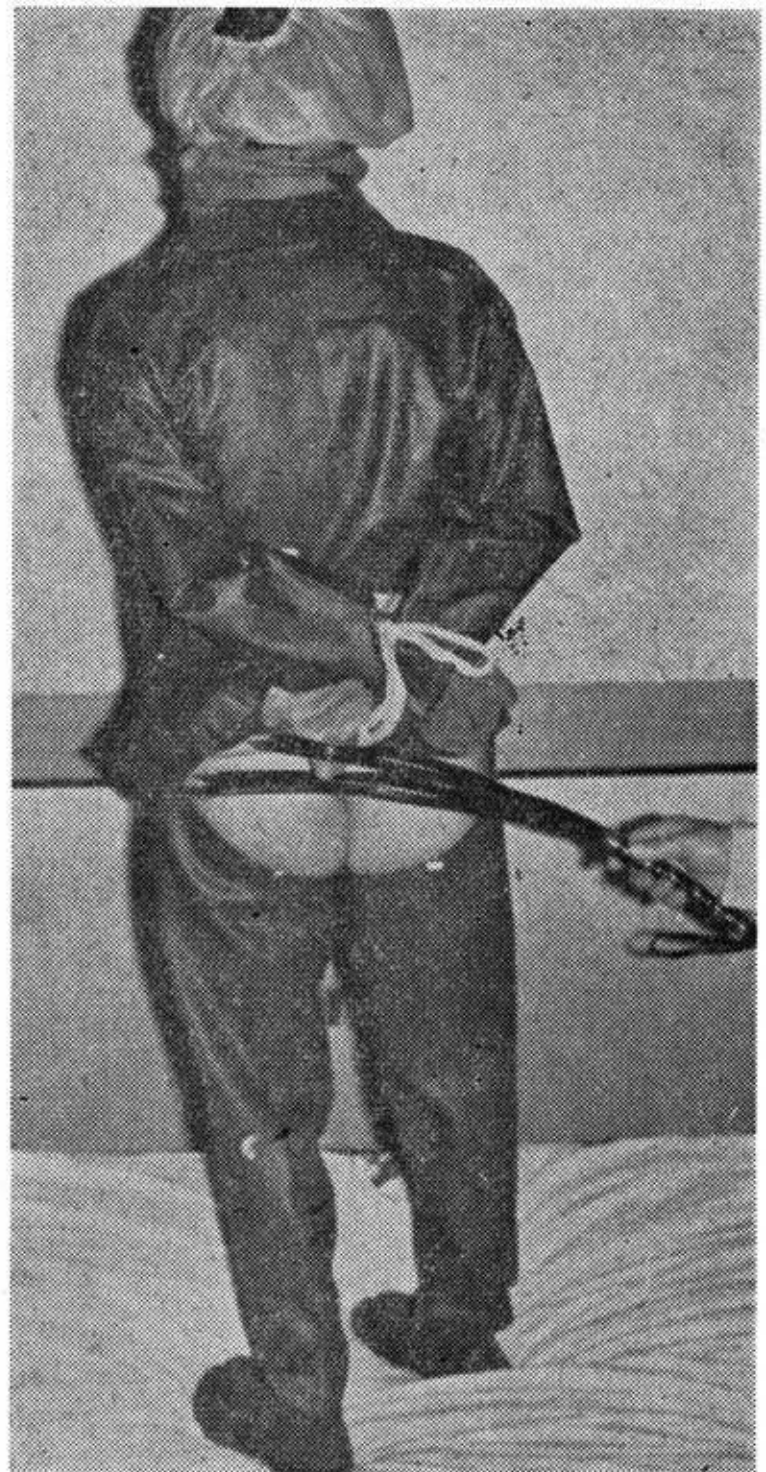
の話題を、このグループだけは、何の気兼ねもなしに、話し合える——。ただ、それだけでも結構、楽しいことではなからうか。

その上、プレイが出来たら一層、愉快だがそれは一先ず、二の次としておこう。

畑村氏は入会金や会費を取って、研究会の基盤を確かめておく方がよいという意見だったが、この点は、私としては全く反対意見だ。

第一、そんな金を集めて保管する人も場所もないし、会計報告する人も、いない。それよりも、会合をした際、飲み食いした費用だけを各自、その都度、負担した方が、後くされがなくて、さっぱりしている。

そんなことを話し合っているうちに、大山氏が「ぼつぼつ、始めましょうか」と腰を上げた。今日は、大山氏夫妻が主人公で、私はゲストのようなものだから、至って肩の荷が軽い。「はい、はい」と気軽にしかける。



ビデオが設置してあって、中央に舞台のようにはマットレスの上に布団の敷いてある個所が、SMプレイの部屋だ。そのプレイの部屋に接した六帖が、差し当り、控えの間、兼観覧席といった按配だ。

私と畑村氏は定めの席に着く。

大山夫人は既に、いち早く、全裸に剥かれて、ベッドの上に仰臥させられている。

大山氏はいくとうと、ちゃんと背広を着たま、上衣も脱いでいない。

彼は、つと、夫人に近づくと、その鼻を、ぐいと掴んで、反射的に開いた夫人の口へ、

ゴム球の嵌口具を、パツと押し込んだ。

その早いこと、目にもとまらぬ早業だ。

もう、こうしたプレイは、今までに何度も何度もやっているのだろう。当然なことをしていると、いった手馴れた作業だ。

ゴム臭いゴムの球が、口の中へ入ってくるだけで、嘔吐を催しそうになりそうだが、それだけで

はなかった。大山氏の手にしているのは、タイヤのチューブを裂いた真黒なゴムのベルトだ。それを幾重にも、顎から口へ巻きつけ、鼻をも、すっかり掩ってしまった。

ぐるぐるぐるっと巻きつけて、ゴムの猿ぐつわをしてゆく早さも、相当なものだ。

「あれっ、これで、呼吸が出来るのか？」  
私は、いささか不安だった。

「ムムムム」

夫人の眼のまわりが忽ちにして充血する。それが合図であったかのよう、和歌氏が待っていたとばかり夫人に襲いかかる。

正常位だ。

私達は、それを見ていた。

「どうだ、息苦しいか？」

大山氏は、傍らから夫人に言葉をかける。

「ウォーミングアップをしておかないと次の本格的な責めが、うまくゆかないので……」

大山氏は私達に向かって解説する。

正常位、一点張りだ。

見られている大山夫人のイケニエの姿が被虐的で妙に哀れだ。

「ビデオを入れようか」

大山氏がスイッチを入れる。部屋が急に明るくなった。ライトが点いたのだ。

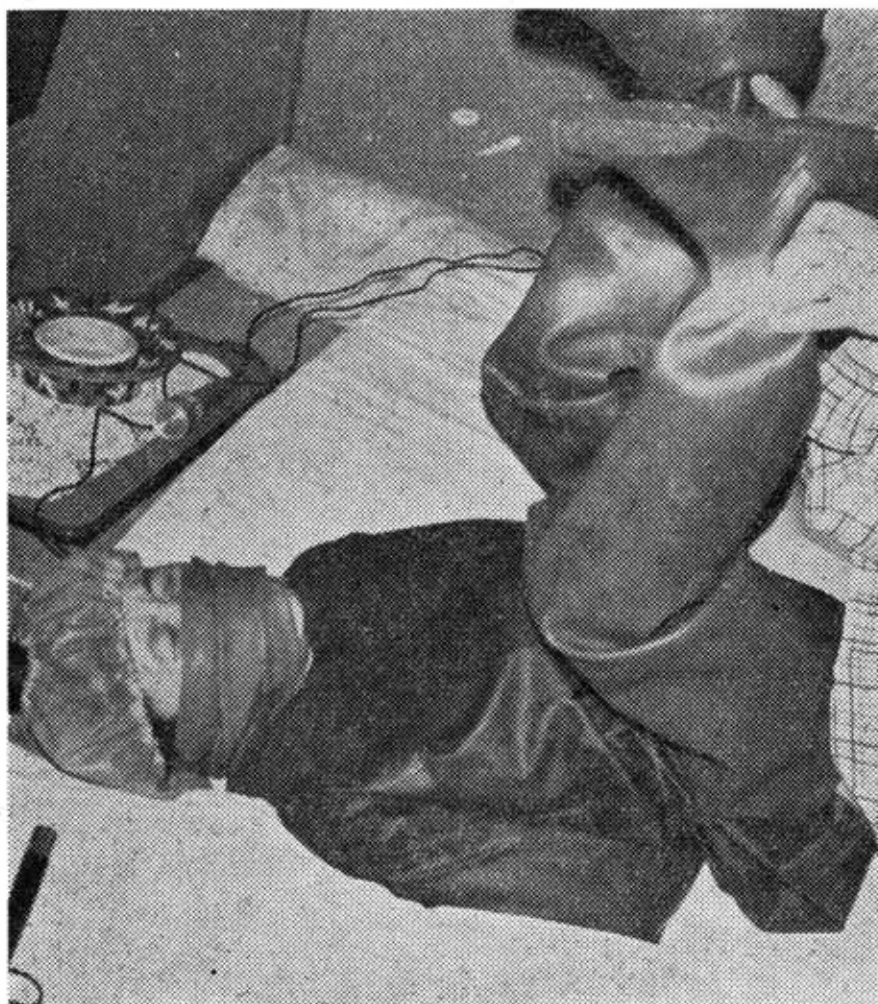
テレコのマイク二つを枕元と足もと  
の二箇所へ配置して、リールを回転させる。

夫人のゴムの猿ぐつわに押し殺されて、くぐもった呻き声が録音されてゆく。

大山氏はカメラを手にした。

中々忙しいことだ。

今のところ、裸なのは和歌氏と大山夫人の二人。他の三人は洋服を着たままだ。



やがて、和歌氏が、「交替、交替」と叫んで、はね起きると、前を押えて浴室へ飛び込んでいった。

誰も応ずる者はない。

私は慌てて上衣を脱いでコタツの掛布団の上へ投げすてた。その上へズボン、シャツ、パンツ、靴下と、次々重ねておいて、素っ裸になって、大山夫人の仰臥している舞台の上へ飛び込んだ。  
いやはや、全くハレンチなことだ。

今日の私はカメラも縄も持っていない文字通りの出演者なのだから、まあ、こんな無礼講も許して貰わずばなるまいが、御主人がちゃんと控えている目の前で、その夫人に挑むとは、なんたることだ。

だが、それがまた、とてもたまらない愉悦なのだから、因果という外はない。

私とて、夫人と同様、ウォーミングアップをしたかった。軽く一丁、調子を整えるための小手調べといったわけだ。

ゴムの嵌口具と猿ぐつわのせいだろうか、夫人は既に相当、練れていた。私は、彼女の鼻孔をぴたり掩っているゴムの猿ぐつわが、余りにもきついので、息苦しいのではないかと思つて、右手を伸ばして、鼻の孔だけを出してやる。傍らで見ていた大山氏が、それを見ていて、すぐさま、元に戻すなり、怒ったような口ぶりで言った。  
「息が出来ん筈はない。本当に息が苦しかったら、合図をしますよ」

そんなものかなあ———と思った。

「どうだ、文子。どんな気持だ」

大山氏が、耳元で言葉をかける。そこで、夫人の名前が、文子だということ



とがわかった。

口も鼻もゴムベルトで、すっかり掩われていたのだから、夫人の返事は「オオオオオ」と口の中で、くぐもっていて、何を言っているのか、さっぱり、わからないが、返事していることだけは、たしかだ。

暑い、たしかに暑い。

額から汗が、ぼつりぼつりと、夫人の胸元に落ちる。大山氏が私の汗をタオルで拭いてくれる。全く妙な具合だ。親切すぎて――。

私は恐縮してしまふ。

いや、実際のところ、自分の妻を犯している男の額の汗を拭いてやる男。それは全く、カリカチュアだ。カリカチュアだったら、それはそれで、またいい。それが真剣なんだから、私の方が恐縮してしまふのだ。

これからの「責め」に、彼が、どんな難問を持ち出してくるかかわからないが、それに応ずることの出来るスタミナだけは、自信があるつもりだ。

大山氏が写真を撮るたび、ストロボの閃光が目につかつかつと、まばゆく感ずる。ストロボに熱はない筈なのに、狙われた皮膚のあたりが、変に熱く感ずる。

私は壁側の腰の襖を足で開けた。

鏡だ。

その鏡にうつる風景を、私は眺めていた。風呂から上ってきた和歌氏が立っているの、脚が見える。手をついて覗き込むようにしている畑村氏の顔も、うつっている。

大山氏がカメラを持ったまま、うろろろしている有様が、まるで、テレビの画面でも見ているように、私の目に映る。

「塚本さんにいじめて貰って、どんな気持ちなんだ。嬉しかったら、嬉しいと言え」

大山氏が再び夫人に声を掛けた。

「うう、うう、むーむー」

夫人の呻き声を落着いて聞いていると、「ウレシイデス」と言っているようだ。

そのとき、夫人は下から、私にムチを手渡した。私は、それを右手で受けとる。

「ううう、ううう――」

夫人は猿ぐつわの下で何か言った。

「それでムチ打ってやって下さい」

大山氏が通訳する。

こんな格好でムチ打ち。さて、果して、うまく出来るだろうか。

私は右手にしたムチを、空でくるくると舞わして弾みをつけておいてから、大山夫人の脇腹とお尻とを、交互に打つ。

打ったたびに、彼女の体が、よく締まる。

だが、ポーズがポーズだから、一向に力が入らない。いつの間に、夫人がムチを手にしたのか、私は知らなかった。

「このムチで私を、ぶって下さい」

そう言っただけでムチを渡されたとき、私の嗜虐の血が一層激しく燃えさかったのを知った。休みなく攻撃し、飽くことを知らず、ムチを揮った。

手がだるくならなければ、もっと、もっとぶちたかった。

自分の裸身をムチ打つための皮鞭を私の右手に手渡した夫人は、いつの間に、どこからそれを持ってきたのか、私は知らない。大山氏が渡しているのを、私は見ていない。

夫人が、その皮鞭を隠し持っていて、そして自発的に私に手渡したのだろうか。大山氏が強要している気配は、そこに密着している私には、さらさら感じられなかった。

皮鞭を夫人から手渡されたことで、私の嗜虐心は、益々火のように燃えさかった。

細くて、しなやかな夫人の上半身を、力いっぱい抱きしめると、手の中でこわれそうだった。こわれて、消えてしまいうさだった。三十分は経っただろうか。

肌と肌とが、お互いの汗で、ぬるぬるになった。暑い。とにかく暑い。

どこに、これだけ水分があったのかと、思うくらい、額から、顎から、胸から、汗の玉が、したたり落ちた。

下になっっている大山夫人は、もっと暑いことだろう。全身、濡れネズミのようだ。

大山氏が近寄ってきて言った。

「舐めさせよう」

「このままかい？ そ

りゃ汚いぞ。じゃあ、ちょっと洗ってくる」

私は飛び起きるなり浴室へ走った。

風呂の湯の出が悪い。ところどころしか湯が出ない。湯の溜るのを待っていると、そこへ

大山氏が迎えに来た。

「おい、早く来いよ」

「湯が中々出ないんだ。ついだから、汗を流してから行くよ」



石鹸の泡を立てて体中を洗いまくってから  
そうそうに、部屋へ戻ると、いち早く、和歌  
氏が私の替りをしていてくれた。

彼は正常位、一遍倒だ。

大山氏は私にスタミナドリンクの瓶を見せて、  
「飲まないか」と言う。

「そんなの、砂糖水じゃないのか」

「いいや、やはりビタミンが入ってるよ」

「そんなのより、咽喉が乾いたから、コーラでも貰おうか」

大山氏は、冷蔵庫からわざわざコップを出して注いでくれる。親切なことだ。ラッパ飲みしようと思っていた私は恐縮する。

畑村氏はオレンジジュースを所望する。

「どうです。あんたも、一風呂浴びてから、一丁責めに加わりませんか」

「とても、とても。あなた方の抜群のスタミナを見せて貰っていますと、

全く自信をなくしてしまいますよ。私なんか  
の出る幕じゃないと、つくづく思いました。  
見せて頂いているだけで、よい勉強になります」

「そんなこと、言わないで、さあ、一つ、同じ釜の飯を喰う同志になってみませんか。洋服のままじゃ、窮屈でしょうから、お風呂へ入って浴衣に着替えられたら……」



そのとき、和歌氏が再び飛び出してきた。  
「交替してくれ。かなわん、かなわん」  
「それでは塚本さん、一つ、あなた得意の縛りを見せてくれませんか」

大山氏は私に三本の縄を手渡す。私は、それを受け取るなり、後手高手小手、開股縛りにした。両膝に左右から縄を掛けて、ぐいと股を引き開いたのだ。

大山氏はカメラを手に近づく。一発閃光を放っておいてから仰向けに夫人を押し倒す。縄が膝に喰い込んで、両股が、いやでも左右に、ぐっと開いてしまう。

「よし、それじゃ、次はゴム責めだ」

大山氏の目が、きらりと光って、私の方へ鋭い視線を送って合図してきた。ゴムを使いたくて仕方がないのだ。

「よしきた。ゴムはどこだ、どこだ」

大山氏の持ち出してきた包みの中は、ずしりと重い、真黒のゴム衣裳だ。魚屋とか漁師の着る総ゴム製の防水具だ。

夫人を抱き起しておいて、ごわごわとした総ゴム製の上衣を三人がかりで着せる。小柄な彼女の裸身の殆どを掩ってしまうくらいの超特大のゴム上衣だ。

次は、太股のつけ根にまで達するゴム長を



穿かす。紐がついているので、肩へ掛けて括りつけ、長靴が抜けないようにする。頭へは生ゴムのオシメカバー。これで、完全に生ゴムに包まれたゴム衣人形が出来上った。

私は、彼女の肝腎のところだけ、露出させておいてくれるように頼む。真黒いゴム衣裳の中で、彼女の真白いお尻だけが、ちんまりと可愛いく見えた。

袖は手の先も、すっかり隠れてしまうくらいの長さだ。大山氏は、私にゴム紐を手渡して無言で「縛れ」と目で合図する。

私はゴム衣人形を抱え上げておいて、両手を回して彼女の両手首をゴム紐で縛った。

このときに、私の体に異変が起った。

風呂から上ってきて、浴衣だけを羽織っていたのだが、このプレイの舞台へ上ってきて彼女にゴム衣裳を着せると暑くなったので、その浴衣を脱いでテレビの上へ放り投げたから、今や素っ裸なのだ。

素っ裸だから、ゴム衣人形を後手に縛るために抱え上げたところ、生ゴムが、ぴったりと私の胸、腹部、それにゴム長が太股に、吸いつくように、へばりついたのだ。

その、ねばつくような生ゴム特有の感触。汗ばんだ肌に、奇妙な動物的な感覚が、思わ

ず、私をエキサイトさせてしまったのだ。

何とも、奇妙な快さなのだ。

汗とゴムと素肌と。そして、むせ返るような熱気なのだ。

私は真黒なゴム衣人形を抱いていた。

大山氏は、あわててカメラを構える。

私の生身の前面の肌という肌に、生ゴムがぴったりと、ひっついた。

私はゴム長を穿かされた彼女の両脚を一気に抱え上げて、自分の両肩にのせた。

私の二の腕から上膊にかけて触れてきた生ゴムの長靴の冷たくてねっとり粘りつく、爬虫類の肌のような感触。いや、爬虫類じゃなくて両棲類の、例えば、濡れた蛙の肌のようなゴムのぬめりが、たまらない。

全身、真黒で、黒光りのする奇妙な動物。



人間として外部に出ているのは、やさしい眼だけだ。人間の目をした黒ゴム人形の怪物に對して、私は得意にしているモーションを繰り返した。

それが合図のように、夫人は狂ったように喘ぎ呻いた。大山氏はマイクを夫人の猿ぐつわを噛まされた口の端に近づける。

私の攻撃は休むことなく激しさを加える。一度、二度、三度――。

夫人は連続して噴出した。

名器ではなくて、まさに逸品だ。

今まで、私は数十人の女性を体験してきたが、こんな激しい噴出を見せた相手は、僅か三名に過ぎない。これも、ゴム装束を着用させ責めたてた結果であろうか。

その瞬間、私は温湯を注がれたように熱く感じた。

全く、素晴らしいと言うより外、言葉では言い現わせない感覚であった。

ゴム衣人形を責めるということが、これ程までに、自分を感溺させてしまうものであるとは、今の今までは知らなかった。

ゴムというものに対して自分が今まで、余りにも無関心であったことを後悔した。

「ゴムなんて、そんなもの……」と喰わず嫌いで敬遠



していた人達にも、一度、勧めてみたい気がする今日の結果であった。

もともと、私は、元氣さの点では自信を持っていた。しかし、自分自身の体のことだから、今日は、どの位の元氣さか——ということとは自分で、よくわかった。

ゴムの粘着性は私を憤起させた。

余りのことに、私は一瞬、戦慄と恐怖を覚えた。自分が生ゴムの虜になってしまうのではないかという恐怖と、体中がアブの泥沼の中へ、めり込んで溺れてしまうのではないかという戦慄的な快感の連続だった。

大山氏は手にしたカメラで、何回となくストロボの閃光を放った。

私は、アップで撮りよいように、その部分を、あからさまに示す。夫人は、もう死んだようになって、私のなすがままだ。

私は、漁師用の重量のあるゴム衣を着用しているゴム衣人形の夫人を大胆にはね上げて女上位の凄いラーゲにした。

もう、こうなってしまうと、自分でも不思議だと思ふくらい、いくら激しい運動をしても、少しもひるまなかつた。時間の経過と共に益々元氣になった。

すっかり、見られている。殊に、その部分

がアップでカメラで狙われている——。

そのことに、私は、今までに経験したことのない異質の凄い快感を味わった。

これが、マゾの快感なのだろうか。

攻撃している筈の自分が、完全に包囲されて、攻撃を受けているといった心境だった。

大山氏は、僅かにゴム衣の間から露出している夫人の臀部目がけてムチを揮った。

ムチが臀部に当たるたびに、夫人の凄い体の反応は、私に直接、伝わってきた。

生ゴムの真黒い衣裳が私の全身に掩いかぶさってくる。

夫人の臀部を叩くムチが、はずれて私の肌を叩いたときは、私は全身が痺れるような、言うに言われぬ刺激を受けた。

こんな快感もあるのかと思った。

ムチの乱打が、遂に私の急所に当たった。

これには、流石の私も、「やめてくれ」と叫んでいた。

テレコの二つのマイクは、そんな私の声もきくと録音していることだろう。

大山氏は一心にムチを揮い、和歌氏も畑村氏も、覗き込んで「アッ」と嘆声を洩らす。

私はゴム衣人形を抱え上げた格好になりながら、いついつまでも、そのまま、そうし

ていたかった。

この密室に今、籠っている五人は、奇妙な共犯者意識で以て、一つの共同作業を、各々違った分野で受け持って行動していた。

夫人の絶え間ない呻き声。

ピシッ、ピシッ……と鋭く響くムチの音。

それに、大山氏の夫人を叱咤する声。

それらが入り混じって、楽しい交響楽を奏でていた。大山氏は、カメラのシャッターを連続で切る。和歌氏が思いっきり強く、ムチを夫人の臀部で炸裂させた。

夫人の逸品が私を痺れさせていった。

あからさまに見られていることが、何にも増して快く、そして、ムチ打たれていることが、よし、それが夫人を狙っているものであるとしても私に、今まで、且って味わったことのない妙味を与えた。

大山氏はムチの手を止めると、カメラを手にしてストロボの閃光を放ち、カメラを置くと、マイクを夫人の口もとに近づけて、猿ぐつわの下の呻き声を録音した。

呻き声を録音するばかりではない。夫人の耳のそばに口を寄せて喋った。

「どうだ、文子。どんな氣持なんだ。言ってみろ。言ってみないか？」

「うう、ううう。ううう——う」

夫人は喘ぎ喘ぎ、意味のわからない返事をしている。自分では、言葉に出して喋っているのだろうが、なにしろ、口にはゴム球の嵌口具とチューブの猿ぐつわ。それに、鼻をもびったりゴムベルトで締めつけられているのだから話せるわけがない。

それでも大山氏には、夫人が何を言っているのか、よく、わかるのだろう。

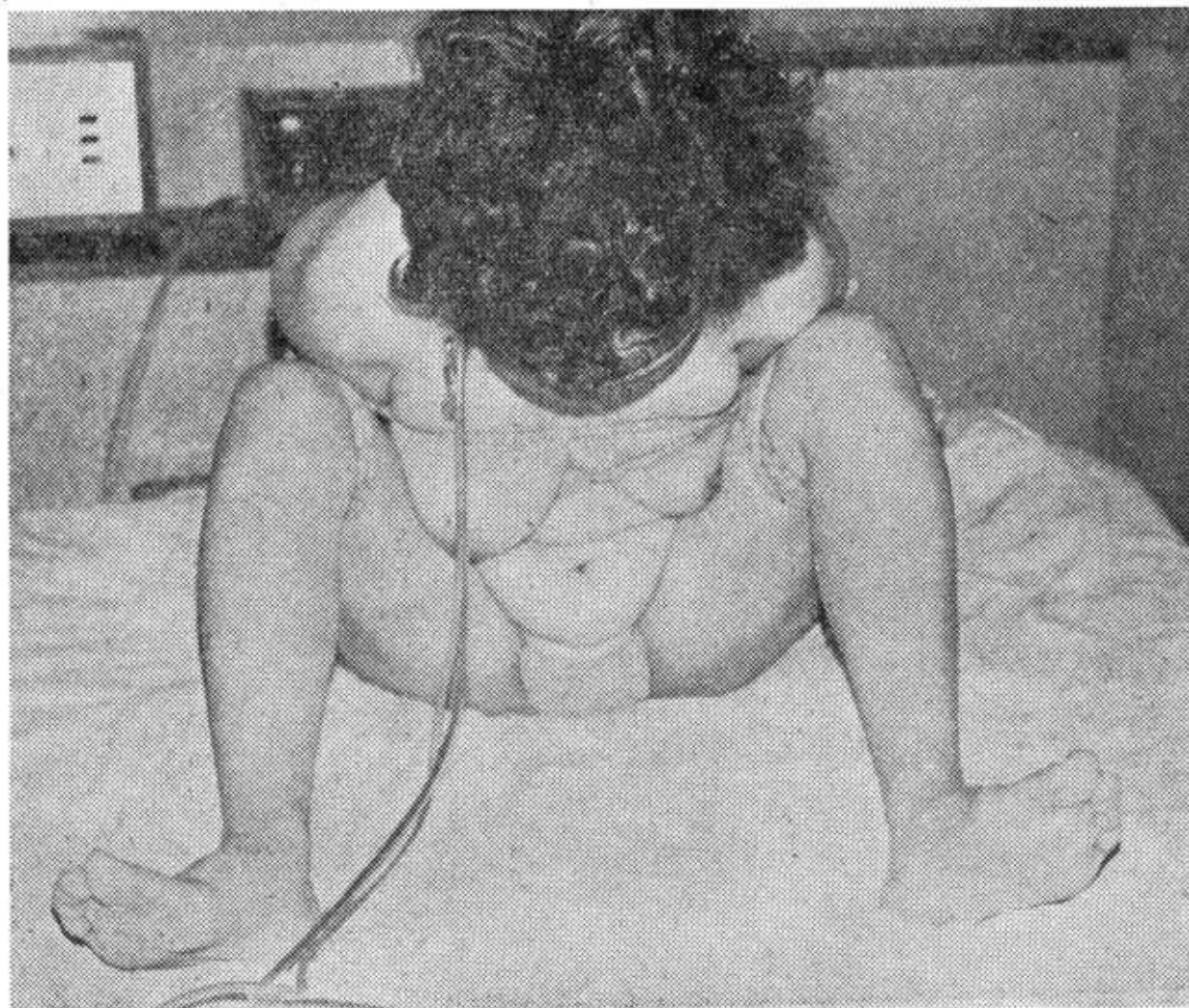
「うん、そうか、そうか。それだったら、塚本さんに、もっともっと、責めて貰って、完全なマゾにして貰え」

「うう、うう——」

大山夫妻のやり取りは依然として続く。

私は、カメラの被写体になったつもりで、さまざまに位置を変えながらも、カメラが狙い易いようにサービスして見せつけた。そして、見物人の目を最も楽しませるように、あらゆる秘術を尽した。

全身に生ゴムの厚い衣裳を纏った彼女は、



暑さのためばかりでなく、汗みどろになっているのが、私にも、よくわかった。

私の肌にも、ゴム特有のヌルヌルとした、ねばりつくような感触が、もう体の至るところに、たまらない快感を呼び起こす。

生ゴムのもつ特有の臭気が、ぶんぶんとうめってきた。

生ゴムというものを、「責め」の小道具として用いると、こんなにもプレイの効果、高められるものだったのか。

私は、一遍にゴムが、大好きになった。しかし、それは一概に生ゴムのせいばかりではなかったらう。

大山夫人のマゾに徹した素直な性格と相俟って、主人である大山氏の飼育よろしきを得ているからだらう。私としたら、その山海の珍味を据膳で頂いているに過ぎないのだ。

ゴムを単に「責め」に使ったというだけでは、とても、こんなに良い筈はない。

そして、何よりも第一に預って力のあったのは、大山夫人の逸品と、何時間も波状的な連続攻撃を受けても、

いささかも、へこたれぬタフなスタミナがあることだ。もしも、彼女がいなかったなら、私はこんなにも、ゴム衣人形を責める妙味を味わうことが出来なかったに違いない。



そして、更に、相乗効果を發揮するに足る条件が加っていた。それは、三人のSM好みの男性の好奇に満ちた目で、じろじろと見られているということだった。

見られている――。

それは、何という凄い快感なんだろう。

一種言うに言われない男性としての、誇らしげな気持は、攻撃的なS心をあふりたて、満足させてくれた。それは、悪童が人に見られていることで、更に悪どい悪どい悪戯を続けようとする心理にも似ていた。

苗木陽子が私に言ったことがある。

「あなたとプレイしていると、単に飼育されるという楽しさばかりではなく、その場面を写真に撮られ、文章に書かれ、そして雑誌に載って、多くの男性の好奇の目で見られるのかと思うと、たまらなく気持がいいの」

私は今、自分も一つの被写体になり、見世物になってみて、その気持がよくわかった。

見られているということ、私は、いつ果てるとも知れぬ遅い元気を、いついつまでも維持し続けていた。いや、自分の意志で今や、完全に、それをコントロール出来る境地にまで到達していた。

私は、出来るだけ、彼女の臀部をあらわに

して、大山氏がムチ打ち易いようにした。

それはまた、私をして、自分をより多く見せたいという欲望を満足させてくれた。

自分に、こんな奇妙な露出癖があるのを、初めて自覚した。

見られたい。見せたい。見ていて欲しいという念が湧いてくるのを、どうしても、打ち消すことが出来なかった。しかし、反面、淡い悔恨の念が湧いたが、それも、この熾烈な快感の前には、打ち消されてしまった。

大山夫人は、私のなすがままになってしまっていた。私のリードによって、緩急自在に操られるゴム衣人形に交り果てていた。淑かな家庭夫人ではなくて、一足のアニマル、いや、セックスの奴隷だった。

私は、もう、自分一人では起き上れない奇妙なラーゲになっていた。大山氏に声を掛けて、手をかして貰う。

ゴム衣人形を責めるって、なんと素晴らしいんだろう。

「塚本さん。文子を、うんとマゾに仕込んでやって下さいナ」

大山氏は私の耳に妖しく囁く。

「私が仕込まなくても、もう立派なマゾヒストですよ。それも、飛びきり素晴らしい珠玉の

ようなマゾ女です。それは、そうと、大山さん、交替しましょうか」

「いや、僕はダメなんだ」

大山氏は自分の妻に尻込みする。

「それじゃ、畑村さん、あんた、どう？」

彼は依然として洋服を着たまま、脱ぐ気配さえ見せない。完全な傍観者だ。

「舐めさせろ、舐めさせろ」

大山氏がカメラを構えて要求する。

「このままでか？ 汚くてもいいのか」

「そのままの方がいいのだ。洗ってきたら、値うちがない」

それでも私は、少しは逡巡する。夫である大山氏の目前だからか。

私がOKの意志を示すと、四時間ばかり、ずっと噛ませ続けていたゴムベルトの猿ぐつわを大山氏は、さっと取った。口中に噛まされていたゴム球が、ぽこっという音と共に、はずれる。

間髪を入れず、今度は、私の別の猿ぐつわが押し込まれた。

そうしたことは、今までのプレイで幾度となく仕込まれていたのだろう。まことに見事な受け方だった。

カメラが向けられた。

カメラを向けられて、ストロボの閃光を矢つぎ早に放たれ、そして、好奇の目が痛いように、その部分に集中し驚嘆の聲が発せられるばかりでなく、彼女の習練を積んだ巧妙な舌技とテクニクとを繰り返されることによって私は完全に酔ってしまった。

酔えば酔ったで、私は益々元気になって、誇らしい気持ちにさえなった。

さあ、どうだ、見てみる——と。

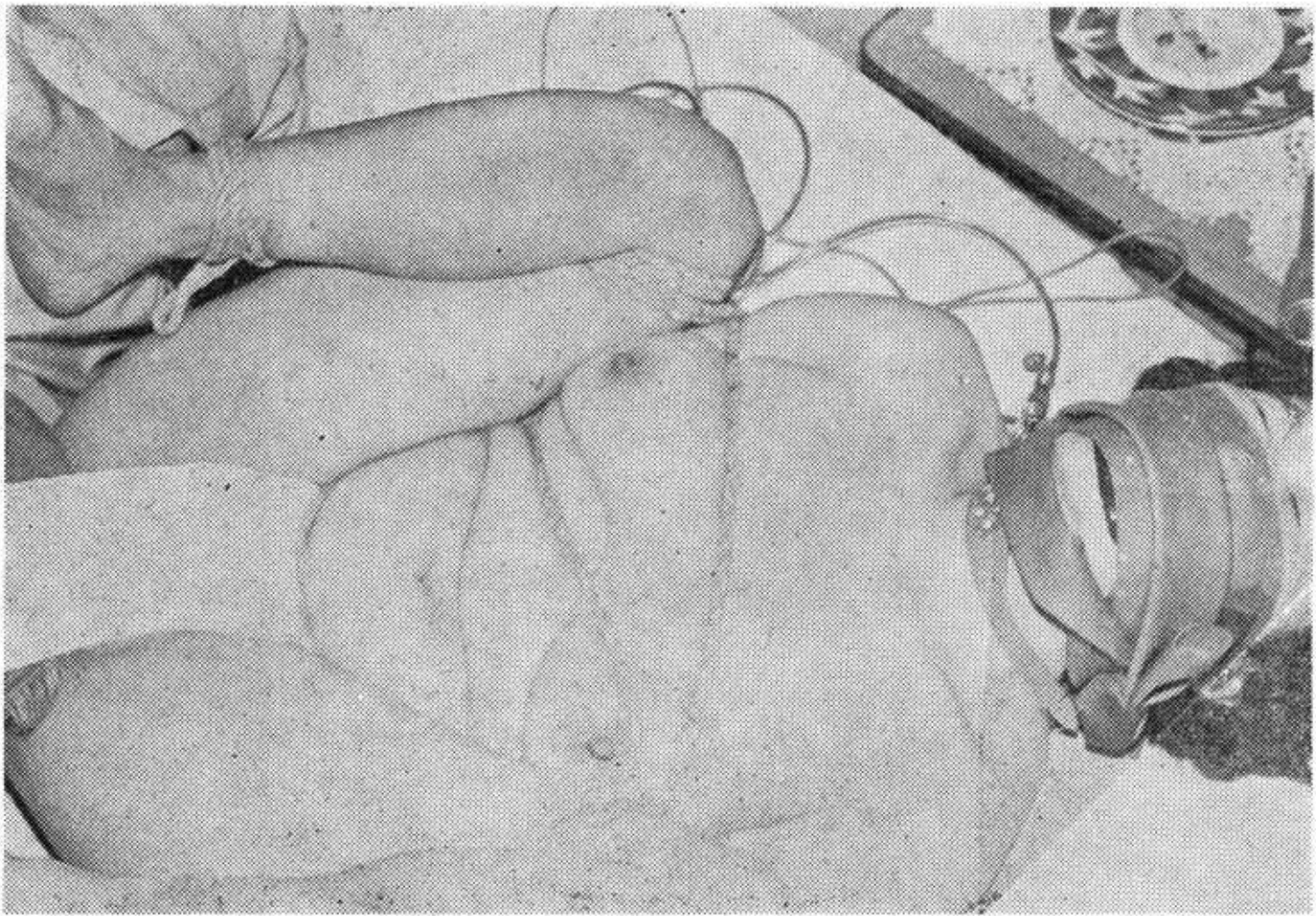
「ゲゲゲとなっても、許してやるナ」

大山氏が傍らから声を掛けた。

必死になって奉仕を続ける夫人が哀れになった。四時間に垂んとする長い間、休みなく連続で責められている彼女が気の毒だった。

真底、彼女はマゾなのだろうか。それとも主人の性癖に対して、単に迎合しているだけののだろうか。いや、そんなことはない。これこそ、本当にマゾの悦びに浸りきってしまったている姿だ。私の目の前にいる女性は、マゾの女神でなくてなんであろう。

汗みどろになった漁師用の黒なゴム衣を纏わされ、しかも後手にゴム紐で括ら



れたままの虜囚の姿の彼女。やっと、ゴム球

とゴムチューブの猿ぐつわから解放されたかと思うと、今また、この難行苦行なのだ。

「塚本さんに責めて頂いたお礼に、しっかり奉仕せんか」

従順な夫人は、主人にそう言われるとサービスしながらも、なにかを答えようと、必死になって、口の中で、つぶやいている。それは勿論、言葉になるような喋り方は出来ない。だが、答えようとしている意志だけは、私には、よくわかった。

全く、よく仕込んだものだ。

これで磨きをかければ、光り輝くダイヤモンドにでもなるだろう。

写真を撮りまくっている大山氏のフィルムが切れたところで、私は浴室へ飛び込んだ。

今日はこれで、もう、何度、風呂へ入ったことだろう。生ゴムの臭気にまみれた汗だらけの体を、生ぬるい湯の中へ浸ける。

湯の出は、相変わらず芳しくない。

さっき入ったとき、石鹸で全身を洗った筈なのに、肌が脂で、ぎらぎらしている。



殊に顔は脂で、ぬらぬらだ。タオルで拭いておいたままで、ざざーっと湯を出す。

バスタオルを腰にして部屋へ戻ると、和歌氏は既にちゃんと洋服を着て、鏡台の前で髪に櫛を当てている。畑村氏はいえ、私のすすめにも拘らず、入浴する気もないらしく来たときの洋服姿のままだ。

舞台のベッドの上では

大山氏夫妻が後片づけをしていた。大山氏はテレコを鞆に入れているところだった。彼女は、脱いだばかりのゴム衣裳を全裸でかがんだまま、畳んでいるところだった。

その姿に、ふと、私は言うに言われない魅力を感じた。

SMプレイの華やかな饗宴が、すべて終わってしまっ、全裸のままで、脱ぎすてたゴム衣を片づけている姿は、一見して隙だらけの彼女の生きのまのポーズであった。



彼女は、そんなことは、何も考えていなかっただろうが、私から見れば、それは、たまらない誘惑のゼスチュアに見えた。

普通だったら、私は彼女と交替して責道具の整理を手伝い、彼女を入浴させるべきが当然なのだが、私は、彼女の虚をついたように突然、襲いかかって、仰向けに押し倒した。

「あっ」

小さく驚きの声を発して、彼女はゴム衣から手を放し、軽く私の胸を突っ張って、抵抗するような仕草を示したが、私に抱きすくめられると、チラッと大山氏の方へ視線をやってから、私の背に両腕を深々と回してきた。

今や、猿ぐつわもなく、ゴム衣もなく、緊縛もなかった。

それはSMプレイを逸脱した行為だった。

大山氏は鞆の口にかけていた手を慌てて放して駆け寄ってきた。そして彼女の耳に口を寄せて言った。

「塚本さんに、止めをさして貰え」

猿ぐつわはしていないのに、彼女は一言も返事をしない。今や、SMプレイは完全に終了を告げているのだ。

カメラもなければテレコもない。ビデオの残像もスイッチを切ったので

いち早く画面から消え去っていた。

大山氏には悪いが、私は大山夫人をSMプレイの相手としてではなく、一個の女性として欲したのだ。

ゴム衣人形としての彼女ではなく、大山夫人としての生の女性に恋していた。いや、彼女の逸品に参っていたのかもしれない。

それは、私にとって、限らない悦楽であり愉悦であった。

女らしい、本当に女らしい大山夫人。

私は彼女の耳に口を寄せて囁いていた。

「次にお逢いできたら、もっともっと、凄く責めの方法を考えておきますよ。そして、出来たら、一晩中でも、責め続けてみたいですね。そして、出来たら、本当の浮気を僕としてみませんか。御主人には内緒で、二人でしめし合わせてホテルへ行くんです。私が、お内へ電話して、大山さんが出られたら、彼に話をします。もし、奥さんが出られたら、そこで待ち合わせの場所と時間を打ち合わせしましょう。ねえ、いいですか」

私は悪魔だ。悪魔の誘惑の囁きだ。悪魔の誘惑に対して、淑かな夫人は、果して、どのような返事をするか、興味があった。

彼女は何も返事をしない。だが、彼女の体

の反応で、その答は、よくわかった。

私は溺れ、そして脚を痙攣させた。

大山氏は、痙攣する私の脚を眺めながら、おろおろしたように叫んだ。

その意味は、も早、私にはわからない。いや、わかっていても、それを、ここに書くことは出来ない。いろんな意味でも……。

むんむんする熱気。寒さは感じない。

春の中の気だるさだ。

菜の花が咲き乱れ、蝶々が飛んでいた。

夢の国か、極楽は、こんな所かと思った。

と、このとき、和歌氏の声がした。

「おい、雨が降ってるゾ」

私は現実に戻った。

細くて、小柄な感じの夫人が、案外、肉づきのよいのに気がついた。

☆

外へ出ると、既に雨は本降りになっていて舗道は街灯の光を映して鈍く光っていた。

ホテルの駐車場で大山氏夫妻と和歌氏とに別れを告げると、私は畑村信一氏を送って、既に日のとっぷりと暮れた雨中の国道を、南港のフェリー乗船場へと向った。

「畑村さん。今日は遠いところを、わざわざ来て頂いたのに、プレイの仲間入りをして貰

わなくて、いけませんでしたね」

「いやいや、とんでもない。折角、すすめて貰っておきながら、私は経験ありませんし臆病なんですね。それでも、見学させて頂いて、大変参考になりました」

「見学とは恐れいりましたナ。これに懲りずに、次の機会には、又、おいで下さい」

「はあ、是非お願いします。私は、どちらかと言いますと、プレイそのものより、会員の方々とSMのことについて、いろいろ話し合う会があったら、出席させてほしいと思っています」

「今日のは、まあ、特別ですが、真面目なおシャベリ会は、何回もやっています。誌上で紹介出来るようなのを、近々やる考えですから、そのときは又、お誘いしましょう」

「よろしく、お願いします。プレイの方は、まだまだ未熟ですので、アルバムを見せて頂いたり経験談を聞かせて貰った方が、私には向いているように思います」

南港埠頭のビルの窓々には、灯が明るかった。雨は一しきり激しく降っていた。

……………

☆（挿入写真は、大山良介氏撮影のものを、同氏から提供を受けたものです）



連載・S時代小説『紫蘭の門』

(第三十四回)

## エ レ キ の 魔 力

風 流 極 道 軒

死後、何が残るのか。  
 残して何になるのか。  
 九次元の人格を行使して  
 雄叫ぶ虹の陣兵の行方を  
 お妻は、ただ、見守る。



女 谷 流 し だ れ 柳

「女谷流し、だれ柳！」

美女衛門が意気揚々と叫んだ。

車裂きの拷問から解き放たれたモニカの肉体に一度、女谷流の緊縛術を味わせて見たいという願いが聞き入れられたのである。

場所は、衣笠美和が吊られている桜の木、すぐ横であった。

二本の下枝を、なわせて、逆さにしたモニカの両脚をしばりつけたのである。

「しだれ柳というより、しだれ桜でござりまするな、殿」

用人の樺山が領田に言うのももっともで、いろは文字の「ろ」の字を横に、つまり、両脚を「N」のように開かせて縛りつけたもの

だから、咲き誇る桜の花々が、太腿や脇腹のかげから姿を見せていた。

「日本ノ桜ハ美シイト聞イテオリマシタガ、コンナニモ美シイモノダトハ……」

ヘンドリックはタルボ・タイプの写真機を桜の花のなかにうかび上ったモニカに向けると、シャッターをきった。

その焦点がどこに合わされたのかは、男なら、いや、女でもすぐわかることであった。

「まるで紅鯉の切身でござりまするな、殿」  
樺山が、感じ入ったように、いう。

「紅鯉の切身か。まことのう」

領田が床几から立ち上るより早く、三尺近くへ、レンズを進めたヘンドリックが、ニヤツと笑って、

「サモン・ピンク色ト申シマス」

サモン・ピンクが紅鯉の切身を意味するところなど領田たちは知らなかった。ただ、まば

前号まで——老中・領田下野の中屋敷では、和蘭の美女モニカが元禄屋たちの見守るなかで、風車責め、車裂きなど南蛮流の拷問を被露していた。戊夜のロザリオのありかを求める元禄屋は、小紫のお景を、ヘンドリックの駆使する南蛮流の拷問にかけることを思いついた。

たきもしないで見つめている。

見つめているのは男たちばかりではなかった。スッ裸にされて縛りあげられている十数人の腰元たちもチラ、チラッと顔をあげて覗き見していた。

女にとっても、また、好奇心をかきたてられる見ものであるらしい。

と、

「ヘンドリック、ヘンドリック！」

後手に縛られて、やっと肩が荒筵についているだけという逆さ吊りの、モニカの唇がひらいた。

「ナンデスカ……モニカ」

つづいて二言、三言、オランダ語でやりとりをしたあとで、

「モット強く、責メテホシ——ト、モニカ

ガ申シテオリマス」

「もっと強くとな？」

「イカニモ。ヨローロッパノ女ハ、喜悅ヲカクシマセヌ。ハッキリト申スモノデ、トキニハコチラガ降参スルコトモゴザイマス」

「はほう、そのようなものかのう」

「最初ノウチハ恥カシガッタリ、タメラッタリイタシテオリマスガ、ホレ、モウコウナリマスルト……」

ヘンドリックはべつに何もしていないようであったが、艶かしいモニカの叫びが断続してあがった。

「ソノ点、日本ノ女ハ、最後マデ、シトヤカデ、女ラシイ慎ミヲ失ワナイトカ。女ハ、ソウアリタキモノデース」

領田の顔に笑いがかんだのは、日本の女にもスゴイのがいるのを知っているからであったが、それは口には出さなかった。ヘンドリックの言うとおり、日本の女の大部分は確かに慎しみ深く、自分の快楽よりも男性に奉仕する気持を片時も忘れようとしなない。

「モニカハ、サスガ貴族ノ血ヲヒク女。マダ理性ヲ失ッテイマセン。ガ、大部分ノヨーロッパノ女、スゴイデース。ムシャブリツイテキマース」

ムシャブリツクという日本語を知ってますよと、強いアクセントで言ったヘンドリックであったが、彼が、現在、昭和四十九年の日本にやってきたら何というであろうか。

慎しみもなにもあったものではなく、なにかにつけて「ファック・ミー！」と叫び、ひまさえあれば、セックス記事を読みあさっているような現在の日本の女に接したとしたならば、何というであろうか。



ちなみに、次の言葉を、女なら誰でもよろしい、何を意味するか尋ねてごらん下さい。

ピケン——ホル——クネペ——クヌツラー——ドレンゲン——クリトリス——シークレット・ポイント——プッシー——コイツス——ボレ……

たぶん、百パーセント、正確な意味を答えてくれることでしょう。そして今度は、御令聞さまか恋人に、そっと質問遊ばされて、さて、御存知なければ、アア、貴方は幸福、佳き伴侶を選ばれたことになるのです。なぜなら、あとは貴方の飼育次第、貴方好みの女に教育することが、可能だからです。

とまれ、安易な「性」指導書など百害あって一利なし。人間、顔がちがうように「性」行為も千差万物。愛し合う二人だけが極秘裡に創造発見していくもので、人真似・猿真似は、うつけ者たちのやることだということ。

さて——、

「ファック・ミー」と露骨に表現しないところ、ヘンドリックも言うように、モニカの「たしなみ」であったし、そのたしなみが、実は、より男性を刺戟するところであった。

「乳酪の匂いじゃ。チーズとか申したの」  
領田の問いに、ヘンドリックが頷く。

「そのジャンヌ・ダルクとか申す絶世の美少女も、こんな匂いが、いたしたのかの？」

「ソウデス。当時ノ書物ニ、ハッキリト書キ残サレテオリマス」

「佳い匂いじゃ。日本の女とは、また異なつた得がたい香りじゃのう」

感嘆した領田が、さて、とばかりに身構えを正すと、戦場で敵を仕止めるかのようにタンプ槍が走って、モニカの唇から耐えられぬような嗚咽が洩れた。

「ちようどよい頃合いのようじゃな。美女衛門、どうじゃな。ひとつ」

四尺ほどの槍の柄を二度、三度、しごきながらの領田の擲擲を美女衛門は真にうけた。

「あ、ありがとう存じまする」

叫びざま、藍微塵の着物の裾を、たくりあげようとしたから、ヘンドリックが驚いた。

「イケマセーン！」

モニカを庇うと「ダメ、ダメデース。ソレハカリハ許シマセーン！」

領田がニヤツと笑ったのは、最後の一線は越えないと、すでにヘンドリックと約束を交わしていたからであった。

モニカをスツ裸にまでしてみせたのに、なぜ拒否するのか。それは、「病氣」をおそれ

てのことであった。彼等から見れば日本は極東の未開の国。どんな病氣を伝染させられるか、わかったものではないというのである。

領田は納得していた。いや、領田だけではなく、モニカを半年のあまりも捕えていた切支丹屋敷の牢役人も同じであった。すさまじい拷問を加え、あらゆる方法で馴れ馴れしいが犯そうとはしなかった。金髪で青い目の女から、奇妙な病氣をうつされては困るという本能からであつたらうか。ただ、例外はあり、二、三人の男が、その線を越えたらしい。

「初回ハ筆舌ニ尽シガタシ。サレド回ヲ重ヌルニ及ビテ曰く——ヤハリ日本ノ女ヲ以テ佳シトナス」と当時の記録が残っている。

欲望をはばまれた美女衛門のギラギラと燃える目が、かたわらの美和に注がれた。

二刻まえ、海老責め以下の拷問をうけて、なかば失心したまま吊り下げられつづけている衣笠内記の新妻・美和である。

美女衛門の意中を察した領田から「よからう、好きにせい！」と声をかけられると、喜び勇んで抱きついていったが、美和は動かなかった。

女谷流の厳しい縄目をつけているせいだけではなかった。疲れきっていたのである。乱

れた黒髪が無心に揺れているのも惨めな風情であったが、ヘンドリックの拡大鏡の凸レンズの焦点を浴びた跡も無残であった。

その乳房を撫でて美和は動かない。両足を開かせても、ただ、虫のような息を僅かに洩らすだけ。

それでもかまわず美女衛門が、襲いかかるうとしたときであった。

「ソレデハ面白クナイデスネ、ヤハリ女ハ目覚メテナクテハ。ヒトツ、正氣ヅカセテアゲマシヨウ」

モニカに対する行為を阻止したお詫びのつもりもあるのだろう。「私、ヨイモノ持参シテキマシタ。コレナラ、スグ意識ヲ取りモドシマス。エレキテルネ、エレキテル」

エレキテルという言葉が耳にはいると、いままで腕組みして考えこんでいた元禄屋の目が鋭く光った。何事につけ、新しいものには強い興味を示す男であった。

その目のまえに、ヘンドリックが運んできたのは、縦一尺横二尺、高さ一尺五寸ほどであろうか。上部に角つののような棒がとび出した唐草模様の箱であった。

エレキテル——元禄屋が、その名を聞いたのは数年前のことであろうか。ギヤマンの棒

を、乾燥した絹布で、こすってから、紙片を

そばにおくと、吸いつけられるようにその紙片がギヤマンの棒に、くっつくという。その原理を応用して、六十年ほどまえの安永年間に、老中・田沼意次の寵愛をうけた日本歴史上、最高の天才平賀源内が、江戸中に流布させたもので、世にこれを摩擦起電器という。

上面の角つののようなものに細長い線を繋ごうとするヘンドリックの手元が、ほのぐらくなっているのを知った領田は、樺山に篝火をたくことを命じた。

それとともに縛をとかれたモニカも廊下に姿を消し、陽がおちた。

あかあかと篝火が中庭を照し出すなかで、「用意デキマシタ。ドウカ御覧下サイ」

ヘンドリックが、顔をよせてきた元禄屋に向かつて言うと、美和の足首に、銀線であろうか、細いものを巻きつけていく。

何事が行なわれるのかと、もう他人を意識することもなく上半身をあげて腰元たちまでが見守るなかで、エレキテルの箱の片方についていた把手をヘンドリックが廻し始めた。

最初はゆっくりと、次第につよく、さらに速く——。

と、ものの二、三十回も把手が回転したと

きであった。

美和の両足が、ピクツと震えた。さらに四回、五回と把手が廻る。

ピクツ、ピクツ！

乳房が揺れ、太腿が揺れて、「ム、ム、ムウ……」と、閉ざされていた瞳が、突如、大きく見開かれたかを見ると、

「ヒ、ヒアアアア……」

すさまじい絶叫が宵闇をつんざき、ヘンドリックが回転をとめた。

「コレ以上ハ、コノ女、疲レテイルカラ危険デス。心臓ニ悪イ」

「疲れていない女ならば、何十回くらいは我慢できるものかな。また、頑健な男なら、どのくらいは耐えることができますかな」

元禄屋が突然、尋ねた。

「ソウデス。人ニヨッテ違イマスガ、二百回ガ限度デシヨウカ。男ヨリ女ノホウガ強クテモニカハ三百回、我慢シタコトガアリマス」

「で、されるものはどんな気持ですか。良い気持とか悪い気持とか、つらいとか苦しいとか、疼くとか」

「ヤラレタモノデナケレバワカリマセン。シビレテシマイマス」

「そのしびれがあとに残るようなことは？」



「マツタクアリマセン。ソレ、保証シマス」  
そばから領田が、

「なにさま、硝子をもって天火を呼び、病を治す器物”じゃというからのう。過度にわたらざる限りは、治病のためにもよいものじゃろう。見てみい、美和がよみがえったわ」

一同の視線をうけた美和の顔が赤く染まっているのは篝火のせいだけではなかった。

喜んだのは美女衛門である。勇躍して、己の権利を行使しようと、とびかかった。

「ヒ、ヒヤア……お、お許しを！」

待望していた悲鳴があがり、ヘンドリックが、興味深く見つめるなかでひぐまが小兎をもてあそぶような小半刻が過ぎていく。

そして次は槍助の順番であった。

始めてまのあたりにする光景なのであろう

か、十数人の腰元たちが、息もとめたように眺めているのに気づいたヘンドリックは、

「領田サマ。私モ楽シマセテイタダキマス。

タダシ、コレ、コレデネ」

とエレキテルの箱をたたき、

「美女衛門サン、樺山サン。ドウカヒトリズツ連レテキテ下サイ。コレ試シテミマス」

コレヲ試スとは、美和を正気づかせたエレキの魔力を、腰元たちに加えるということであ

らう。

十数人の女たちがいっせいに顔を伏せた。

「面白いのう、若侍にも見せてつかわせ。後学のためじゃ」

領田がうなずいた途端、紫折戸のかげ、築山の麓、雪見灯籠のうらから飛び出してきた若侍たちが、思い思いに、好みの腰元にかけるよると、手とり足とり抱えあげて、ヘンドリックの周りに群れあつまる。

主君の命令は、エレキテルに関する「後学のため」。従って、女たちに手を触れるのも最少限度にすべきところを、これを幸いとはかりにあらぬところに手を出すものだから、嬌声、媚声、叫びや悲鳴が、東の山の端にのぼった宵待月にまでとどくかと思われるばかりの騒ぎとなった。

銀線を、足や、腕につながれて、いっそうけたたまし絶叫のほとばしる合間を縫うように、美和の鳴咽が響いていた。

紛々として舞い散る桜の花びらの下で、若く、美しい十幾つかの女体が、篝火のもとで繰りひろげる落花狼籍の光景を真正面に見据えながら元禄屋は、ゆったりとギヤマンの盃を挙げていた。

酒盃に、うかぶは二、三片の桜花。

元禄屋は、ひそかに麻布別邸へと使者を走らせていたのであった。

## エレキテル責め

奥まった部屋には四人――。

領田と元禄屋とヘンドリック、それに、いままでに受けた甘美な拷問の汗を湯殿でながし、与えられるまま友禅染の長襦袢を着こなしているモニカであった。

いや、掛燭の光のなかに、もう一人いた。

麻布別邸から、早駕籠で送りこまれてきた小紫のお景であった。

夜もすでに五つ刻をすぎて、中庭での喧騒も、おさまっていた。

「お景」

元禄屋は、冷たく呼びかけた。

「いかに徳夜叉にみさをたて通そうとするそなたでも、今夜は、今夜こそは、いっさいを白状しないわけには参るまいて」

お景は、菱縄縛りにされていた。一分のすきもないその縄目は、腰から下だけを僅かに覆う鴉色（ときいろ）の湯文字とともに、羅卒の鞭兵衛が気をきかせたものであろう。早駕籠を昇りできたのも黒馬と赤狐であり、二

人は、早々に引き返していった。

はたして南蛮のエレキテルという機械が、  
どんな拷問にも屈しないというこのお景の口  
から、戊夜のロザリオのありかを聞き出せる  
かどうか、領田は、面白そうに事の成り行き

を眺めていた。

「コノ女（ひと）デスカ。ジャンヌ・ダルク  
ノヨウナ女トイウノハ」

すでに事情を聞いていたヘンドリックは、  
縄尻を畳に這わせながら正座しているお景を



イメージギャラリー

『新案責め機実験』

岡 たかし

目を細めて眺めていたが、紅珊瑚のように可  
憐な乳首に吸いよせられるように、つと、手  
をのばした。しかし――

八重垣流小太刀をつかうお景は、むざむざ  
と南蛮人の意のままにはならなかった。斜め  
に体を開いてその手をかわすと、右膝を立て  
て起きあがり、飛鳥のように部屋の隅へと後  
退した。

「オオ、スバヤイ動作デース」

あきれ顔でいったヘンドリックは、今度は  
大手を拡げて立ち上り、慎重に迫ってくる。

脱出の道はあるだろうか。

躰ごと襖にぶっつかって倒し、廊下で二回  
転して身を起こし、一気に突っ走れば庭にで  
る。夜詰の侍たちもいるであろうが、広い庭  
のあちこちには竹林あり、雑木林あり、土蔵  
があり、床下もある。塀の近くまで辿りつく  
ことができれば、六尺の海鼠塀。緊縛されて  
はいるが飛びあがれぬことはあるまい。

万に一つの可能性があるかと判断したお景は  
じわじわと近寄ってくる巨人のようなヘンド  
リックの腕のしたをかくぐると、全身の重  
みを四君子の花の描かれた襖にあずけた。

バリッ……と、いう音とともに大きな穴が  
あき、襖が外へ倒れる。



うまくいった!

倒れた反動を利用して廊下で二回転。サツと身を起こして、ハツとなった。

「責め場から逃げようなんて、姐御らしくもねえ料簡ですぜ」

ニタ、ニタツと黄色い歯を見せているのは美女衛門と槍助ではないか。

「ち、畜生!……」

歯を喰いしばったが、どうにもなりはしない。縄尻をとられて部屋に突き戻されると、両足首にも縄がまかれて、左右の柱の、ねもとに結びつけられてしまう。

仰向けに「人」の字にされたお景の腰の下に、脇息まで押しこんで弓なりにした二人は「では、あちらにて警護を」と領田に挨拶をすると、襖を新しいものと取りかえて引きさがっていった。

「相変らずのじゃじゃ馬ぶりじゃのう。この女ばかりは、そちの手にもおえぬらしい」

「残念ながら、これほど天晴れな女は、みたことがございませぬ。いつまでたちましてこの調子でございまして」

「それだけにまた責め甲斐があろうというものじゃろうて」と酒盃をあげた領田は、荒い呼吸を重ねているお景を見やって「ヘンドリ

ック殿。日本の拷問では、とんと屈服いたさぬ女じゃ。南蛮のエレキテルで、責め抜いてやって下されい」

「承知シマシタ。今度ハ逃ゲラレヌヨウニ、コレモ剥ギトツテオキマシヨウ」

ヘンドリックの手が、鵝色の湯文字の紐にのび、それを解こうとしたとき、

「ソレ、アナタ、ダメ。妾、ヌガセル」

その手をぶったのはモニカであった。どうやら、さきほどの満たされぬ思いが鬱積しているらしく、邪険な態度でヘンドリックを押しつけて紐をとくと、

「恥カシイデシヨウ。フッフッフ」金髪が乳房に触れるほど身をよせて含み笑い「妾モパンティヲ取ラレルトキガ一番恥カシカッタデス。ソノ恥カシサ、取ラレルタビニ、イヨイヨ強クナルモノデスネ。最初ハ、ナンニモワカラナイクライ興奮シテイル。二度、三度四度……ダンダン、恥カシサ感ジテキテ、身ヲキラレルヨウ。コノ気持、女デナイト、ワカラナイ」

切支丹屋敷で、取調べの度毎にスツ裸にされていたモニカの体験から出た言葉であったが、回を重ねるにつれて狂れてしまい、羞恥の薄らぐ女が多いなかで、さすがはモニカ、

オランダの貴族ほどのことはあった。が、そのつつましやかさも、時と場合による。切支丹屋敷では、たしかに女らしく拷問をうけたに相違ないが、いま、燃えあがった官能の炎を満たされぬまま、しかも、席にいるのは四人。次第に変身していったのも、止むをえないことであろうか。

ゆっくりと湯文字をずりさげて、弓なりに反ったお景を羞恥にのたうたせるモニカ。

音はしなかったが「ム、ム……」お景が呻いた。菱縄をかけられて脇腹をとおっている二本の縄が、肉をはさんだせいであった。

その間にヘンドリックは、銀線をお景の左右の足首に結びつけた。

「モニカ、始メマース。ドキナサーイ」

「待ッテ。一本、トテモ長イノガ」と、きわ立って長い腋毛を一本抜きとると、掛燭の灯りにかざして「艶ガトテモキレイ、オ景サンノワキゲ……」エンジェル・ヘア（天使の髪の毛）ノヨウデスワ」

コト、コト……とエレキテルの把手が廻り始める。

自分の足もとで何が始まるのかお景には皆目、見当がつかない。夜になって、わざわざ早駕籠で迎えにきたところから察して尋

常一様の責め折檻ではないと覚悟はしていたが、南蛮人が同席していようとは想像もできないことであった。その南蛮人が、バテレンの魔術のような箱をつかっている。

どうしようというのだろう——妾をどんな方法で責め苛もうというのだろう。長い睫毛を、ひっそりと閉ざして、不安な気持に駆られるお景の耳に、

「アラ、ホクロガアリマスノネ。コンナトロニ」

モニカが、右の太腿にある小さな小さなホクロを目ざとく見つけて奇声をあげた。

その瞬間——

お景は、ピリ、ピリッと衝撃をうけて、のけぞった。

「フッフッフ……お景。いよいよエレキテル責めが始まるぞ」

元禄屋が、ひと膝のり出すより早く、領田の顔がお景のうえに、のしかかってきた。

コト、コト……コトツ……

回転が早くなるにつれてピリ、ピリッとくる震えが足さきから突きあげてきて、お景は無性に叫びたくなった。それを必死で、歯を喰いしばって耐える。

すでにヘンドリックは、五、六十回も把手

を廻したであろうか。

鼻孔をひらき、眉をしかめ、額には脂汗をにじませているお景の顔を、じいっと眺めていたモニカが、突然、

「チョット、待ッテ。一人デハカワイソウ。

妾トドチラガ我慢強イカ、試シテミマース」

思いがけないことを言い出したのである。

どうやら鬱積していた不満のはけ口を、エレキにかけられることで解消しようというのであろう。ヘンドリックが、ニヤッと笑い、

「面白いのう。日本の女とオランダの女の我慢くらべか、よかろう。やってみい」

領田が煽りたてるまに、着ていた友禅染の長襦袢をサッと脱ぎ捨てたモニカは、小山のような乳房を揺さぶってすわりこみ、右足をエレキテルの箱に向けてさし出すと、左足を お景の右脚と重ねあわせた。

電流を二人の軀に同時に流そうというのである。さっそく領田自身が縄をとって、お景とモニカの脚を交斜させて縛りつけると、ヘンドリックが、お景の右足首から外した銀線をモニカの左足首に、まきつけていく。

女相撲取り——と形容するとモニカが怒るのであろうが、お景のそばで足を投げ出したモニカは、たしかに巨大であった。太腿の太さ

も腕廻りも、ゆうにお景の二倍はあろう。

そのモニカが「コレ、ジャマナリマス」と、湯殿でつけてもらった湯文字を自分からすすんで脱ぎすてたものだから、八畳の部屋が、急に狭くなった感じさえした。

「大丈夫デスカ。挑戦シテ負ケテモ、私、知ラナイデスヨ」

その変身ぶりに、なかば驚き、なかば喜びながらヘンドリックが把手をとった。

このエレキテルは、御存知の方も多いと思われるが、東京通信博物館に陳列されている平賀源内つくるところの摩擦起電器とはほぼ同じものであった。ガラスの円筒を錫箔を貼った杖で摩擦すると起電し、それを電道装置を経由させて蓄電し、銅線または銀線をつかって放電させる。果して何ボルトの起電力を持ち何アンペアの電流が流れるのか審かでないが、治病に用いられたところをみれば、人間を感電死に追いこむほどの力はなく、おもちゃのビックリ箱ほどで、単一の電池が四、五本ほどのものであったろうか。が、それでも五、六ボルトはあり、結構、強いショックを与える。ましてやエレキテルの場合は、把手を廻すにつれて起電力は、あがる。

万一、お景をショック死させるようなこと



があつては大変と、元禄屋はその点に關しては、くどいほどヘンドリックに念を押して、安全を約束させていた。

むんむんとたちこめる妖しい匂いのなかでコト、コト……と鳴っていた把手が、やがて効果を發揮するときが近づいた。

興味深く見守る三人の男たちの眼に、最初に映じたのは、お景のへそであつた。天井に向けて突き出ている形のよいへそが、ピク、ピクッと上下する。つづいて太腿が震え、唇がまげられて頬のあたりの筋肉がひきつってくる。モニカには、まだ反応がない。

お景の負けか——と思ったとき、

「ア、アウ！ アウ………」

呻いたのはモニカのほうであつた。太腿がユサ、ユサッと揺れ、咽喉をのけぞらせて顔を左右に振る。金髪が烈しく波立って、桜んぼのように大きい乳首が「の」の字を描いて掛燭に輝く。

把手の回転が早くなる。

「ア、アッ、アッ。へ、ヘンドリック！ ア

ア……アウ！」

両手を斜めうしろに突っぱって上体を支えているのだが、その手の指が、畳をかきむしるようにして震える。

「ア、ア、ア……ヘンドリック！」

乳房をブルンブルッと震わせながら、身によじるモニカ——。

考えてみると、このエレキテルは、いまだいうバイブレーターにあたるのではないか。違っているところは、直接に電流がながれるというだけであつて、体に与えるバイブレーションは同じの筈。

モニカは三百回、把手を廻すまで耐え抜いたという。そのモニカの唇は、すでに開かれ放しであつた。白い歯並みの奥から熱い吐息が吐き出され、青い瞳には、それとわかる恍惚とした表情が、うかんでくる。

「ア、ア、アッ……ヘンドリック！」

モニカの唇から絶えず喘ぎがほとばしるのに対して、お景は一言も発しなかった。ギョツと歯を喰いしぼったまま耐え忍んでいる。

「二百五十回ヲコエマシタ」

ヘンドリックが叫ぶ。尋常の女なら、とくに音をあげている回転数である。

さらに、二百七十回、二百八十回……。

「ヤ、ヤメテ！」と叫んだのは、モニカであつた。白い肌を赤く染めて魂切るような声を出した。「死、死ニソウ……妾……モウ、死ニソウデース！」

コト、コトツという音が止んだ。

フウーと大きく息を吐いたモニカは、恍惚とした状態を領田の見つめるにまかせていたが、やがてパッチと目を開き、

「妾、敗ケルノキライデース。オ景サンモ降参サセテミマス」

と跳ねおきて自分の左足首の銀線を外し、「オ景サン、コレ、我慢デキマスカ」

外したばかりの銀線を、お景の右太腿のほくろにあてて、

「ヘンドリック、大至急、回転サセテッ！」

「面白イデス。ヤリマスヨ」

どうやら、より残酷な拷問が始まると感じた元禄屋は、血の気を失っているお景の顔ののぞきこみ、

「徳夜叉の隠れ家は、どこだ？ お景、白状したほうが身のためだよ」

言葉は優しくあつたが、大鷲のような眼はキラキラと輝いていた。もしもエレキテル責めでも屈服しないとすると、ヘンドリックの話ではないが、ジャンヌ・ダルクというフランスの美少女が一年半もあらゆる拷問に耐えぬいたと同じような結果になろう。一日も早く戌夜のロザリオを手に入れた元禄屋にしてみれば、あと一年も待っているのは、何とし

でも悠長すぎた。

「ヘンドリック殿。頼みます」

「承知シマシタ。コレナラ大丈夫デス。必ズ

白状シマスヨ」

コト、コトツという音が聞えてくる。次第に回転が早くなる。

と、ほくろにあてていた銀線をモニカが、こともあろうに、一寸(約三センチ)ばかり上にすべらせて、けたたましい笑い声をあげた。

ヘンドリックが把手をにぎる。コト、コトツ……と、不気味な回転音がひびき、お景は

自分のおかれていた立場を知って、ゾッと全身に鳥肌がたった。が、しかし、忍び抜かなければならない。

(徳夜叉さま! どうかご無事で、一日も早く傷をなおされますように。お景は、お景はこ、このとおり、生きております!)

惨めな姿ではあったが、ともかくも私は生きています。決して屈服などいたしませんという健気な心を、手の指を握りしめることによって示しながらお景は、襲ってくるであろう衝撃に備えた。

——ピリ、ピリッ!

衝撃がきた。「ア、アッ!」呻くことによって、やっとそれに耐える。つづいて、二撃三撃、四撃! 全身をきりきざまれるようなその感覚を、徳夜叉の顔を臉の裏に描くことによって、どうにか耐えた。

把手が廻り、起電力が増加する。

「ア、アッ……ム、ム! ムッ……」

脇息の上の双臀が揺れ、太腿が跳ね、脇腹が、ひきつる。

「ム、ムムムッ……」

足の指を力いっぱい開いたり閉じたりして苦悶するお景を見おろしていたモニカが、「ドノクライデスカ。妾、チョットダケ試シ



イメージギャラリー

『おぞましき接待』

マエダ・ヒオミ



デミタクナリマシタ」

女の苦悶の表情は、快樂の顔と変りがないという。お景の表情に、陶醉に似たものを見てとったモニカが、嫉妬まじりの冒険心をおこしたのであらう、銀線の先端を自分の同部位に当て替え、左脚を、そっとお景の右脚に触れさせて電気を流した。

とたん、

「キャアアッ」

金髪をふり乱して二尺もとびあがり、天井に頭をぶつつけて、

「ヘンドリック、ダメ。モウ、ソレ以上ハダメス。危険デス」

おろおろした声で訴えた。

が、お景は、まだ耐え忍んでいた。モニカの警告をきいた元禄屋が強く叫んだ。

「お景！ 戊夜のロザリオはどこにある！

言え！ 白状するんだ！」

なおも回転しつづける把手の音にまじってお景の答が返ってきた。

「誰が……誰が、白状など……ム、ムウッ！ す、するものですか！」

なおも健全な意識を保ちつづけていたのであった。が、それもそこまで、「四百五十回！」と、ヘンドリックが回転数を告げるやい

なや、

「ヒ、ヒイイ！」

汗にまみれた裸身を弓のように反らせたかを見ると、急にぐったりと全身の力を失ってしまった。

「立派デス。コノオ景サン、立派デス。ジャンヌ・ダルク以上ノ女ノヒトデス」

ヘンドリックが感にたえぬように言うと、

「ホントデース。ドンナスポーツノ選手デモ鍛錬デキナイトコロヒトツアリマース。コレ

ダケ責メラレタラ、女、必ズ降参シマス。オ景サンノヨウナヒト、ヨーロッパ中、探シテモイナイデショウ。妾、感心シマシタ」

銀線をあらためて右足首に結び、軽くショックを与えてお景を正気づかせたヘンドリックが、

「私、オ景サン、好キナリマシタ。抱カセテ下サーイ」

と、いい出したからモニカが驚いた。

「ヘンドリック！」

病気のおそれがあるから最後の一線は越えないと今まで言いつづけてきたではないか。

それが、またどうして！

「イケナイワ、ヘンドリック！」

「カマイマセーン。オ景サン、ミゴトナ躰シ

テマス。ドコモコモ健全デース。見レバワカリマース。私、是非、日本ノ想イ出ニ抱カセテモライマース」

お景の姿態は理想的であった。ヘンドリックが、膝立てになつて前へ進むだけでよい。

「ヤ、ヤメテヨ、ヘンドリック！」

なおも手をのばすモニカの肩を、がっちり掴んだのは、元禄屋であった。

「領田様。私がまず、お毒味をさせて頂きまするぞ」

エレキテル責めでもお景が屈服しないことを見てとった元禄屋は、獅子翻敵——モニカという異国の女を賞味しようと決断したのであった。

お景が健全な肉体の持主であるように、モニカ・ファン・インダイクも健康な躰を誇っていた。

## 日本のジャンヌ・ダルク

「アリガトウゴザイマシタ。コレデ日本ニ来タ甲斐ガアッタトイウモノデース」

モニカを引き取りにきたことも忘れたように言うヘンドリックは、よほどお景が気に入ったらしい。

「なんのなんの。モニカ殿もまた、格別でござりました。領田さま。さようでござりましょう?」

「いかにもじゃ。実に素晴らしいものであったぞ。モニカ殿」

領田が背中を撫でながら呼びかけたが返事はなかった。それもどうり、モニカはうっとりした瞳で元禄屋を見上げていたのである。

「モニカ殿と申すに、これ、モニカ」

領田の手が乳房に、のびた。

モニカもお景も、一糸まとわぬ姿で、三人の男の間に坐っていたのである。

「妾、オランダヨリモ日本ガスキニナリマシタ。イツマデモ、コウシテ元禄屋サマノソバニ居タイ」

「これはこれは。この領田、手痛くふられたことになるのう!」

「イエ、領田サマモ好キ!」

振り返って乳房を觸るのにまかせたもののやはり元禄屋が気になるらしく、

「ネエ、元禄屋サマ。オソバニ、オイテクダサイ」

一方、お景は、やはり縛られたままであった。縄をとけば、また脱走を試みるに違いないが、ヘンドリックのエレキテル責めをうけ

て蒼白くなっていた頬にも血の気もどおり、媚さえ、うかんでいるようであったが、これは意志では、どうにもならない女の業とでもいうものであろうか。

「私モ、コノオ景サンヲ、オランダニ連レテ帰リタイデース」

ヘンドリックが膝の上にお景を抱きあげると激しく唇を奪った。

「ハッハッハッ。では、いったい余はどうなるのじゃ。余をひとりにいたすのか」

天下のことは、思うがままにならぬことはない領田が、元禄屋の胸にしがみついているモニカの巨大な双臀へ手をのびながら、高らかに笑った。

「元禄屋サン。一年半、オ待チニナルコトデス。ジャンヌ・ダルク、一年半タツテ自白シマシタ。ソノ間、オ景サンヲ可愛ガツテアゲナサーイ。ソレトモ、千人ノ兵士ノ中ニオ景サンヲ投ゲコンデ颯リモノニシマスカ」

元禄屋は大きく首を横にふった。手生けの花にしたいところ思っているが、お景を百人も千人もの男たちのおもちゃにしようなどとは考えてはいない。

「ソレデ安心シマシタ。オ景サンノコノ匂イハ、ホントニ貴重ナ香りデス。香水ニシタイ

クライデス」

お景の匂い——菊の花と桜鯛の味、蜂蜜に浸した菊の花、極上の酒にしたした桜鯛のさしみの味——そして絢爛と咲き香る嵯峨菊の花の匂いであった。

その匂いとモニカのチーズの香りのなかでヘンドリックが、土産品としてさし出したのは、拡大鏡とエレキテルであった。

拡大鏡は、おそらく美女衛門に下賜されて女谷流光輪責めの威力を、いよいよ高めることであろうし、エレキテルは元禄屋のコレクションに加えられて菊亭貴子を始めとする女たちを、いやがうえにも呻かせるであろう。

そのほか、ヨーロッパ近代文明の所産が、数多く、領田に献上されたことは言うまでもあるまい。

名残りを惜しむかのように、夜明けがた、もう一度、お景を抱いたヘンドリックは、同じく領田と元禄屋に愛撫されたモニカと二人で次の朝、江戸を立て長崎に向った。

その小荷駄のなかには、日本地図と葵の紋服があったことは、もちろんだが、その上に元禄屋からおくられた鳥尾芳年描くところの「女責め二十八佳選」がしのばせてあった。オランダに帰った二人は、すぐ結婚した。



アムステルダム、ノートルダム寺院で行なわれたその式典は豪華なものであったが、なかでも花嫁モニカの首を飾る百コの天然真珠は人目をひき長く社交界の語りぐさになった。

語り草と言えば、ヘンドリックが出版した「秘本・日本」という書物も、また多くの読者を得た。かのシーボルトの「日本」をはるかに上廻る売れ行きを示し、その中でも、芳年の「女責め二十八佳選」が絶讃されたことは勿論であるが、なかならず、小紫のお景は「日本のジャンヌ・ダルク」とよばれて、日本女性の偉大さ、優美さ、貞操心などの典型とされた。お景という発音がOK! という英語に通じるところもあって、いまでもお景の名は有名であるという。

とまれ、モニカとヘンドリックの夫婦だけでなく、「秘本・日本」を読んだ人々が、いずれも夜毎、日本流の拷問プレイを楽しみ、そのためにオランダ市場で、木綿縄の値段が高騰したらしいことをお知らせしておいて、さて――

話は、領田と元禄屋がモニカを抱き、ヘンドリックがお景を抱いていた頃、つまり夜明けもちかい七時半刻であったろうか。

雪見燈籠の仄かな光をうける桜の花のした

で、二つの影が、うごいた。

「お前さん。やけに楽しそうじゃあないの」

「そう見えるかい？」

「あのときのお前さんの顔は、まるで」

「まるで菩薩さまのようだったと、こう言いてえんだらう、お妻」

亀甲縞の上田八丈に紅縞の帯であろうか、おぼろ月夜で、さだかにはわからぬが、洗い髪を、はらりと朝風に靡かせた一つの影が、

「あいよ。菩薩も菩薩、まるで阿弥陀さまの化身のようだったよ。阿弥陀さまは、ほれ、なんとか悪人のほうが極楽に行けて、善人は地獄に墮ちるって仰言ってるらしいけど、あれは、ほんとかねえ、お前さん」

「さあてなあ、善人とか悪人とか、次元があるからねえ。善人なおもて往生す。いわんや悪人をや! というのは疑いのねえところだが、はて、どれが善やら、どれが悪やら」

「そうだよねえ。この世のなかの善と悪を見究めることは、難かしいからねえ。お前さんでなくちゃあ、一、十、百、千、万、十万、百万、千万、億、兆、京、詩、垓、穰、溝、澗、正、載、それに、極・恒河沙の、かなたまで見通すことはできないものねえ」

この二人は、洗い髪のお妻と、虹の陣兵に

まぎれもなかった。

「ときに、お前さん。あの女たち……」

お妻が言いかけた時、陣兵が、それをさえぎった。

「お妻。女ツてのが、この世にいるかい？」

女でございッてのは、いくらでもころがってるけど、ホラ、観音さまみてえな神々しい女が、いったい、この日本にいるのかねえ」

ひらひらと舞う桜の花びらを黒髪にうけてお妻が、

「妾じゃあ、どうだえ? お前さん」

「オットット、忘れてた。すまねえ、お妻。」

おめえは、まったく観音さまだよ、観音さまも観音さま、三十三観音を、ひとつにしたくれえの正真正銘の観世音菩薩さまよ」

「嬉しいねえ、あんた。ほれ、雪が降ってるよ。初雪だよねえ」

「ハッハッハッハ、違いねえ。こりゃあ、雪だよ。初雪だ」

やっと今頃になって気がついた夜詰の侍たちが、追っ取り刀で駆けつけてくるのを眺めながら、虹の陣兵が、

「お妻。徳夜叉さまの傷手もおったことだし、次は、いよいよ、日本中を桜吹雪のなかにたたきこんで、はでな立ち廻りをやらかす

ことにしようか」

「あいよ、お前さん。妾しや、お前さんの言うとおりでよ。だけどね」

お妻、今度は迫ってくる侍たちが手に手に持っている籠灯の光線をあびて、紅縞の帯と紺木綿の手甲が、はっきりと映えた。

「だけど、なんだい、お妻。まさか、天と地が逆さになると言うんじゃあ、あるめえ」

数十人の侍たちが、すでに至近の距離に達していた。

「あいよ。そんなことじゃあ、ありません。

そんなことは瓦版屋に任かせておけばよいことで……」

お妻の言葉の終らぬうちに「咄！」と地軸の底から、ひびくような懸声があがった。

## ☆ SM画稿 募集!! ☆

☆SM雑誌の草分けとして、二十数年の輝やかしい歴史を誇る本誌にふさわしいSM画稿を読者の方々から募ります。

☆画材は、女体責め、女体緊縛を初めとして、女王様や女御主人の狂暴ぶりでも結構ですし、女体切腹の悲愴美は勿論、下着などのフェチズムに関係したもので、本誌の内容にマッチするものでし

たら、お好みのものを、お寄せ下さい。

雪見燈籠のかげから、一人の侍が躍り出たかを見ると、つぎの瞬間に、もんどり打って倒れた。

「ねえ、お前さん。鼠小僧次郎吉が捕まったんだってねえ。ついさっき、妾しや、知ったんだよ」

籠灯に照し出されたお妻は、紅珊瑚の平打ちカンザシに手をやると、

「鼠小僧次郎吉っていうのは、たしか、お前さんだったよねえ。それが、なぜつかまるんだろう」

——ゲェツという叫びが築山のそばでおり、侍が、水音高く池におちた。

「ほほう、そうかい。お妻、面白いじゃあねえか。ハッハッハッハ。この俺が、この鼠小

☆必ず自作の未発表の作品を御投稿願います。白い画用紙に黒色のペン又は毛筆を御利用下さい。大きさは御自由ですが本誌の雑誌大位までが適当です。カット的なものは半分大でいいと思います。

☆掲載作品につきましては、作品の出来に相当した画料をお支払致します。アイディアだけの時は、鉛筆画にても構いません。奮て御応募下さるよう期待します。

△奇譚クラブ編集部△

僧次郎吉が捕まったとは、ハッハッハッ、こいつは面白い」

白刃が閃き、「咄、咄！」という低い、ひびきとともに、さらに二、三人の影が、脆くも暁闇に崩折れていった。

「お前さんには、分身が、いくつもあるからねえ。それにしても、いったい、誰かしら。へまをして捕まったりしたのは」

お妻の手を離れた松葉カンザシで二人目の侍が、もんどり打って大地に這った。

「じゃ、お前さん」

若い牝鹿のように、すんなりと伸びた脚がしなやかに躍動して地を蹴ったかと思うと、一つの籠灯が消え、

「面白いじゃあねえか、お妻」

二つ、三つ、四つと、二人を照し出していた光が、たたきおとされて、五つ目の籠灯が宙を飛んだかと思うと、なにかのはずみで桜の梢に、ひっかかった。

その梢にちかく、初雪のように舞う桜吹雪の渦のなかに、陣兵とお妻は、すくと、枝を踏みしめて立っていた。

その背後に、またたき始めたのは、明けの明星であろうか。



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

## 女神への拝跪

カット・岡 たちし



城 剣 太 郎

— マゾの芽生え —

「おい、五郎。ここへ来て、よごれた足を拭いておくれ」

男のように乱暴な言葉で、私の女神、美枝子様は、下僕の私に命令される。外出から帰って来た美枝子様は、そのままベッドに、ごろりと横になり、カチリとライターを鳴らして、たばこに火をつけにじり寄る私の顔にフーッと煙を吐きかける。ミニスカートの太股までめくれて、ピンク色をしたパンティーが、わずかに見える。

「何をボヤボヤしてんだい。早くストッキングをぬがせて、歩きまわって汚れた足を、きれいにしておくれ」

私は、いわれた通り、ストッキングを、くるくると巻くように、太股から下の方へおろす。ムダ毛のないスベスベした、それでいてやや浅黒い、筋肉質のしまった形のよい足が、あらわれる。

「ストッキングの匂い、かいでみな。どんな匂いがする？」

私は、いつものように、丸めたストッキングを鼻にあて、息を吸

い込む。ムツとした甘ずっぱい匂いが、鼻腔の中一杯にひろがる。

「とても、よい匂いでございます。美枝子様」

それから私は、その形のよい二本の足を、交互に膝の上にのせ、蒸しタオルで、ていねいに拭く。その間中、美枝子様は週刊誌のグラフページをめくっては、時々、薄くなった私の頭上へ、たばこの煙を吸きかける。

「さあ、お前の一番、好きなキスをさせてやるよ」

と、足の裏を、ぐっと私の顔の前に突き出して来た。この自分より十歳以上も若い女性に下僕として奉仕することのできる感激に、私は骨の髄まで、しびれて来る。私は、その感激に浸りながら、ピチャピチャと音をたてて美枝子様の足の裏を、舐めさせてもらうのだ。ブリーフ一枚になって、作業している私を、チラッと横目で眺めた美枝子様は、

「なんだい、それだけで、もう昂奮してんのかい」

と、うずたかくなって、その証拠を見せている私のブリーフの前面を、右足で強く圧迫してくる。

「ドレ、出してみな」

美枝子様の命令は、絶対である。下僕である私の羞恥など完全に無視されている。そして、ブリーフから顔をのぞかせて息づいている醜惡な男性自身を、しばらく凝視していた美枝子様は、ピチンとマニキュアした、きれいな指で勢いよく、はじいたのである。

「アッ、痛いっ」

と叫ぶ私に、美枝子さまは、ゲラゲラと男のように笑っている。

そして美枝子様は、

「かわいいそうだから、ここへキスさせてやる。早くおいで」

と、パンティを押し下げ、ベッドの上に中腰になり、くるりと、皮をむいたような、美しい双丘を私の方に向けてくる。

「ハッ、ありがとうございます」

私は、深々と頭を下げて拝跪する。そして、アヌスに向かって、にじり寄り、かわいた唇を押しあてる。

これが、美枝子様と、下僕である私の愛情の交換である。

美枝子様は二十一才。Aデパートのショップ・ガールである。その百六十五センチ、五十八キロという、均斉のとれた美しい身体が認められ、時々、デパートで催される水着ショーをはじめ、春、秋のファッション・ショーに、かり出されて、臨時のファッションモデルを、つとめることもある。

さて私は下僕である私のことなどは、どうでもよいのだが十三才。ある建築会社に勤める平社員である。ごく幼い時から女性に恥かしめられ、虐待されることによってのみ、性的な欲望を感じる性格——いわゆるマゾ的な性格に生れついているのだ。

幼いころ——そう六、七才のころのことである。私の家は、昔の地主で、割合、裕福な暮らしをしていたので、六人いる兄弟、姉妹にそれぞれ、子守りのねえやがついていた。私にも、タケという女の子が、生まれると間もなく、専属の子守りとしてつけられた。タケは、近くの百姓の娘だった。高等小学校を卒業したばかりだったので、十二、三才のころから、私の遊び相手として毎日、私の家へ来ていたわけである。

タケは、毛虫が大嫌いだった。それを知っていながら私は、いつもタケを困らせようと、毛虫を庭のあちこちから捜して来ては、棒の先につけて、タケをおどろかせて、一人で喜んでいた。



それは五月ごろだったと思う。大きい毛虫を見つけると、そっとタケの後ろへまわり、背のびして、タケの髪の毛につけたのだ。毛虫は、その気味の悪い、黄色い毛をモソモソと動かして、這っているうちに、ポトリとタケの襟首から背中へ落ちてしまった。「キャッ」というタケのおそろしい悲鳴に私は、さっと逃げ出した。しかし、それからが大変だった。タケは、私をつかまえ、

「五郎ちゃん、今日こそ、かんべんしないからね。さあ、おらについてくるんだ」

と、抱きすくめるような格好で、土蔵の中へ連れ込んだ。中は昼でも薄暗く、饅<sup>す</sup>えたような、かびの匂いが、ムツと鼻をつく。

「いやだ、いやだ。タケ、はなせ」

という私の泣き声には、耳もかさず、タケは細ひもで、私の手を後ろ手にしりあげ、さっと足払いをくわせて、私を板の間に転がしてしまった。そして私の顔の方に背を向け、腹の上に馬乗りに、またがったタケは、ズボンに手をかけると、パンツと一緒に足首のところまで、ズリ下ろしてしまった。足をバタつかせて、一生懸命に抵抗するのだが、蜘蛛の巣にかかった蝶のように力では、とてもかないっこはなかった。

「ちくしょう。タケのばか。はなせ」

私は大声で泣きわめいた。タケは、ちらりと後ろを振り向いて、「いくら、デカイ声で泣いたって、ここは蔵の中だから、母屋まで聞えはしねえよ」

といいながら、両足を浮かして、尻に全重量をかけて来る。そしてタケは、

「へー、こうなってるの」

と、こんどは上から一心に、私の股間を眺めているらしかった。その時だった。突然、腹の上の圧迫感も、背中の下に折れ曲った腕の痛みも、ウソのように消え、ファッとした快感が、全身を包んでくるのを感じたのだ。

「アレッ、こんなにさ……」

タケは珍しいものを見るように、目を輝かしていたに違いない。親指と人差し指の間に、はさみつけ、裏側から、横から観察している。それは、かなり長い時間だったように思う。やがて、先刻まで暴れていた私が、急に静かになったのに気づき、タケは私の腹の上から、あわてて、おりた。手早く、ズボンをはかせると、私に「五郎ちゃん。このこと、だれにも、いっちゃいけないよ。もし誰かに告げ口したら、こんどは、もっと、ひどいからね」

と、キラキラ光る目を向けていった。私はテレくさそうに、だまって、コックリしただけだった。土蔵から出ると、柿の葉を通して射す初夏の陽光が、まぶしいくらいに明るかった。

この出来ごとが、私のマゾ的性格形成へのスタートだった。その後、私は土蔵の中で味わった不思議な快感を思い出す度にタケに、「誰にもいわないから、この間のようにしてもいいよ」

といてみたが、タケは、とぼけたように

「なんの話？ この間のことって……」

というばかりで、二度と私の希望を、かなえてはくれなかった。やがて私も、いつとはなく、そんな出来ごとを忘れてしまった。

## ——八重との思い出——

私は中学生になった。子守りも必要でなくなった我が家に、その

ころ、八重という勝ち気な、目鼻立ちのパッチリした女中がいた。八重は私より三つ年上だったが、いろんなことを知っていた。どうして子供ができるかとか、その際、男も女も、とてもよい気持ちになるのだというようなことを、時々私に教えてくれた。

八重は、そういう面に、うとい私を、子供だと思って、甘く見ていたらしく、ある時、風呂からあがって、バスタオル一枚を胸から腹に巻いたまま、涼んでいた。私がそばへ行っても恥かしそうな様子をすることもなく、

「五郎ちゃん。あんた、女の人のおそこ、見たことないでしょ」と私の顔をのぞき込むようにして平気な顔で言う。

「みせてやるよ」

といったかと思うと、ハラリと前をおおっていたタオルをまくった。太股をピツタリとつけていたため、私がそこに見たのは、ただ若草のような黒いかげりだけだった。

「こんどは五郎ちゃんの番よ。出して見せなよ」

私はその時、突然、幼い日のタケとの出来ごとを思い出した。

「ウン、じゃ、俺ここへ寝るから、八重は腹の上に後ろ向きに、またがっておくれ。その方が、よく見えるだろう」

八重は、私のいう通りに私の腹の上に馬乗りになった。タオルの下から八重の双丘が、わずかに見える。八重はタケと同じように私のズボンを下げ、パンツを、ぐっと引き下ろした。その時はもう、ファツとした快感が全身を包んでいた。

「アラ、いやだ。こんなになるの」

八重は、はじめて見るらしい光景に、びっくりした声をあげた。そして、私は突き上げるような快感に襲われた。

私にとっては、生まれて初めての経験であった。快感が去ると、不安になった。

「八重。おれ、どうしたんだろ。死ぬんじゃないだろね」

と訊いてみた。いろんなことを知っている八重にとっても、初めての経験らしかった。肩で息をしているのが、後ろ姿からも、はっきりわかった。

「死ぬもんかね、五郎ちゃん。おとなになったんだよ」

昂奮した顔を、私の方へ、ねじ向けるようにして言った。

そのことがあってから、私と八重は、急速に親密になった。八重が風呂からあがるのを待ちかねて、私は、

「この間のようにしておくれよ」

と、せがんだ。八重は二回に一回位の割で、私の願いを、きいてくれた。

そして、ある時、腹の上にまたがっていた八重がヒョイと腰を浮かせたことがあった。そのまま、尻をつき出すように、私の顔の真上付近まで、尻を動かして来た。下から見ている私の目の中に、巨大な双丘と、その中心部まで、はっきりと、とび込んで来たのだ。

「五郎、なめておくれ」

その時になると、八重は、いつの間にか、私を「五郎」と呼び捨てにするようになっていた。

八重の声に、私は夢中で、顔を持ち上げていた。かすかな匂いが口中に広がってゆく。八重は尻を振るので、私は両手で、しっかりと双丘をかかえるようにしていた。

それは、むし暑い夏の夜の、思い出であった。四十ワットの電灯に蛾が二匹、狂ったように鱗粉を、まき散らしながら舞っていた。



イメージギャラリー

『何よりのもてなし』

岡 たくし



すと、股間が充血し、先生の声がガランドウの洞穴の中に響く、こだまみたい、何の意味も持たない「音」になってしまうのだった。

そんな八重との、抜け出そうとしながら抜け出し得ない交渉が一年余りも続いた。その後、八重は、父親が脳卒中で倒れたため、家事の手伝いをするといって、私の家から去って行った。

その一年間に、私は八重によって、マゾの快感を植えつけられたのだ。その間、いろんな思い出があるのだが、それは別の機会にゆずることにして、現在の、美枝子様との交渉を紹介しよう。

### ——女神・美枝子様——

八重は、やがて横に倒れ込み、ゼイゼイと肩で息をしていた。

「八重、どうしたんだ？」

私は不安になって、八重の顔を、のぞき込んだ。

「ちょっと、気分が悪くなっただけよ」

涙をためたような、変にギラギラ光る瞳を向け、八重は答えた。

その時の思い出は、いまでも生々しく思い出されるのだ。

私の学校の成績は、八重との出来ごとを境に急激に下がった。学校で先生の話を聞いている時でも、フッと八重の白い双丘を思い出

が現在の私達夫婦の日常である。

美枝子様と私は、知人の紹介による、平凡な見合い結婚で結ばれた。最初は平凡な夫婦生活であったが、私の目に狂いはなく、美枝子様は、結婚後三カ月目くらいから、そろそろ女神としてのS的性格を現わし始めたのだ。

△五郎ちゃん▽が、いつの間にか△五郎▽になり△あなた▽が△お前▽に変わっていった。私は逆に、△美枝子▽が△美枝子様▽になり、ことばづかいも△……でございます▽というように仕向けられ

ていったのだ。

結婚当初、美枝子様との平凡な夫婦生活では、私は勿論、美枝子様も不満な様子であった。

「あなた、ダメな方ねえ。もっと頭を使って、どうしたら女のわたしに喜ぶかってことを考えてみたら」

と、謎めいたことをいうようになった。そして、或夜、

「あなたのように、体力もなく、男らしさのない男性なんて、女の尻に敷かれりゃいいんだわ」

呟くようにおっしゃるのが聞えたのだ。ああ、尻に敷かれる、私が多年あこがれ、実現を求めていた境地なのだ。

「お願いだ。僕を尻に敷いておくれ、美枝子。その豊かな尻で、僕の顔の上に、またがっておくれ」

私は我を忘れて、美枝子様の前に、ひれ伏し、懇願した。美枝子様は最初、あきれたように私を見下ろしていたが、やがて、お芝居でないことがわかれると、その瞳を、変にキラキラと輝かせ、唇のほしに、さげすみの表情をのぞかせながら、キッパリと、こうおっしゃったのだ。

「よし、これから『五郎、お前』と呼ぶが、いいか。そして私は、お前の主人であり、女神さまだから、私のことは美枝子様と呼べ。そうすれば、お前の願いどおり、毎日、尻の下に敷いてやるよ」

そして美枝子様は、私を仰向けに床の上に寝かすと、スカートをまくりあげ、フリルのついた、ピンク色のパンティのまま、私の顔の上に、ぐっと尻を、おとされた。九十センチはあると思われる豊かなヒップにおしつぶされ、私の顔は美枝子様の全体重を支えてギシギシと鳴った。口も鼻もふさがれ、臀部の隙間から洩れてくる空

気を必死になって吸った。ああ、この感激、この恍惚。私の股間を見る見るうちに、充血しはじめるのだ。

美枝子様は、そのまま、くるりと百八十度、回転されたので、その醜惡な姿を、はしなくも見られてしまったのだ。

「なんだい、この態度は」

美枝子様は、私の劣情のしるしを、ご覧になって、お怒りになったのだろうか。足裏で、力一杯、私の股間をふみつけられたのだ。

「ウッ……」

という声にならない、呻きが私の口から洩れる。こうして疼くような痛みが、いつしか快美感に変わってゆくのだった。

### ——ガム捜しのプレイ——

美枝子様と私の生活——昼間は、普通の夫婦のように隣近所に映っていたに違いない。つきあひも、普通の若奥様と何らかわりなく適当に世間話をしたり、旦那をこき下ろしたりして、うまくやっていたようだ。しかし、夜になると——昼間でも、例のプレイがはじまるとそうだが——美枝子様の態度は一変してしまうのだ。女神様と下僕になって、私達夫婦は耽美な世界に墜ちて行くのだ。

生まれつきの素質というのだろうか、美枝子様は足舐め、ヒップ責め、肩車、馬乗り、といった具合に、いろいろな新手を考え出して、私を責め抜いた。中でも、とくに好んで用いたプレイは「ガム捜し」とで名づけようか——美枝子様の食べたガムを、私に食べさせるという遊びだった。

「五郎、ガムをあげようか」

という時の美枝子様の瞳は、もう獲物を前にした猛禽類のように



妖しい光を放ち始めるのだ。はじめのころは、嚙んでいたガムを、ポイと床へ吐き出し、

「お食べ」

といって、そのまま食べさせたが、それだけでは、美枝子様も私も物足りなくなって来た。

「いいかい。このガムを、どこかへ隠すから、お前は、前か後ろか当てるんだよ」

と美枝子様は私に目かくしをし、ご自分は、ガムを体の中へ隠してしまわれるのだ。私は、当てずっぽうに「前」とか「後ろ」とかいう。

「本当にあるかどうか、捜してみな。ただし、手は使っちゃいけないよ。舌で捜すんだよ」

私は美枝子様の近くへ、にじり寄り、一心に、舌でガムを捜し始める。美枝子様は、全裸のまま私が捜しよいうに、ベッドの上でいろいろなポーズをとられる。足を大きく開いたり、膝の裏側へ、両腕をまわして、えびのように、からだを二つに折ったり……目かくしで見えないが、それは実に、ハレンチ極まるポーズだったと思う。いくら捜してもないと、

「アハハハ、残念でした。前ではなくて、後ろでした」

といいながら、かかとで思い切り、私の後頭部を蹴り上げられるのだ。そのあげくに、

「かわいそうだから、食べさせてやるよ」

と、体温であたたまったガムを、私の口の中へ直接、入れてくださるのだ。

「ああ、女神さま。ありがとうございます」

私は心から感謝の言葉を捧げながら、その何ものにも代えがたい珍味を、いただかせてもらう。

### ——風呂場で の 恍惚——

結婚して、六カ月目に私たちは、それまで住んでいた八畳一間の間借りから、三DKのかなりデラックスなアパートに移った。権利金十万円、家賃は一万五千円と私たち夫婦には、ちょっと痛かったが、共稼ぎのため、経済的にも、かなりゆとりがあったため、なんとか、やってゆけるだろうという見通しも、たっていた。

ポリバス、水洗トイレに、小さいながら、瞬間湯わかし器まで完備され、6・6・45の部屋も、まあまあというところで、派手好きな美枝子様は、すっかり気に入ったらしかった。

「ポリバスのあるのが気に入ったわ」

と美枝子様は早くも、どうやって私を責め抜き、いじめ抜こうかということ、頭がいっぱいらしく、その瞳をキラキラ輝かして私を、じっと、ご覧になるのだった。

引越した、その夜から、新しいプレイが、はじまった。

「五郎、背中を流しておくれ」

バスの中から、美枝子様の、カン高い、それでいて、ややかすれた声が響いてきた。

私はブリーフ一枚で風呂場へ飛び込んでいった。やや浅黒いが、すらりと伸び切った見事な肢体。贅肉の全くない、かもしかのような足。くびれたウェスト。ここだけは、白くなめらかな双丘と、胸のふくらみ。これまでも、しばしば見た身体だが、タイルの上に、わずかに足を開いてお立ちになった美枝子様の、神々しいばかりの

美しさに、私は思わず土下座して、拝跪してしまう。

「さあ、しっかり洗うんだよ」

美枝子様は、くるりと向うを向いて、中腰になれる。私はスポンジに石鹼をつけて、力を加減しながら一心に、こすりはじめる。

「はい、こんどは足」

背中から足、腕、腹と洗い、足の裏まで、きれいにする。

「ちょっと待って。私、おしっこ、したくなったの」

美枝子様は、そのまま、しゃがんで、用を足そうとなされたが、ちよつと考えてから、

「五郎、おいで。お前、はだかになって、ここへ寝てごらん」

私には美枝子様の考えが、鏡に写すように、わかってしまった。

美枝子様は、私の顔に尊い……を浴びせようというのだ。私はゴロリとタイルに仰臥して、目をつぶる。美枝子さまは、私の胸の上あたりに両足を払げて、お立ちになったようだ。立ったままの姿勢でそれは突然、滝になって私の顔を激しく襲った。開けるだけ開いた私のくち唇がピクピクと痊れんする。その口を目がけて、狙ったように銀線が次から次と、ほとばしるのだ。顔中、濡れそぼった私を見下ろして、美枝子様は、

「どう、おいしかった？」

とケラケラ笑っておいでになる。

性に目覚めたところから、絶えず私の心の中を占めていた『美しい女性の Urine をゴクゴクと腹一杯、飲みたい』という願望が、いまかなえられたのだ。私は美枝子様の尊い滝に打たれながら、全身をつらぬく感激に、いつまでも、ふるえていた。この恍惚境こそ知る人ぞ知る境地なのだ。

## ——神酒に酔い痴れる——

こうした女性の Urine に対する止み難い願望——それは、すでに中学二年生の頃から芽生えていたのだ。それには八重とのことに、もう一度、触れなければならない。

三十年近く、昔のころのことだ。そのころは農家の娘たちは、ほとんどパンティなど、はいていなかったようだ。八重もあまりパンティやズロースなどを着用しなかった。その証拠に、八重のおしっこは、朝顔型便器を設置した男性用便所を専ら使っていたことで、わかるのである。便器に尻を向けて、足をやや開いて立ち、そのまま着物の裾をヒョイと、からげて用を足すのである。そのことを発見した私は、八重の Urine を手に入れようと、ある夜、便器の中に缶詰のあき缶を設置したのだ。今にして思えば、音のするあき缶などを使わずに、もっとうまい方法があったと思うのだが、中学二年生のころの私には、目的のためには手段を選ぶだけの余裕はなかったのだろう。

あき缶を装置して、私はしばらく、物陰にかくれて様子をうかがっている。トコトコと八重の足音がする。そして、いつものように尻を向けると、用を足しはじめた。しかし、あき缶に水滴が当たる異様な音に気付いたのか、八重は終ってから、ちよつと便器の中をのぞいていたようだが、そのまま去って行った。私は、そのあとおもむろに、あき缶をとり出した。それは缶に半分ほど、入っていた。ポンと鼻をつく異臭。私はブルブルふるえる手で、缶を口に運ぶ。一口、口にふくんで見た。△塩辛い▽口の中一杯にひろがるその味は、ただ塩辛いだけ。とても全部は飲み切れなかった。しかし



その時の目くるめくような感激は、いつまでも忘れることができなかった。それが、女性の Urine に対する激しい渴望となって、私の心に芽生え、育って行ったのである。

さて、三度、美枝子様との生活に、もどらなければならない。

私の絶えず抱いていた疑問——飲酒後の Urine の中に、アルコール分は存在するだろうか——その疑問に解答を与える出来事を紹介しよう。それまで私は、アルコール分というものは、胃や腸から、ほとんど吸収されてしまい、排泄されないと信じていた。それが、十年ほど前だろうか、本誌に沼正三氏が「神の酒を手に入れる方法」で芳野眉美氏に呼びかけて、つぎのように書いておられるのを、読んだことがある。

『これこそ、文字通りの神酒というべき珍味は、飲酒した後のものです。S 子は外の酒は駄目でしたがビールだけは大好きで、夏になると良く飲みました。このあとの容器の中の液体こそ、芳野君、君に味わせたいものの随一です。こればかりは筆でかけない、本当に飲んだ人でなければ分りません。もともとホロ苦い塩からい液体に適度のアルコールが含まれ、一種異様の味わいです。』

私は体質的に、酒には弱く、コップ一杯のビールで、顔が真っ赤になってしまう位ですが、美枝子様は逆に、角ビン半分位、一人であけても平気という酒豪なのである。沼氏の告白文を読んで以来というものの、アルコール分はいった Urine で酔っぱらいたいという止み難い願望が、いつも心の隅に深く根をおろしていた。その長い間、抱きつづけて来た願望が、美枝子様によって、案外早く実現されたのである。

アパートに移って一カ月目ごろだったろうか。梅雨もあがり、夏

を迎えた、ある宵のことだった。

「五郎、いま帰ったよ」

玄関をはいるやいなや、美枝様少しロレツの怪しい言葉を投げかけてきた。

「きょうから、うちの店の屋上で生ビールをはじめたから、帰りにお友達とジョッキ二杯ずつ、あけて来たんだよ」

と、友達と二人で、もつれるように、ソファに倒れ込まれた。

「こちらは、友達の多加子さん。これは、うちの五郎」

と紹介する。多加子さんも大分、酔っているようだ。美枝様より、いくらか小柄だが、若い肉体がハチ切れるようにピチピチしており、なかなかの美人である。

「五郎、ガムをあげようか」

美枝様は、それまで囁んでいたガムをポイと、はき出すと、ペデキアした美しい足の指ではさんで、私の顔の前へ突き出した。一対一なら、なんでもなく、すぐ食べられるのだが、第三者の見ている前では、躊躇が先に立って、どうしても食べられないのだ。

「美枝子、みっともない真似は止めなさい」

私は、ついぞ使ったことのない、強い言葉で、たしなめた。

「ホホ……何よ、そんなに、えらそうなことを言っ。顔を尻の下に敷かれたり、足の裏を犬のようにペロペロ舐めるくせに……。多加子さんには、みんな話してあるのよ。エエイ、じれったい。こうしてくれる」

と、美枝子さんは、私の髪の毛をつかむと力一杯、引っばって、ご自分の近くまでつれてくると、ぐいと顔を上に向けさせられたかと思うと、無理矢理、足指を私の口の中へねじ込まれ、ガムを食べ

させられてしまうのだった。

「多加子さん。こんなのは、まだホンの序の口よ。この人ったら、私のおしっこでさえ、喜んで飲むのよ。どう、これから私達のおしっこを飲ませて、酔っぱらわせて見ない？」

「アラ、まさかそんなこと私、とても見ていられないわ」

「平気よ。さあ、あなた、さっきトイレに行きたいといっていたわね。この中へ、やっちゃいなさい」

美枝子様は、いつの間にか、お勝手からガラスのジョッキを二つ持ってきて、一つを多加子さんに渡して、そういつている。そしてご自分はパンティをおろすのも、もどかし気に、ジョッキの中へ、さわやかな音をたてて満たしているのだ。多加子さんは、さすがに人前をはばかってトイレの中へ、かけ込んだが、やがてジョッキ八分目くらいに満たした、琥珀色の液体を持って、出て来た。

「さあ、五郎、飲みな。きょうのは特別おいしいよ」

色といい、泡といい、それは外見、生ビールと全く似ていた。

「さあ、どちらがおいしいか、よく味わって飲むんだよ」

美枝子様は、ニヤニヤしながら、私を見つめておいでになる。

「美枝子様、多加子様。いただきます」

私は人間ではないんだ。犬かもしれない。いや豚かも知れない。まず最初に多加子さんの方に手をかけて、ぐっと一口飲みこんだ。「ヒャーッ」

と多加子さんは、その時、両手で顔をおおってしまった。三口ほど飲んでから、こんどは美枝子様の方に手をかける。いつも、いただいているのとは確かに違った味がする。美枝子様の方が、匂いも味も濃いようだ。またたく間に、両方のジョッキは、からになって

しまう。かなりアルコール分を含んでいたのだろう。しばらくすると、顔から、首が真っ赤になってくるのが、わかった。

「五郎。お前、酔っぱらったね」

たしかに、私は酔っぱらったらしい。ドキドキという心臓の鼓動が聞える。顔をおおっていた多加子さんは、いつの間にか顔から手をはなし、じっと私を見つめている。

「さあ、こんどは、いつもの、猿の芸当を、ご覧に入れるんだよ」

美枝子様の声に、私はフラつく身体を起して正座する。

「猿の芸当のはじまり、はじまり。お代は見てのお帰り」

美枝子様は、縁日の見世物の呼び込み口上を真似て、おっしゃるのだ。もう、ここまで落ちてしまえば、これ以上、落ちるところはない。この美しい二人の女性の前でなら、どんなはずかしいことだって出来る。

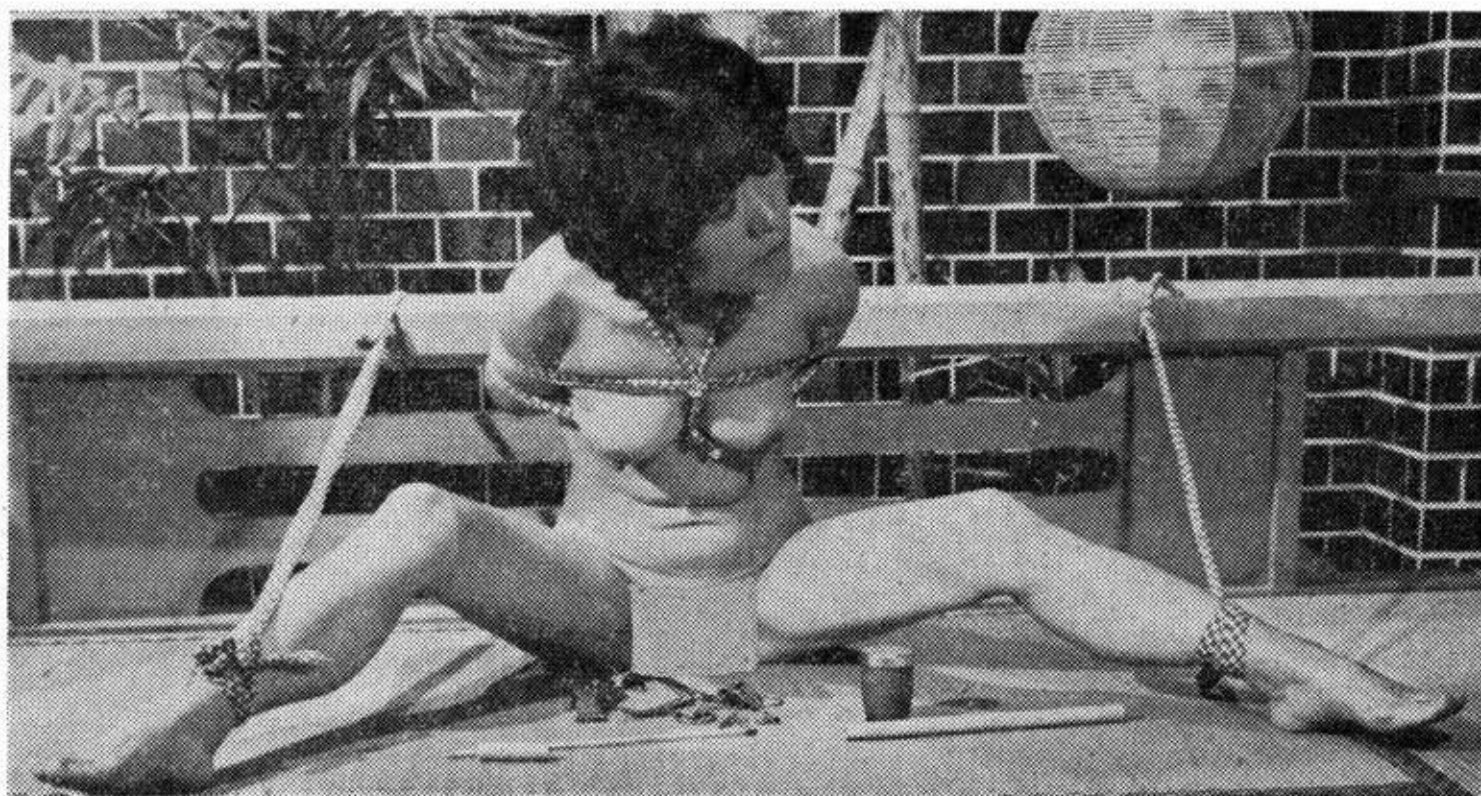
美枝子様と多加子さんは、ソファに行儀の悪い恰好でかけておいでになり、美枝子様などは、ジョッキに生ビールを注いだままの姿なので、太股の奥さえ、見えるのだ。

私はおもむろに、醜態にいきり立つ、みにくい姿をお二人の眼前に露呈する。美枝子様は、たばこに火をつけ、吸い込んだ煙を、私の鼻の前に吹きかける。私は異様に目を光らせて注視するお二人の前で、憑かれたように、一心に、はずかしい行為に励んだ。

「ハハ……、やっぱり猿ね。それ、もっとスピードをつけて」

と、時々おはやしになる。そのうち、だんだん、お二人の笑い声が、遠くで響いてくるようになったら、私はいつしかそのまま気が遠くなっていった。耳には、いつまでもお二人のケラケラと笑いこぼる、お声だけが聞えていた。





＜告白＞

## 飼育妻からプレイ妻へ

## プレイ妻から奴隷妻へ

たま  
玉

き  
木

あき  
章

こ  
子

彼って、なぜ、こんなにも、縛られた女性の写真が好きなのでしょうか。

毎月、奇譚クラブを直接、発行所から、それも速達で送ってもらうように私の名前で申し込ませているのも、分譲の写真が欲しいばかりのように私には思えてならないのです。

その月の新刊号に発表してある新しい分譲品は、雑誌を私が入れるなり、すぐに速達で申し込ませるのです。勿論、速達で注文するのです。私が十九の年まで郵便局に勤めていて、そして、そこで彼と知り合ったからというわけではありません。

彼としては、新しい写真を、少しでも早く手に入れたかったのです。私の手元に写真が届きますと、私は彼に、すぐ電話をします。

「あなた、来ましたわよ」

それでわかるのです。その日の夕方か夜は必ず、彼は私の所を訪れます。泊ってゆくことは決してありませんが、新しい写真が来た日は、いつも夜晩くまでいて、写真を見ながらプレイをします。

彼は縛ることは、そう上手ではありませんが、両方の手首だけは、うしろで、きちんと縛ります。私は、両手が背後へ回って使えなくなる、だから妙な気持になります。

「ああ、これから、いじめられるのだわ」という気持が、それをきっかけに、自分に言い聞かせるのです。

彼は写真のいろいろな縛られ方や責められ方を、熱心に見ていますが、実際に私を縛るときは、そう手のこんだ縛り方はしないのです。不器用というのでしょうか、時には、写真の縛り方を真似て、私を縛ることがあるのですが、ぶかぶかになったり、途中でわからなくなって中止してしまうこともあります。

私が塚本様に縛られて、沢山の写真を頂いたときは、彼は子供のように躍り上って喜んでいました。でも、それも当座のことだけでしばらくすると飽いてしまいうらしいのです。

この頃になって、もう一度、塚本さんに責められてこいと私を、そそのかしたり、S研の会員の人達に、寄ってたかって責められたり、縛られたりして来いと言ったりします。

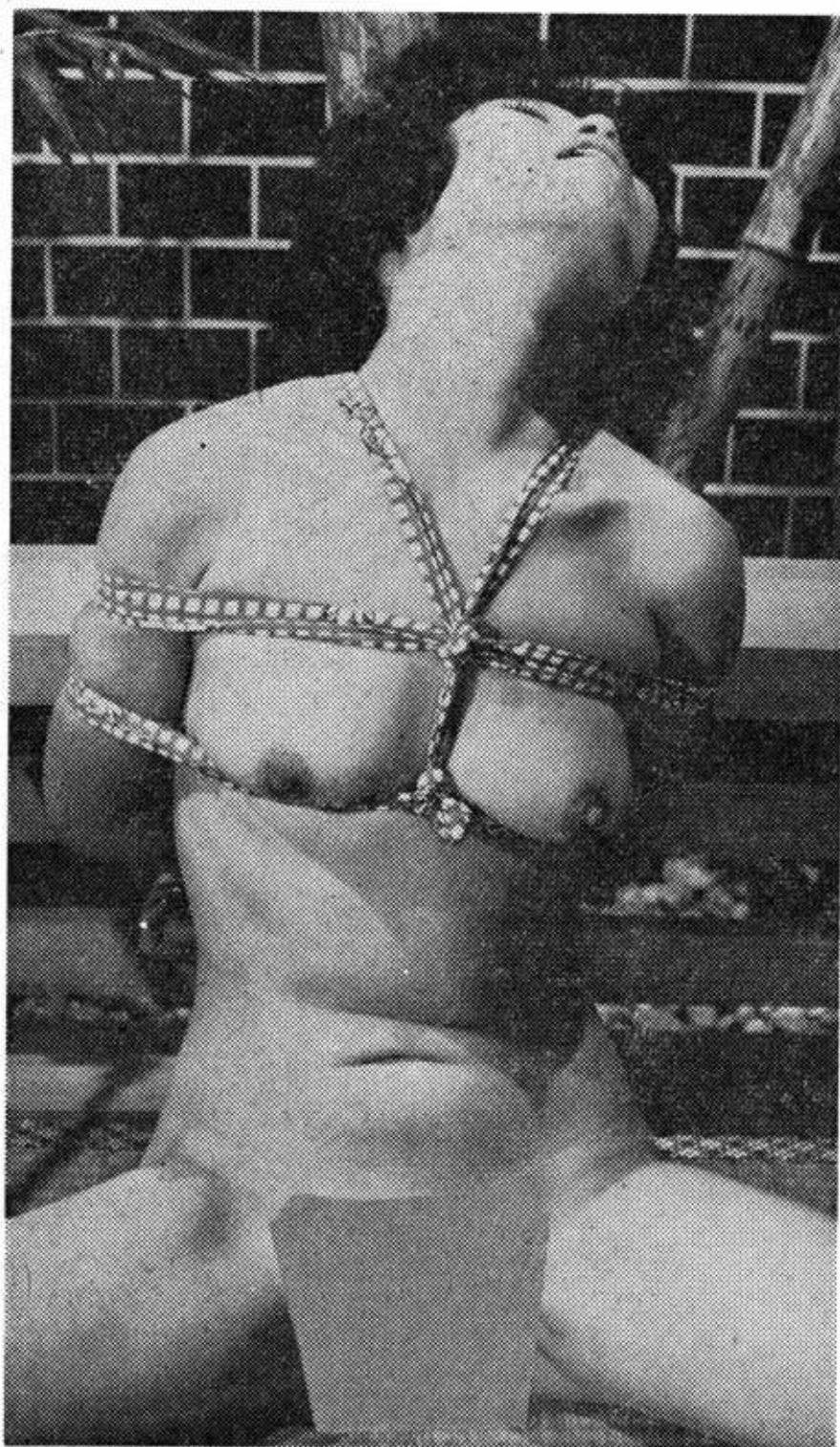
そんな後で、いつも口喧嘩になります。と言いますのは、私の返事が、「そんなこと、嫌ですわ」と言っても、また、いそいそと、嬉しそうな顔をして、「それじゃ、塚本さんに責められてきますわ」と返事しても、どちらにしても、不機嫌そうに私を、どなりつけるのです。

「これだけ長く一緒に暮していながら、僕の頼みが聞けないのか」と言ったり、「もう、僕に飽きたから、他の男に責められたいんだろ」と嫌味を言ったりします。

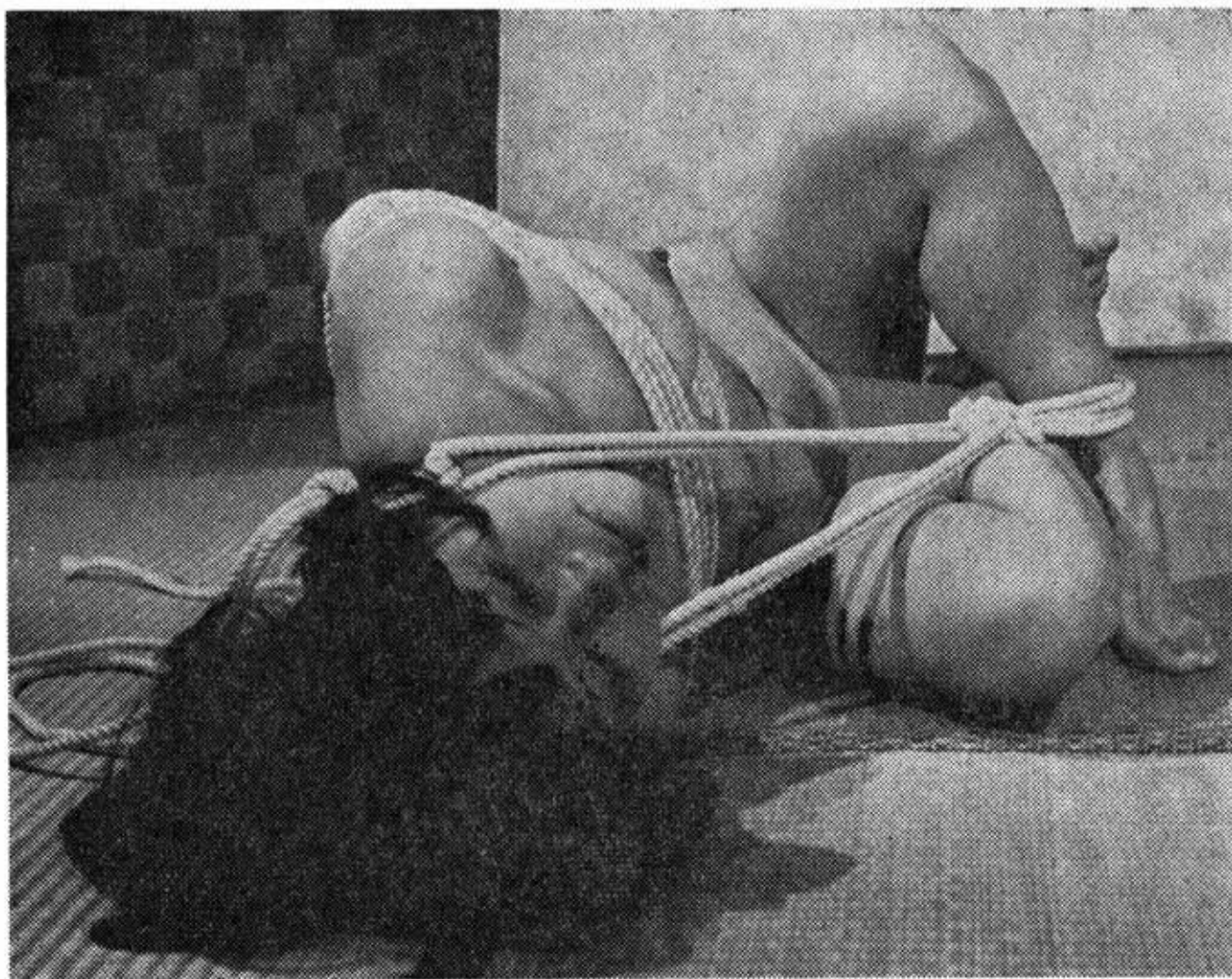
私も負けていずに口答えしますから、口喧嘩になった末、いつも、私が縛られてしまいます。十九の年から八年間もの長い間、彼に飼育されつづけてきた私ですもの、正式の妻ではありませんけれど、飼育妻から、この頃はプレイ妻となりつつあります。

悪態をつきながら、軽く抵抗し、そして、彼が自分を縛り易いように身をこなし、結局は、彼の思うように縛らせ、適当に、喘ぎ悶えて、その頂点で夫婦の交りに入ってゆきます。縛られた女の写真を見ながら、或は私を縛ってからでないと、燃えない彼。そして、いつしか、私も、そんなになってしまったのです。

でも、私が、責められている時、殊更、プレイ妻らしく、大仰に騒いで、涙を流してみ







せたりすると、彼は敏感に、それを見破ってあとで私を叱るのです。私としては、余り気の乗らない時でも、ゼ

スチユアを大きくして泣き喚くふりをしていきますと、真実、そんな気持ちになってくることです。ですから、そんな演技をしてみせる習慣も身についてしまいました。

これも、哀れな日蔭の奴隷妻の、はかない処世術の一つかも知れません。

男性である彼は、自分の気の向いた時に、私の所を訪ね、そして、挑んできます。ですからといって、女性である私が、いつも、いつも、受け入れ態勢を十分にしていって、待っていられるものではありません。

せっかく、彼が訪ねてきても、今日は、余り気が進まない。出来たら、プレイはしたくないと言った日だけあります。でも、プレイ妻としての私の今の身分としては、それを強く打ちだすことは出来ません。ですから、そんな日は、どう

しても、オーバーな演技をしてしまうことになります。

「お前という女は、格好ばかりで、内容のない、味の無い女だ」と怒ります。

幸いにして、どうしたわけか私は、よくよく妊娠しない女です。一度も避妊をしたことがないのに、まだ一度も妊娠はしません。彼の家では、立派に子供があるのですから、彼に能力がないというわけではありませんし、それに、これは、彼には内緒なんですけど、結構、浮気はしているんです。塚本さんだって、二回しか、SMプレイはしていませんけれど、最初の時から、もう完全にワケありになっていました。

写真を頂きに、レストランで待合わした時も、私の方から、お誘いしてしまいました。塚本さんって、お誘いすれば必ず応じて下さるんです。女心を失望させるようなことは決してなさいません。ですから、二度目の時なんか、私、真実、燃えてしまいました。

浮気の相手って、塚本さんばかりじゃございません。なにしろ、日中は殆ど家におりますし、子供もないのですから、退屈で仕方ないのです。それに、お昼のテレビ、再放送のドラマなんか、一人で見ていますと、結構

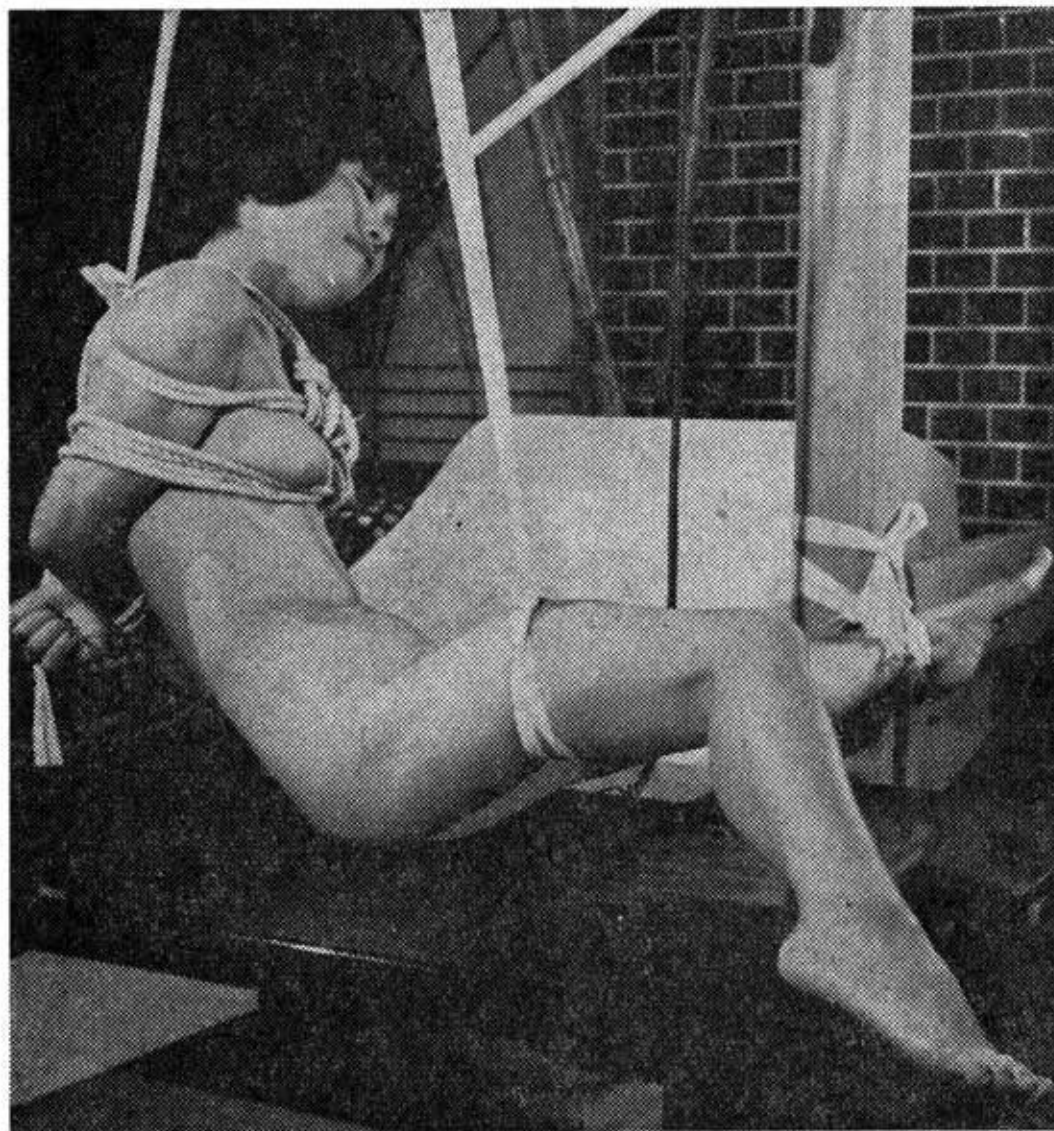
そそのかされてしまいます。

飼育妻からプレイ妻へと変わりつつある私ですが、彼は私を、やがて奴隷妻にしたいような口ぶりです。それは、閨房のなかであつたら、どんなに奴隷妻としての行為を強要されても、私は満足します。でも、私の生活全部を奴隷化されるということは、いくら、日蔭の妻でも、耐えられません。

いや、日蔭の妻なればこそ、羽をのばす自由がほしいのです。私が自分の欲する時に、欲する人とプレイの出来る自由がほしいのです。今までの八年間というものは、彼の欲する時に、彼の欲するまま、SMプレイをやって飼育されてきました。

十九の年、郵便局に勤めていた私は、窓口で彼と知り合つて好きになり、やがて彼に妻子があるということが分つてからも、好きな彼と一緒にいられるのなら、という只それだけで日蔭の生活をするようになってしまったのです。

SMのことについては、何一つ知らなかった私も、彼の手とり足とりの導きで、十九の乙女から飼育妻へ



の道を歩み、奇譚クラブという雑誌を毎月、見せられるようになってからというものは、急速に私の身体にも、SMへの興味が湧いてまいりました。

それから八年。今や、私も女盛りの身となつてみれば、いつまでも飼育妻のままでは、気が落ちつきません。時たま、彼の目を盗ん

での浮気も、やはりSMに関心のある方ではないと、しつくりゆかないように思えてなりません。子供もいないのですから、パートでも働きに出たいと言いますと、彼は、どうせお前が働いたって大した収入の足しにはならないから、といって許してくれません。

私にしたら、収入目当てよりも、気晴しのつもりですが、私が勤めに出るとろくなことはない、彼は心配しているのでしょう。

戸籍上は一応、独身ということになってはいる私ですから変な虫がつくかも知れません。

何も知らなかった私に、縄の味を覚えさせ今では、その味が忘れられなくなつてしまった私。彼の好きな時に、好きなように縛って楽しむことの出来る私の体が、彼のためにだけ、こうして、待っているのです。

日中は、仕事があるので殆ど訪ねて来ない彼も、一週間に一回か二回、ひよいと顔を見せるのも、夕飯前が多いのです。風呂へ入ってから軽い食事。それも決して、



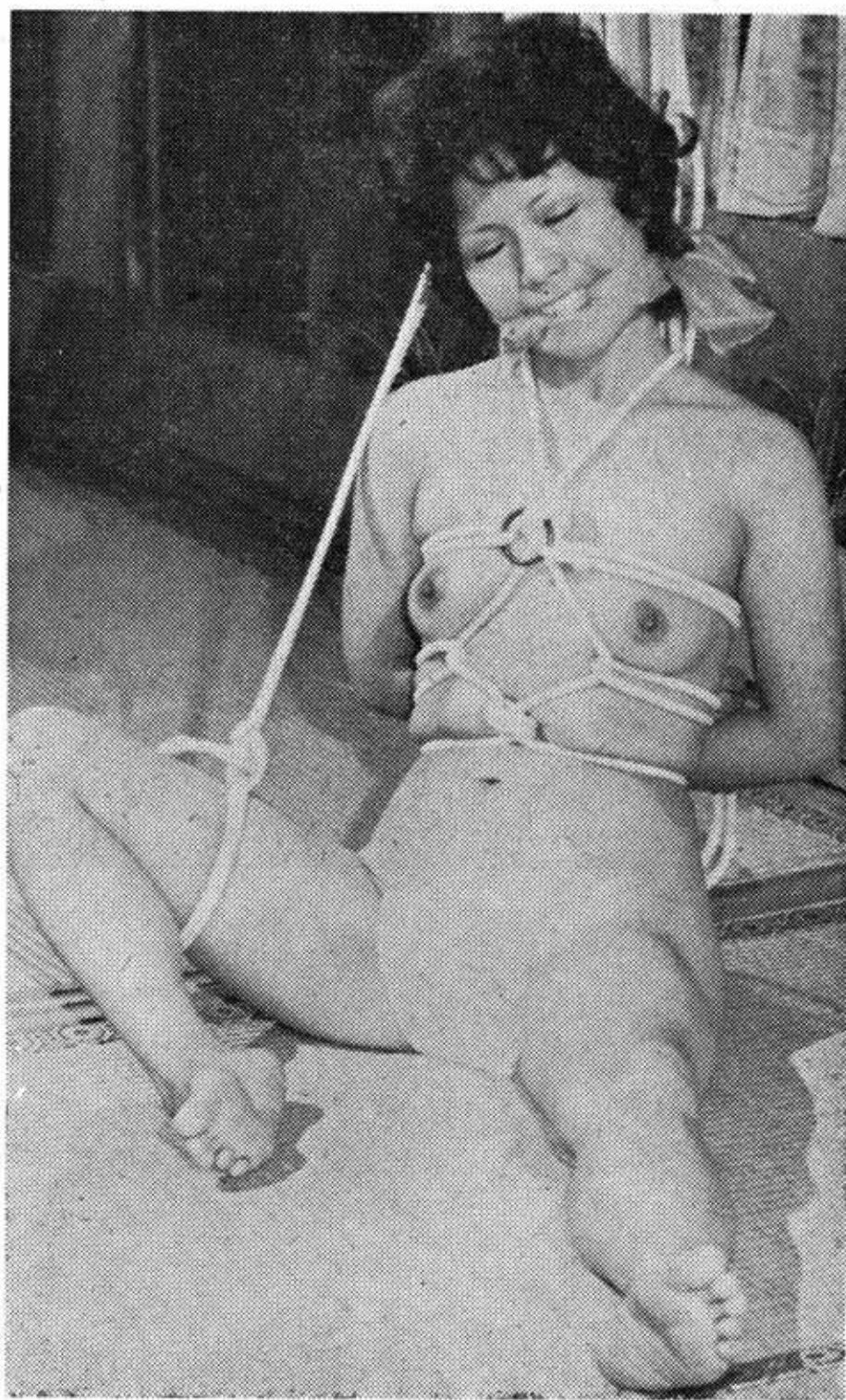
腹一杯、食べるということはありません。

プレイのあとでも、決して泊ってゆくというようなことはありません。最初のうちは、そんな彼を、駐車してある車の近くまで送ってゆくのは、本当に辛かったのですが、この頃では、それも、すっかり慣れてしまつて、玄関で握手して別れたり、ベッドの中から投げキッスで別れたりします。

「もう、ぼちぼち、お前の写真を塚本さんにうつして貰わにゃいかな」

それは、彼自身の欲求から来ている、私の緊縛写真ほしさに根ざしているのです。現像も出来ないし、第一、彼はカメラさえ持っていません。今更、カメラの勉強なんて、と考えている彼のことでですから、自分で私の写真を撮るということは彼には無理です。

一度、通信で知り合った読者の方と、プレイをして、写真をうつして貰ったことがあるのですが、うすぼんやりとぼけていて、それに、全体に白っぽいのです。どうなっているのか、私にはわかりませんが、彼は、その写真を見て、すっかり失望し、「お前が、こんな筈はない」と言つて破りすててしまいました。あの時のがっかりした彼のげんなりした顔は忘れることが出来ません。緊縛写真が、



人一倍、大好きな彼だけに、失望もまた、大きかったのでしょう。

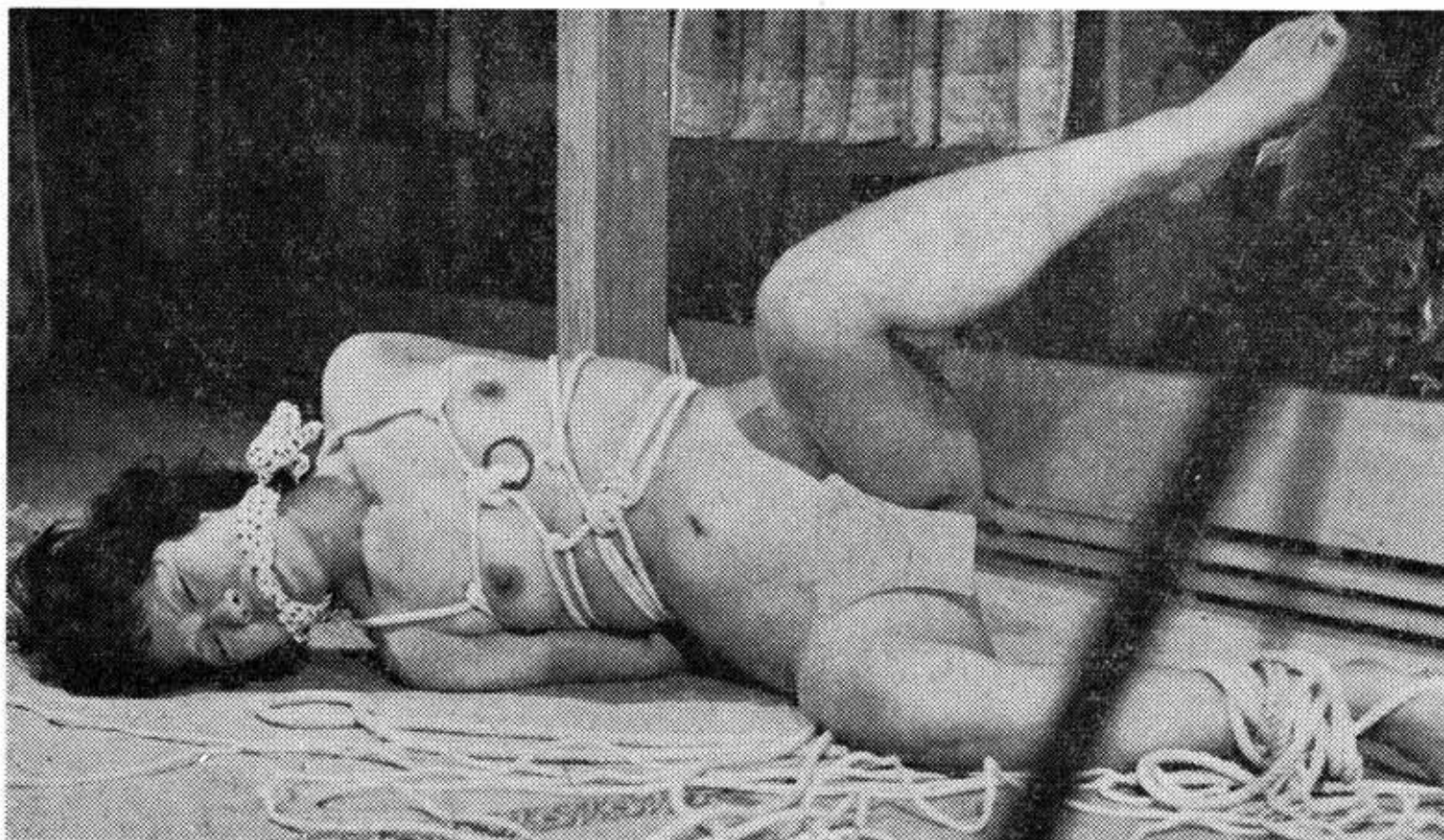
この前、塚本様に責められた時、彼の伝言として、一枚だけ、カラーの写真を下さいねと、お願いしましたところ、それじゃ、特別に念入りに撮影して、大きく伸ばしてあげようと言つて、縛られた正面の裸像を、ブルーのライトで写して下さいました。

何型というのでしょうか、カレンダーにす

るような大ききで、私の頬紅の朱さまで、くっきりと出ている色の鮮明さで、実物よりも美しいなあと、びっくりしました。

送るのは、大きくて包装が面倒だからと、わざわざ持ってきて下さった塚本様に、お目にかかる、変に、私の胸がさわぎました。

塚本様が、強引に私をひっさらつて下さったらいのにと考えました。私のお部屋でコーヒーでも、と、お誘いしましたけれど、用



心して、上ってこれません。もし、お部屋へ入ってこれたら、うしろから抱きついて誘惑してやろうと思っていましたのに、すぎがありませんでした。

塚本様の「カメラ・ルポ」は、彼の一番、愛読している個所です。ベッドの中で私と並んで読むことが多いのです。奇クが速達で、私の手元に届いた日は、余程の重要な用件のない限り、彼は私の所へ来ます。

各頁にのっている豊富な写真に、彼は先ず目を輝かします。そして、次には、その文章を、つかれたように読み耽ります。私は横に寝ているのですから、彼が凄く興奮しているのが、よくわかります。

責めのクライマックスのところは、声を出して、私に読んで聞かせます。そうして、彼は読んでいる自分の声に酔っているようなのです。一月号で、私がルポの主人公となった時の彼の感激したら、ありませんでした。

十二月号のルポは、苗木陽子さんで彼の奇クに対する関心度が高められて

いる所へ、一月号が私でしたから、彼の感激も相当なものでした。そして、二月号、三月号、四月号と力を抜かない塚本様の健筆に、雑誌を手にするたびに驚いています。

もう、四、五日したら、五月号が速達で届きます。

どんな女性のどんなルポが載っているのでしょうか。彼ならずとも、私も楽しみです。彼がハッスルすれば、私もまた、嬉しいんですもの。

彼と口喧嘩をしながら、そのあと、きまっで激しいプレイ、いいえ、私に対する彼の飼育が始まります。

飼育だけじゃ、つまらないわ。それに、奴隷妻もいや。

一対一の燃えるようなSMプレイがしたいの。それは、今の私の望みです。

退屈で、退屈で、もて余している、この私のからだ。塚本様のルポで、一皮も二皮も脱いでしまっただけだと思っている私です。

彼も、きっと、私に、ルポされて来いと、許可を与えることでしょう。

なぜって、彼も、ぼつぼつ、私の新しい写真を、ほしがらう頃なんですから。

——（おしまい）——



浩が行く (第四話)

# バーミクラに陽は沈む (後)

カット・マエダヒオミ



久留木 栄

うとしたとき、ずっと近よった人影が軽く肩を、たたいた。

見ると、田舎っぽい紳士が立っていた。ツイードの褐色のスーツだぶだぶのズボン、フチの太い眼鏡。西陣のお召を派手に着こなした栄子とは、比較にならない、ヤボな人物だった。

「心配なかつた。おれの手で行くべ」  
浩は、そういつて強引に栄子の手を、にぎった。

その時、車の運転席から下山が、助手席から、いま一人のチンピラ加納が降りてきて二人を、とりまいた。いずれも、一癖ありそうなタイプだ。

「どちらさんか知りませんが、うちのお嬢さんに勝手なマネは、ごめんこうむります。さ手をひいてもらいましょう」

「ハハハハ。お嬢さんは、よかったべ。帰っ

(九)

栄子が、至の病院の費用を届けに行った帰り、山城組の子分、下山の運転する車に乗る

「忘れたべ、千代子さん」  
「まあ、社長さん！ 忘れられるワケないでしょ。でも、どうしてここへ？」

たら、山城組の親分に言ってくれ。ホステスのことを、ぬしが組では、お嬢さんと呼ぶべえか、とな」

「なに？」

「ばかやろう！」

浩が、そういった途端、浩の体は激しく左に、とんだ。下山が打ってかかったのだ。栄子は、とっさに身を、しずめた。どこが、どうなったのか、栄子の目には、よくわからなかったが、浩の体を追った下山が大きく一回転して地上に、たたきつけられるのが、わかった。

加納も、つぎの瞬間、一撃を首すじにくらって、ヘタリ込んでいた。

下山といえば空手二段。山城組でも幹部級の手下だった。それを苦もなく叩き伏せたこの花野という男の強さに、栄子は舌をまいた。いったい何者だろうか。田舎じみた態度は、ちっとも変わっていなかった。変わったのは言葉つきが標準語になったくらい――。

「さ、いきましよう」

「と、いって、どちらへ？」

「私の家さ。いい家だよ。当分、そこで暮らすのもオツなものですよ」

「あなたの家につれていって、どうしようと

いうの？」

「一日中、縛って楽しませてあげるよ。それに至さんの療養費用も、いまより、はずんであげる。つまり、いまの山城組から花野組に足ぬきしたというわけ！」

「まあ！ わかれれば殺されるワ」

「どうだか。殺されるのは、いま山城組を牛耳っている代貸しさんの方かもネ。親分は、まだ拘留中だろ。そのくらいのことは調べずみだよ。いかが？」

「いやといっても、強引に連れて行くつもりなんですよ？」

「そうだ」

「仕方ないワ」

「じゃ、話は決まった」

浩は、にこにこしながらそう約束すると、病院の庭に、たおれている男たちに活を入れた。

「おい、チンピラ。このお嬢さんは、たった今から、オラこと、花野組の組長、卓平が、あずかることになったべ――」

と告げた。

キョトンとしている二人を後に残し浩は、病院の外で待たしていたタクシーに栄子を乗せ、ひとまず、栄子を井上博士の友人の経営

するマンションの一室に連れ込んだ。

「ここに住むの？」

「いいや、ここで君の荷造りをするのさ。あいつらから、つけられていても、わからないようにね」

「え、荷造り？」

「そうだよ。なに、簡単なことさ。トランクに入ってもらっただけだよ」

「まあ、私がトランクに？」

「そう。そら、そこにある」

と押し入れをあけると、大きなジュラルミンのトランクが出て来た。

「ずい分、用心深いね」

「そりゃ二人の生命が、かかっている。あなたと私のね……だから」

と、浩は笑った。

「仕方ないわ！」

栄子が承知すると、浩は手早く栄子を、そのトランクに、つめこみ、嚴重に錠を、おろした。一瞬、栄子の目の前から、明るい色彩の世界が消え、真っ暗やみが栄子を、とらえた。トランクに入れられるとき、手足、腰、頭をベルトでとめられたので、栄子は全く身動きもできなかった。

浩は、栄子を詰め込み終ると、すぐ田舎っ



ぽい背広をぬぎ、黒めがね、黒スーツ、黄色いネクタイの、浩専門のイキなスタイルに変身して、到着した時と反対側の道路に待機していた井上病院の救急車に合図すると、白衣の医師風の男が二人、かけ出してきて、このトランクを受けとると救急車に乗せ、浩といっしょに、その町を走り去った。

まことに鮮やかな手際だった。これでは、あとをつけてきた下山らが、いくらその貸アパートを調べても、もぬけの殻。わかるハズもあるまい。

こうして栄子は首尾よく井上病院の精神科の一隅にある隔離病棟に連れ込まれたのだったが、三階の一番隅にある、この部屋は、白いベッドと白いシーツ、白い病衣に囲まれた採光のよい部屋だが、窓という窓は鉄格子の入った嚴重な隔離部屋で、トイレも洗面所も部屋の中にあり、婦長室から監視できる、しくみになっていた。

白衣の男たちはジュラルミンの箱を、そこに運び込むと、浩だけを残して出ていった。浩は一人になると、やおら、そのトランクのカギをあけた。

「フフフ。かれこれ、三十分か。一時間たっぷりトランク詰めにしておこうと思ったが

うらまれると、こわいからな」

蓋をあけながら浩は、にくまれ口を、たたいて笑った。

「どうせ、オモチャにしたいんでしょ」

「わかりがいいなあ！」

「あなたが至に世話になったდანて、とても信じられないワ」

「そりゃそうだろうな。ま、それは、どうでもいい。あいつの方が世話をやかせたくらいだからな。それより、早く出てこいよ」

「だって手も足もベルトで、とめたままじゃないの。でられるわけがないワ」

「そうか。それは忘れていた。それじゃ、はずしてやろう」

浩は、わざと近寄り、脇腹をくすぐりながら、ゆっくりと、はずした。栄子はトランクから出てくると、大仰に背のびし、そのあとで浩にだきつき、しっかりと、くちづけをした。栄子の方が積極的に浩はそれに逆らわなかった。

一息つくとも栄子は、しげしげと浩を見た。余りの浩の変貌に驚いたのだ。

「いったい、あなたは何をする人なの？ 花野さん！」

「さっきも、いったろ。花野組組長！」

「うそおっしゃい。デカでしょう」

「デカは、ひどい。デカなら女を縛って、この間のように、もて遊んだりなんかはしないぜ。そうだな、何というかな。まあ、アメリカ流に言えば、暴力探偵社長ってとこか」

「まあ……」

「ハハハハ」浩は軽く笑ったが、急に真顔になり、「栄子ッ！」と鋭い声で、いった。栄子はビクツとした。

「冗談は、やめにしよう。これからが正念場だ。とにかく、ここは君の隠れ家としてボクが苦心して工作した、ある精神病院の隔離病室だ。少々不自由だが、安全第一にしておいた。ともかく、君の関係している、一連の事件。といっても、君が、どこまで知っているか知らないが、それが解決するまで、ここに住んでもらうことになるだろう。事件については本職の刑事に来て調べてもらう。だから君がしたこと、つまり、おれを誘惑したようなこと。その代金を誰が、どのように配分しているか。逃げたときの制裁など、見聞したことを残らず言っしてほしい。そうしないとあの山城組を追放できないんだ。わかるか？」

「わかるワ」

「だったらよい。君の亭主が交通事故を起し

たときの、お巡りさんの岩元部長が警部にな  
って、いまは、ここの捜査課長だ。いずれ、  
あとで、しのんでくるだろう。そしたら一切  
しゃべってくれ」  
「いいワ。でも、花野さん。あなたも、ずっ  
と、いてくれるんでしょ？」

「いや、オレはダメだ。いまから、もう一度  
山城組に、もぐりこもうと思っっているんだ」  
「まあ。それは危いワ」  
「覚悟の上だよ。だけど、いまなら相手は動  
揺している。だから、『夕づる』と『クラ』  
のママの葵華枝も、しっぽを出すかもしれない」



イメージギャラリー

『縄と鎖とムチ』

志羽 利也

い。山城組の本部からトルコ「カナリヤ」と  
「夕づる」には秘密の通路があると、にらん  
でいる。その辺を、さぐりたいのだ！ さあ  
余り時間がない。さきにもいったように、こ  
こは病院だ。西陣織の衣服では困る。白衣に  
着替えてくれ」

「まあ！」

「いやかい。いやっていうんなら、手を縛っ  
て剝ぐぞ。オレは、その方が、いいんだ」

「いけすかない」

栄子は浩に、さいそくされ、しぶしぶ着物  
をぬいだ。派手な総しぼりの正絹の長襦袢、  
緋の腰巻も、みな脱がされ、白衣を着た。そ  
れで派手好きの華やかなホステスは一転して  
質素な病人に一変した。

「よく似合うネ。ついでに、これも着てもら  
おうか」

浩は白いヤッケのような服をとりあげた。

「何？ それは」

「搾衣という、暴れる病人に着せる服さ。せ  
っかく精神病院に入院したのだから参考まで  
に着せてやろうというのだよ。君にはマゾ気  
分があるだろう。だから似合うよ」

「いや、いやーよ、今は」

「今だから、いいんだ。今ならオレが着せら



れる。他の人のときは、そうはいかないぞ」

「まあ、ひどい！」

「とにかく、その白衣を脱いで、これを着てみないか。オレは、あと三十分しか、時間がない」

「そう、そうね。いいわ」

栄子は、しぶしぶOKした。ひどく神妙になっていた。浩が白衣をとって搾衣を手渡し、やると、それを頭から、かぶった。この搾衣は丈は長く、足くび近くまである袋状のもので、丸首の頑丈なシャツの胴を長くしたようなものだった。着ると袖が長く、ひとりでは、なかなか脱げない。浩が袖先のヒモを背中から前に回し、胴体にまきつけて縛ると、それだけで上体の自由は拘束され、白くて長くワンピースを着た自由を失った人形が生まれた。

「よし、それでよい」

と浩は笑った。

「当分その姿で暮すよう、看護婦さんに頼んでおこう。トイレと食事の世話は、してくれりし、岩元警部も君のその姿の方が調べやすいかも、しれないネ」

と、浩は手を栄子のアゴにかけて、からかった。

「そんなことをしたら、舌をかんで死んでやるから……」

「さあて、死ねるかね。サルグツワぐらい、たくさん、あるよ」

と浩は皮のカセを、とり出して見せた。

「まあ、ひどい。ホテル「夕づる」以上じゃないの」

「じゃ、観念しな」

そういうと、浩は栄子に抱きつきディープキスした。

「さあて、このまま帰りたいが、三十分の約束だ。それでは可哀そうだから、こんどは脱がしてあげよう」

と浩はヒモを解き、栄子の搾衣を脱がしたあと、再び白衣姿にしてやった。それからベルを押すと、顔見知りの看護婦長、藤堂文子が顔を出した。

「やあ、婦長さん！ 首尾は上乘です。あとは、お願いします」

「承知しました。浩！ 余りいい気になって女の子をオモチャにしては、いけませんよ」「バレタか。わかったよ。あとは博士と岩元君に頼むよ」

浩は、そういうとカギのかかる扉から栄子に投げキッスをして出ていった。

栄子は、その後ろ姿を穴のあくように見ていた。田舎紳士から一転して現代青年に変わったナゾの男、浩の正体は何か。味方らしく頼もしい浩に、ふんわりと恋心すら覚える栄子だった。

藤堂看護婦長は、その間も、きれいに栄子の脱ぎすてた衣類やトランクを片付けていたが、それも終ると「夕方まで、ゆっくりして下さいネ」といって出ていった。

ひとりぼっちになると栄子は、無性に人恋しくなった。夫、至のためにバーミクラのママ葵華枝から金を借りてから、その借金払いに売春をさせられるようになった、地獄の一年間が、走馬灯のように、かけめぐった。絶望におちいった栄子に残された生きがいはただ至の生命だけだったが、それも、もう絶望に近いという、医師の話だった。そんな昨今の荒涼とした華やかさが、身体をいじめるマゾに走らせたのかもしれない。目に見えない力が栄子が無我夢中にさせ、破滅への道を走らせていた。——栄子は、そのことが、よくわかっていた。それだけに浩の出現は大きなショックだったのだ。

そんな栄子の前に現われたのは、浩の予告どおり、昔、栄子に親切にしてくれた岩元警

部だった。

二人は、しばらく無言で向かいあった。

「花野から聞いたの？」

先に口を切ったのは栄子だった。

「花野だって？ 誰？」

「さきほどの人よ！」

「ああ浩か。あいつ、また偽名を使ったな」

「え！」

「花山さん、あの男は幾つも名前をもつ現代の忍者だよ。正義の味方さ。気にしない、気にしない。それよりボクが訊くことを、知ってるだけ話してもらいたいんだが」

「わかりました。お話します」

「ありがとう。記録を係の者にとってもらうことにしているんだが、いいかね」

「ハイ」

「じゃ、さっそくだが……」

と岩元が合図すると、同僚の山田係長が入ってきた。藤堂看護婦がイスや机を運び込んできた。栄子は寝台に腰かけて準備が終るのを待った。

「さあて、何から聞こうか」と、岩元は、参考人としての栄子の、本格的な調書を作りはじめた。

# (十)

その夜、浩はツケひげをして米国のバイヤ、マンフィールド・浩に化けていた。衣裳も、がらりと変え、あかぬけた細身のエリのダーバンを着込み、バーミクラに姿を現わした。

夜十時ごろだったろうか。ドアボーイに青いバッジを示すと、最敬礼してフロアに案内した。

「いらっしゃいまし。まあ、まあ、マンフィールドさん。ようこそ」

とママの葵華枝が愛想よく迎えに出た。浩の示したバッジはSM界では有名な写真家大谷進のファン中山太郎画伯の紹介で、ゆずってもらった。このクラブの秘密会に出入りできる会員証だった。念には念を入れ、浩は昼紹介の電話をかけてもらっていたのである。この浩が、千代子を指名した花野卓平とは、お釈迦様でもご存じなかう——という浩の名演技だった。

華枝は、いそいそと案内した。バーの奥のドアをあけると上品な部屋があり、そこに招待された浩は、そこでビールのサービスを受けた。

ママから命ぜられたらしい三人の若い娘が出てきて浩に寄り添った。その一人がマリ子であることを浩は早くも見抜いていた。女たちは、だまってサービスをした。というのもママがいるからだ。浩は、それが自分の選ぶパートナーの、顔見世であることを察した。若い女たちが去ると、ママが

「いかがですか？」

と、いった。浩が、

「ナンバー2ね。あの、いきのよい娘」

というと、ママは

「さすが、マンフィールドさんね。お目が高い。あの娘は悲鳴が大きいので、それはそれはムードが出るのですよ。好みは洋風でしょうか。和風でしょうか」

「そう、最初は洋風、あとはNIPPON流江戸趣味で」

「オ、ホ、ホ、ホ、ホ。承知しました。それでは、しばらくお待ちを」

といって華枝は姿を消したが、しばらくして、反対側のドアから入って来て、浩を招いた。

「準備ができました。さあ、どうぞ」

狭い廊下が長く続いた突き当たりでボタンを押すと、横に小さな、くぐりがあき、地下



に、人が一人、やっと通れる小道が通じていて、階段を十段ぐらい降りたところに、小さな部屋があった。そこに入ると、明るいシャンドリアの光がパツと浩を照らした。

「お待ちどうさま。マリ、ごあいさつをなさい。マンフィールド様です」

というと、美しい顔の少女が現われた。浩が見ると、まぎれもなく指名した少女マリ子だった。この前、浩についた女である。

マリ子は黒っぽい絹のうすいボレロを首に巻いていた。しかし、その下は裸で白いブラジャーに白いパンティ。白い手袋をはめ、腰には黒皮のベルト。その上を銀のくさりが巻いて、そのくさりから手錠がのび、マリ子の両手首を背中拘束。足は黒のストッキングを太股まで、はかせられていた。

「マンフィールド様。マリです。御指名ありがとうございます。あすの朝まで、たっぷりおかわいがり下さいませ。マリは、あなた様のムチやロープで存分、泣かせられることを心から、のぞんでいます」

と、あいさつされて、浩は感心した。よく仕込んだものと思った。

華枝は、そのマリの口を大きくあけさせ、鉄の玉のついた皮のサルグツワを、はめた。

そして両手首から長く連なっているクサリを浩に渡し、

「五号室に、なさって下さい。木馬が楽しみですよ」

と笑顔で二人を見送った。

マリを追いたてるように、その部屋から出廊下を、しばらく行くと、NO5と標示のある部屋があり、中に入って浩は、アツと驚いた。そこは、うすぐらい電気がついていて、まるで中世の監獄、魔女の拷問部屋そっくりに、できていた。

部屋に入ると扉をしめ、中から錠をおろすと、もう二人だけの天下だった。マリ子の背をつつきながら部屋中を案内させると、入り口近くにムチ打ち台、引きのばし拷問機、中央に回転水車、奥に木馬がつくってあった。天井に滑車もあり、さらに愛技用の中世風の豪勢なベッドもあった。そのベッドは四隅に鉄環のある責め専用のもので、それにすばらしい壁画が浩の目を、ひきつけた。よくみると、それは大谷進の友人の中山太郎の絵だった。魔女の拷問風景で、いまにも悲鳴が聞えそうなりアルな感じだった。

浩は、さてどこから始めようかと思った。手首の錠をはずし、一枚の分厚い手枷をとり

それを、はめてみた。その手枷についたクサリをたぐると、カラカラと滑車の音がして、マリは両手を高く開いて天井につられた形になった。足が、わずかに、つまさきだつ程度で止めると、マリが苦しそうな、あえぎ声を出した。浩は、にやっと笑った。悲鳴がいいと聞いていたので、サルグツワをはずしてやり、白のブラジャーをはずし、黒い皮のブラジャーに変え、パンティも破った。こうして浩の責めの第一課が始まったのだ。

浩はマリの両足首にも重そうな木の枷をはめた。それから細身の柳の木のムチを持ち、ヒューッとマリの前で振った。

「ああ、ああーっ、御主人様」

とマリが、せつなそうに顔をくねらせた。浩は、それが明らかに、媚態である、と思った。そう思った途端、思わずムチがマリの太股を打った。

「ひゃーあ、ああ」

マリは大きな悲鳴をあげた。

浩は、またニヤッと笑った。

このくらいでは、まだたいしたことはいハズだと思ひながら、いったい、どう扱ったらいいかと考え、無意識に四、五回、ムチで殴った。それから、マリを枷からはずし、皮

イメー  
ジャリー

## 『黒い猫』

マエダ・ヒオミ



のひもで背中両手首を、きっちり縛りあげ、口にも厳重に、つめ物をして皮のサルグツワをはめた。マリの体がこわばり、ふるえるのがわかった。

案外、この女は、まだSMの味を知らないのではないかな……浩は、ふとそう思った。

浩は、それをためす意味で木馬にのせてみたい、と思った。ママが木馬が楽しみといった意味も、といてみたかったのだ。

浩が木馬の傍にひきづって行くと、意外やマリは激しく抵抗した。だが、そんな抵抗は、ものの数でなく、かてて加えて天井から吊るされたくさりも利用でき、マリを木馬に追いあげるのは朝飯前だった。皮のパンティが中割れなので、浩は心配して、木馬の頭をなぜ、背をなぜているうち、一つの、つまみを見つ

た。それを押すと、頭が二つに割れ、中からワセリン状の軟膏と、黒光りのするデルドーが出てきた。

なるほど、これが楽しみという意味かと、浩はワセリンをデルドーにぬり、女の体に別のくすりをぬって装填すると、マリはそれだけで激しく、もがいた。

そのままの姿で木馬に腰をおろさせるとデルドーの基部が木馬の背にぴっちりとはめこまれ、女はイヤでも、きれいな騎乗姿をとらされることになる仕掛だ。

木馬の胴にヒザと太股を固定、足首に重しを下げ、木馬の頭を、もとにもどそうと、頭をつまみを押すと、頭は静かに閉じたが、木馬全体が微妙な振動をはじめ、マリの体が大きく、のぞけた。だが、いくらのもぞけても、もうマリは木馬から逃げることはできず自由のきく範囲内で必死に、もがいていることが、わかった。

なるほど！ これか、と浩は思った。浩は無意識のうちに水牛の皮のムチをとり、マリの尻を、はげしくムチ打っていた。

十分か、二十分か、しばらくすると木馬の動きは、とまった。浩が近よってみると、マ



りは鼻で荒いイキをつき、肩をあげさげし、全身、油汗をかいていた。

浩は、そっとその場を離れた。それから寝台に、ひとりねると、マリが激しくもだえるのが、わかった。が、放っておいた。このまま朝までと思ったが途中、ふと、気が変わった。というのは、一責めしたら隣室にいかかという木札を見たからである。

その下に行つてボタンを押すと、スルスルと戸があき、中をみた浩に目をみはらせた。何とそこには、江戸時代の拷問部屋、お白洲が、そこに作られていたのだ。

浩はマリを木馬からおろし、その部屋に連れ込むと忽ち全裸にし、そこに、しつらえてあった真田ひもで、きびしく縛りあげ、サルグツワも純日本風の手拭いに変えた。

サルグツワをかえるとき浩は、

「ああ、旦那様。殺してえ」

という女の、せつない悲鳴を聞いた。

『殺してやるともさ！』浩は、そう思った。

口には出して言わなかったが、女がいじめられる味を知っていることが、その言葉に現われていると思った。

真田紐で嚴重に縛りあげながら、女のひじの関節部分に両腕とも、かなりの静脈注射の

あとがあるのを見つけた。多分、覚醒剤や麻薬の跡であろう。そうでもしないと、この女たちが、身がもてるわけではないのだ。恐らく女たちは相手にされる前に一本、打ってもらうのではなからうか。浩は、そう判断した。そればかりではない、SMの訓練も受けているのだろう。

浩は日本式の縛りではエビ責めが好きだった。そうしておいて犯すのは、乙なものである。だが、浩はマリを犯す気にはならず、木馬のデルドーをはずして、利用することにした。その上に縄をかけ、体をたてに縛ることもできた。そうして足の裏や、わき腹を、こそぐると、女は自由になる爪先をふるわせて答える。

こうして浩は女を一しきり責めると、放置してそのまま寝台に入り、ぐっすり寝た。翌朝、目をさますと、浩は呼び鈴を押し、マリ子の方をかえりみることもせず、さっとひきあげた。浩の手から豪華枝へ多額の遊び賃が支払われたことは、もちろんであった。

だが浩は、ただ遊んだだけではなかった。

その日、浩は大谷進の暗室を借り、マイクロフィルムの現像をしていた。前夜、遊びながら、浩は胸のポケットにさしてある万年筆

の中にセットされていた小型カメラで、きちんと秘密の通路から、控え間5号室の内部、ついでにマリ子のあられもない姿から注射のキズあとまで、ばっちり、ぬすみどりしていたのだ。

さすがに浩は調査マンである。できあがったネガをみながら浩は、これは証拠になるとにやっと笑った。それに、いまごろは部屋の二、三個所に、しかけた盗聴器も威力を発揮していることだろうと思った。鶴子が近くにミニカーをとめて、一日中、盗聴している手はずになっていた。

## (十一)

こうして二、三日経ったある日、浩は「クラ」の会員グループによる乱交パーティーがあることをつきとめ、首尾よく葵ママからマンフィールド氏としてライセンスをとることに成功した。

盗聴のおかげで、その夜、覚醒剤の密売が山城組をあずかる代貸、潮田涉と、お客をよそおった上部団体、大東組との間で行なわれることもつかんだので、この乱交パーティーを機に手入れすることに決め、岩元警部を中心に準備を進めることにした。浩が内から、

外からは盗聴を利用して岩元が、というわけである。

その日、浩は約束の時間の午後七時より三十分、早めにバーミクラに行った。白い、こざっぱりしたスーツに派手なバーミリオンのネクタイ。いささか、やくざっぽい英国紳士風のスタイルで、店の扉をスーツと、あけた。いち早くマリ子が見つけてそばにやってきた。

「ミスター・マン、何とかさん。いらっしゃい。この前は、ひどかったワ。だけど仕方ないの、マンさんに惚れたのだから。ねえ、きょうはダメかしら？」

「さあ、どうなっているかな。きょうはパーティの招待客だから」

「そう。じゃ、だれがだれに当たるかわかんないわねえ」

「君か、ママさんだといいがなあ」

「ほんと？　ほんとにそういつてくれる？」

「ほんとだよ——マリ子は正直ものらしいものな」

「まあ、うれしい」

話しながら浩は店の奥に入り、ゆっくりとボックスに腰をおろした。

マリはエリと背中を大きくくったグリーン

の系統のミニのブラウスとスカートをつけていたが、目がいきいきとして、何となく、うれしそうだった。だが、よくみると、どこかやけっぱちな表情が残っていた。

とりあえずビールで一息いれていると、ママの豪華枝が、きょうは和服姿で、やってきた。大島の泥染め風の、きのきいたシックな模様の着物だった。地味なつくりで、この前と打って変わった、しとやかさがあった。

「やあ、ママ」

「マンスフィールド様。先夜は、どうも有難うございました。またきょうは、ようこそ」

「サン・キュー。きょうは、また楽しみで、

面白い趣向でもあるのかね。何か手伝うことでも……」

「それでございます。私がホステス役をしますので、ホスト役をひきうけていただだけませんかしら？」

「ホスト役？」

「そうです。こんどの秘密会ではSとMの会員が楽しむことになっていますが、私は、だれとも楽しみたいありません。だけど、ホスト役が必要です。カップルでないといけない規則になっています。ところが、私の相手役がちょっとケガをして来れませんので、そ

の代理をしていただきたいのです。私がMで登録しているのでSの方。しかも信頼できる方であればなりません。マンスフィールド様なら二世でもあり、大谷さん、中山さんの知人とか。それで、この前いらっしゃったときから、お願いしようかと……」

「そうか、そんなことできるかな」

「あら、ご冗談を。この前のお手並み、みごとでございますしたワ。マリ子を抱かないところなど、堂々たるものでした」

「いや、お恥かしい。美人のママから口説かれては、イヤとはいえませんが——で、具体的に、どうするのです」

「パーティは例の5号室と隣の4号室の壁をはずしてしますの。あなたは、そのまま結構ですが、私は黒皮のブラジャー、金色の貞操帯に、黒手袋、黒ストッキングの、いでたちで、後ろ手錠、王冠姿になります。この前のマリに似た形ですが、頭からスケスケのベールを、ひざあたりまで垂らします。あなたは、その私を舞台に出し、いまから会をはじめると宣言して、最初に、そのモデルとして、私の手錠をとり、首枷に手を入れて、固定。柳のムチでお尻をたたいて場内を一周していただきます。これが儀式です」



「なるほど。それから？」

「それが終わると、乱交パーティが始まります。あなたと私は、すぐそこを出て3号室にうつります。そこは個室で普通、私のプライベートルームにしていますが、各部屋を盗み見できる装置もついています。そこに帰ったら、二時間位、暇があります。このパーティのときバーミクラは閉店していますので、だれもくる気遣いは、ありません。たっぷり楽しんで下さい。これが私の最大のサービスです」

「ありがとう」

「会が終わったら、私が送って外に出ますワ。」

私も、それでお役ごめんですの」

「マリ子らは？」

「ひとり者の会員のパートナーとして三人だけ使っています。その一人です。あの子は、かなりマゾっ気が強いので、大事なホステスの一人ですよ。そう、あなたには、ごっこん参っていたようすわ」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。それは光栄なことでは——」

「それにしてもマンフィールドさんは日本語がお上手で……」

「なに、ハワイの生まれだが、もともと日本

で育ったし、あちらには、最近、行って二年ほど住んだぐらいのものですからネ」

「あら、じゃあその頃、大谷さん？」

「そう。あの人は私のSMの先生です」

「なるほど、責め方が似てますワ」

「こりゃ驚きだな」

浩は頭をかいた。ママが仕事の話を始めたとき、もうマリ子は、そこにいなかった。

会員も一人、二人と集って来はじめた。いずれも仮面をつけており、楽しげだった。その人たちにママは頭をさげ、あいさつしていたが、ボーイ長が会員をとりしきりだしたので、ママは浩と、いっしょに3号室に入り、儀式的服装を、ととのえはじめた。

裸になったママは、外見よりずっと豊かな肉体をしていた。山城組長の正妻だけあってもう三十台のはずだが、二十台のような、みずみずしさだった。しかもオキキャンで、やぐざっぱいところがあり、浩は思わず、ごくりと生ツバをのんだ。

「どう、まだ見捨てたものじゃないでしょ」

「驚きました」

浩は、正直に頭をさげた。

ニンマリとはほえみながら、ママが黄金の貞操帯をはめると、まさに西洋の妖姫といっ

た感じだった。ママは目のやり場に困る浩をせかせ、腰に厚い皮のベルトをまき、それにしつらえられた手錠を点検した。頭からベールをかぶり、王冠をのせ、姿見で恰好をととのえたあと、浩にいつて後手錠にはめさせ、銀のくさりを持たせた。これで準備OKだった。

いよいよパーティは始まろうとしていた。ボーイの合図で、浩はママをうながして外に出た。

時計をみると、まだ岩元らは待機もしていないところである。余り早くて敵に気付かれてはというので、ギリギリまで、その素振りを見せないことにしてあった。だが、山城一家では、きわめて大事な取り引きも行なわれることでもあり、子分を、あちこちに張り込ませていた。それが浩には、よくわかった。

ものものしいな——

と思いながら、今夜の手入れ一本にも、SM一本にも、打ち込めない自分を発見し、落ち着いてと自らに言いきかせていた。

浩と華枝が4号室に入っていくと、中央に舞台があり、二十人ぐらゐのカップルが浩らの到着を待っていた。

最初にママが、つづいて浩が台の上にあが

ると、パツと電灯が消え、浩とママと二人だけのシルエットがライトの中に浮かびあがった。

「きまりにより、会の儀式をします」

浩とママが口をあわせ、いっしょに、おごそかに宣言した。

浩は約束どおり、ママの手錠をとり、そばに立っているホステスの援助で首カセをとり



イメージギャラリー

『同棲時代の思い出』

岡 かし

ママをカセに固定した。

「さあ、神の前に、ぬかずくのだ。ゆっくり円を、えがいて歩け」

浩が命じ、白木の柳のムチでママの尻をピシャリと叩くと、ママは、

「神に幸あり」

と叫んで、直径五メートルぐらいの円弧を描いて舞台の周囲を回り、終って静かに座った。それから日本式の礼で祭壇に、ぬかずいた。浩は再び、そのシリにムチを振った。ひとしきり振るうと、皆の祈りの声が聞えスポットが消え暗黒になった。それと同時に約束どおり浩らは、その部屋を脱出、3号室に入った。

3号室の盗視テレビを入れてみると、4、5の両室は共に明るい電灯がとまり、各カップルごとに派手なゲームが始まっていた。

浩に見覚えのある木馬に女をのせようとする者。男を犬のように、はわしている女。さまざまだった。

「どう、ミスターマン。もうもえてきたわ」

「いいなあ、ママさん」

「ふ、ふ、ふーん」

鼻をならすママに言われるままドアに施錠すると、もう二人だけの世界だった。儀式の



ムチだけで、ママは、もうほんのり上気していた。山城組長がパクられてから、もう三カ月、かなり、男ひでりのはずである。燃えていたとしても当然と浩は思った。

「ママは日本流が好きだってね」

「また、だれが、そんなことを？」

「ママの顔に書いてあるわ」

「にくらしい人」

「さ、覚悟、覚悟！」

と浩は言い、王冠、ベールをとり、ブラジャーをはずし、首枷をとると、そばの箱からロープをとり、背中にママの手首を回し、きっちり縛りあげた。こうする方が手入れのとき、手錠より、とれにくいと考えたからである。

浩は、そのロープを方円流の規則にそって嚴重に首、腕、胸と縛りあげていった。縛り終ると、次はサルグツワにかかった。これは皮製の方が、よくしまる。浩は、つめ物を口にかませ、皮製のサルグツワを、しっかりかけたあと、ロープで鼻と口を中心に頭を亀甲しぱりにした。念には念をと、いうわけである。それから貞操帯を、はずした。ママは、それだけで、のどをならした。

「まだ早いよ、ママ」

浩は、わざと、そういう、ダンスの引き出しからデルドーをつけた皮パンティを探し出し、ポケットから媚薬をとり出して塗ると、それをかけ、その上から、きっちりロープをかけた。腰縄をしめたあと、股間縛りを施したのである。

このデルドーのパンティにはコンセントの受け口があり、電動される仕組みになっていた。足首を交差して縛り、うしろ手と結んで逆さエビ縛り姿にすると、ぐっと、からだがりかえった。うつむけにして縛りあげたママの体を一、二、三で、あお向けると、ママは自分の体の重みで体中の縄がしまり、ウ、ウ、ウと悲鳴を洩らした。その様子を見ながら、浩はコードをセットした。スイッチを入れると体がピンと、こわばった。

それから向きをかえ、ママの胸の上にまたがるようにし、その乳房をもて遊ぶと、ママが顔をふって、それにこたえた。悲鳴が洩れ目がうるんで、せつなさそうな、表情を訴えた。

浩は、それを楽しみながら、時計を見た。手入れ約束時間まで、あと二十分ぐらいあった。浩は、あたりを見回し、ダンスを探し、黒い布を見付けてきた。激しく首をふって抵

抗したが、ママの目は忽ち視覚を奪われてしまった。それから浩は監視テレビを操作してみた。2、4、5、6、7号室は、いずれも監視できたが、1号室だけは、ダメだった。ホテル「夕づる」も、そこから見れた。浩はすべて調べてみて1号室で麻薬取り引きが行なわれているにちがいないと思った。

監視テレビのスイッチを切り、3号室のドアの施錠を確認すると、浩は秘密通路を調べてみた。栄子の話で、それらしいものがあると知らされていたものである。戸棚を動かすと小型のドアがあり、裏口への通路に通じていることがわかった。

浩は部屋に、とってかえし、手錠を一組とると、部屋の電灯を消し、脱出にかかった。迷路のような道を二、三十分進むとボートと光が見えてきた。足音を消して近づくと、屈強な若者が一人、外を警戒していた。浩は、それを見ると、猿のようにとびかかり、当て身をくれた。男は朽木のように倒れた。その男の両手に手錠をはめて後ろ手にきめ、タオルでサルグツワをかませ、外に出た。

そこはトルコ「カナリヤ」の庭の一隅であることがわかった。栄子の指摘したとおりだった。小さな物置きのようになっていた。そ

こを出るとカナリヤの裏口があった。浩は、そこから外に出ると、近くの公衆電話に入り警察に電話した。

岩元警部が出た。

「OKだ。予定どおり、本隊は「クラ」の玄関から中へ。一隊は、「夕づる」の玄関をはれ。また最後の二隊はカナリヤの裏口へ。オレは、そこにいる。マダムは3号室で棒にしている。取り引きは1号室らしい」

浩は一気に、しゃべった。

「ありがとう。出動だ、出動！」

という岩元警部のドスのきいた声が受話器

を伝わってきた。

それから十分後、浩はヤミの中に長身の山田警部補の顔をみた。警部補は、ハンデイトキーと投光機をもち、機動隊一コ小隊を動員して、そこを固め、十五人を連れて、中におどりこんでいった。

浩は、それを見届けると、暗い道をひとり歩いて、鶴子が待機しているミニカーに乗りこんだ。

「すんだよ」

じつと浩を見つめる鶴子の目に涙が、わいてきたかと思うと、急に抱きついてきた。

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

|    |       |     |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 五万円 |
| 良作 | 一篇につき | 三万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 二万円 |
| 佳作 | 一篇につき | 一万円 |
| 可作 | 一篇につき | 五千元 |

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めま

す。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさ、求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

「蟻」にかえって、警察の捜査本部に電話を入れると、福島署長と井上博士が待機していた。最初に電話に出たのは署長だった。

「山根君、御苦労さん。成果は、あとで報告するよ」

と、がっしりした骨太のジャレ声が返ってきた。浩は博士に変わってもらった。

「ママの許可を得たんで、鶴子と、一週間ほど旅に出てきますが、「クラ」のホステスでマリ子というコをたのみます。覚醒剤中毒になっっているらしいので、なおるまで栄子といっしょに療養させてやって下さい」と浩は頼んだ。

「わかったよ。ゆっくり楽しんでこい」

という博士の言葉をみやげに、浩は鶴子を迎えに行った。

訪問着に着替えた鶴子を、姉の広子のマイカー、ニュー・コロナの助手席に乗せると、広子に見送られて出発した。

二人は何も話すことはなかった。――

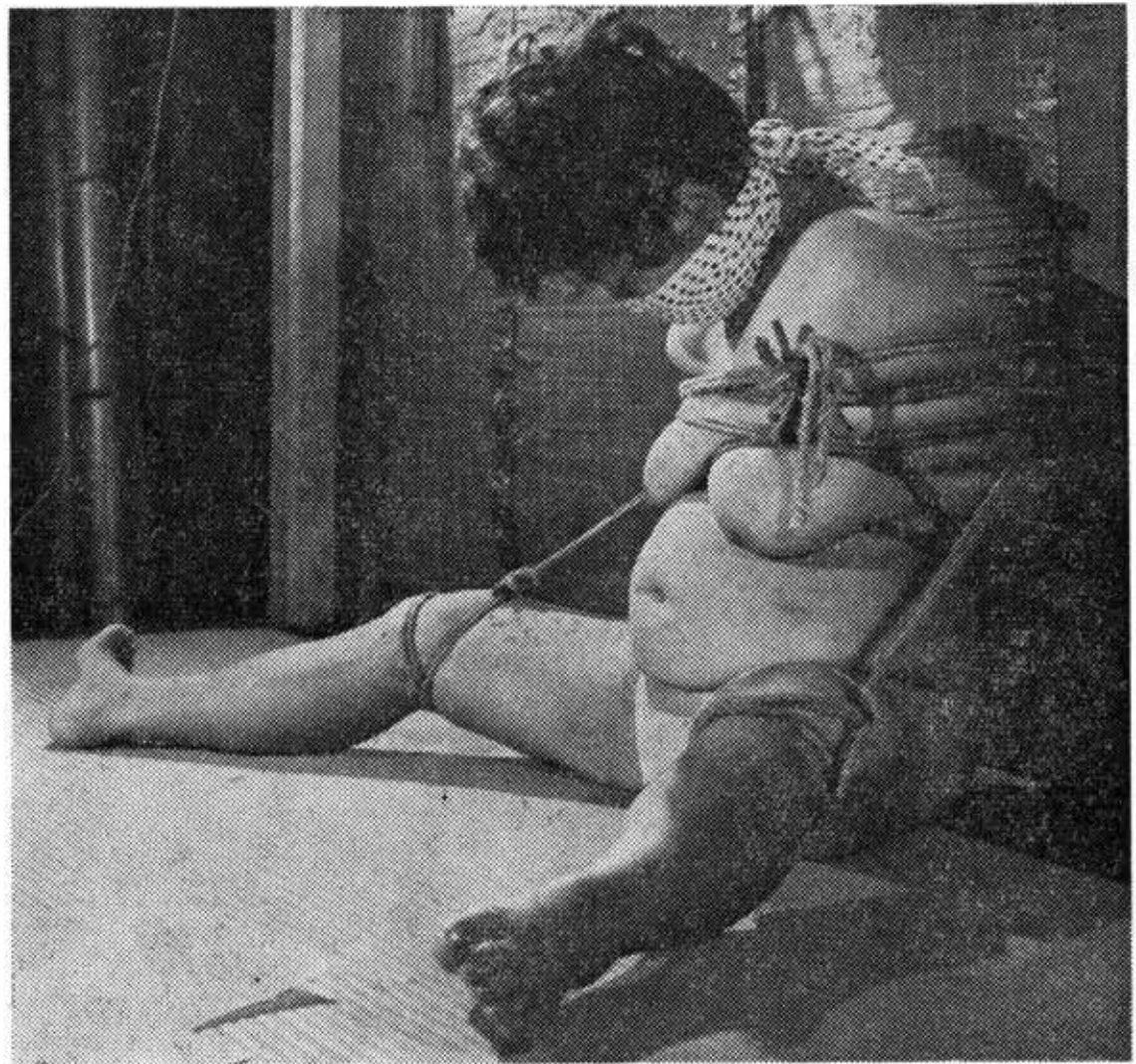
ただニコッと、ほほえめばよかった。

旅の宿で鶴子が、どんな痴態を示すやら。

浩はSM器具一式をそろえたトランクをみやり、夜の訪れが、できるだけ長いことを願っていた。

(おわり)





編集長さま

この前は、とんでもない、お願いをいたしましたして、はしたない自分を、ただ、ひたすら恥かしく思うばかりでございます。

この頃、やっとのことで、浮気止めに剃られましたアトが、人並みに生え揃ってまいり

△昔は物を思わざりけり▽

# 熟<sup>う</sup>れてゆく私<sup>わたし</sup>の体<sup>からだ</sup>

苗<sup>なえ</sup> 木<sup>き</sup> 陽<sup>よう</sup> 子<sup>こ</sup>

まして、以前の彼との浮気も、天下晴れて出来るようになりました。

でも、あの、生まれて初めて両手を縛られて剃られましたときの、思わず失神してしまいましたショックは、終生忘れる

ことはございません。あんな激しいショックを受けてしまっただけからは、もう、ありきたりのことでは、私の体は感激しなくなってしまいました。

夫の生前、一度だって、そんなことをされたこともない私でしたのに、塚本さまに、お

逢いしてしまっただけからは、まるで、別人の自分に生まれ変わってしまったみたいです。

編集長さま

この頃の私って、自分の体が別人に生まれ変わったと思うばかりでなく、一日一日、果物が熟<sup>う</sup>れてゆくみたいに、肉体が熟<sup>う</sup>れてゆくように思えてならないのです。

昨年の八月に初めて責められて以来、僅か四回かプレイをして頂きませんのに、私の体って、こんなにも変わるものなのでしょうか。

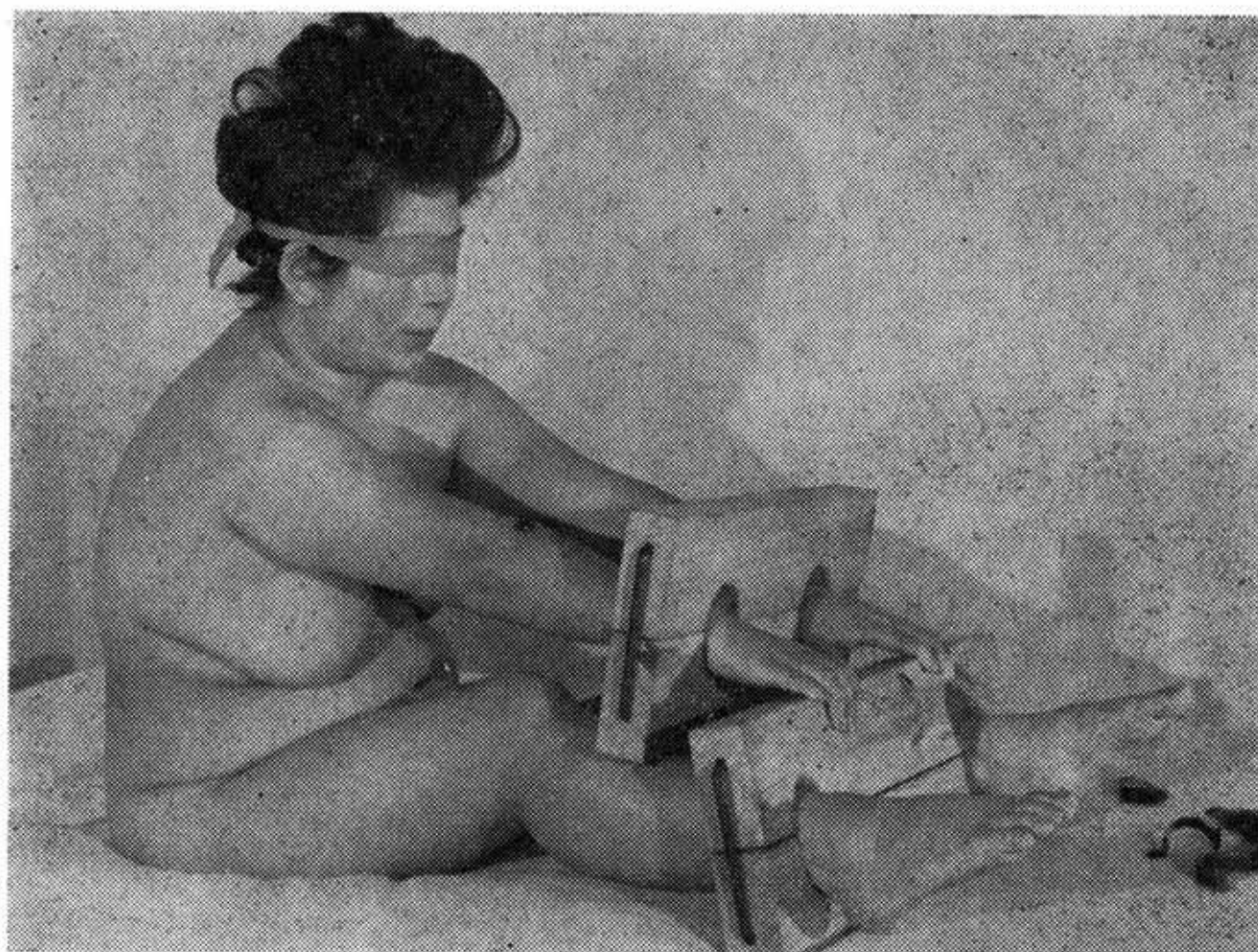
金庫の奥深く、大切にしまひ込んであります奇クと写真をとりだしては、それを眺めながら、部屋のなかで素っ裸になって、たった一人でする激しいマスターベーションが、今の

私の唯一の楽しみでございます。ときには、そんな有様を三面鏡に映して、喘ぎ、悶える自分の姿を眺めて楽しみます。

塚本さまに責められますと、ただ、私のしてほしいという、少し先を見越して、うまく責めて下さるというばかりではなく、沢山の写真に撮られ、そして、そのときの有様が、細大洩らさず、カメラ・ルポの文章に書かれるのです。いいえ、書かれるばかりではございません。それを奇譚クラブのトップに載せてしまわれるのです。

そして、日本全国のSMファンの方々に見られ、読まれてしまうのです。最初のうちは、とてもイヤだったのに、いつの間にかやらそれが、たまらない刺激になって、プレイしていても、これがルポで書かれるのだわ。この写真が分譲品として、マニアの方々の手に渡るのだわと考えますと、思わず、身ぶるいするような興奮におそわれます。

塚本さまとSMプレイをしています限りそうした戦慄的な感激は拭い去ることはできません。もっと、もっと、ひどく責めてほしいという気持が、次々と湧きあがってきて、どうしても、抑えきれません。



昔の私は、こんなでなかったのに、あれ以来、どうかしてしまったのでしょうか。昨年の十二月に、坂本さまとお二人で責められ

てからというもの、沢山の方々に輪姦されたいという、おぞましい願いさえ起ってきてそれをペンにさえてしまった私です。

そんな私の大それた願いが、空かけて通じたのでしょうか。二月中頃になって、塚本さまから連絡があって、「二月中旬に、御都合のよい日を言って下さい。女体責めのベテランを、二人か三人、揃えますから」ということでした。そのときの私って胸も躍るばかりの嬉しさでした。すぐに、「は、はい」と、お約束してしまったのです。

それなのに、悲しいことが起ってしまったのです。私の大変御恩になった方が、前々、お悪かったのですが、急に入院なさって、そして、お見舞い、看護と、あわただしい日々が続きました。悲しいことに、手当ての甲斐もなく亡くなられ、お通夜お葬式と、手の放せない、毎日でした。

はっと気がついたときは、すでに三月の声を聞いておりました。  
編集長さま



人の世って、悲しく、そして、はかないものでございますわね。そんなことを想うにつけ、やはり、元気で生きている間に、せめて好きなことを思いっきり楽しみたいって、気持ちが湧いてまいります。

私は、これからの自分の残りの人生を悔いなく生きるために、身を灼くような激しいSMプレイに没入したいと思いました。そんなところへ塚本さまから電話がありました。

「二月は日を知らせるからって言うことだったので待っていたのに、一向に連絡がなかったじゃないか」と叱られました。

私は、くどくどと弁解しませんでした。そのかわり、「じゃあ、三月は、あなたの御都合のよい日、おっしゃって。その日には必ずまいりますわ」と答えていました。

三月十二日、十三日の両日、一泊の予定でくるようにというのが塚本様の、言いつけ



でした。S研の会員、三名ばかりに話をしておく。そして、一流のホテルの飛び切りの部屋を予約しておくから、とのことでした。

もう、その日の晩から、私の胸は、わくわくしてまいりました。胸ばかりではございません。お恥かしいことですが、ここに書き出すことが憚られます部分ですが、熟れたようになってきたのでございます。

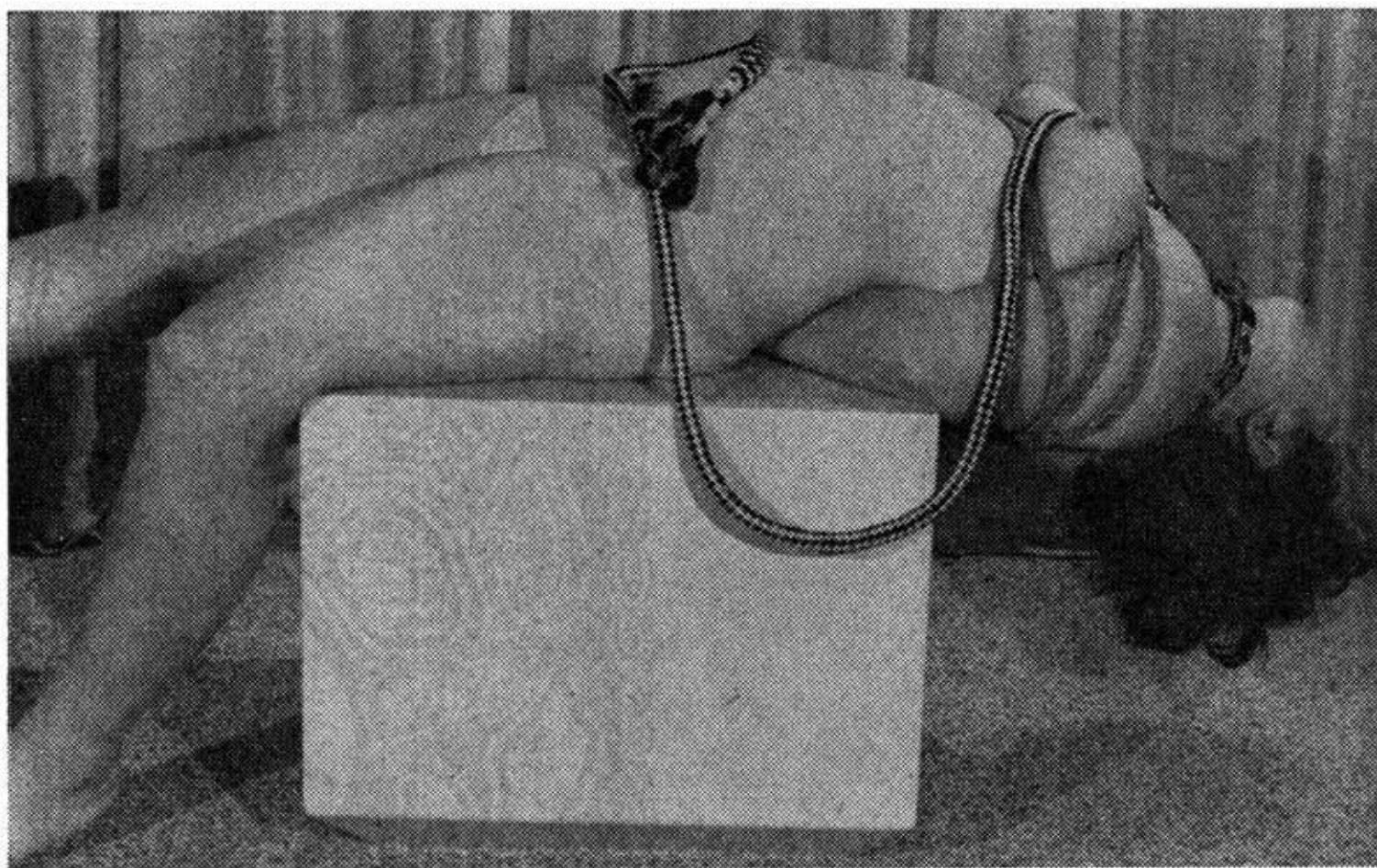
塚本さまはじめ、何人もの、ベテランの男

性の方に、よってたかつて責められる。そして、そんなあられもない自分の姿がカメラに収められる。そう考えただけで、私の全身はかっかと燃えてきました。

なんとという楽しい気分でしょう。か。ぱっと目の前が明るくなったような、はやいだ気持ちになりました。十二日には、本当に久しぶりに、この肉体が、男の人たちの思うがままに責められ、そして自分がケモノのようになってしまうのだと思いますと、身ぶるいさえしました。何人の方々が来られても、自分一人で受け入れてしまおう。そう決心しますとそれがまた、たまらない感激でした。自分の体が、どんどんと熟れてゆき、ふくれあがってゆく感じがしました。

編集長さま

それなのに、世の中って、本当に、ままならぬものでございますわね。そんなに、その日の来るのを指折り数えて待ちながら、十二



日の朝を迎えて、塚本さまに、お断りのお電話をしなければならいなんて、こんな悲しいことはございませんでした。

その理由を、いくら弁解がましく申しあげたところで、折角、ホテルの部屋を予約されS M研究会の会員の方々を、お招きしておられた塚本さまのお怒りを静めることはできません。

ひょっとしたらこんな私を、もう二度と、お誘い下さらないかもしれないかもしれません。

今度お逢いしたら、またまた、ツルツルの禿坊主に剃られてしまうのだと、幾夜、考えたことでしょう。そんなことを考えながら、一人寝のベッドの中で繰り返したマスターベーションを、これからまた、続けなければならいのです。

陽子って、本当に好色な女でございすわね。もう、こうなってしまう以上、死ぬまで直らないと思います。

ですから、陽子は溺れて溺れて溺れきってしまいたいのでございます。

この償いに、今度、塚本さまに、お逢いしましたときこそ、それこそ、徹底的に責められ、ケモノ以下の扱いをされてみたいと思っております。

もう、どんなむごたらしいことでも一晩中お受けする考えでございます。

そんなことぐらいで、お詫びになるとは思いませんが、もし、陽子に、次の機会を、塚本さまが、お与え下さるのでしたら、同じS M研究会のメンバーの方々の手で、この私の肉体を吊るし上げて頂いて、償いをいたしとうございます。逆さ吊りの開股のままで、罰として犯されましたら、これ以上の感激はございません。

編集長さま

もし、塚本さまにお会いなさる機会がございましたら、どうか、よろしく、こんな私のお詫びの気持を、お伝え下さいますよう、お願い申し上げます。

末筆ではございますが、編集長さまの御健康を、心から、お祈り申し上げます。

かしこ

苗木 陽子





第六十八回

ロンドン  
倫敦パレード

アメリカ娘アンが、まんまとスリ変ってメリー王女になりすまし、予定通り落馬して大騒ぎになっている丁度その頃、クラブハウスから百メートル程、離れた谷間に、ひっそりと停めてある車があった。トレーラーをついている。いわずと知れた蔡樹理のものであった。

そのすぐ側に湧き出したように人影が動いた。そこは競馬場の下水路にあたり、空気抜きのマンホールがついている。そういえばク

ラブハウスの裏手にもマンホールがあった。有明は麻酔で死んだようになっていてメリー王女をかついで、この下水の中を這って来たのである。下水渠の中で、例のゴリラの毛皮で裸身をスッポリと覆った。そこだけはムキ出しになっている臀部に赤色のスプレーを吹き付けた。もちろん、猿轡もカマしてある。死んだように眠りつづけている王女は、何をされても為すがままであった。

トレーラーの上に取り付けてある鉄檻の中に頭から押し込んでピーンと錠をかけた。プラスチックで出来たディスプレイサブルの注射器を格子の間から射し込んで、赤く塗っ

た臀に突き立てる。ビクビクッと慄えがきて犠牲者は息を吹きかえした。

ゴトンゴトンと揺れる振動の中で、メリー王女は次第に現実を認識しはじめていた。トイレの中で、何者かに抱きすくめられてからのことは、一切わからなくなってしまっている。ツーンと鼻にきた甘酸っぱい匂いがまだ記憶に生々しかった。

——誘拐されたのだわ。  
ゾーッと脊筋が寒くなった。王族の一人として身の危険はなかったとはいえない。それはそれなりに覚悟があった。しかしラディ

カルなグループは、ほんの一握りで、大部分の国民は依然として王室を敬い、その一族を愛しているという自信があった。そうした自信が、彼女を自由奔放にしていたといっている。つまり、何かあっても、それは交通事故のような確率の災厄であろう。そして、それは卵をぶつけられるようなことから始まって

せいぜい銃撃される程度だと思っていた。ケネディ大統領が狙撃されたとき、護衛達が心配しているという話を聞いて、彼女は「メッタに当りはしないわ。死ぬときは馬から落ちたって死ぬんだから、そんなにクヨクヨしないで……」と言って、かえって彼等をなぐさ

前号まで「秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等はその機質に応じて五段七階級に分類され、巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。特に今度のG号作戦では英国王室のメリー王女が標的にされていた。全組織を総動員した有明は、王女の替え玉をつくり、見事に本物の王女を誘拐してしまった。あとは原潜ネプチューン号に移せばよいわけである。」

めたという逸話が残っている。

しかし、彼女が漫然と想像していた危険の中に誘拐は全く入っていないかった。それは、たえず護衛の監視下におかれている身分では彼女を攫うという可能性は殆どないといっているからであった。

何よりも彼女を萎縮させたのは、着ていたものを全部、剥ぎとられてしまっているらしいということ。そして、自分の顔にかぶさっているマスクのレンズを通して、手足がゴリラの毛皮につつまれていることを知った。

彼女には想像も出来なかったけれども、ムカつくような汗くさい臭い、素肌にザラザラと当る不快な裏皮の感触。すべてが彼女の先輩たち、朝小路久子やジーナ、そして近くは百合子とアンが積み重ねてきた残り香だったのである。

立ち上ろうとしても手足が自由に動かないのは、狭い鉄檻の中に閉じ込められているのだとわかった。そして、一カ所だけ、見ることもない部分だけが、どうやら、床に直接、さわっているらしいということに気がついたとき、メリー王女の絶望は最高潮に達した。さっきから間歇的に始まっている尿意が、

その絶望に拍車をかける役割を果たしつつあった。どうしてそれを処理したらいいのだろうか。このまま、誰の助けもなく時間がたつてゆけば、どうしても今すわっている床に放出してしまわなければならなくなる。

トレーラーをつけた蔡樹理のベントは国道M-30をロンドンに向って、ひた走っているいつも、メリー王女が愛車ローバーを駆って走る道であった。

行き交う車は、誰一人、このトレーラーの中に王女が檻禁されていると知らない。さらに、もっと想像を絶することは、アン王女が生れてはじめて、最もみじめな状態のもとでその体内にたまった液体を放出したことであろう。檻の床に、から車の床下までゴム管で接続されたドレインから流れ出した液体は、数百メートルに亘って、細い線状に路面を濡らしたのであった。

宿舎のサボイホテルに帰ると、車はそのまま裏庭の納屋へ廻って檻ごと、その中に運び込まれてしまった。

森閑として、ほのぐらい納屋の中に、一人身を慄わせて、すすり泣く薄倅の王女だったけれども、外目には、あくまで一匹のゴリラ



が、何故か力なく蹲って、呻いているとしか見えない。

その頃、ロンドンの夕刊紙や放送は、口を揃えてメリー王女の落馬と、ウインザーにおける静養。そして当分の間、王女に関するアポイントメントが取り消される旨を報道していた。

二人の美女を従えた有明が入ってきて、王女には相手が誰であるか見当もつかなかった。詰問しようとしても、口を封じられていては、それも不可能だった。

彼が持っているのは新聞紙の一束である。

「どうかね、ゴリラさん。その居心地は」

などと嘲笑しながら、それをひらひらと見せつける。

「ディリー・ミラーだ。読んであげようか……」

呆然となる王女。自分の失踪が、さぞかし大騒ぎになっているものと推測していたのが見事

にアテが外れてしまったのである。

——自分以外に、もう一人のメリーがいる。

もしやと思った期待も今は空しい。誰もメリー王女が誘拐されたと気付かず、まして、替え玉だとは気付いていない。そうならば捜査網も敷かれる筈がないのである。

「ロンドンでは平常通りの生活を営んでいる」

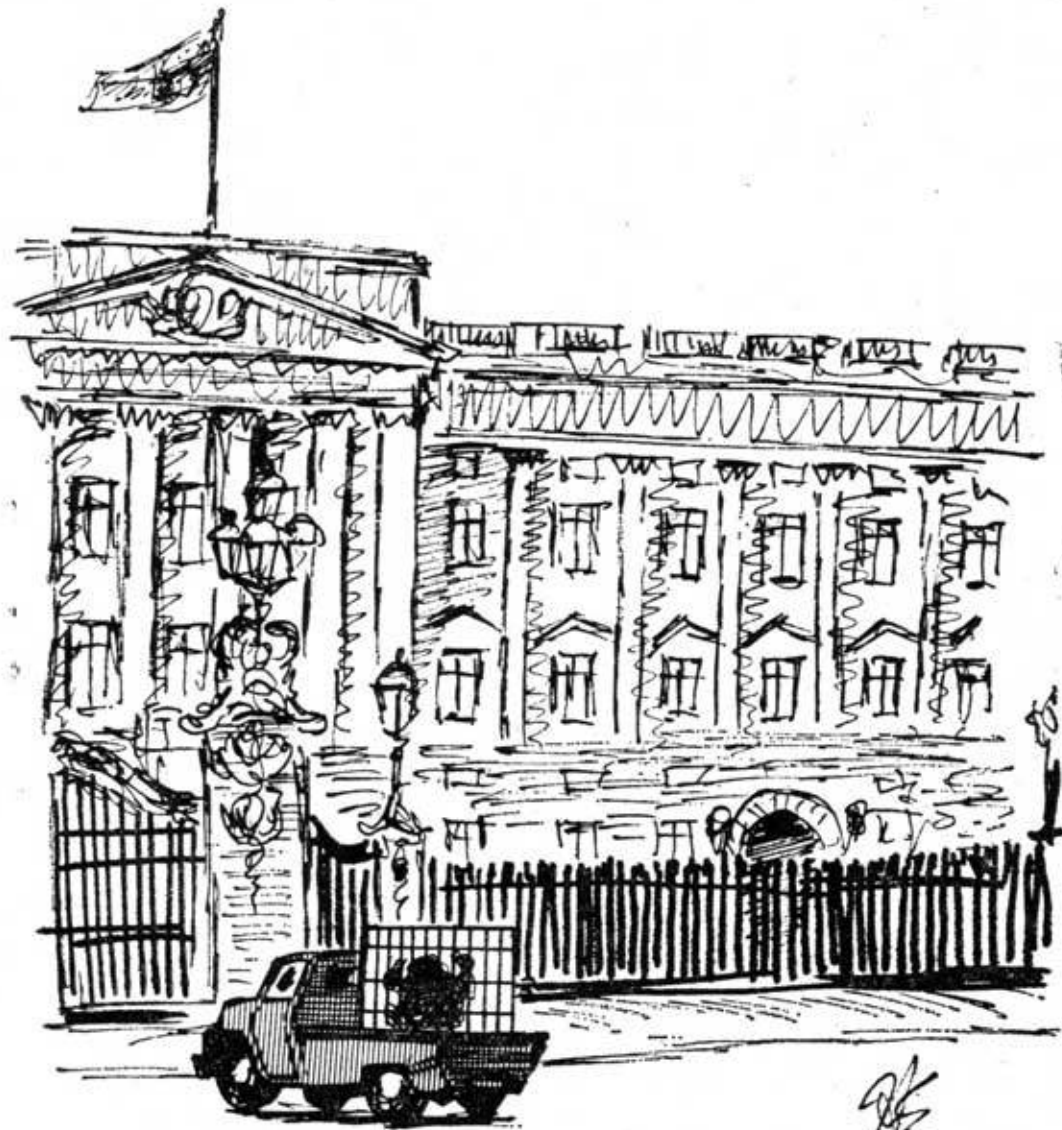
有明がズバリと言った。

「とんだ△王女と△食△だったね。王女の替え玉はアンというアメリカ娘で、顔も声も、ほとんど区別が付きにくい程、整形してしまっている。あとは王女の生活に馴れることしかない。落馬のショックで一時的に記憶を喪失したことにして矛盾をゴマ化そうとしているんだが、新聞には勿論、そんなことは発表されていない。だが、何も発表されていないということ、は、アンが結構うまくやっていることの証拠だと思ふよ」

「ウーウー」

毛皮の奥から洩れてくる声が一層、はげしくなった。プライドを傷けられた王女が本当に怒り出したのである。ゴリラのぬいぐるみの中に閉じこめられていることも忘れて立ち上ろうとした。しかしそれとても、空しく鉄格子をガタガタいわせただけにすぎない。

「ああ、吼えるがいい。暴れるがいい。血腥い獅子王の子孫よ。おまえの祖先がやってきたことを、



今、おまえの肉体に思い知らせてやろう」

シェイクスピア劇の主人公のように勿体ぶった態度で有明が威した。が、すぐ元の口調に戻って、

「これからロンドンを離れる。昔、エクスカーション（処刑）の前は、見せしめのためロンドン市内を引き廻しパレードしたという。それで、おまえにとって懐かしい場所を、いくつか廻ってやることにするから、有難く思え。多分、一生の見納めになるだろうから」

いつものトレーラーをやめて、イギリス・フォードのピックアップが用意されていた。ゴリラの檻は、その荷台に乗せられ嚴重にロープが、かけられた。そのまわりに荷物が詰め込まれる。

「今日はトラックですか」

出発しようとエンジンをかけたとき、ウェールズ訛りの庭師が近づいてきて、蔡樹理になりすました有明に挨拶した。

「ええ、長いこと、お邪魔をしました。今日ロンドンを発つものですから、このゴリラにもシテイを見物させておいてやりたいと思いましてねえ。ハハハハ」

と、すぐく上機嫌である。それにつられてお人好しのウェールズ人が檻に手を出そうと

すると、

「おっと、止めて下さい。今サカリがついてるんで、噛みつかれますよ」

下品な言葉に一層、狂ったように暴れ出すゴリラをみて、さすがの庭師も、たじたと手を引っ込めてしまった。

サボイホテルを出たピックアップは、ビクトリアストリートを通過してバックingham宮殿の前に入る。

正門前に屯っていた群衆が、驚いて振りかえった。いつも不動の姿勢をとっている赤い制服のスコッチガードさえ、目を動かせたくらいだった。

ゴリラの檻を積んだトラックが宮殿の正門に近づいてスピードをゆるめたからである。

自分を認めさせようと空しい努力を繰り返すメリー王女。だが、群衆は彼女をゴリラとしか、見てくれない。

ゆっくりとした動作で近づいて来た警官が「どうしたのかね。この場所に、そんなものを乗せて来ては困るのだが……」

と言う。

「いや、失礼しました、オマワリさん」

有明が一寸、片目をつぶって、おどけたよ

うに言った。

「このゴリラは私の家族も同様なんで今、ロンドンの名所めぐりと、しゃれこんでいるのです。女王陛下も夫君殿下も、このゴリラとお話しなされたら大喜びなさいますよ」

プツと噴き出した警官が、

「冗談をいいなさんな。女王陛下はゴリラなんかのお知り合いはないよ。さあ、そんなことより、サッサと行ってくれませんか。人だかりがして困るから」

悲しそうな声で、ゴリラが吼えた。それは妙に、くぐもったような声だった。冗談をいいなさんな——といった警官が、このゴリラの中味がメリー王女だと知ったら、死ぬ程、びっくりしたに違いないのだが、彼は簡単にこう言っただけだった。

「ホホウ、ゴリラはこんな声を出すものか」

トラファルガースクエア、ピカデリーサーカスなど、人目につきやすいところを練り歩いたピックアップは、物見高い群衆の視線をいっぱいに受けた。

変り者の中国富豪が、ゴリラを連れて旅行しているということは一寸したコラムニュースになるであろう。だが、その背後に世紀の



一大誘拐犯罪が隠蔽されていることに気づくものは一人もなかった。ひとり、やっきとなつて泣きわめいているメリー王女を除いて、すべての人には、あたりまえのテンポで、あたりまえのことしか、していない。

車はウエストミンスターアベイからパリアメント（国会議事堂）の側を通過してテムズ河に出る。ウォーターロー橋を渡らずに左に折れ、テムズの左岸を、どんどん走り出した。

もう人通りはなく、ただ車のラッシュである。そこではゴリラをつんだピックアップは問題にもされない。

三十分ほどして、ロンドン塔近くに、もやっているエミコ号に着いた。

ゴリラの檻は積み出したものを、もとへ戻すのだから問題はない。税官吏も、警官もチェックさえしなかった。第一、外交特権を持つガボンの公用船では、そのチェックさえ遠慮すべきだったかも知れぬ。

今や、すべてのものが揃った。エミコ号は銅鑼を鳴らして、もやいを解き、静かにテムズ河を下って行った。

翌朝の新聞には、蔡樹理のゴリラがロンドン見物をしたことが面白おかしく書かれていた。それから、もう一つ。メリー王女の身の

廻りを世話していた美しいイングリス郷夫人が突然、失踪したことが簡単に報じられていた。

## しわがれ声

怪鳥のさえずりのような甲高い声が、ドームに反響していた。電気鞭を振るうアマゾン女兵の叱咤も、それに応じて噴出する女囚たちの悲鳴も、すっかりシワガレ声になってしまっていた。

高い気圧から常圧に戻る時かかる怖ろしい潜水病を防ぐには人間の体内から窒素を追いつてしまわなければならない。

その方法として、空気の代りにヘリウムと酸素の混合ガスを呼吸させるのである。こうすると潜水病には、かからないが声が、すっかり変ってしまう。

ドームの真上には原子力潜水艦ネプチューン号が到着していた。その前日、エミコ号から、ひそかに脱出した有明以下、捕獲女囚を収容して、ここまでやってきたのである。エミコ号は、ニセの有明、ニセの蔡樹理、そして、これだけは予め船艙に用意していたホンモノのゴリラを乗せてガボンまで順調に航海

して行くであろうが、彼等を追うことは、この物語の本旨ではないので、われわれは再び焦点をネプチューン号に戻すことになる。

スチールスプリングで充分、水圧に耐えるように出来た直径八百ミリほどのゴムパイプがネプチューン号とドームのヘッドとを結びつけた。例によって二本のワイヤーが上下して次々と女囚たちを引き上げ始めた。

腋の下をまわして、ゆるく縛った紐にフックをひっかけて引っ張りあげるのである。胸乳が牽かれて、その痛みで皆一様に悲鳴をあげる。カラスのような声が一層、哀れさを、さそっていた。

朝小路久子の場合は、依然として上下の歯をトレイでガッチリつなぎとめられていたから、その悲鳴さえ、出せなかった。ジーナも同様だった。

最後に、アマゾン女兵たちが収容されるとハッチが閉められた、フロッグマンたちによってゴムパイプも外され、ドームの中に海水が充たされる。一切の機械設備が嚴重にシールドされ、次の作戦で使用するときまで海底でひっそりと眠りつづけるのである。

収容が終ると星エミー司令は直ちに帰還の命令を発した。G号作戦は、その目的を達成したのである。獲物を一ぱい抱えたネプチューン号は、船脚も重く大西洋を南下しはじめた。もちろん行動を秘匿するため、全潜航である。水滴型の潜水艦は水上を走行するより水中の方が、はるかにスピードが早い。その意味から海中走航が望ましいことになる。

第一、原子力を燃料としているから乗組員のため以外に酸素を必要としないのも強味といっている。

今は鎖で繋がれ、その上、脳手術で情緒反応を除去された、かつての乗組員たちは、機械を監視するだけの人間機械となつて、何の不平もなく、おどろくべき正確さで艦を操作していた。星司令以下のスタッフは、単に命令を与えれば、いいのである。

一方、レセプション・エリア（第四回、参照）では女囚の登録が進められていた。艦底の一室に後手錠のまま押し込んでおいた女たちを、片っ端から吊りあげてゆく。

イングリッド郷夫人、ジャネットも何人目かに吊りあげられた。

貴族の誇りからか、つとめて平静をよそお

つてはいたものの、その金髪はバサバサに乱れ、千切れた衣服は海藻のように垂れ下がっているにすぎない。だが、それすら、手荒く引き剥がされてしまう。

「あ、ちょっと待って下さい。これはマスタ―が囹にお使いになるんだとおっしゃっています」

飛び込んできたジャンヌが叫んだ。

パンティだけになったジャネットは、もう両足首を上吊り上げられ始めていた。

「どうすればいいの」

少し口をとがらせたわけは、ジャンヌ、すなわち小林敏子が、有明の王国で最も羨ましがられる「お手付き」で、その特権の故に昇進も、めざましいからである。とはいえ、G号作戦に参加させるため繰上げ任官したばかりの少尉だったから、乗組員の中では最下位のアマゾン女兵ということになる。そのジャンヌが、有明の権威をカサに着て、先輩のやりかけたことを止めようとしている。誰が伝えたとしても、有明の命令は絶対だったから、それに従わなければならないのだけれども、それがジャンヌの口を通じて伝えられたのが口惜しく、癪にさわったのであろう。

ともかく、ホンのしばらくの間だったとはいえ、虎口を脱したジャネット夫人は、手足のいましめを解かれ、恥かしい裸身も、まだしもましな未決服で蔽うことを許され、ジャンヌにかかえられるようにして出ていった。

「どうして、不服そうな顔をしているの？」

入れ替りに入ってきたのはエミー司令だった。二人のアマゾン女兵が不動の姿勢をとった。開股跪坐の礼は有明に対してのみなされるので、そのほかは貴妃に敬礼するといつても、不動の姿勢をとるだけでよい。

「可哀そうに、あのイギリス貴婦人は長くは生きられないのよ。マスタ―が犠牲用になさろうとお考えになっていらっしゃるのです。ですから、しばらく規則通りに扱われないからといって、そんなにアタることはないですよ」

アマゾン女兵の最高責任者である星恵美子から、このように優しく言われて、女兵たちの不服も、すっかり慰められてしまった。

気をとり直した二人は、再び作業に、とりかかった。ハッチの下へフックのついたロープを降ろす。



こちらは最下層の船艙。

もう大分、減って、ゆとりは出てきたとい  
っても、まだ数百の美女たちが、裸身を寄せ  
合って蠢いている。むせかえるような人イキ  
レ、哀哭の呻き声が、ジメジメした船底に満  
ち満ちている。前にも記したと思うが、ここ  
はバラスト用のスペースで、必要に応じて海  
水を入れるようになっていいるから、ただでさ  
え、しめっぽいのである。

ガッチリと髪の毛を掴まれては、もう駄目  
だった。

「……………」

ありったけの声を、はりあ  
げたつもりが、轡の下では声  
にはならなかった。腋の下を  
縛った太縄がギュッと締まっ  
て、キリキリと痛んだ。

電動クレーンの力に抵抗す  
ることは、できない。元子爵  
令嬢も何もあったものではな  
かった。朝小路久子の裸身は  
屠殺場の肉塊のように、ぶら  
下がって、そのままレセプシ  
ョン・フロアへ上って行く。  
さっきの二人が待ちかまえ

ていて、手馴れた手つきで久子の足首にバン  
ドエイドを巻きつけ、その上にガッチリと足  
輪をかけた。足輪には一本ずつロープが、つ  
ながっている。胸をしめつけていた太縄が外  
された。

ホッと床に、しゃがみ込んだ一瞬、ち  
がうクレーンの音が起って、久子の両の足首  
は夫々別の方向に牽かれ始める。

数秒後、久子は両股を一文字に開いた姿で



逆吊りにされてしまっていた。クレーンの位  
置が天井ではなく横の壁、それも、ほぼ二メ  
ートル位の高さだったから、開股角度はY字  
型というより、T字型に近かったのである。

それだけに久子は、まるで股間から裂けてし  
まいそうな激痛に襲われていた。依然として  
解かれていない後手錠では、体重を手で支え  
ることすら、出来ぬ。止むを得ず、僅かに床  
につく頭を突っぱって、股にかかる張力テン  
ションを少しでも緩めようと必死の努力をし

ていた。膏汗だか、泪だかしらな  
い、冷たい体液がタラタラと顔を  
流れて、床に散らばっている漆黒  
の髪を、しとどに濡らしてゆく。

それは女体が耐えている痛苦とは  
裏腹に、ひどく艶めかしい風情で  
あった。何かを注射されたらしく  
チクリと内股が痛む。

「バージンですね」

「ハイ」

二人は、まるで飛行機の機長と  
副操縦士が出発前の点検をする時  
のような冷静さで、予め印刷され  
ているチェックリストに記入し始  
めた。

カチャ、カチャと器具の音がして、久子が自分でさえ、触ったこともないような自分の肉体の部分が、おどろくべき不作法さで測定され始める。おしひろげられ、何かが差し込まれ、かきまわされる。そのたびごとに、何ごとかが、記入されて行く。

歯噛みをしたくても、その歯並みさえ、動かせない切なさであった。その上、全力をつくして体重を頭で支えていなければならぬ何という屈辱だろうか。ピクピクと慄える久子の全身。あますところもなく露出した肌から噴き出した汗が、言葉ではあらわせない彼女の瞋りと苦しみとを代弁しているようであった。

「クウーッ」

女体がのけぞって、硬直した。

タートウ・スタンプが鼠蹊部を一撃したからである。何百という、墨を含んだ針が、その皮膚を貫通した。

「G・一七二号ですね」

「ハイ、G—一七二号です。確認いたしました」

一々、復唱している声が上の方で聞えていても、久子には何のことやら、さっぱり分らない。

ない。こんな恥かしい、酷い仕打ちを受けていなければならぬのなら、いっそのこと、気を失っている方が、ましだと思ふのに、どういうわけか、それもままにならない。彼女は知らなかったけれども、さっきの注射液には、防疫剤ばかりでなく、精神安定のためのトランキライザーも、混入してあったのである。

そうでなくても勝気な久子は、精神安定剤の効果によって、惨烈な凌辱を気絶もせず耐えて行かなければならなくなっていた。

やっこのことで、股廻りの検査が済んで、逆吊りから解放されたとき、久子はもう、精も根も尽き果ててしまっていた。

それで、今度はバンザイ型に固定されて写真をとられたり、上半身の側定をされることになった。一番、酷いことを最初にやられてしまうと、次が割合に受け容れやすくなるものである。

だが、そうした従順さも一時のもので、次のサリンジルームには、今までより一層、彼女を驚倒させる絶望的な検査が待ち受けていたのである。

とまれ、半月以上もの間、彼女の顎を動かさないようにしていたマウストレイも、ここで漸く外してもらえたので、やっと口がきけることになったけれど、こうした長い時間、言葉を出していないことで、かえって口をつくような話し方が出来ない。ただ弱々しく、「もういや、ゆるして……」とか、「たすけて……」とか、断片的に叫ぶのが、せい一ぱいだった。

しかし、そんな久子の哀泣などは斟酌される筈もない。チェックはスケジュール通りに進行してゆく。

そして、あのおぞましいイニシアル・エクスクリータが採取される時が来た。容赦なく挿入されたカテーテルを通して彼女の器管が分泌した液体が、彼女の意思に関係なくガラス容器にとられ、標本として保存されることになった。

朝小路久子は、今は女囚G—一七二号として、カプセルに送られ、入国時レセプションを待つことになる。

女囚たちの悲泣を乗せて、原潜ネプチューン号は大西洋の荒波を切り開きながら南下していた。



《連載》

女

の

虜

囚

(4)

佐 治 麻 造

Mゲループ

〔空想創作集団〕

作品

△ある湯治客の話より▽



彼の顔を見ると早苗は、しがみついて顔を彼の胸に埋めた。

「帰して貰えたのね。ほんとによかったわ」  
「馬鹿だな帰れるに決まってるじゃないか。おや、誰かお客さんが来てるのかい？」  
「ええ、友達が来てるのよ。帰って貰うわ」

女であった。

「私、料亭の仲居をしていますの。今日はお休みが貰えたので、お邪魔してたんですのよ。ほんとに御厄介をかけてしまつて……」  
食事が済んでお茶を飲みながら、志乃は済まなそうに言った。少し飲んだビールで目が

「まあ、いいじゃないか。一緒に飯でも喰おうよ。昼飯抜きだから、腹が空いたぜ」

早苗は、いそいそと支度にかかった。来客は早苗より二つ三つ、年上らしい月岡志乃という小柄で色っぽい目許をした

うるみ、頬をほんのりと染めていた。

「早苗さんのこと、御存知だそうですわね。ですから白状しますけど、私も前科がありますのよ。実は早苗さんとも監獄で知り合ったんですの。早苗さん、辛かったわねえ」

早苗は眉をひそめホッと溜息を洩らした。「監獄と聞いただけでも、ぞっとするわ」「私だってほんの出来心だったんですのよ。預かってたお金を、つい使い込んで……」「捕まったのは、私の方が早かったかしら」と早苗が、口を挟んだ。

「そうよ。私が留置場に、ほうり込まれた時あんたは坐って涙を流して泣いてたわ。それから殆ど、ずっと一緒だったわねえ」  
「半年先に出して貰ったでしょ、あなたは。羨ましくて羨ましくて、しまいいには憎いとさえ、思ったわ。けど、私が出る時、かつらを

持って迎えに来てくれたでしょ。ほんとに有難かったわ」

「けど、いろいろ聞いたんだけど、私達位の事だったら、油を絞られて不起訴になるか、せいぜい執行猶予か、悪く行つて婦人矯正院に一年位、ほうり込まれるのが関の山だつていう話よ。実刑を喰うなんて、ほんとに運が悪かったのねえ。警察じゃ、そんなでもなかったけど、検事局では何だか憎まれたらしいわね。せいぜい、しおらしく神妙にしてただけどねえ」

「あのね、私達を調べた、あの瘠せた女の検事さんはね、中央から左遷させられたと思つて、当り散らかしてたんだと思うわ」

「矢張り、そうかしらねえ。ほんとに口惜しいこと。余程、悪い様に書いたんだわ」

「けど、刑が三年まででよかったわね、戸籍に前科がつかずに済んで……」

「今度ブチ込まれたら、たとえ一年でも戸籍につくのね」

「もう二度と行きたくないわ。金輪際、悪いことはしないから」

早苗は、思い出すのもおぞましいのか、身震いして、そう言った。

「ほんとに生地獄だわねえ。糸の一本すら、

身につけさせては貰えないんだからねえ。体に番号を刷り込まれ、鼻環をつけられて、鉄の枷と鎖で縛られ繋がるんだから。あさましい恰好で監獄へ送られて行つた時の気持は今でも、思い出すと体が熱くなるわ。早苗さん、憶えてるでしょ。駅のホームで一列に繋がれて立たされ、汽車を待ってた時のこと。あの日も、今日みたいに雨が降つて肌寒い朝だったわねえ」

「そうだったわね。十人程の中で女囚は私達二人だけなもんだから、私達ばかり見物されてるような気がしたわ。身動きしたといつて鞭で、ぶたれたわ。あんまり情けなくて恥しかったので、夢中だったのね。あの時の気持が、どんなだったのか私には、ハッキリ思い出せないわ」

「ほんの少し足を動かしても、鞭が飛んで来るし、世間の人達は嘲ってジロジロ眺めるしこんなにされてこれから二年間も過すのかと思うと、とても生きては出られないような気がしたわ。ともかく女囚でも、大の男と同じ戒具をつけられるんだから、全くひどいもんだと思つたわ」

「志乃さんおかみとこの女将さんだつて、そんなにひどい女なら、一度、臭い汁を飲んで来ると

いいのにね。きっと人間が変わるわよ」

「そうよ。それでね、先刻の話の続きだけどさ、隠してた前科がバレたでしょ。とても居辛いのよ。お店、変わりたいんだけど、不景気でしょ。ほんとにどうしたらいいかしら。堅気のお仕事したいけど、字も下手だし、そろばんも出来ないしねえ」

志乃は煙草を吸いつけて溜息をついた。

「前の御主人に頼んで見たら、どうなの？ しっかり、やっているとじゃないの」

「よしてよ。私が逮捕されたら、あとにも先にも面会しに来たのは一度だけ。それも離婚を知らせに来たのよ。あんな男なんか、こちらから願い下げだわ。世話したいといい寄つて来る男には、碌なの、いないしねえ。あら御免なさいね。そんな気で言つた訳じゃないのよ」

謙二は苦笑いしながら、口を挟んだ。

「早苗は、あんまり話したがらないんだけど辛いもんだらうなあ、懲役というのは」

「辛いのは辛いよ。当り前の話だといえ、それで貰えないのよ。当り前の話だといえ、それでおしまいだけどさ。年がら年中、鉄の錠で縛られてるのが当然の事なの。そして労役させる時、必要なだけ、錠や枷をゆるめて



くれる訳よ。泣いたって喚いたって、憫れみの言葉一つ、掛けてくれる人はいないわ。鞭を喰って飛び上るのが関の山よ。ともかく人間、懲役囚と奴隷にだけは、なりたくないわねえ」

「そういうことだね。しかし、まあ二人で、お互いに慰め合えて、よかったじゃないか」

「あら、冗談じゃないわ。懲役囚が、お互いに慰め合ったり出来ると思ってるの？ 囚人同志が、口を利いたら、半死半生の懲罰なのよ。それに嵌口具を固く嵌められてるし、独房へぶち込まれてるのよ。四級囚になって嵌口具を勘忍して貰えたのは、私が出る間際だったのよ。おひるの餌の時、それこそ、決死の覚悟でさ、口を動かさないように囁き合うのが、やっとなのよ。幸い一度も見つからなかったけど……」

「そんなお話は、もうよしましうよ」

早苗が、哀願するように言った。

「そうね、思い出すと身震いする位だわ。けどさ、意地の悪い看守達には随分、苛められたわねえ。自分より年下の娘みたいな看守にさ、犬畜生みたいに扱われて、口答えどころか、お礼を言わされるんだからねえ。口惜しくて口惜しくて、最初の頃は一晩中、泣き明

かした事もあったわ。自由の身になったら、必ず仕返ししてやろうと考えた女看守の二、三人は、いるけどさ。出て来たら、いつかそんな事は、しようとしないうになっちゃしまったわ。早苗さん。ほら、二人でさ、独身の看守の宿舎で使役された時、あんた随分、ひどい目に遭わされたじゃないの？」

「もう、よしてよ」

早苗は、泣かんばかりの声を出した。

月岡志乃は夜も更けた頃、どこか淋しそうに、それでも笑い声を残して帰って行った。

「あら、手首に痕が、ついてるわ。手錠を長い事嵌められてたのね。痛かったでしょ？」

早苗は、彼の両手首をやさしく揉み撫でて

「今晚、泊って下さる？」

と甘えるのだった。

「罰金は、どの位なの？ すぐ払わないと大変よ。何だったら、私の貯金を全部、下ろしてもいいのよ」

寝物語に早苗は言うのであった。その貯金は、彼の与える少ない月々の手当ての中からつましく残したものであろう。そのいじらしい心根を思うと、謙二は思わず彼女の体を抱きしめて涙ぐむのだった。

「お前は、そんな心配しなくてもいいよ。い

くら令子の奴が財布を握ってるからってさ、その位は何とかなるさ」

ようやく晴れ渡った夜空に月が澄んで、窓のカーテン越しに蒼い光が仄かに射し込んで来た。

○ ○

それから一年近く経った。令子の実家に帰り、謙二の不貞を理由に離婚訴訟を起して、莫大な慰籍料を要求した。そして早苗は、みごもり、兄の俊一は弟の有様に舌打ちしながら、海外視察の旅に出て行った。第三回目の調停裁判のため、午前中を家庭裁判所で令子と睨み合ってた謙二は、臨月の身重な早苗を訪れるのも嫌気がさして、有閑令嬢達を自宅に招いて午後早くよりパーティをやって騒いだ。会社では彼はいてもいなくてもいい存在だったし、何かにつけて高圧的な美しい嫂には頭が上らないし、調停裁判は甚だ不利な形勢になっていたし、彼はむしろしゃして夏の夜を徹して飲んだ。

夜が明けた頃、最後まで彼とつき合ってたんだ三人の娘達が言い出して、海へ泳ぎに行くことになった。彼も娘達も泳ぎ支度のまま車に乗り込んだ。

「あら、謙二さん。六尺褌を締めてるのね」

「キリッとして男性的で、素敵だわ」

六尺褌を締め、真赤なスポーツシャツを素肌に着ただけの謙二は、いささか得意になってアクセルを踏んだ。痛飲したため、頭が、ふらふらする。

「大丈夫？ 私、替ったげようか？」

「お前さんよりはシャンとしてるよ。先刻、シャワーを浴びたからな、心配するなよ」

山手の住宅街から海岸に出るには街の中を通り抜けねばならなかった。ターミナルの附近では、朝早い勤労者達が既に足早に急いでいた。うるさい表通りを嫌って彼は、狭い裏道を選んで飛ばした。そして、ある辻で一人の男をもろに、はね飛ばして轢いてしまったのだった。キャアキャア騒いでいた令嬢達も派手なケープの胸許を押えて流石に蒼くなった。

あたりに人影は、まばらで、目撃した者がないように思った謙二は、一旦、踏んだブレーキを放し、アクセルを強く踏み込んだ。

「逃げるの？」

「大丈夫よ、逃げちゃおうよ。見すばらしい男だったわ。あんなの轢いたって、何ていうことないわよ。あんなのは案外、死にやしないわ。あの男がボンヤリしてるからよ」

「あら、あそこの二人連れの女が見てたらしいわ。早く早く」

口々に騒ぎ立てる令嬢達の声を背に、彼は必死にハンドルを切った。誰かにナンバーを見られたかも知れない。こうなれば、もう逃げるしかないのだ。狭い町を縫って逃走する彼の掌は脂で濡れ、額や体に汗が滲んだ。

「ど、どこへ行くの？ 海へ行くんじゃないの？」

「それ所じゃないよ。帰るんだよ。どこかで車を調べなきゃ。あつ、交番だ！」

タイヤが軋んで、車は、右の小路に突っ込む。

「駄目よ。袋小路だわ」

「大通りに出て飛ばした方が、却っていいんじゃないかって？」

「分ってるよ。だが来る時、通った十二号線は駄目だ。十七号線へ出て迂回しなきゃ。おい、誰か外に出てバックを見てくれよ」

「だって、こんな恰好で車の外に出られると思うの？」

「なぜ十二号線を引返しちゃいけないのさ」「うるさい！」

彼は恐怖と焦燥に駆られて舌打ちして嘸鳴り、令嬢達は鼻白んで、ふくれ面をして、ふ

てくされた。

目撃者の二人のBGの通報によって捜査追跡を初めた当局の行動は、謙二の予想を遙かに上回って敏速だった。派手な海辺姿の三人の令嬢達を乗せていては、追跡するのも比較的、容易な訳であった。

ようやく十七号ハイウェイに乗り入れて、しばらく疾走した謙二は、背後に白バイのサイレンを聞いて背筋を凍らせた。

「見つかったわ」

「ど、どうするの？ 私達は責任ないわね」令嬢達の声も震えていた。白バイに追いつかれた謙二は観念してブレーキを踏んだ。

「お前が、ずっと運転してたのね？」

白バイの交通警官は婦人だった。白いヘルメットの下に波打つ黒髪を撫でつけ、大きな風防眼鏡を、はね上げ、ハイウェイに革の長靴をカツカツ鳴らして、婦人警官は、きびしい目で車内の連中を窓越しに睨み回して言った。

「免許証を出して」

「あつ、忘れました。持ってることは確かです。ほんとです」

「フン。三十分程前、並木橋の裏通りで人を轢いたろ？」



「……………」

「どこからどこへ行くの？」

「あ、あのう……………」

「車も搭乗者も、目撃者の話と合致するし、フエインダーも凹んでるね。轢き逃げ容疑者として緊急逮捕する。車から降りて！」

凜とした婦人警官の声に彼は抗う気力も失い震える手でドアを開いて、よろめき出た。

「何よ、その恰好は！ 手を出して」

赤いスポーツ・シャツの下は六尺禪一本の彼が、サンダルを突っ掛けて朝のハイウェイの風に吹かれて立ちすくむのを見て嘲笑を唇に浮べた婦人警官は、腰の革バンドの革サックからキラリと手錠を抜き出して、彼の右手を掴んだ。

「誰か運転出来る人はいないの？ この車は証拠品だから持って行きたいんだけど」

謙二の両手に嵌めた手錠に捕縄をつけて縄尻を握った婦人警官が、風防眼鏡を下ろしながら令嬢達に言った。

「私、出来るんですけど、免許証を持って来ていないんです」

「いいわ、私についておいで」

「あの、私達も……逮捕されるんですの？」

「調べて見なきゃ何とも言えないけど、あんな

た達は法的には責任なさそうね。ともかく、一緒においで」

婦人警官は苦々しげに言って謙二の縄尻を曳いて白バイに結びつけ、サンダルを脱がせて車内に投げ込んだ。

「何だい、これは。あんなざままで婦人警官にパクられてら」

「どうしたんだろ？ ありゃ、車の中に別嬪が三人もいるぜ」

通り掛かった大型トラックがスピードを落して運転台の男達が、じろじろと見下ろして行った。うるさそうに手を振ってトラックを追いやった婦人警官は、令嬢達の車がUターンするのを見ながら、謙二に鋭い一べつをくられて白バイに跨がってエンジンをかけた。走り出した白バイに手錠の捕縄を曳かれ、謙二は泡を喰って走り出した。

「あ、あんまりですよ。こりゃ、ひどいや」

「うるさいわね。つべこべ言わずに走りゃいいのよ」

喘ぎながら哀訴した彼に、振り向きもしないで婦人警官の叱り声が返って来た。

ゆっくりと走ってくれはするものの、ともすれば捕縄が、ぴんと張って、手錠が手首に喰い込んで痛い。背後から、ついて来る車の

令嬢達の視線を背に感じると、屈辱感が、こみ上げて来た。こうして、どこまで連れて行かれるのかと思うと、人を轢いた事が悔まれた。轢いたのは仕方ないとしても、逃げ出した事が痛切に後悔された。

ハイウェイから街の大通りに入る頃には、彼の胸は破裂せんばかりに苦しかったし、素足の足裏がヒリヒリと痛かった。群れをなして道を行く人々全部に見られるのが本当に情なくて情なくて、白バイに跨がった婦人警官の背を恨みをこめて見つめるのだった。

最初の交番で本部に報告した婦人警官は、手柄を立てて嬉しそうだった。街の大通りには信号が至る所にあって立ち止まれるのは嬉しかったが、車や人々に囲まれて、はじめな姿を晒すのは涙が出る程の思いだった。婦人警官は次第にスピードを容赦なく上げ、彼は息も絶え絶えになって口から泡を吹きながらようやく警視庁の裏門に辿り着いて、ぶっ倒れてしまった。

「しっかりおしよ。さあ、立って、こっちへ来るんだよ」

婦人警官は、地面に倒れて喘ぐ彼の脇腹を革の長靴の先で蹴って、白バイから解いた捕縄を引っ張る。車から降りた令嬢達は、こわ

ごわと、しかし、さげすみの色を浮べて一かたまりになり、むき出しの足を寄せ合って傍らに立って見下ろしていた。

○ ○

交通課の調室に連れて行かれた謙二は、白バイの婦人警官に取調べられた。

「住所は？ 姓名は何ていうんだい？」

鋭く訊問する婦人警官の革長靴は、床に坐った彼を小突き回し蹴り飛ばさんばかりだ。謙二は身もだえしながら、すべてを自供する他なかった。

指紋を取られ、スポーツ・シャツを取り上げられて揮一本の姿にされ、鎖で首に番号札をつけられて、地下の留置場に、ぶち込まれた。二時間程して曳き出され手錠腰縄を打たれて、今度は、刑事課の調室に連れて行かれた。悪質な人身事故として刑事課へ移されたのだ。

「水を吞ませて下さい」

年かさの婦人刑事を見上げ彼は、かすれた声で哀願したが鼻で嘲笑されただけだった。

再び取調べが繰り返され、自分の犯した罪の深さをひしひしと感じた彼は、涙をこぼして喘いだ。

「監、監獄へ入れられるんでしょうか？ 罰

金は、いくらでも払いますから、監獄だけは何とか勘弁して下さい」

婦人刑事の顔が更にきびしく引き締まって

「お前、被害者の事は気にならないらしいのね。自分の事ばかり心配してるけど、自分が轢いた人が、どうなったか気にならないの」言葉をやめた婦人刑事の目に怒りと憎悪が燃え、そして軽蔑の色が浮んだ。

「お前が、はね飛ばして轢いた被害者はね、先刻、病院で亡くなったんだよ」

驚愕した彼は、眼前が昏くなった。

「酔っぱらって朝から遊びに出掛けて、人を轢き殺した訳だよ。立派な殺人罪だね」

「そ、そしたら死、死刑に……」

「残念だけど殺人罪は適用出来ないのよ。業務上重過失致死罪よ。残念だね。お前、大学まで出て、それ位の事を知らないの？」

婦人刑事は哀れむように彼を見下ろした。

「す、すみません。まさか死ぬとは思ってなかったものですから……」

「未だそんな事、言ってるの？ 性根を叩き直してやるわ。お立ち！」

顔がはれ上って歪む程のビンタを喰って、彼はポロポロ泣きながら悲鳴を挙げた。

そこへ若い婦人刑事がやって来て、面白そ

うに笑いながら眺めていたが、彼が腕をもがいて少し弛んだ腰縄を、きつく締め直して、取り調べの婦人刑事に何か耳打ちした。

「これに拇印を捺して！ そのままで出来るわよ。何、もたもたしてるの？」

手錠を腰縄で押えられたまま、やっと拇印を押した彼は、縄尻で尻をピシリと打たれて引き立てられた。

連れられた室には、壁際に教壇のような大きな台が設けられ、その前に椅子が並べてある。揮や猿股一つの男の容疑者達が七、八名首の番号札を、ぶらぶら揺すりながら手錠、腰縄姿で、ぞろぞろ連れて来られた。謙二も彼等の中に混じて一緒に台の上へ追い上げられ、壁を背にして一列に立たされた。

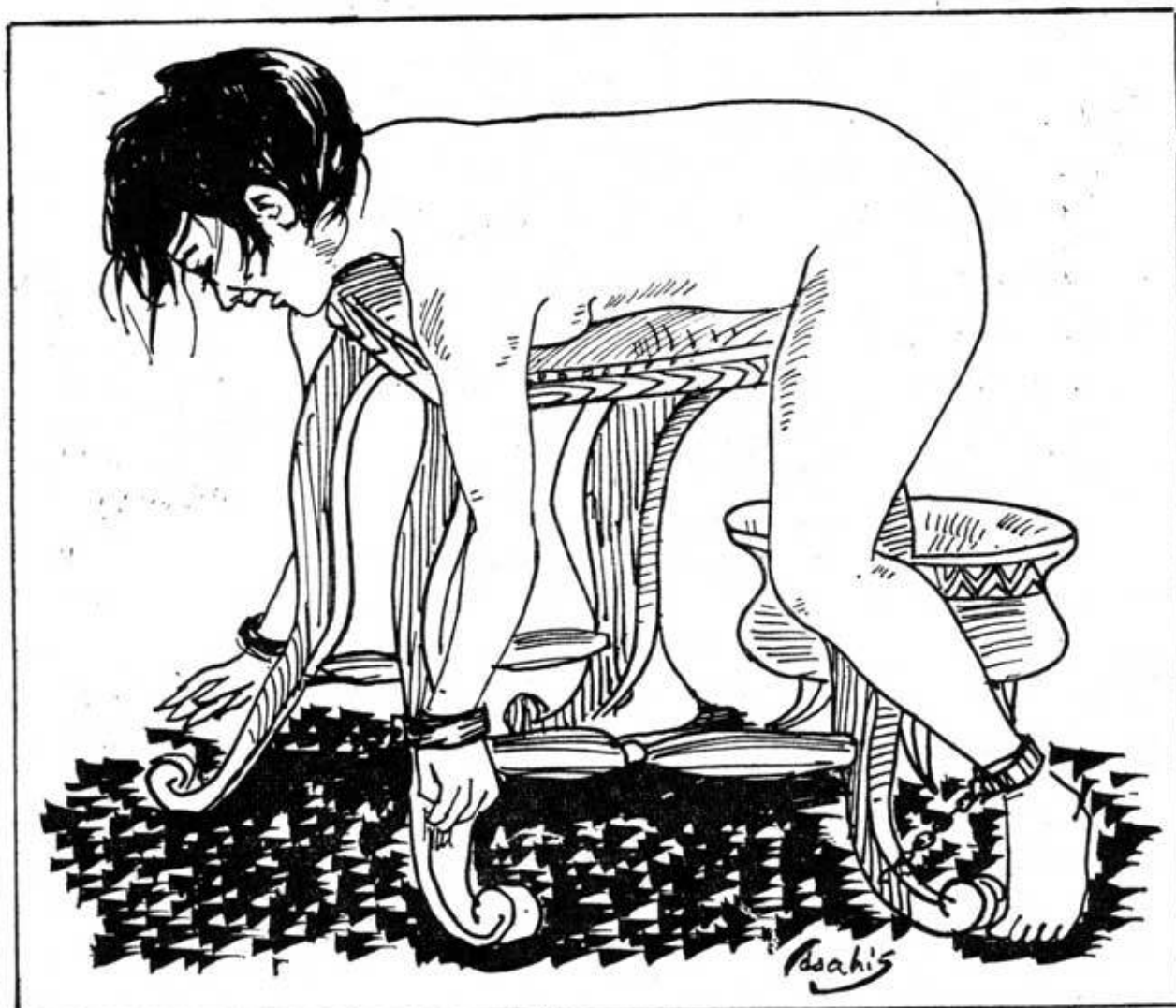
「顔を挙げて、真っ直、前を見て立つんだ。こら、動くな。じっとしとれ。この野郎！」

若い男が、ふくらはぎに鞭を喰って悲鳴を挙げた。二人の若い娘さんが案内されて入って来て椅子に坐り、恐ろしそうに台上の男達を眺めた。年配の背広姿の男が娘達に説明する。

「実は、もう自供しましたので必要ない訳なんです、折角おいで願ったのですから、ついでにお願いします。証拠は一つでも多い方



旭 須 坂 『不安な時間』 イメージギャラリー



がいい訳でして。先刻、証言して下さった事件の運転者を、この台に並んだ連中の中から指摘して下さい。首につけてある番号を、こ

台上の男達は、いまいましように左を向いた。顔が痒くなったのか、謙二の隣の男が上体を深く前に曲げて手錠をガチャガチャいわ

の紙に書いて下されば結構です。はつきりしなければそれでもいいんですよ。御覧の通り縛ってありますから御心配なく。なんなら近くへ行つて、よく見て下さい」

BGらしい二人の娘の目が台上的男達に注がれ、時々ぱちぱち、まばたきしながら一人から一人へと移って行く。

「横から見て見ますか？ えーと、右側から御覧になったんでしたね。こら、左向け」

せながら鼻の辺りを搔いた。「ちくしょう、見せ物にしゃがって。俺達にや関係ないんだぜ」

呟いた一人の男が、忽ち鞭を喰ってヒュー泣いた。

「よし、こっちを向け」

ふてくされたような身振りで、再び正面に向き直る男達の手錠がキラリと光る。娘達の視線が謙二に集中し、ひそひそと話し合う。彼は体中が熱くなった。

「お分りになったようですね。有難う。裁判所で証言をお願いするかも知れませんが」

娘さん達は、ねぎらわれながら出て行き、男達は、ぞろぞろと台から降りて小突かれ、罵られて地下の留置場へ追われた。

身をかがめて入った独房の鉄格子扉が謙二の背後でガチャンと閉まり施錠の音が響く。

「印の所で正座してるんだよ。そうそう」

制服を、きちんと着た若い婦人警官が、今解いた捕縄を束にまとめ、外した手錠の環をギリギリと閉めながら、鉄格子越しに彼を冷ややかに見て、叱りつけるように言った。

「お願いですから、水を飲ませて下さい」床に膝をつき、鉄格子に両手で、しがみついて彼は哀願した。

「駄目々々。何言ってるのよ。ここを、どこだと思ってるの？ さっさと正座おし」

鉄格子の間から手錠で額を小突かれた彼は目をこすりこすり、床のマークの上に膝を折った。靴音を響かせて婦人警官は立ち去り、彼はみじめさに涙を膝にこぼして、声を押えて哭いた。この身は犯罪者として、強大な権力の冷厳な手の中に囚われたのだ。深い絶望の思いを、ひしひしと胸に感じて謙二は、体を慄かせて嗚咽するのだった。被害者は死んだのだ。課される刑罰を思うと、恐怖に全身がわななき、胸が喘いだ。

「二十七号。その恰好は何なの！ 正座してろと言ってるだろ」

目の前の壁に、しがみつくようにして泣声を忍んでいた彼を、先刻の婦人警官が回って来て叱りつけた。

「今度、姿勢を崩すと鞭よ。いいかい」

「ハ、ハイ。すみません」

彼の声は弱々しく、かすれた。

「水を欲しいんだろ。もうじき、用便が許されるからね。その時に、便器の水を舐めたらどう？ 少しは溜ってるわ。フフフ」

彼は、唇を噛んで黙って、うなだれた。膝においた両手首には、白バイに繋がれて走ら

されたため喰い込んで、こじた手錠の痕がついて、薄く滲んだ血が黒く乾いていた。

やがて与えられた囚人食の異臭は、とても吸れたものではなかった。しかし、咽喉の渴きに堪えかねる彼は、げーげー言いながら吸り込んで、咽喉を僅かにうるおすのだった。「おや、初めてにしては大分、吸ったじゃないの。お口に合ってたわね」

婦人警官にからかわれて、彼の胸に悲哀がこみ上げて来た。

夕方近くなって、足の痛さ苦しさに堪え切れなくなった彼は、両手を床について呻き喘いだ。忽ち発見されて引きずり出され、背に革鞭を三つ喰った彼は、通路の床にしがみついて悲鳴を長くひいて体を、のた打たせた。婦人警官の靴先が、容赦なく、独房へ蹴り込む。

「性根が入ったかい？ 鞭を頂いたお礼を言うんだよ」

「あ、ありがとうございました」

怒りと口惜しさに、謙二の胸は張り裂けるばかりだった。しかし、この身は既に囚われの身。彼女には絶対の権力があるのだ。正座の位置へ、いざる彼の背後で婦人警官が施す錠の音を、みじめな思いで彼は聞いた。

翌日も、その次の日も、謙二は独房にぶち込まれたままだった。朝になると、呼び出された者は珠数繋ぎにされて検事局へ護送されて行き、夕方になると打ちひしがれて連れ戻された。拘置所が手狭なので、余程の兇悪犯以外は起訴まで警視庁の留置場に拘置されるのである。

一かけらの自由すらない朝夕が、どんなものであるかを、彼は骨身に沁みて教えられて行った。嘗て高校で受けた懲罰などは、比較にならない冷酷さであった。要領の悪い彼は、姿勢を崩すたびに発見され、鞭を素肌に喰らった。囚人食を床にこぼして舌で舐めさせられた。

余りの苦しさ切なさ、夜になると床をころげ回って呻き、壁を叩いて喚いた。しかし監視の警官に見つかり、容赦もなく鉄砲手錠を掛けられた上、手錠と六尺禪の後ろの結び目を捕縄で結んで引き絞られた。苦痛の呻きを洩らすと、嵌口具を噛まされて蹴り倒された。全身、脂汗にまみれて一時間の後、赦されたが、腰から上の骨と筋肉はバラバラになってしまったようで、その痛みは数日後まで残った。



三日目の朝、謙二は呼び出された。太い革の腰枷を締められ、両手にガッチリと手錠を嵌められて腰枷の前の金具で留められ、腰を連鎖された。追い立てられて歩くと、鎖がチャチャラと悲しく鳴る。

建物を出ると、明るい朝陽が、まぶしかった。コンクリートを敷いた道があるのに、その上は歩かせて貰えない。素足に砂利を踏んで裏門を出ると、黒塗りの大きな護送車が待っていた。通り掛かる人々の、さげすみの目が恥かしい。上体を曲げて辛うじて届く指先で目を押えると、監視の婦人警官に尻をピシヤリと叩かれた。護送車の小さな角窓には、既に積み込まれている婦人被疑者達のパーマの頭の先が、ちらちらと見える。

警視庁から検事局へは二十分程だった。裏門の外で降ろされ、浅間しい姿を世間の人々の目に晒して追い立てられた。職員の男女が行き合い、朝の挨拶を交わし、珠数繋ぎの被疑者達には無表情な一べつを与え、或は無視して通って行く。職員出入口を入って、すぐ右手の薄暗い階段を地下に降りると、大きな控室があった。頭を押えつけるように低い天井や四方の壁は、コンクリートむき出しの陰惨な感じで、電灯に照された冷たい床には、

何列にもマークが埋めてある。既に二十名程が、前の方の列を埋めて正座していた。ジャラジャラと連鎖だけを解かれた謙二達、約三十名の男女は、叱られ罵られながら列を作って、床のマークの上に膝を折って坐った。

やがて番号を呼ばれた連中が、よろよろと立ち上って、腰枷に曳き縄をつけられて曳かれて行った。膝を崩したり、身動きの大きな者が横手に引きずり出され、鞭を喰って床に這いつくばって喚き呻いた。片隅には、恐ろしい電気鞭の器械や焼鰻を当てる器具等も置いてあって囚人達を威嚇しているのだった。私語をしようものなら、魂も吹き飛ばような電気鞭を受けねばならないのだ。鼻を吸る音が絶えず聞え、女囚達の殆どは声を押えて忍び泣いていた。

番号を呼ばれて、すぐ返事をしなかった者は、調べから帰って来ると、五十センチ程の三角の檜の棒を二本、自分でマークの所に運ばされ、鉄砲手錠にされて三十分間、その上に坐らされる。如何に悲痛な声で哀訴哀願しようとも、男女の看守達は面白そうに煙草をふかし、茶を喫み、そして雑談を交わしながら意にも介しない冷酷さだった。

調べを待つ囚人達に昼食は与えられない。

硬い手錠と窮屈な腰枷とで両手を腹の前に留められて、ただじっと、うなだれて坐っていると、謙二は体を、もて余した。苦しくて切なくて、早く取調べに曳き出して欲しいと、そればかり願うのだった。午後遅くなると

「警視庁二十七号」

「ハ、ハイッ」

びくっと飛び上った彼は、立ち上ろうとして呻いて倒れた。足が動かないのだ。しかしそんなことは理由にもならない囚われの身。曳き縄の先の金具を、ぐるぐる振り回しながら待っている、あの若い綺麗な婦人警官の所へ這ってでも行かねばならないのだ。一刻も早く行こうとする仕草をしなければ、鞭を覚悟せねばならないのは分っていた。膝で、いざって列の間を、すり抜け、喘ぎ喘ぎ足許に這い寄った謙二の腰枷の後ろにカチリと曳き縄がつけられ、ぐいと引き上げられる。

「お立ち！ 立って、きりきり歩くのよ」

痺れ切った足を懸命の努力で踏ん張ろうとする謙二に、若い婦人警官は舌打ちを浴びせて、矢庭に足を挙げて背を蹴り飛ばした。婦人警官のスカートはピタリしているようでも大きなひだがあって、足の動作は大きく出来るのだ。ぶざまに前に倒れた彼は、肩と顔

を床に打ちつけて呻いた。ひどい仕打ちを受けて彼の胸は怒りにふるえたが、反抗や口答えはおろか、不服がましい顔つきすら、出来る身ではないのだ。

「鞭でシャンと、させて上げようか？」

「か、かんにんして下さいまし」

「フン。その気になれば立てるじゃないの。」

検事さんも私達も忙しいんだよ。さっさと、お歩き」

曳き縄の縄尻が彼の尻にピシリと鳴って彼は齒がみしながら、よろよろと歩き出した。

連行された調室では、それぞれ離れて配置された大きな机が四つ。その前では、一人宛の被疑者が絶対絶命の糺問を受けて、身もたえして坐っている。恐ろしさに顔も挙げられない彼は、デスクの一つの前に突き飛ばされるようにして坐った。命じられるままに額を床につける。椅子を引き寄せた婦人警官が検事に一礼して縄尻を握り、彼の背後で腰を下ろした。

「顔を挙げて！」

おそろおそろ見上げた彼は、咽喉の奥で呻いて驚いた。何という偶然か、彼を調べるのは嘗ての婦人検事補坪内三枝子であった。

「又、会ったわね」

彼の違反歴を調べて知っている彼女は、冷たく見下ろして言った。

「今度は、この前のような訳には行かないからね。早いこと、済ませましょう。えーと」

彼女の調べは、びしびしと要領よかった。

彼は、すべてを認める外なかった。

「まあ、故意じゃなさそうね。けど大分、悪質ねえ。懲役に行つて貰うことになるわね」

「ど、どの位？」

「そんなことは、私が決める事じゃないよ」

「お、お慈悲です。懲役だけは勘忍して下さいまし。死んだ方の遺族には、おっしゃるだけのお金を払いますから。お、お願いです。この通りでございます」

「ホホホ。手を合わせて拝んで貰ったって仕方ないわ。お前は一体、自分のした事を悪かったと反省してるの？」

「そ、それは、もう……悪うございました。」

申し訳ありません」

「そう。口先だけの様に聞えるけどねえ。」

じゃ、もう一度、呼び出して上げるわね、起訴までに、よく反省して出ておいで」

書記の娘が調書と朱肉を持って傍らにやって来て、威張り散らして拇印を押させた。

「お礼を申し上げるんだよ」

椅子から立上った婦人警官がスカートを引っ張って直しながら、叱るように言った。

「ありがとうございます」

「さ、おいで」

腰を曳かれて、よろめきながら連れ去られる彼の背後でライターが鳴って、あくびの気配がした。

○

○

再び警視庁の留置場へ戻された彼には、はじめな日々が続いた。

自由の身になりたかった。それにもまして早苗に会いたいと痛切に思うのだった。彼女が、さぞ驚き心配して、小さな胸を唯一人、痛めているだろうと思うと、その面影が臉に浮んで切なかった。陰うつな留置場の、重苦しい空気と暑さに喘ぎ、鞭の音に恐れ、わなないて、一分一分が、のろのろと気の狂いそうな遅さで過ぎて行つた。

検事局へ曳かれた日から四日目、今日も、一日こうして過すのかと、壁を睨んで堪まらない気持で呻吟していた彼は、午後おそくなって突然、曳き出された。

用便をさせて貰い鉄格子を潜り出て、婦人警官がきびしく見据えながら腰の革サックから取り出す手錠を見た彼は、両手を揃えて差



し出した。嵌め易いように手を差し出して動かさねばならないのだ。嵌めて頂くという気持を表わさなければいけないのは、みじめだった。神妙さを認めて貰えれば、決して抜くはしないが、ゆるく嵌めて頂けるのだ。少しでも、ふてくされたりすれば、手首が千切れる程、きつく締められる。腰枷を締められて手錠を押えられ、曳き縄をとられて引き立てられた。

裏門ではなく表玄関の方へ曳かれて行く。社会の人々とも出会って恥かしかった。当局の人々は無視するように行き違って行くが、何かの用件で多勢やって来ている一般の人々は眉をひそめて体を避けるようにし、それでもジロジロと眺めて通るのだった。街には、こんな恰好をした男女の奴隷が至る所にいるのではあるが、奴隷達を見るのとは全く異なっていた目で見られるのは致し方ない事だった。「ああ、あなた、これからどこへ行くの？ 今日とは定時なんですよ？ もう四時よ」

表玄関の所で、若い男を連れた地味なスーツ姿の娘が、謙二の縄尻を握る婦人警官に声を掛けた。スーツの娘も婦人警官と見えて、傍らに横を向いて立つ若い男の両手には手錠が光り、それから延びる捕縄を片手の掌に、

ぐるぐる巻いて束にして握っていた。

「又、挙げたのね。今月も総監賞は、あなたのものね」

「今日一日、追い回して四越デパートで、やっと押えたのよ。手錠を掛け損ねたんで相当暴れて苦労したわ。スラれた被害者を探しても、いないのよ。弱ったわ、ほんとに」

「そうお。私これから、局へ行かなきゃならないの。これ連れて来いっていうのよ。明日にしたら、いいのに。主任さんが私に行けっていうのよ。嫌になってしまいわ。今晚、約束があるっていうのにねえ」

制服の婦人警官は謙二の縄尻を、いまいましように引っ張って嘆息した。

「へえ、誰と約束があるの？ お楽しみね。さ、おいで」

婦人刑事は若い男を、きびしく促して小突いた。

「あら、そんなじゃないわ」

制服の婦人警官は謙二の背を押しながら、少し頬を赤らめた。

「隠さなかったっていいわよ。四課のKさんでしょ。知ってるんだから。これッ、ふてくされてると、ひどいわよ。こっちへおいで」婦人警官は肩にかけたショルダーバッグの

革紐をゆすり上げ、男を叱りながら廊下を曲って行った。

「さ、行くのよ」

玄関の階段の上で、人々の行き交う街の通りを眺めて立ちすくむ謙二の背後で婦人警官は、もう一度、きびしく言って、縄尻で腿を打ちすえた。

「護送車に乗せて貰えないんですか？」

「何を、ぜいたく言ってるのさ。恥かしいんなら何故、悪いことをしたの？ とっととお歩き。馬鹿ねえ」

今度は腿の内側を、したたか打たれて、彼は身をよじって痛みを、こらえた。何といった所で、詮方ない事だった。恥かしさに全身を赤くした彼は、深くうなだれて歩道を曳かれて行った。

停留所でバスを待つ間、

「この男、何をしたんですの？」

と老婦人が、好奇の目を輝かせて訊ねた。

「殺人です」

婦人警官は事もなげに答え、人々は驚いて少し退いた。後尾の席に婦人警官と並んで坐った謙二は、死んでしまいたい程の恥かしさだった。両足の間に顔を埋めんばかりに深くうなだれた彼の目に涙が惨んだ。

右隣に腰掛けた婦人警官の腿や膝がスカートに包まれて目に入る。夏の制服の、その薄手のスカートの上には、右肩から掛けた黒い大きなバッグが置かれ、更に曳き縄の縄尻を握った白手袋の左手が載せてある。職務上、当然のことを果している、この婦警を怨む筋合は毛頭ないのは、よく分ってはいるものの冷然と並んで腰掛けている彼女が、やはり恨

めしかった。つい先刻、この婦人警官に嵌められた手錠が一しお、冷たく、硬く感じられた。バスが揺れて婦人警官の体と触れ合った途端、彼女の左手が激しく動いて、縄尻が彼の、むき出しの腿の上に、ぴしと鳴る。  
「じっと坐ってるのよ！ 体を起して、ちゃんと掛けてなきや駄目じゃないの。床に坐らせるわよ」



イメージギャラリー

『捧げるよろこび』

岡

たかし

彼は手錠を鳴らせて、辛うじて眼頭を拭いた。乗客達の視線が集まる思いで、更に涙が溢れる。

「そんなに恥かしいの？」

「ハ、ハイ。顔を隠させて貰えたら、どんなに……」

「ホホホ。情けない男ねえ。ふてくされてる方が扱い易いわ。お前みたいに、めそめそされるよりも。皆さんは何とも思っでは、いらっしやらないわ。それとも誰か知ってる人でもいるの？」よく透る声で話し掛けられて、彼のみじめな思ひは益々つものった。

「さ、着いたわ。降りるのよ」

ショルダーバッグを、ゆすって肩に掛けた婦人警官はスカートを払いながら立ち上がり、曳き縄を強く引っ張った。曳き縄を結んだ腰枷の金具が、腰の後ろでガチッと鳴り、彼はよろよろと立ち上がる。乗客の目が真正面から注がれる中を、彼は両側の人々の前を通ってバスを降りた。

被疑者控室の床に彼が坐った時は、既に四時半を過ぎていた。やがて囚人達は、顔をゆがめて呻きながら、よろよろと立ち上って、署別に整理されて列を作り、唖鳴る声やビンタの音。そして連鎖する音が、一しきり響い



た。鞭で床を叩く音。そして肌に当てられる鞭音と悲鳴が鎖の音と交錯して、彼等は連れ去られて行き、謙二は唯一人、例の婦人警官に縄尻をとられて調室へ曳かれた。退庁する職員達の流れに逆らって、廊下を素足で踏んで歩いていると、悲しさがこみ上げて来る。

謙二を再び連行して警視庁へ帰らねばならない婦人警官は、とても不機嫌だった。何の理由もなく背や腿を縄尻でピシリピシリ打たれて、彼の悲哀は益々募った。

三階の三一五号室では婦人検事、坪内三枝子が帰り支度をしていた。

「あら、連絡が届かなかったの？ 私ね、急用が出来ちゃって、すぐ帰らなくちゃならないのよ。折角、連れて来て貰ったのに済まなかったわねえ」

聞くなりホッとした様子の婦人警官の顔が次の瞬間、プツとふくれて、彼女は電話に飛びついた。護送車に待って貰うため連絡しようとしたが、交換手は既にいない。挨拶もそこそこに、彼女は彼を急き立てて調室を飛び出した。息せき切って急ぐ婦人警官と被疑者の二人連れを、人々は驚いて見送った。

しかし裏門では、既に護送車は出発した後だった。

「ほんとに、腹が立つねえ。あの検事ったら勝手な事ばかり言ってるさ。バスも電車もラッシュで、こんなの連れて乗れやしない……」

帰りを急ぐ彼女は、結局タクシーを奮発したのだった。警視庁の玄関では、目つきの鋭い若い男が、夜勤の婦人警官と立話をしていて。それを見た彼女の瞳が一瞬、キラと、光る。

「やあ、御苦労さん。電話で訊ねた所さ、もう帰る頃だろうと思ってね」

ソフトを親指で少し持ち上げて男が笑顔でそう言うのと、彼女の顔が笑み崩れた。

「すぐはうり込んで来るからね待っててよ」

彼女の手が、謙二の背を強く押す。

「ゆっくり支度しておいで」

「早く来ないと、私が口説いちゃうわよ」

夜勤の婦人警官が受付から、そう言って笑った。護送伝票の処理も、もどかしげに、彼女は謙二の戒具を手早く外すと、足を挙げて独房に蹴り込み、鉄格子を音高く閉じて、あとをも見ずに立ち去って行く。両手首を撫でながら、謙二の耳には施錠の音と靴音とが、いつまでも、みじめに残っていたのだった。

○

○

翌朝、又も検事局へ護送された謙二は、婦

人検事、坪内三枝子の机の前で平身低頭を繰り返して改悛の情を示したのだった。そして起訴する旨を言い渡された。

「今日から拘留所にいて貰うからね。強盗や窃盗並に扱ってやりたいけど、残念ながら、そうも行かないようね」

第一種未決監へ収監された謙二には差入れの衣服が与えられた。第一種未決監というのは非破廉恥罪の未決囚を収監する所である。

手を回して情勢を予測して差入れしてくれた嫂の貴子は、更に法理士をつけてくれ、そして金力とバックに物をいわせて色々と運動してくれた。そして逮捕されてから一カ月の後には、莫大な保釈金を積んで保釈して貰えたのだった。

拘留所の事務室に法理士を伴って現われた貴子は、軽蔑を含めた冷たい笑顔を見せて言った。

「馬鹿なことしたもののね。俊一はいないし、仕方ないから私が、いろいろ心配しなくちゃならないじゃないの。忙しいのに困っちゃうわ」

「済みません。いろいろと、どうも……」

「保釈の保証人にまでされたのよ。資格のあるのは私しか、いないんだもの。それで、こ

んな所に来なくちゃならないのよ。しっかりしてくれなきゃ困るわ」

嫂は、手錠腰縄の連中が、ちらちら見える廊下の方に眉を、しかめて見せた。

「被告人、森謙二。お前は、これから保釈するが、この心得を、よく読んで守ること。保釈が不適當と認めれば、ただちに取消すからね」

年配の婦人職員が心得書を手渡し、宣誓書に署名させ、拇印を取った。

「保証人の森貴子さんの指示に従うのよ。保証人は何時でも電話一本で、収監を申請出来るんだからね」

体の拘束なしに仰いだ空は、ほんとに青く澄んでいた。

謙二は、そのまま嫂夫婦の邸宅へ連れて帰られた。

「私の許可なしに外出したら駄目よ。あんたの家は閉めてあるわ。いい？」

嫂は彼に、しかと言ひ渡したのだった。彼の留守中に、彼の財産は整理されていた。保釈金も彼の財産から支払われていた。

「銀行預金は、これだけよ。動産と不動産のリストは、これ。よく見といてね。あなたのルーズなものも呆れたわ。私がいなきゃ、令

子さんに、いい様にされた所よ」

嫂はピシャリと言った。謙二は、早苗のことが気になって仕方なかった。しかし、早苗のことを嫂に話す勇氣はなかった。

矢も楯も堪まらなくなった彼は翌々日、嫂の外出を見澄まし、女中達の目を掠めて家を脱け出た。

早苗は、ひっそりと産み落した男の児を抱いて、少しやつれた体を物静かに振舞って、淋しげに暮していた。白い頬に涙を流して喜び迎える彼女を抱きしめ、赤児の顔を覗いて彼は心が和らぐのを覚えた。生れて初めて味わう深い喜びと平和に満ちた胸一杯の安心感だった。

「面会も差入れも出来なくて、ほんとに済みませんでしたわ」

「いいんだよ、そんなことは」

彼は何のためらいもなく、財産のすべてを彼女に与えた。預金証書も小切手帳も印鑑もそして不動産の権利書も。

「とりあえず自由に出来るのは銀行預金だけだけど、なるべく早く不動産も、お前の名義にするよ」

「そんなこと、なさっていいんですの？ 私

が元気になったら、働きに出て、なんとかしますから」

「文句を言わずに受け取れば、いいんだよ。馬鹿！」

彼の強い語気の中にこめられた愛情を覚って、早苗は涙ぐみながら素直に受取って押し戴くのがあった。

「あなたが……」

彼女は悲しげに口ごもった。

「あなたが出て来られるまで大切に持ってますわ」

「出て来るって？」

「だって、今度は罰金じゃ済まないのは分ってますわ。執行猶予になるといいんだけど、それも……」

彼女の長いまつげから、涙のしずくが、こぼれて落ちた。早苗は、彼のやった事を一言も責めなかった。そして、その晩は親子三人川の字になって深々と眠った。幸福な眠りであった。

翌日のひる前、おそろおそろ帰った謙二は嫂に散々、油を絞られた。

「早苗とかいう女の所へ行っただけでしょ。そうに決まっているから心配もなかったけど、黙って脱け出したのは言語道断よ。自分の分



際を知ってるの？」

「早苗のことを、嫂さんは知っていたのですか？」

「当り前よ。令子さんの訴状に書いてあったわ。ともかく今後は、絶対に脱け出せないようにする必要があるわね」

嫂の美しい顔に、皮肉な笑みが冷ややかに浮んだ。

「被保釈人心得に書いてあることを、知ってるわね。保証人は必要に応じて、残酷に至らない範囲に於いて、被保釈人の身体を拘束し又は所要の処置を取ることが出来る。被保釈人はこれを拒む事は出来ない——分った？」

嫂は笑いながら部屋を出て行ったが、すぐに何かを持ってやって来た。

「裸になって、これをお穿き！」

「穿けったって、これはパンティじゃありませんか。嫂さんですね。しかも大分、古くて汚れていますね」

投げられたピンクの薄い布切れを拾い上げて、彼は眉をしかめた。

「誰のだっていいじゃないの。文句を言わずに早くおしよ。言うことをきかないと保釈を取消すわよ」

「脱ぎますよ、脱ぎますよ。そして、これを

穿きや、いいんでしょ」

素肌にピンクのパンティを穿いた彼は、破れかぶれだった。嫂の性格として、本当に収監申請を出し兼ねないのをよく知っていたからだ。

「よく似合うじゃないの」

嫂が笑いながら取り上げた物を見て、彼は驚いた。手錠の環のようなものが二個、ごく短い鎖で連結されているのだが、一つの環は他方よりも、うんと大きい。クローム・メッキがキラリと光る。

「そ、そりゃ何ですか？ それを私に嵌めるのですか」

平然として近づくを見て、彼は思わず後退りした。

「そうよ、あなたに嵌めとくのよ。必要な処置と拘束という訳ね。収監がいやなら、じつと、しといで」

立ちすくんだ彼の右側に片膝をついた嫂は大きい方の環を右足の膝関節のすぐ上に嵌めた。大きな環の半分が重々しく一回転してガチッと錠に喰い込んだ。

「ずり落そうね。けど、ひかがみの処は略々直線になってるのね、成程」

嫂は感心しながら、更に環を締めて上下に

ゆすぶり、彼は悲鳴を挙げた。

「あっ、い、いたい。やめて下さい！ いくらなんでもひどい」

「そんなに痛いかい？ けど案外、重いわねさあ、右手をおかし」

垂らした右手が更に引き下げられ、小さい方の環が手首に嵌められた。二個の環は右足の外側で短い鎖で連結されて冷たく光っている。

「こ、これは何ですか？ 嫂さん」

「フフフ。あなたの逃走防止用戒具よ。買ってきたの。ま、片方だけで赦したげるわ。何なら、もう一組あるから、そっち側にも嵌めて上げようかしら。バランスがとれて楽かもよ。ホホホ」

「冗談じゃありませんよ。外して下さいよ。歩けやしませんよ」

「歩けるわよ、ゆっくりならね。でも走るのは、どうかねえ。走れるものなら、走って見るといいわ。鍵は、ホラこれよ。私が持つて歩くことにするからね」

「お願いだから外して下さいよ。もう決して脱け出しませんから」

「ホホホ。まあ当分、そうしてるといいわ。暮らしには差し支えない筈よ」

「ち、ちくしょう！」

ガチャガチャと短い鎖を引っ張って、彼は顔をしかめて唸った。隙をみて、嫂の指先の鍵を奪おうとして飛び掛かった彼は、忽ちバ

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十三日確実発売!

|     |     |           |
|-----|-----|-----------|
| 一月分 | 1冊  | 六〇〇円(送共)  |
| 三月分 | 3冊  | 一八〇〇円(送共) |
| 半年分 | 6冊  | 三六〇〇円(送共) |
| 一年分 | 12冊 | 七二〇〇円(送共) |
|     |     | 郵便番号 558  |

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとか、かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉区大領町四丁目六八號出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替(大阪四二七八三番)』のいずれかをご利用

ランスを失って、厚い絨緞にころけて、もがいた。

「ホホホ。そんなんじゃ、両方、嵌めてしまわよ。私に手向い出来ると思ってるの？」

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代四〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎年二十三日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

私が指一本、挙げれば、あなたは、又ぞろ拘置所へ逆戻りなのよ」

「わ、わかりましたよ。いつまで、こうしくんですか」

「怒ったの？ フフフ。私が、いいと認めるまでね。ま、おとなしく坐ってなさいな。お茶でも淹れさせるわ」

紅茶を運んで来た女中のお菊は、びっくりして目を円くしたが、やがて袂で口を掩って笑い出した。

「笑うもんじゃなくなつてよ。謙二さんは鍾がないと風に吹きとばされそうなの。だから当分夜も昼も、こうしとくからね。よくお世話して上げるのよ。お風呂の時だけ外して、その他は嵌めたままにするから、そのつもりでね」

「ハイ。でも、お可哀想ですわ。それに、あんな物を穿かせておくんなんて」

「これ？ 恥かしくて外を歩けないようにするためなのよ。いい考えでしょ。ずらせることは出来るけど、破かない限りは脱げないしね。他の物を上から穿くことも出来ないという訳よ」

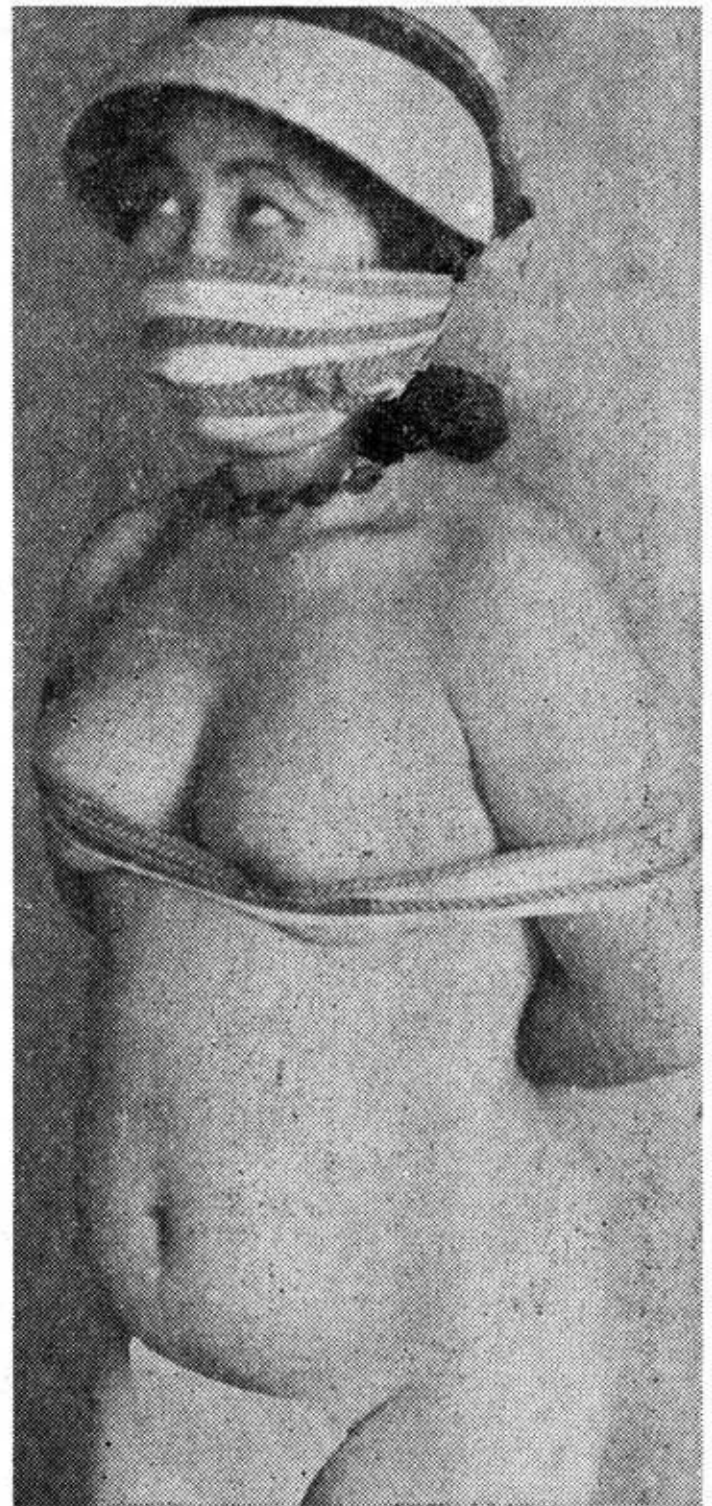
嫂の貴子は、美しい声で、さもおかしそうに笑うのだった。



## 妊婦初縛りの告白

児玉昌子の思い出

瀬戸内勇



もともと、私と彼女との、なれそめというのが、ありきたりの一見惚れといった他愛もない、きっかけからでした。

目が大きくて、丸顔のぽっちゃりとした肉づきのよい体つきが、私の気に入りました。

そして何よりも気に入ったのは、彼女が小柄で、愛くるしい感じの少女だったことでした。一六一センチと、余り背の高くない私にとって、小柄な彼女が、何とも、たてようもなく可愛らしく感じたのです。

その頃、SM雑誌といっても、奇くぐらしか出ていませんでした。今でこそ、十何誌も目白押しに書店に出ていますが、それも、ここ、一、二年の間に急に出されたもので、今から十何年前は、それらは影も形もありませんでした。

その頃から、私は秘かに奇クを愛読していました。そうです。女の裸を縛ってみたいという、原因不明の欲求が、そんな自分と同じ人達の集っている奇クへと走らせたのです。

私は、奇譚クラブを毎月、愛読することによって、自分のそんな性癖を、人知れず、誰に迷惑をかけることもなく慰めていました。

私は、女の裸を縛りたいといっても、決して、ひどい傷アトや縄のアトをつけたり、血

を流したりすることは好みませんでした。

どちらかと言いますと、軽く縛って、女性の裸の美しさを失わない程度に拘束しておいて鑑賞したいという気持ちが強かったのです。

残酷なことや惨虐なことは、相手の女性がもしやって呉れと言ったとしても、私は、よいしない気持でした。

やんわりと軽く「縛る」ということが、どういうことなのか、それは私にもわかりませんでした。ただなんとなく、そうしたくて仕方がなかったのです。当時の奇譚クラブは、そうした私の欲求に、ぴったりの編集内容でした。

当時、黒井珍平氏が提唱しておられたようなハほんの軽いサジズムVが、私の最も好む嗜好だったのです。とはいっても、機会があったら、この自分の手で、裸の女の子を縛ってみたいという気持ちが失われたわけではありません。出来たら、一度でもいいから、女の裸を縛るチャンスがあったらなあ、と考えていました。

そんな頃、私は彼女と知り合ったのです。おきまりのデートから、私たちは、いつの間にか、親しくなっていてゆきました。こんな娘だったら、結婚してもいいとさえ

思うようになりました。ガールフレンドとして、誰に見せても恥かしくない器量とスタイルを持っている彼女でした。

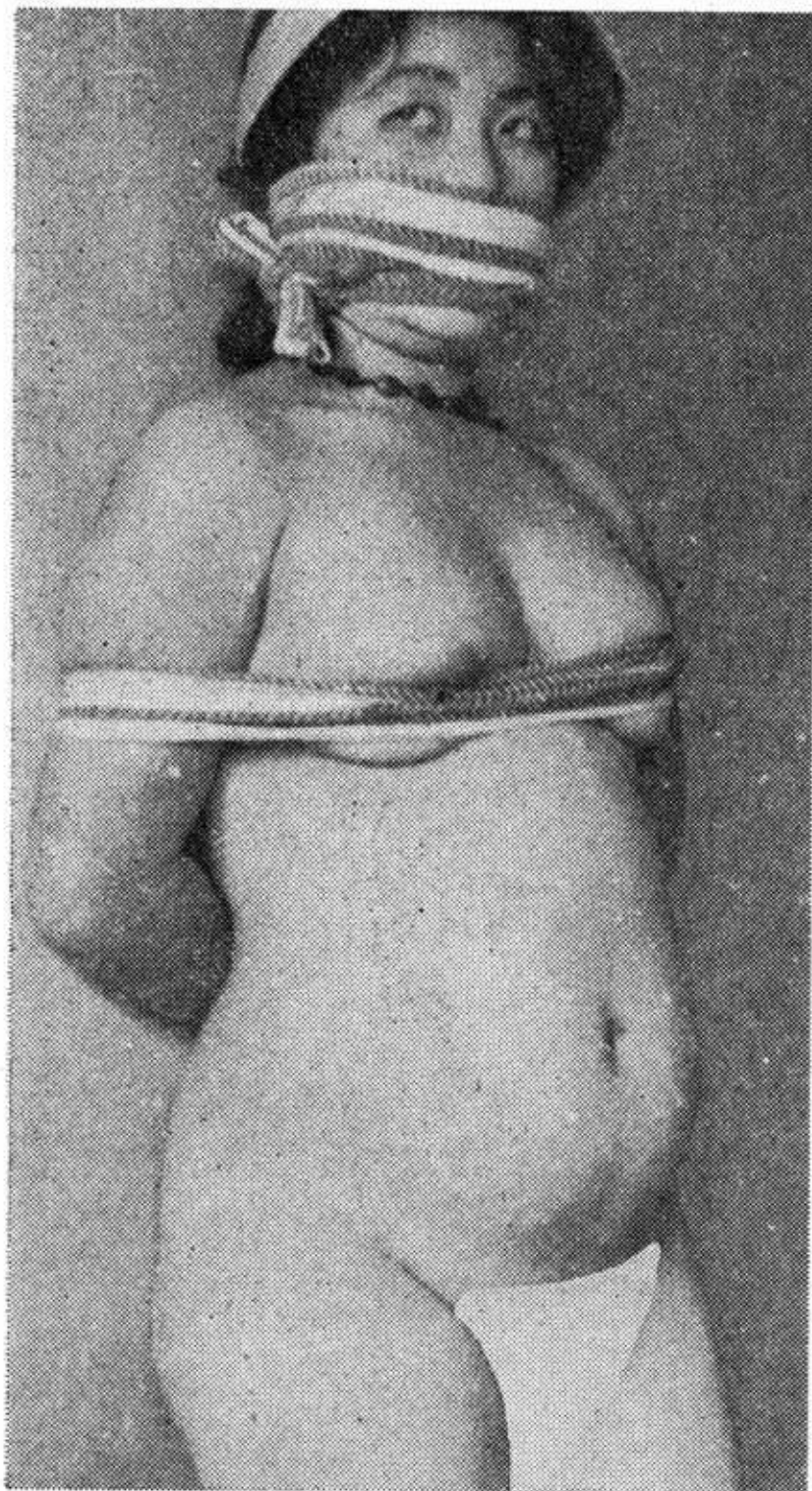
いつしか二人は、ホテルへも誘い合うようになり、「勇さん、好き」と彼女が真面目に言って呉れるようにさえなりました。私も、真実、彼女が大好きでした。

逢いだして三月ほどして、私は思いきってそれでも、控え目に、「縛らせてくれる？」と頼んだものです。彼女は、「えっ？なぜなの」と、疑問に思ったようでしたが、私が

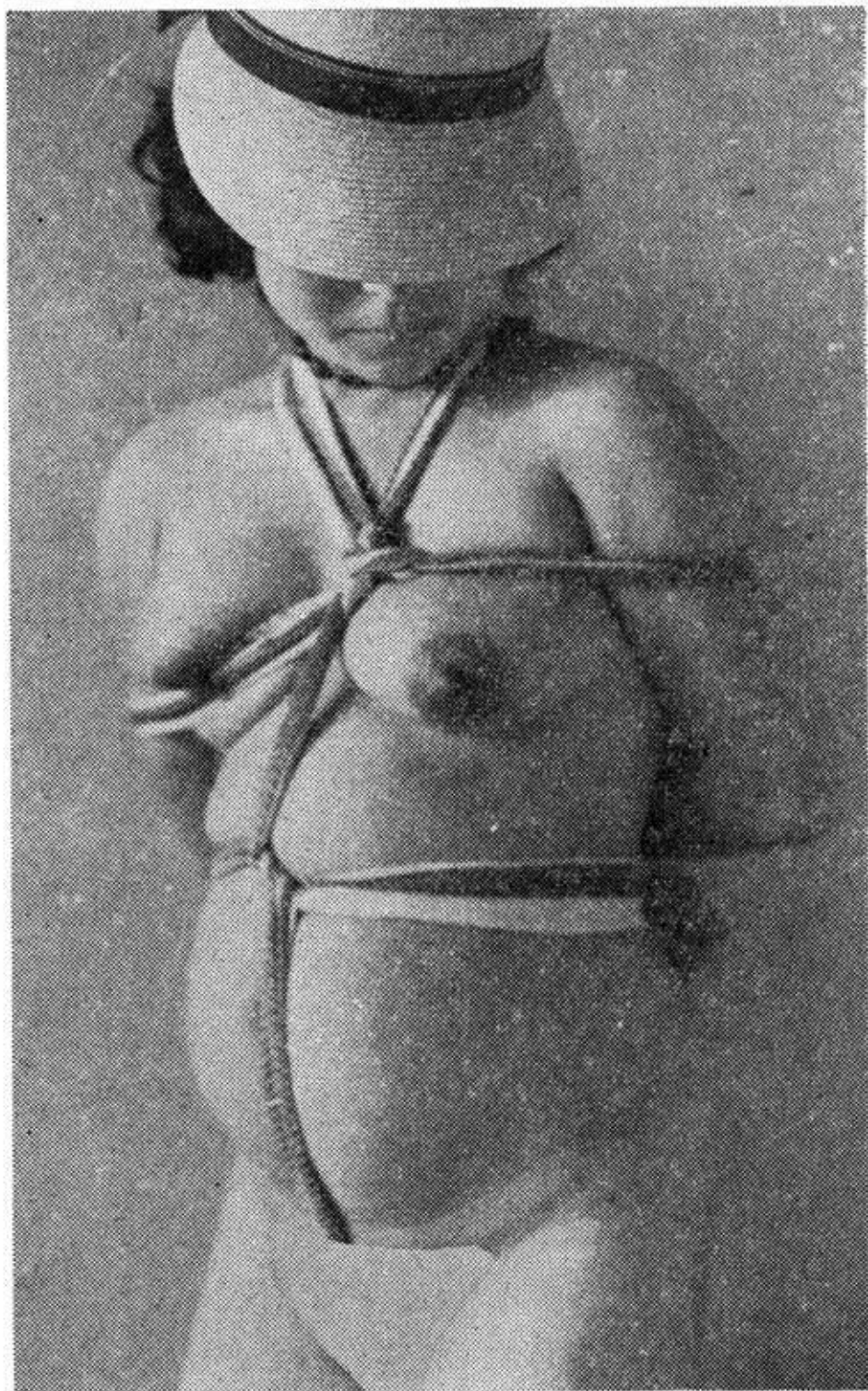
「なんとなく、縛ってみたかったから。でもキミが嫌だったら、いいんだよ」と言ったら「ええ、いいわよ。縛ったって——」と明るい声で答えてくれたのです。

私は、こわごわ、彼女の裸を、そっと縛りました。感激で指先がふるえました。

それ以来、私は、彼女と逢うたびに縛りました。縛るといっても、麻縄やロープを持っていたって縛るといった本格的なものではありませんでした。あり合わせの紐で、奇譚クラブにのっている縛り方を真似して、軽く真似







事に括るだけでした。

うまくは縛れませんでした。私にとっては、それが、何物にも換えがたい貴重な感激であり、体験でした。35ミリの旧式のカメラで、そんな彼女の姿をうつしました。上手にはとれませんでした。それを自分で現像するときは、また格別でした。

彼女こそ、自分の妻になる女性だと、私は心にきめていました。両親も彼女だったら、

きっと気に入ってくれるだろうと、信じた。器量も悪くないし、従順で、気立てもやさしいのです。そして、私にとって、何の気兼ねもなしに縛らせてくれるという、唯一の貴重な女性だったのです。

今年こそは、彼女と、なんとしても結婚式を挙げようと決心した年のことです。一月の中頃に一度、逢ったとき、私もスキー旅行に行ったり、帰ってきてすぐ、新入社員の合宿

訓練の指導にかり出されて、ずっと家を留守にしていた、四月ばかり、彼女と逢っていませんでした。

新緑の木々の葉が燃えるような五月の末、私達二人は、久しぶりに新宿で逢いました。

彼女は沈み勝ちで、どうも、いつもとは様子が違うのです。明るくて快活だった彼女がずっと、うつ向いたままなのです。ややしばらくして、「私、妊娠しているの」と、彼女が言ったとき、私はびっくりしました。

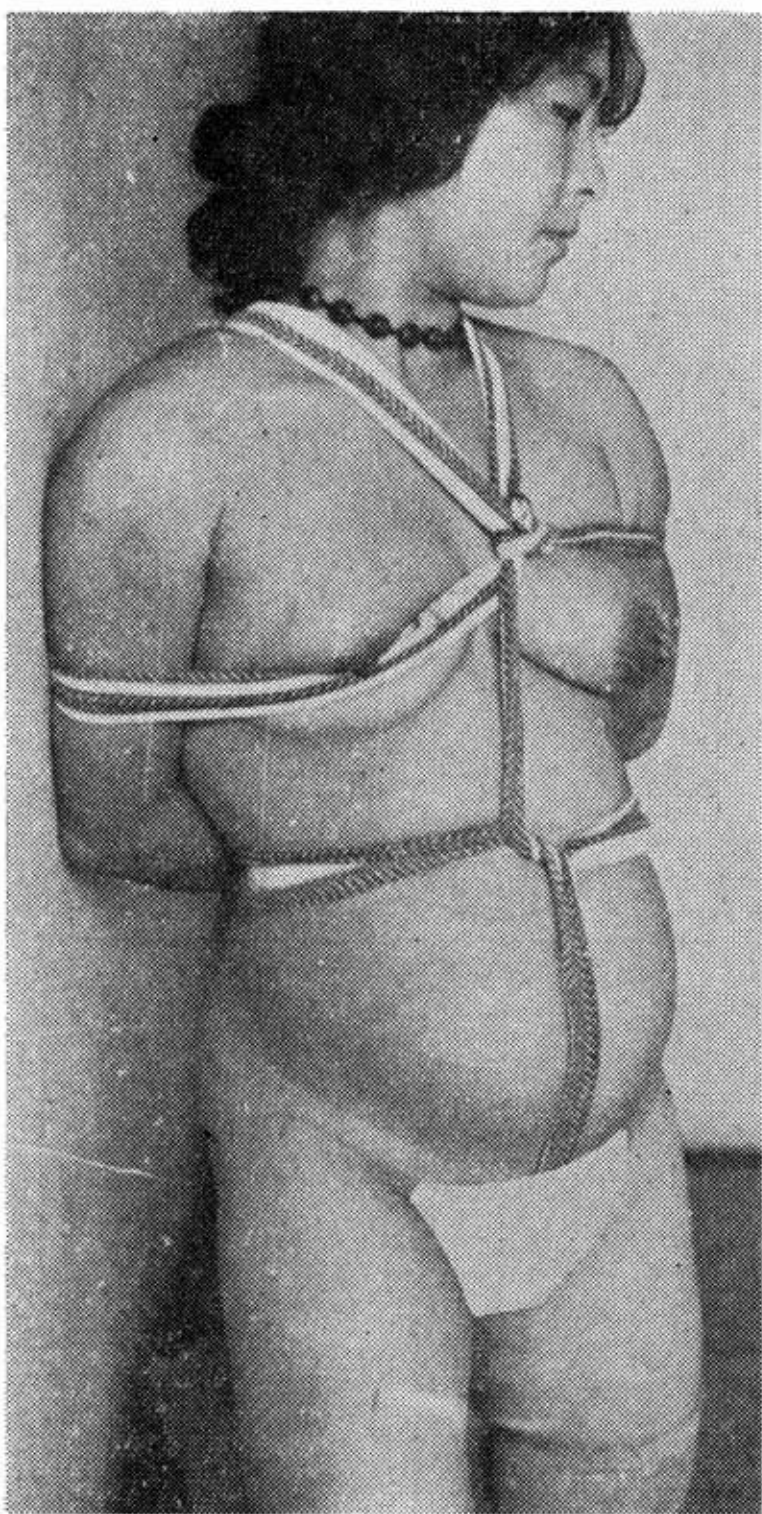
私は、自分の子供だとばかり思っていました。だから、「何故、それを早く言わなかったんだ」と詰問しました。でも、次の彼女の言葉で、私は、脳天をハンマーで殴られたようなショックを受けました。

「ごめんなさい。私、昨年の暮れ、結婚したんです。それで、今、八カ月になります」  
「だったら、一月に逢ったときは、もう、結婚していたってわけか」

私は血を吐く思いでした。

「すみません。勇さんのこと、忘れられなかったのですけど、両親のすすめる人が、どうしても断りきれなくて……」

「それで、結婚したってわけか。そりゃ、僕もキミに結婚の申し込みをしなかったのは、



悪かった。でも、僕のこの気持は、誰よりもキミが、よく知っていて呉れると思っていたのになあ。ああ、おそかったか——」

私は泣くに泣けない気持でした。しかし、すでに彼女が正式に結婚し、それに妊娠八カ月ということであれば、もう、どうすることも出来ません。男として、すっかり諦めて、彼女のこれからの幸福を願ってあげるのが、私の取るべき道でしょう。

こんな素晴らしい女性に、もう二度と、私の前には現われないだろうという悔恨が、私の心をチクリと刺しました。

「最後の思い出に、キミの妊娠した裸の体を見せてくれる？」

「ええ、いいわ。それで勇さんの気がすむんなら。縛ったって、いいのよ」

そう言うってから、彼女は再び、以前のような明るい顔に戻りました。

私は彼女を紐で簡単に縛ってから、妊娠した裸をカメラにおさめました。

好きで好きで、大好きだった彼女の妊娠した姿を見てから、私は妊婦の自然の美しさというものを知りました。

全体に肉づきがよくなり、特に豊満な乳房

が、お腕を伏せたように見事なふくらみを見せていて、その乳首の大きさと共に、如何にも女らしい感じがしています。

お腹は八カ月といっても初妊娠ですから、そう目立って大きいというほどでもありませんが、膨らんだお腹の中心に、お臍がぺこんとへこんでいるのが、とても可愛いく、美しく見えました。妊婦の裸全体が、なんともいえぬ女らしい感じで美しいのが、私の胸を打ちました。

これは、きっと、私の大好きな彼女の妊婦姿だったからでしょうが、それから後も、私は他の女性の妊婦姿にも、これを機会に関心を持つようになりましたから不思議です。

それ以来、私は彼女には一度も逢っておりませんが、彼女と逢っていた頃のこと、思い出として忘れることは出来ません。

今では、何兎かの母として、きつと幸せに暮していることだろうと思います。

私は、その翌年、今の妻と結婚し、平凡な日々を大過なく過しております。

あの頃の楽しかった青春時代を思い出し、もし、彼女と結婚していたら、奇クに夫婦プレイの変わった写真も送れたのにと、一人、複雑な微笑を噛み殺しております。



カット・伊藤 祥子



☆ は じ め に ☆

私が奴隷妻に関連して雑文を、本誌上に発表し始めてから、もう何年になるだろう。その間、幾つかの随想を通じて『奴隷妻』と言う如何にも嗜虐的な語感を持つての言葉の本質が、SMの世界に特定した一類型として地位づけられることを念願し、努力し続けて来た心算である。

それかあらぬか、最近本誌上でも、奴隷妻への認識が漸次、高まり、夫への奉仕手段として、多くの貞女諸姉の実践事例を、殆ど毎号の様に拝見出来る迄に立ち至ったことを、

この上なく嬉しく思う。本質的には奴隷妻と無縁の内容なのに『奴隷妻の性辛抱』と題した映画さえ公開されているのは、所詮この響きの良いSM用語が、遍く一般化しつつある一つの証拠となるであろう。

奴隷妻とは、毎度述べる様に、奴隷化した妻の呼称なのだが、同じ奴隷化するならば、その事実を日常的に具体化することが望ましい。と言う趣旨から私は、予々『胴鎖』の緊締を最も簡易な方法と認めて、主唱して来た訳だ。このことの詳細は今回は冗述を避けるが、兎もあれ、本誌寄稿者の中から、これ迄に今田、山本、橋本、紀川の各位が、この胴

S M 随 想

奴隷妻の哀歎に思う

柴 利 好

鎖の恒常的実践者であることを、相次いで明白に名乗り出でられたのは、心からの喜びである。この喜びを表わすために私は、各位の夫人達に対し、誌上に出られた順序に従って『奴隷妻第一の女』から『第四の女』迄、逐次、尊号を奉った。然かも、このことに就いてオーナーの各位から何れも懇篤な言葉さえ戴く、望外の光栄を担ったのである。前置きはこの辺にして、本稿では、奴隷妻、新旧お三方をご登場願ひ、彼女達の哀歎を付度し合ひ、夫婦と言うものの情愛の尊さに就いて若干の感慨を述べようと思う。

## その一 西村夫人のこと

先般、長期に亘って、ご掲載を賜った拙作『命預けます』は、私が日頃、抱いている理想的奴隷妻の概念を一人格として集約化したものである。そしてこの小説成立の経緯は、別稿『春子曼陀羅』に詳述した通りである。処で本誌十二月号に於いて西村真氏から『命預けます』に就いての御高見を戴いたのは、衷心感謝に堪えない。兄のご投稿は多分『曼陀羅』発表以前になされた様に推察されるので、貴見に対するご返信は、一切を右の記録に譲っても宜しかろうと思う。何れにせよ拙作が、奴隷妻飼育実家としての兄のお眼に止まり、仮令、部分的にもせよ、共感を得られた箇所があったと、お洩らし下さったことを、深く感銘し、厚くお礼申し上げる。

○

二月号の同兄による飼育調教法を、私は格別の興味を以て拝読した。何故なら、兄が夫人に対して胴鎖緊締の予ねてからの実行者であられたことを承ったからである。ご寄稿によれば、「もちろん腰から股にかけての鎖が永久的な形で妻の力では取れないよう、普通

に測って60センチ弱あるウエストを52センチにまで現在は鎖を縮めて、ペンチでしっかりと、とめている」と述べられた。続いて「帰国後は、腰鎖を約20センチ縮めた」とも申されている。ここに「もちろん」と言う表現が使われているのは、この種の鎖の緊締が、奴隷妻の当然在る可き姿として、何等の疑念もなく兄に承認されていることを示している。

この様にして、兄が夫人に科しておられる『腰鎖』がどんなものかは詳かではないが、「腰から股にかけて」とあるから、屹度第三の女、橋本八重子夫人同様に、一本の鎖で締め付けられており、この鎖の長さを20センチ縮めたと言う意味なのであろう。それとも、ウエスト部分の胴鎖が20センチ縮められたのだろうか。そうだとすると、これは大変な事だ。出来ることならこの辺の事情を、次回で寄稿の折にでも今少し具体的に承り度い。

現在の夫人の胴囲が60センチ弱、つまり59センチ位の処が52センチに迄、鎖を縮めて細められているのは間違いない事実で、これ丈でも夫人の肉体上の負担は決して軽くはない筈である。腰鎖20センチ短縮の影響が、夫人の肉体の上に、何処にどのように現われているかは今の処、分らない。けれども、全く伸

縮性のない金属鎖による緊締は、縄紐類のものに較べて数段の苦痛を伴う。これは実験すれば直ぐ解ることだ。ウエストを鎖と縄で同じサイズに締め較べて見ると、緊締の結果が同じだから、苦痛の度合いも同じだと思うと、それが大違いなのである。

60センチ弱の胴囲りは日本女性として寧ろ瘦形に属するから、この贅肉の少ない細腰を鎖で縛られることは、皮下脂肪豊かな肥満体よりも内腹部に直接的に鎖の抵抗を受けることになる。それ丈に、瘦身の方が肥満体よりも苦痛が甚だしい。夫人のウエストは現在52センチ(21吋)と言われるが、兄の徹底した調教振りから推察すると、将来、必ずやモット緊しく細く締め付けが続けられるに違いないと思う。即ち更に5センチ縮まれば47センチ(18吋半)、10センチ縮まれば42センチ(16吋半)だから、そうなれば成年男子の両掌の指先が届く程の細さになる筈だ。果して、そこ迄、調教が進むかどうか、勿論、分らないけれども、現状の俛では済まない様な気がしてならない。此処でこんなことを申し述べる愚生の本意は、是非その様にあって欲しいと言う勝手な願望からなのである。

何れにしても、腰鎖が永久的な形で夫人の



力では取れないようにペンチで、しっかり止められている事実と、それに耐え続けておられる鎖夫人の献身に対して西村氏夫人を『奴隷妻第五の女』と、お呼び申し上げることの無様を、お赦し願ひ度い。そして次の機会にでも、夫人の美しい胴鎖姿のお写真を、出来るなら正面、背面、側面の三方からの真影をご公表戴き度く、切に期待している。

○

兄はフランスへお出掛けの前に、夫人に対して障子が破れそうな鼻輪をつけて行かれたそう。その当然の結果として鼻輪は、夫人の美しい鼻下に常時、取り外されることなく嵌められ続けていたと理解して良いのだろうか。とすると、夫君ご旅行期間中、夫人は否応なく飼牛同様に鼻輪付きの俤、日常生活を過されたことになる。印度や南方の習俗ならいざ知らず、これ亦、我々の一般的風習に反した、大変な出来事と驚かされた。

更に瞠目されるのは、『新案飼育調教法』である。即ち夫人に対し、奴隷食として「コプロトースト」が支給されていると言う事実である。夫人は、ご自分の体内から排出された汚物をパンに塗られて己が食物として与えられておられると言う。しかも最初は泣いて

許しを乞われたけれども、毎晩の様に後ろ手に縛り、鼻をつまんだの強引な調教によって「今では時々妻から求めてくるようにまで」馴化されたとのことだから、誠に恐れ入る。

こんな場合、普通ならば怒って大喧嘩になる処なのに「泣いて許しを乞われた」と言う夫人の何と、いじらしい純情さだろう。夫人がこれ迄に受けられた数々の調教の内でも、奴隷妻の悲しさを、これ程迄に痛感なさったことはなかったと思う。然かも、この切なさ

と苦しみを乗り越えて、夫君の嗜虐の要求を受け容れ、進んで献身されている夫人の諦観と、夫君を思う至純の愛の尊さを、心から讃えずにはいられない。

これに就いて私は嘗て本誌を飾った和泉弥栄夫人の哀話を、いみじくも思い出した。夫人は夫君の暴虐に耐え兼ねての逃亡を繰り返して失敗された揚句、逃亡防止の手段として両乳首を中心とした桜の花弁を入墨されたのだった。それは扱ておいて、捕えられ家に連れ戻された夫人は所持する全ての下着類を売却され、パンティ一つさえ残らず破棄された。そして全裸の身を柱に鉄鎖で繋がれたその上に、我と我が排泄物を食事として与えられると言う無惨な目に遭われたのであった。私は

この様な心身の愉悦を全く伴わない虐待事件に就いて、当の弥栄夫人が、私の日頃、称える『奴隷妻』とは全然、異質の存在。即ち単なる被虐妻であることを以前『慕情』の中で指摘したことがある。同じ汚物の給食であっても西村、和泉両夫人の被虐の生活の実態を仔細に考察すると、そこに奴隷妻と被虐妻との相違を判別出来ると思う。これを別語で示せば「幸福」と「悲惨」との差別とでも称えられるだろう。何れにしても夫人を、ここ迄徹底的に飼育完成なさった西村氏の不拔の執念と、これに応えて、良く奴隷妻として挺身これ努めておられる夫人の、いじらしい心情に対して、満腔の賛辞を惜しまない。

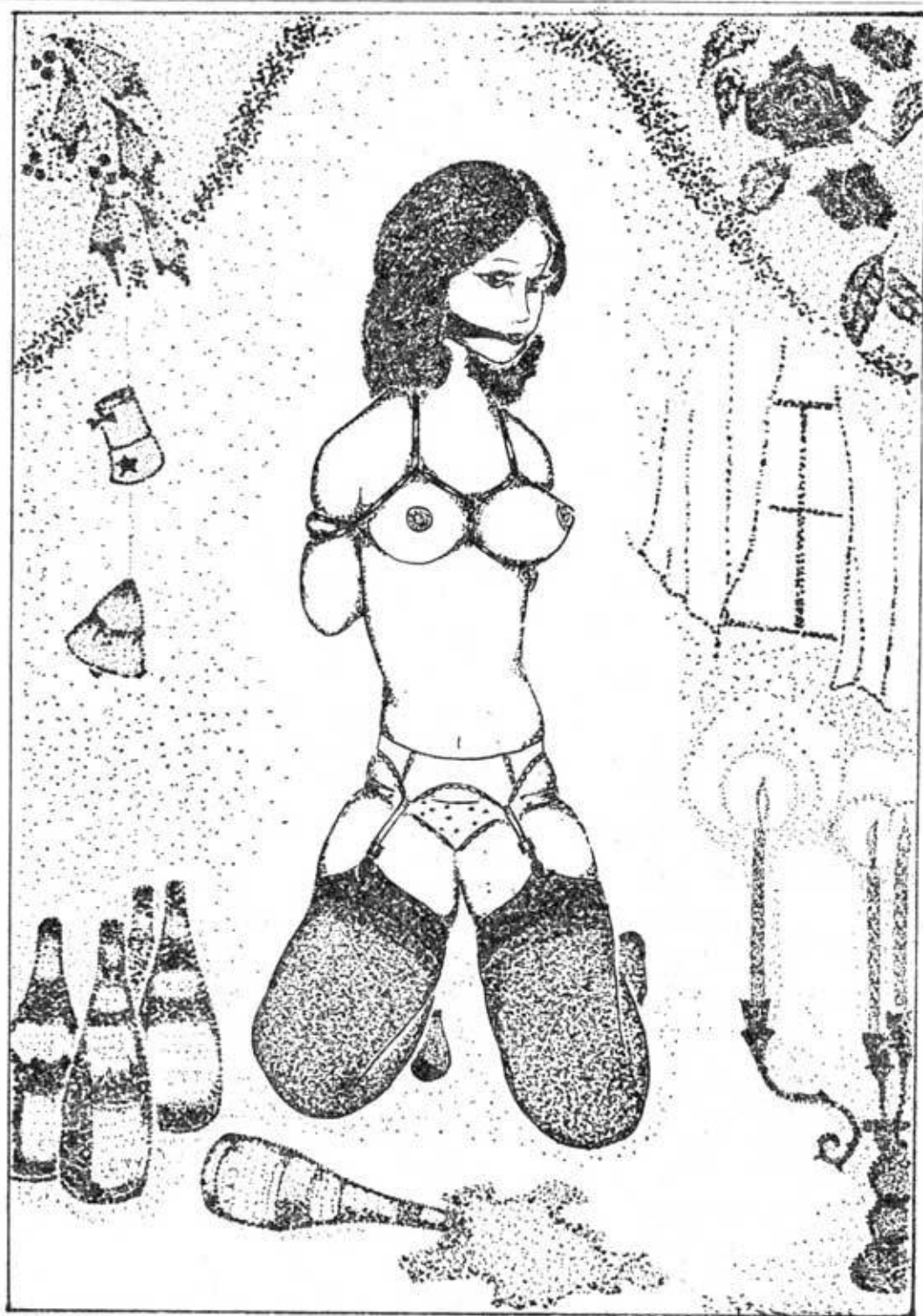
○

因みに愚生の奴隷妻に関する所見の概括は昨年の6月号『奴隷妻覚え書』に要記してある。この一文は、奴隷妻の実際のオーナーとしての西村兄からすれば、お粗末極まる駄文でもあらうけれども、ご笑覧の榮を得た上で何分の、ご叱正を賜われれば幸甚である。

まこと鎖夫人の本誌上出現は「第四の女」紀川和歌子夫人以来、久方振りのことだったので、マニヤとしての喜びも、一入なのである。数年前迄は、真逆実際にはあるまいと思

っていた、この様な鎖夫人の続出に対して、  
只々有難く、文字通り随喜の思いで一杯であ  
る。こうして筆を進め乍らも、これ迄に誌上  
を飾られた鎖夫人諸姉の美しい栄え姿の数々

が眼の辺りに彷彿としている。どうか引き続  
いて他の多くの隠れた奴隷妻としての鎖夫人  
達のご出現を、この稿を借りて切に待望する  
ものである。



イメージギャラリー

『SMパーティー』

若江 正史

## その二 田宮夫人のこと

田宮寿子夫人に就いては従来から何度も述べさせて戴いている。それ丈に私の夫人への傾倒振りも大方、察せられると思う。夫人は仮令、胴鎖の常締こそ受けてはおられないが縛られることに、責められることに、これ程迄に夫君に対して従順で、献身的な女性是他にあるまいとさえ思われる位、徹底した奴隷妻意識の権化の様な方と拝察される。それ故にこそ私は、敢えて夫人に対して先の『覚え書き』の中で聖女の称号を奉った。私は『命預けます』で、『縛られるために生れて来た女』として、私好みにも仮空の春子を描いた。が、この寿子夫人こそ、正しく現実、これに当て嵌まる女性の様に思われてならない。

扨て昨年11月号で辻村隆氏が、久々にこの田宮夫人に就いて健筆を振られている。私はこの項目を、宛ら、初恋の女に再会した思いで懐かしさに胸震わせて拝読した。辻村氏の寄稿内容は「逆吊り」が題目だから、夫人に対する記述も当然、そのことが主体となっている。氏の相交らずの麗筆によって、まるで私もその責めの現場に居合わせてでもいるかの様な錯覚さえ覚えた。その中で同氏は、嘗



てサロンに掲載された『緊縛の屋外実験』に添えた二葉の写真に就いて述べておられる。このフォトこそ、先に拙稿『吊り責め』に、編集氏の特別のご好意によって添えられた夫人の逆吊りの真の姿に外ならないのである。私と寿子夫人との浅からざる因縁を思わざるを得ない。

## ○

本稿では、夫人の吊るし責めそのものに就いての論及を差し控え、特に印象深い二点を掲げ、以て夫人の奴隷妻としての精進、努力の成果を偲ぶこととしよう。

去る44年1月半ば、田宮氏ご夫妻が辻村家を訪問された時、寿子夫人は和装訪問着で着飾った下の素肌に、夫君の手により予め細引で強烈な緊縛を受けて行かれたのであった。これに係わる辻村氏の長い原文を必要箇所だけ短縮して要記すると（原作者よ、無礼を諒とせられ度い）

「夫の叱咤で、夫人は最後の一枚をぬいだ。パンティは穿いておらず、いきなり緊縛の裸身が、私の眼に飛び込んできた。乳房は、細引で上下をきつくしめられ薄紫に変色して、ポックリと盛り上り、両の乳首は根元を赤糸でくびられて、まるで乳首だけを別にとりつ

けたように乳房から飛び出していた。ウエストを締めつけた細引は、肌に没して見えぬくらいで、乳房の谷間からウエストの細引に垂直に連結された、もう一本の細引は、臍下から股縄となつて、乳房を縛った背で結ばれていた。それぞれの結び目は堅く真結びにしてあり、細引だけに、ちょっとやそつとでは解けそうにもない。寿子夫人は、細引でポイントをしめつけられた上、更に訪問着という厄介な和服の着付で、数本の紐を使い、帯で締めつけて、柔肌を思いきり虐めつけられて、尚且つ、苦しさに耐えて、さりげなく、笑いを泛べていたのであった。」

とある。この様にして家を出る時に縄打たれてから彼此、二時間程も掛かって混み合った街道を自動車で揺られ通しであった話だから、ご夫妻が辻村家に到着した時、夫人の肉体を締めつけていた全ての縄目は、どんなに緊しく柔肌深く喰い込んでいただろう。その縄目を夫君恭介氏は、予め用意の先端の丸い小鉄を縛り目に差し込み乍ら、パチンパチンと切り解かれたのは、指先を使っての解縄が不可能な程、縄目が厳しくなることを予期すればこそなのである。夫人の柔肌に印した赤紫色の縄目の条痕の有り様は、本文には略さ

れているけれども嘸かし凄まじかったに相違ない。細引が肌に没して見えぬくらい絞られたウエストと言い、雁字搦めに女体の上下を締め上げた、それぞれの急所の状態など想像する時、夫人の苦痛に対する忍耐力の素晴らしさを、感嘆せずにはいられない。

寿子夫人の、この着衣下の柔肌緊縛の事實は、既に夫人が同家に着かれた刹那に、「何だか奥さん、苦しそうやネ。縛って来たのと違う？」と辻村氏の燭眼によって、早くも見透されたと言うのだから、この二時間に及ぶ緊縛行が夫人に与えたダメージが相当だったことを如実に窺知出来る。

右の様にして着衣の下で、夫君の愛縄によって素肌に緊縛を受け乍ら、長時間、外歩きを強いられている女性は寿子夫人独りに止まらない。予々他の多くの奴隷妻諸姉が、各様の嗜好に応じ、創意工夫を凝らして実践されている事実を、小竹雪枝夫人や橋本八重子夫人、その他、数々の実例によって詳しく拝承している。殊に小竹夫人の、裸身が括れる程入念に締め絞られた、細紐の喰い込む有様を外出される時と、家に戻られた時とを比較して撮られた二葉のフォトを、私は決して忘れはしない。私は、これら諸姉達の難業苦業振

りを拝見し乍らも、田宮氏から寿子夫人に同様な状態の強制がありはしないかと秘かに予想しては、その告白文の発表を待ち望んでいたものであった。

これが、遂に今般、辻村氏の一文によって実際を知ることが出来た次第だ。然も、この記事の内容が、取り分けて私の心を打つのは身長一五七センチ、体重三九キロと言う夫人の極く華奢な身体付きと、夫人がSM生活に没入される原因となった或事件の経緯。更には、こうした責め苦を我が生来の業として諦め、只管、耐え続けておられる優しい心情に対する憐れみ等々の考慮が然らしめる、私独りの感傷からなのだろう。序でに申すなら、この訪問の途すがら、始終、夫人の体内に太目のサラミが嵌め込まれていたのもSMの興趣を浚う一事である。

○

興味ある第二点は、去年、敢行された逆吊りの記録の中に見られ、これを要記すると「見事に逆吊りになった彼女の体を、空中でグルグルと数度、回転させる。手を放すと弾みがついて女体は独楽のように回転する。小柄で、たおやかな女体のうち、臀部だけが異常なまでに発達していて遅く、飼育の果、

この完全剃毛と関連して、私は田宮夫妻のSMプレイの後の爛熟した耽溺の生活を、そこに、ありありと見る想いがしたのであった。彼は、立てかけてあった竹箒を手にとると、ささくれた竹束の方で、キュッと締めて、鍛えられて強靱になった双臀を、発止発止と打擲する。打擲のはずみで空中で揺れ、ゆるやかに回転する女体から、むしろ甘い苦痛の呻きが、夫の嗜虐を、あふり立てるかのように洩れる。」

とある。成程、本玉稿の冒頭を飾る二葉の真影で、小柄な身体に、不釣合いとも思われる程、肥えた夫人の臀部の状態が明瞭に窺える。この様にムッチリと肉付豊かに発達した美しい臀部を眼の辺りにして、これに折檻を加える立場であれば、仮令、真性のサディストでなくても「ビシリビシリ」と思い切った鞭打ちを加え度くなるに違いない。殊にこの写真の様に、逆さ吊るしに吊り下げられて、色艶やかに眼前に揺れ動く、生き生きとした上向きの肥臀の有様を見ては、尚更のことと言えるだろう。

宮廷所属のバレリーナ達が鞭打ちによって特訓される「ロシヤ宮廷の踊り子」と題する訳本を読むと、女性の臀部は鞭打たれば打

たれる程、肉付豊かに引き締まり肌の色艶も美しくなるものだと言う意味の事が記されている。それが果して事実かどうか疑っていたのだが、この寿子夫人の豊臀の状況を拝見しては、小説中の記述が単なるSMの興味本意の嘘偽りではないことが肯かれる。

先年、香川絃一郎氏のご寄稿による数葉の吊るし責め写真の中に、豊臀を剥き出しに惜し気もなくカメラに向けて、後ろ手、正位吊るしを受けている、うら若い女性の麗姿を拝見した時にも、私はこの吊り責めに喘ぐ女性の丸やかな臀部を、思うさま、打ち据えて見度い欲望に駆られたことがあった。女性の豊臀と鞭打ちの因縁は、SMPの中で在る可き必然の姿の様に私には考えられる。

既に古典的名著となっている中村古峽氏の「変態性格者雑考」に、岡山の一僧侶による婦女暴行事件の実例が記されている。即ち、同時に二人の若い女性と居住した田口逸堂なる人物は、片方の肥満体の女性を、しょっちゅう全裸に剥いで、彼女の豊満な臀部から背部など全身を鞭で打擲しては楽しんだ。彼女は、その度毎に、悲鳴を挙げては部屋中を逃げ回り乍らも、急迫する鞭先に翻弄され続けていたものであった。この乱行が近所の噂に広ま





イメージギャラリー

『羞恥の中の悦虐』

マエダ・ヒオミ

り、この僧侶は司直の裁きによって金百円也の罰金刑に処せられた。処が当の肥満女性は、その様にして鞭打ちされることを、決して厭がってはいなかったのだそうだ。

今にして思えば、百円で女性を自由に打擲出来るのなら、私も一つ……と言った怪し

からぬ慾念も起ろうと言うものである。この記事に添えてある被害女性の背面写真では、印刷が不鮮明なので、肌面に印されている筈の鞭跡が不明瞭だが、骨盤の上辺の所が一条極端に括れを見せ、その上下に連なる丸々と盛り上った肉厚の背中と臀部が見られる。件

の僧侶の慾情の有様を、成程と首肯、感得される美事な肥満体であった。お断りして置くが、私は決して肥満体好みではない。偶々肥満体と鞭打ちとの関連に就いて述べ度かったので右の実例を挙げたのである。

話を本筋に戻そう。要するに私が此処で申し度いことは、小柄で華奢な寿子夫人の肉体であるにも拘らず、臀部丈が異常に丸々とハチ切れんばかりに発達している事実。即ちその様に發育を促進させた鞭打ちの激しさの意味に就いてなのである。この豊臀こそは普通ならば到底、耐え切れない程の激しい鞭打ちの苦痛に対して夫人が、じっと辛抱し通し、何年も耐えに耐え続けて来られたればこそ結実された、SMPの偉大な成果なのである。

或時は、余りの苦しさに悲鳴を挙げようにも、又は苦痛を訴えてお許しを乞い度くても口に嚴重な猿ぐつわを嵌められて、擲たれ続けられた事もあったであろう。そうした打擲の終了した後に、夫君の愛撫がどの様に持たれようとも、この折檻の苦しさは並大抵の形で済まされない、痛ましいものであったであろう。それにも拘らず、夫君の嗜虐の行為を一つの愛撫の形として受け容れ、その強烈な責め苦に、耐え続けることに、至高の喜び

を味わっておられる優しい夫人の心根、これこそ奴隷妻の真随と言わずして何と呼ぼう。

○

承れば、ご夫妻は現在、山口の山陰地区に居を移され、新生活に入られておるとか。ご住地こそ変わっても、ご夫妻のSMPは、よもや杜絶されはしないと思う。仮に現状が、嘗てあった関西時代に較べて、辻村氏の言われる緩々の時期であるかも知れなくても、寿子夫人の心の奥底には、あのSMP盛時の頃の思い出が、尽きることの無い泉の様に湧き出しているに相違ない。ひょっとすると、ご新居の奥座敷に、秘かに白木の角材が立てられていて、然かもこの様な単なる独立柱ではなく、上方に同質の横木さえ渡してあるかも知れない。そして全身を柔肌も括れよとばかり厳重に責め柱に縛りつけられた寿子夫人は、自らが背負ったこの運命の十字架上に、細やかな裸身を晒し乍ら、刻々と募り来る縄目の苦痛に喘ぎつつも、益々激しく燃えたぎる嗜虐の陶醉の中に、奴隷妻として、終生夫君に仕えまっつることの幸福を、染み染みと噛みしめておられる様な気がしてならない。

願わくば寿子夫人よ！ いつ迄もバラの花の様に美しく、真性奴隷妻として末長く生き

続けて下さらんことを、心からお祈り申し上げる。そしてその後の奴隷妻振りの逐一を、夫君恭介氏の筆によってでも良い、いつの日か誌上に、ご披露下さらんことを併せて乞うものである。

### その三 小田原夫人のこと

私は、前に『奴隷妻の本義』で、奴隷妻の持つ悦虐嗜好こそ、重要であると説いた。然もそれを不可欠のものとして強調したのである。処が、この愚見に若干の補正を加えざるを得ない事実を、小田原一郎氏の近況通信によって知らされた。即ち、奴隷妻に不可欠である可き悦虐嗜好の保有には、稀には例外もあり得ると言う事実なのである。

同氏によれば、夫人は氏の、その後の熱心な調教にも拘らず、未だに心身内に本格的な悦虐嗜好が開花しては来ないものようである。察する処、夫人は、ご結婚迄は恐らくSMに全く無智なお方だったのであろう。それ丈に、夫君から緊縛プレイへの協力を要請された時の驚きと悲しみが、どんなに大きかったか想像するに難くない。全裸の縦縛りにされた時、それを拒もうとして抵抗された結果

四、五日間、軟膏のお世話にならなければならなかったと言う。この一事でも、当時のSMPに対する夫人の認識の程度を、推知出来る。こうした事態にもめげず、その後も懸命に調教し続けられた夫君の態度も立派だが、それにも増して、求められる俚に緊縛の苦痛を乗り越え、それに耐え乍ら夫君に仕えられている夫人の純情は一層、讃えられて良い。

夫人は多分、その様にして夫君の意向に従う事が、愛する者への妻としての義務として諦観されたからであろう。愛児を出産後も、引き続き、従順にプレイを継続しておられる。愛児を氣遣い乍らも、二時間も「縛られ酌婦」としてサービスなされた時の夫人の縛られ姿の、あの素晴しさ。それは、これ迄に夫人が受けられた数々の被縛経験の成果を雄弁に物語っている。羞恥に消え入りそうなその時の麗姿は、前向き後ろ向きのフォト二葉共、緊縛姿勢から受ける被虐的情緒の点では全く非の打ち処の無い迄に完成されたものであった。殊に彼女の体格さえも、ご結婚当時に較べると数段の艶やかさが加わり、緊縛に適した柔軟度を増しておられる様子が窺えたものである。

それにも拘らず小田原氏のお便りでは、夫



人は依然としてM的快感の本質を自覚しない  
 尽で、プレイに従っておられるらしい。つま  
 り、縛られる事に喜びを感じるM的嗜虐感  
 の点では、往時と殆ど変化が見られないもの  
 のようである。夫人は、夫君の要求の俚に緊  
 縛プレイに、いそしんではおられるが、それ  
 は彼女に取って「縛られて嬉しい」とか、更  
 に積極的に「楽しいお縄を頂戴」と言う風な  
 悦虐感を享樂する段階に迄に至らない模様で  
 ある。

○

それでは夫人は、何故この様に甘んじて縛  
 られ続けておられるかと言え、これは偏に  
 夫君の嗜好に対する一生懸命な理解と奉仕の  
 精神に徹した、深い愛情に基づくものと見る  
 より他に説明の仕様がなと思う。即ち夫人  
 にとって縛られること自体は何等、肉体上に  
 直接的な喜びを、もたらしてはいない。けれ  
 共、そうされる事によって、最愛の夫君が喜  
 ばれるのなら、敢えて縄目の苦しさに耐え  
 て、素直に献身する事こそ、妻たる女の道で  
 あると、決意を固めておられるに相違ない。  
 「貴方に喜んで戴けるのでしたら、私縛られ  
 ますわ。何卒お好きな様にお縛りになって下  
 さい。私は貴方のものよ！ たとえ苦しくて

も、どんなお仕置でも出来る丈の辛抱は致し  
 ます。でもお約束して！ 私を愛して。いつ  
 迄も私を愛して下さいませね。お願いです」  
 これが夫人の真意に間違いないと、私は思  
 う。愛する夫のためには、全てを捧げて悔い  
 ない健気な妻の心情は、如何なる場合でも尊  
 い。仮令SMPで肉体的快感が伴わなくても  
 夫人がそれによって夫婦愛と言う、心の喜び  
 丈を求めて止まないものであるならば、彼女  
 は正しく奴隷妻としての立派な素質ある女性  
 であると解釈される。但し、この様にして自  
 己を捨てて夫に従う丈の妻のもたらすSMP  
 が、真性S男にとって、本当の意味でSM感  
 覚を満足させる行為であるかどうかは又、別  
 個の問題となろう。

それは扱ておき、この様に緊縛によって受  
 ける肉体的苦痛が、とりも直さず精神的愉樂  
 に繋がる現在の夫人のSM生活は、最早S男  
 によってなされる一方的虐待とは見做されは  
 しない。今後、小田原氏の飼育調教宜しきを  
 得れば、或は将来、夫人が真の嗜虐の陶醉を  
 感得なさる迄に馴化が進む事が有り得るかも  
 知れない。然かもこの馴化が順調に進まず、  
 夫人のSM感度が現状の域を出ずして今後共  
 推移したとしても、夫君たる一郎氏は決して

悲観なさるには及ばないのではなからうか。  
 何故なら夫人は「二人だけのプレイならとも  
 かく、ヒトには縛られて喜ぶマゾ女と思われ  
 ることに、強い抵抗を感じ」ておられると言  
 う。そして「二人だけのプレイでなら、今ま  
 で以上に数多く、もっと強度の責めにも協力  
 する」と迄、おっしゃっているではないか。  
 私は、これで十分だと思う。これ以上を現在  
 の夫人に要求なさる必要は更々、ない様に思  
 う。この様な一途な献身が、一概に本格的な  
 マゾ女性になり切れない夫人にとって、どれ  
 丈の犠牲的行為であるかを推量する時、こう  
 迄、決意されている夫人の心根の優しさ、い  
 じらしさを痛感させられるのである。

○

処で、夫人の嗜虐反応に就いて小田原氏は  
 縛られ酌婦の折には「それでも、結構、楽し  
 んでいた様子が窺えた」と言われたし、先般  
 も「けっこうエクスタシーも味わっているよ  
 うに思える」と観測しておられる。この様な  
 夫人の心の在り方、即ち、その小さな胸の奥  
 に去来する、諸々の微妙な心裏の翳りの本質  
 が、果して何であるかの詮索は、今余りに結  
 論を急がれない方が良さそうに思う。兎に角  
 Mではないと言われる夫人が、夫君の要求を

極力理解して、協力なさっているのだから、貴兄に於かれても、非M女としての夫人の立場を充分に尊重せられて、そのお気持ちに温かい、いたわりの心を持たれる事こそ大切である。夫人のお気持ち、今後、どのようにうつろい、成育して行くかに就いての見定めは、やがて長い歳月が自然に解決して呉れるであらうから。

今次の大戦で、飽く迄も兵役服務を拒否し続け、終戦迄、頑張り通した或キリスト者の話を聞いた事がある。その方は峻烈な拷問の果て、遂にその激しい苛責にすら一種の恍惚感を味わう迄になったと述懐されていた。これは言わば一種の法悦とも言えるものかも知れない。この事例は夫人の場合と本質的に相違があるし、極限状態の程度にも大差が認め

【伝言板】○本誌へ寄稿された方、投稿された方、モデルに志願された方、読者に他へ洩らすようなことは致しません。故に安心の上、通信をお寄せ下さい。尚、手紙の転送や郵送などは双方が納得されない限り原則として取り扱いません。御質問や電話は理由にお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。電話連絡が必ず必要の際は、当方からその旨を記してお返事申し上げます。

られるから、譬話としては、不適當かも知れない。併し、M性の自覚が無い者にも、M的現象が起り得ると言う一つの論拠にはなると考える。心優しい夫人を妻として持たれる兄は、SMPの度毎に、夫人への愛と感謝の真心を、卒直に言行を以てお示しになる可きであらう。

○

「私はMじゃない」とおっしゃる夫人ではあるけれど、現に夫君のS嗜好を理解する事に努め、納得して一身を投げ出してプレイに協力を惜しまれないこの事実。それは仮令、緊縛によって直接的悦虐嗜好が、彼女の心身に湧かなくても、その犠牲的行為が即ち、夫君への愛の奉仕である、と達観した妻の喜びに繋がっている事は事実の様に推察される。この夫君に対する献身的奉仕と言う肯定的忍従の姿こそ、立派なM女の心であると認められると申せば、繊細な夫人のお気持ちを傷つける事になるだろうか。

併し、少なくとも彼女こそ悦虐嗜好の有無に拘らず奴隷妻の本質に即した貞女である事は紛れもない事実であると断言出来ると思う。小田原氏ご夫妻の一層のSMPのご精進を願い上げると同時に、夫人のご理解ご協力

を得て、その麗姿が今後共、誌上に絶える事なく掲載し続けられん事を、切に期待するものである。それが為には、先ず夫人の第一希望を容れて、写真撮影に際して、それがご当人であると、他人から思われない工夫が絶体に必要なである。それには深い猿ぐつわや眼かくしをするのが良策で、猿ぐつわは既に既出のフォトに於いて実行されているのだが時々それが、ずれ落ちそうになり、容貌隠蔽の効果がない様に見えるものがある。単に容貌を知られない為の工夫としてならば猿ぐつわより眼かくしの方が効果的の様に思える。

それで思い出した事だが、昔発行されたK通信の中に、緊縛、眼かくし正座の女性の写真が掲載されていた。この女性は稍上向き加減に顔を傾け、次ぎに来る可き愛撫を待ち望むかの様な風情が、眼かくしされた容貌から窺えた大層、印象的な姿であった。眼かくしは被虐者に対して諦観と奴隷意識とを助長させる心理的手段として猿ぐつわより優れている様に思われる。それによって香わしい美貌を拝せなくなる事は真に残念ではあるが、拝見する側に取って、それ位の犠牲は、夫人のお心を思えば当り前の些事として我慢しなければなるまい。

(完)





＜夫婦で〔S研〕に参加したい男の告白＞

## SMの極致は複数プレイ

やま  
山

ね  
根

あきら  
明

私は奇ク十数年来の愛読者で結婚十年になる夫婦です。従って、奇クは結婚前の独身時代から毎月欠かさず、目を通しております。

私は夫婦が緊縛や鞭打ちによってエキサイトして、やがてSEXプレイに移行し、加虐と被虐のムードに陶醉してエクスタシーに達するというのが、夫婦SMプレイの常道だと、かねがね考えております。しかし反面、緊縛や鞭打ち、そのものの中にも、しびれるようなSEXの快感があると思いますし、これは一概に言えないと思います。

夫婦である以上、如何にSMプレイといっても、いずれはSEXに移行するということとは当然のことですが、結局は、緊縛や鞭打ちとSEXとの結びつきの度合いに帰します。

緊縛や鞭打ちそのものの中に、しびれるような被虐の悦びがあるのか、それとも、これを前技として被虐の高まりの中で行われる性感帯への責め（乳首、陰核、肛門などへの刺戟）に悦びがあるのかということです。

いわば、妻女を緊縛し鞭打ちするのは

そのことに悦びがあるのか、又は屈伏させた女性に対する、その後の羞恥責め（肉体的及び精神的）に悦びがあるかということです。

美しい女体を、さまざまなスタイルで緊縛し、また鞭打ちするのは、それによって変化する千変万化の女体の妙を楽しむという美的要素があり、又、女性の抵抗力を奪い、全てをさらけ出させて、男性の目を楽しませるという加虐、被虐の要素があり、これがSとMの本質ではないか、などと考えています。

SMプレイのうちでも、夫婦プレイとみなれば、右に述べた要領の中でも、夫が妻のSEXを責めるという要素が、一層、強くなってくると思うのです。

夫婦の正常なる性行為の中に於いても男性は知らず知らずのうちに、女性を責め弄びたいと思ひ、女性は責め弄ばれたいと思ひ、自然に、そのようなポーズや動作をとるものですが、夫婦のSMプレイとは、このような意識を、お互いに最初から持って行動することではないでしょうか。

夫は、妻が男性に責められることによって快感を覚えることを知っていて、女体責めのいろいろの技法を研究し、妻は夫が女性を責めることに悦びがあり、女性の被虐の表情や

姿態や、声音を見聞きすることに快感を覚えるということを知っていて、夫の責めに従い協力することになります。

そして、夫婦が加虐と被虐の快感の中で、心身ともに和合してゆくというのが、夫婦間のSMプレイの一つのパターンではなからうかと思っております。

このような加虐の技法を、いろいろと研究し、最愛の妻に試みる夫は、妻にとっては、最高の奉仕をしてもらっているわけであり、妻としても幸福と思わない筈はないのです。

複数プレイで、夫以外の男性に責め弄ばれる妻の被虐感、それこそ最高のものでしょうし、夫の加虐感もまた、妻の被虐感が強い程、比例して最高のものですから、本当に信頼し合っている夫婦なら、妻を他の男性の淫虐の手に委ねて、妻を被虐の絶頂に悶えさせることで、妻にSEXの最高の妙味を味あわせてやれるわけです。

こうして、妻を第三者の男性の手で、弄ばせるといふことは、夫婦生活の中でも、最も妻を愛した、やり方だと思ひます。

女性にとって、複数プレイを好むということ、それだけM感覚が鋭く、そして素直な形で育っているからで、主人の許しを得て、

主人の見ている目の前で、他の男性に責め弄ばれるところに、最高の興奮があるのです。

夫に見られているというところに、一層、激しい快感があるのだと思います。とにかくこれは、夫婦間の仲の睦まじさを示す現象だということが言えます。

私は生まれつきの性向がSM的なところへもってきて、奇クを愛読しているうち、結婚前から、知識の上では、一応のSMファンになっていました。

私の性向はといいますと、女性に対してはS、同性に対しては多分にMの要素を持っております。私が女性に対して抱くS的感情や妻に対して行うSプレイは、そのまま、自分が女性であったら、男性から、こうされたいと願う被虐的な気持を、そのまま、現わしたものですし、事実、同性に対しては、女性化した気持や態度で責められることを望んでいるわけです。

奇クの小説やルポを読んでいますと、男達の美女に対する羞恥責めの情景や写真を楽しみながら、いつの間にか、自分が美女の立場になって、男達に責められているような気持ちになり、オナニーし、慰めてしまいます。

私の性器に対する嗜虐の願望は、このよう



に、自分に対する被虐の願望の裏返しのようなのですが、私は羞恥責めをする事も、される事も大好きで、性器露出願望もあり、いきおい妻との夫婦プレイも、最高度に妻の羞恥を弄ぶための露出的なポーズを取らせることになります。

緊縛も、やがて行われるSEXプレイで、その部分を露出させるために使われ、鞭打ちも妻に、さまざまな恥かしい姿態を強要させるための手段として使っています。

私は結婚して間もなく、妻を素裸にむいてテーブルの上にねかせ、四肢をテーブルの脚に縛りつけて羞恥責めにして弄んだり、後手に縛って鏡の前へ連れてゆき、さまざまに弄んでいる姿態を映してみせたり、股間縛りにして鞭打ちして悶えさせたり、無理矢理、口淫をさせたり、また鏡の前でオナニーを強制したり、張型を使って前後を同時に責めたりしました。

このようにして、現在では、かなりMとして飼育してきたのですが、緊縛と鞭打ちとはこのようなプレイに、いつも併行して使い、妻に被虐の悦びと性教育していったのです。

今考えますと、新婚そうそう、純真だった妻が、よくも協力してくれたものだ感謝し

ていますが、妻の言によりますと、夫婦とはこのような事をするものだと思います、されるまにならなっていたそうで、そのうちに、そうされるのが、とても快感になり、そうされないと何か物足りなくなってきたと申しておりました。

妻の性向にも、最初から、かなりM的な要素を持っていた事も確かです。妻は「貴方がこんな女にしてしまったのよ」などと申していますが、現在はSEXプレイの時に、後手に緊縛されると非常に快感が強いと告白しています。又、犬のような背向位のラーゲも被虐感から異常な興奮状態を示します。

張型は強姦を連想させて使いますので、妻は張型を見ると、強姦されている気持で、子宮が、しゅう縮すると申しています。

縄や鞭を使うときも、妻には強姦や輪姦や拷問の状況を話して聞かせながら、暗示的に緊縛したり、鞭打ちしたりしていますので、今では、縄や鞭を見ただけで、犯される気持となりエキサイトすると申しています。

私は妻を責めますときは、大抵、物語を設定して、被虐のヒロインとしての妻を責めながら話を聞かせるのですが、妻は、この物語の中に身を置いて悶え、悦びに快感を倍増さ

せているようです。私は妻を羞恥責めしながら、妻に責め言葉を加えてゆき、妻は、これに受け答えしながら、許しを乞いつつ被虐の淵に沈んでゆきます。私は妻のこの時の表情を楽しみ、夢で発する淫らな呻き声にS的な感覚を満喫し、意志に反して見せる痴態に、視虐感を満足させるのです。

このようなプレイの間、私は、どのような事があっても、自分が満足するまでは、妻の肉体に対する責めを止めませんし、結局は、妻が何度も失神して、完全に意識を失うまで続くのです。

私達夫婦が、最近よく用いる責めの方法を少し述べてみましょう。

妻を素裸にむいて、後手に緊縛し、首縄をしておき、仰向けにねかせて、両足を持ってかかえ上げ、股を開かせて二穴を手や口で弄ぶのです。勿論、あとでSEXプレイへと移行してゆきます。

同じく素裸にして、後手縛り首縄にしておき、上向きにねかせ、両足をぐっと頭の方へ屈曲させて、頭の両側で紐によって足首を固定してしまいます。腰の下へ枕など入れて高くしますと、それからの責めが、スムーズに行うことが出来ます。

次に、素裸にして、後手縛り首縄というのは同じですが、椅子の上へ坐らせ、両足をぐっと持ち上げて首のところで、足首を固定し、さっきと同じように、口とか手による弄び、そしてSEXプレイへと移行します。

いずれの型も、最高に露出度を高める態位ばかりですし、又、妻自身にも、自分の犯されてる恥かしい部分が、まる見えになるという羞恥責めのポーズなのです。

そして、いずれの型も、妻は身動き一つ出来ない緊縛ですから、前面に露出した部分に対して、同時に加えられる責めの快感から、絶対に逃れることが出来ないのです。私は思いのままに、とことんまで妻の肉体を弄ぶことが出来、女の苦悩の表情や悦虐の恥態の限りを眺めるといふサジスチックな快味を味わうことが出来るのです。そのときに発する妻の悦虐の嬌声は私を嗜虐の天国へ導きます。

更に妻は、自分に加えられる責めの数々を見て、異常に興奮し、その妻の姿態を見て、また私が興奮するといった具合です。

そして私は、妻の表情を見ながら、責め手を加減し、休ませたり又責めたり、強弱深淺を、くり返すので、妻は長時間、責めて責めて責め抜かれるのです。

私の妻に対するS的性向の一端は、以上のようなものですが、妻もよく協力してくれまじし、私と共に楽しんでくれます。私自身が自分にして欲しいと思うことを、妻にしてやるわけですから、結局は深い愛情の中に、妻も信頼して、ついてきてくれるのでしょう。

本格的な縛り（縛りのための縛り）や鞭打ちは、私はまだ実行したことはありません。しかし、妻は緊縛そのものも好む様子ですし鞭打ちも痛いから、嫌とは言っていますが、鞭打ちをすると異常なまでに興奮し、性的な快感を覚えると告白しております。

複数のプレイについても想像することは、とっても興奮すると申していますが、さて、私が実行しようかと言うと、恥かしくて怖いから、と尻込みします。私としては、複数のプレイは、是非、実行してみたいと思っておりますが、なかなか実現しそうにありません。

SMの極致は、他の男達に強姦される妻の被虐の姿態を夫が見ることであり、また夫に見られる妻の気持ではないかと、私は思っております。その点について、読者の皆様の御意見を承りたいと思います。

他の御夫婦と複数プレイをするのなら、私のプレイは、やはりSEXプレイであり、

妻に対すると同じような方法で女性を責めることでしょう。女性を責め抜いて最高の悦虐的快感で骨の髄まで喜ばせてあげたいと思っております。それが男性の女性に対する愛の奉仕であると信じております。

ですから、私の責めは執拗で容赦がないので、女性は長時間に亘り、夢うつつの中で悶え悦虐にのたうち、しびれるような幸福感を満喫するのです。私もまた、長時間の責めを楽しみ、ゆっくりと女体を觀賞し、SMプレイの醍醐味を、きわめることが出来ます。

私は機会さえあれば、私独りででも、複数プレイに参加してみたいなどと、常々思っております。SM研究会にて、そんなチャンスを与えて下されば幸いです。

塚本鉄三氏のカメラとペンのルポルタージュは、毎月楽しく大いなる共感をもって拝見し、自分の果たし得ないことをやって呉れている氏に、一沫の羨望と嫉妬の念が禁じ難いものがある反面、SM研究会を通じて会談の機会を持ちたいものだと思っています。

そして、自分の経験や感想を詳細に述べさせて貰って、ベテランとしての氏の忌憚なき御意見を承りたいものと思います。